熊本県文化財調査報告第233集

御幸木部遺跡群

国土交通省熊本河川国道事務所加勢川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2006.3

熊本県教育委員会

写真（PL）

写真（PL）

写真(PL)

写真(PL)

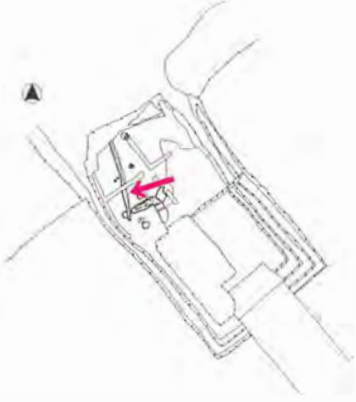
※この写真は、国土地理院長の承認を得て同院及び米軍撮影の空中写真、米軍撮影空中写真を掲載したものである。(承認番号　平18九複、第195号)

写真(PL)

写真(PL)

写真(PL)

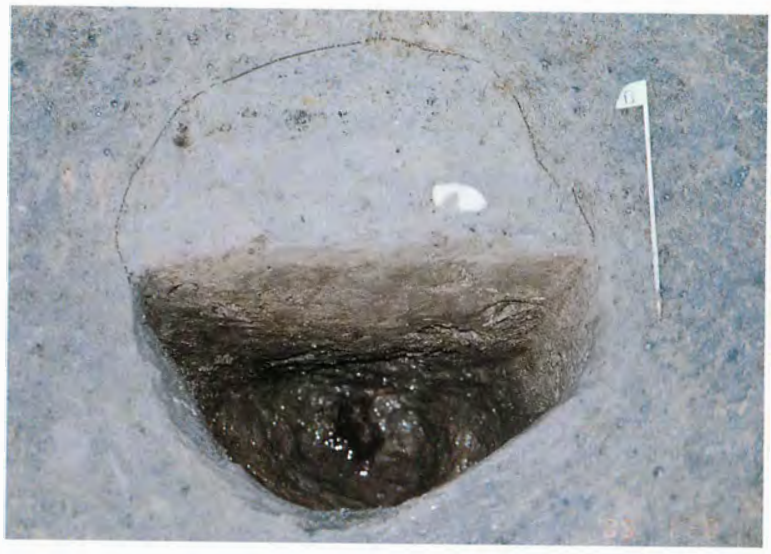
写真(PL)8
調査1区
土層断面



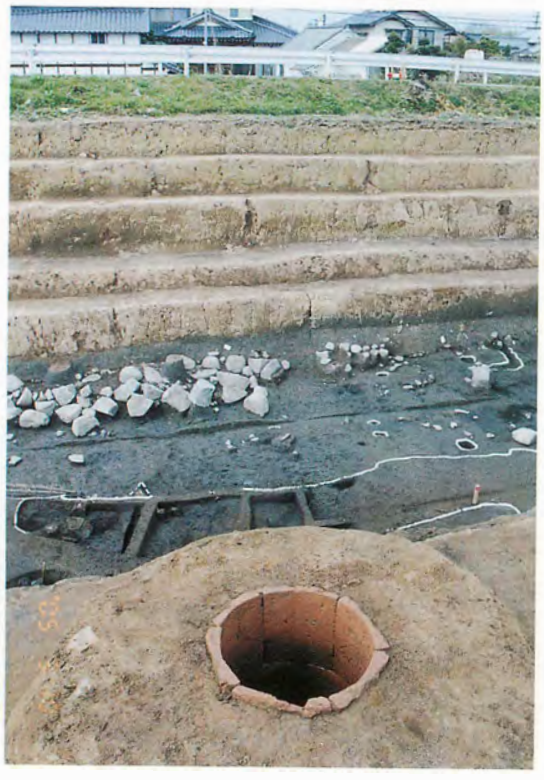
写真(PL)9
調査2区-1
土層断面

写真(PL)10
調査3区
土層断面

写真(PL)11
調査3区
S009遺物出土状況



写真(PL)12
調査1区
ピット31番柱材残存状況



写真(PL)13
調査区外井戸検出状況

40
35
38
39
37
(写真のみ)
32
34
31
33
36
(写真のみ)

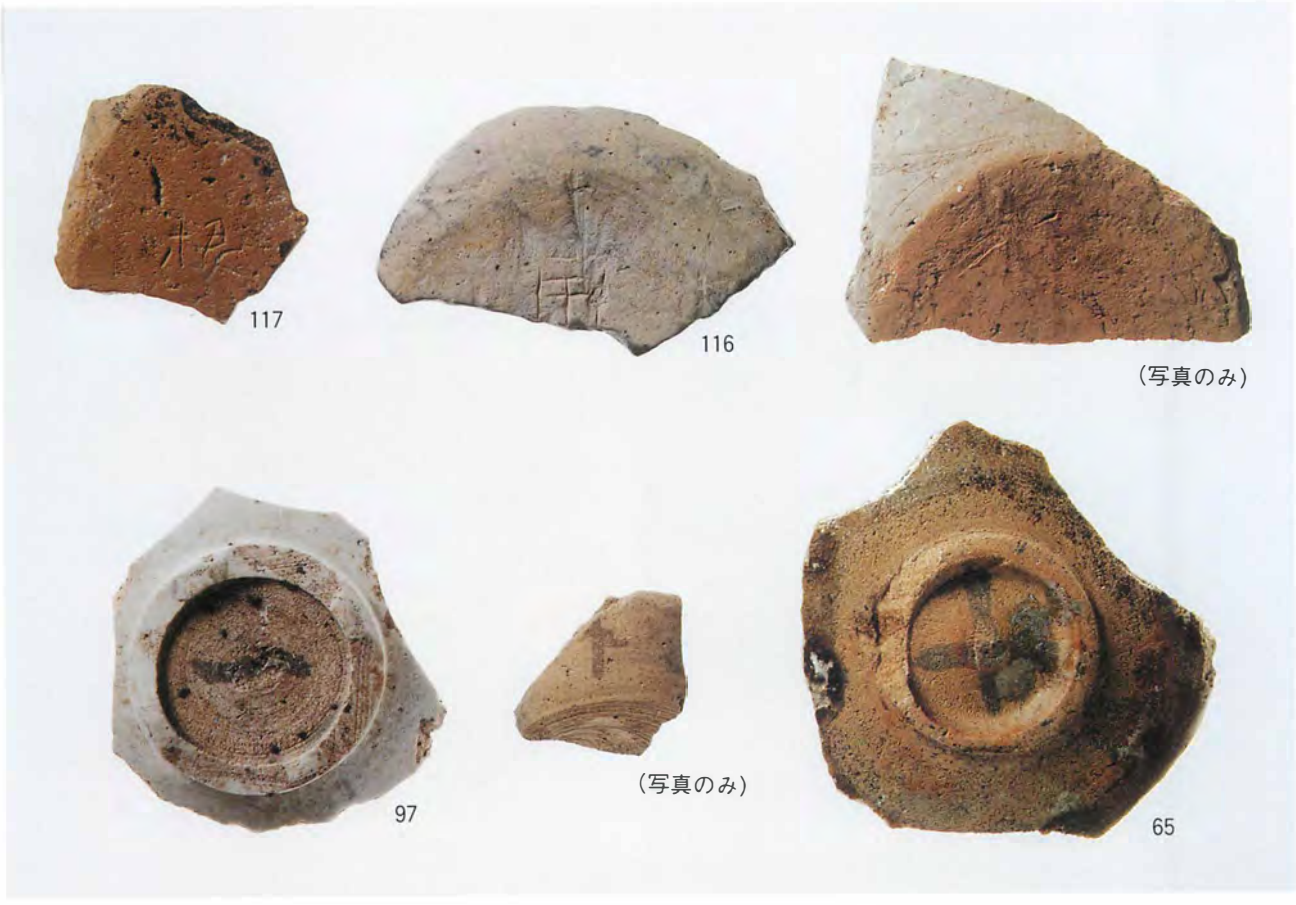
写真(PL)

47
46
61
64
62
44
48
59
41
43
49
42
(写真のみ)
45

写真(PL)

写真(PL)　S006出土遺物近世陶磁器【18世紀～19世紀】（２）

写真(PL)



写真（PL）

写真（PL）

写真(PL)

写真(PL)　　S009出土遺物　弥生（２）

発掘調査でわかった御幸木部遺跡群の様子

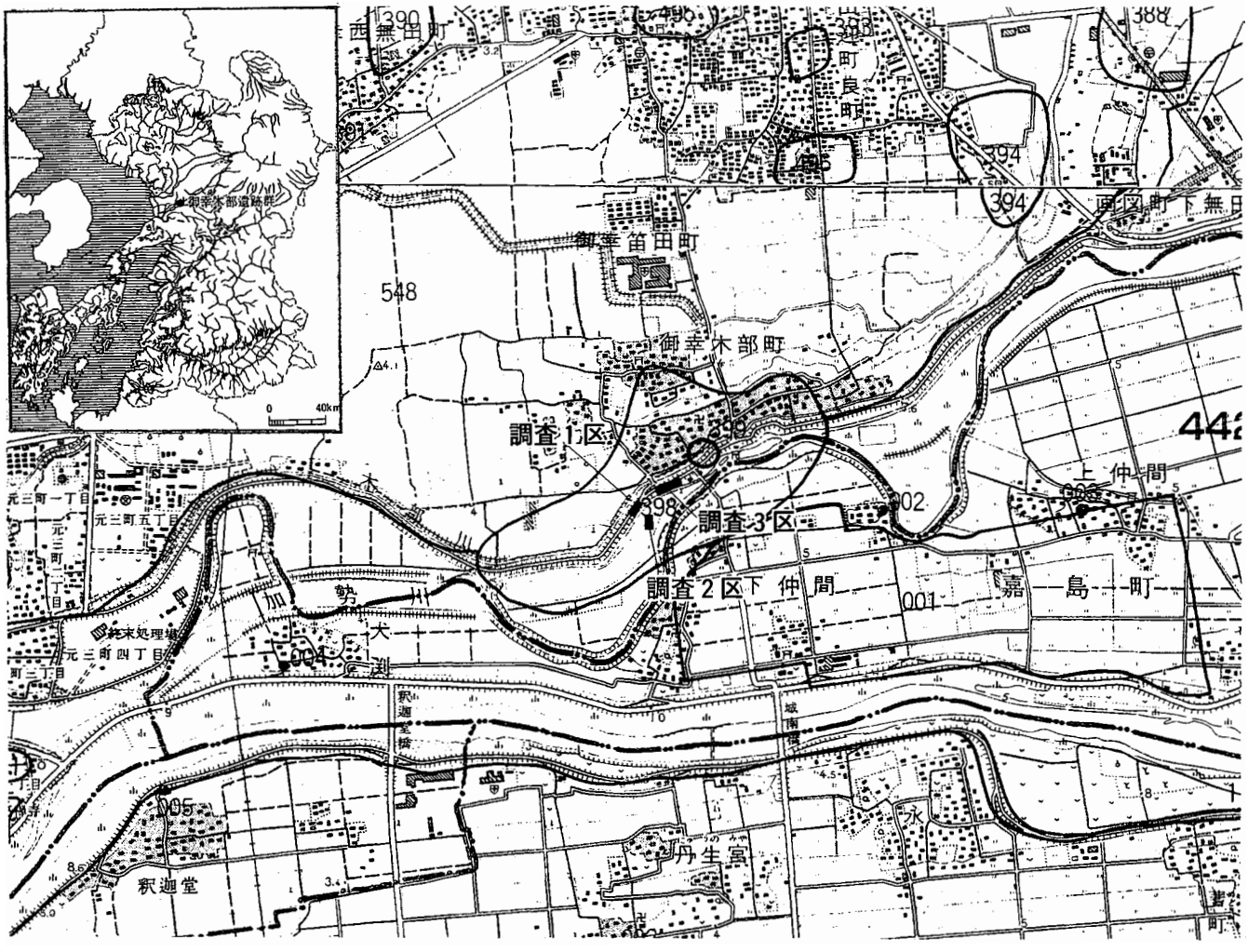
【御幸木部遺跡群の紹介】

御幸木部遺跡群は、熊本市御幸木部町にある加勢川の中流、右岸に広がる遺跡です。標高は約３ｍです。加勢川流域には弥生時代から古代（奈良時代から平安時代）や中世（鎌倉時代から室町時代）にかけての遺跡が密集しており、江津湖遺跡群、権藤遺跡、八ノ坪遺跡、熊本平野条里跡などが挙げられます。

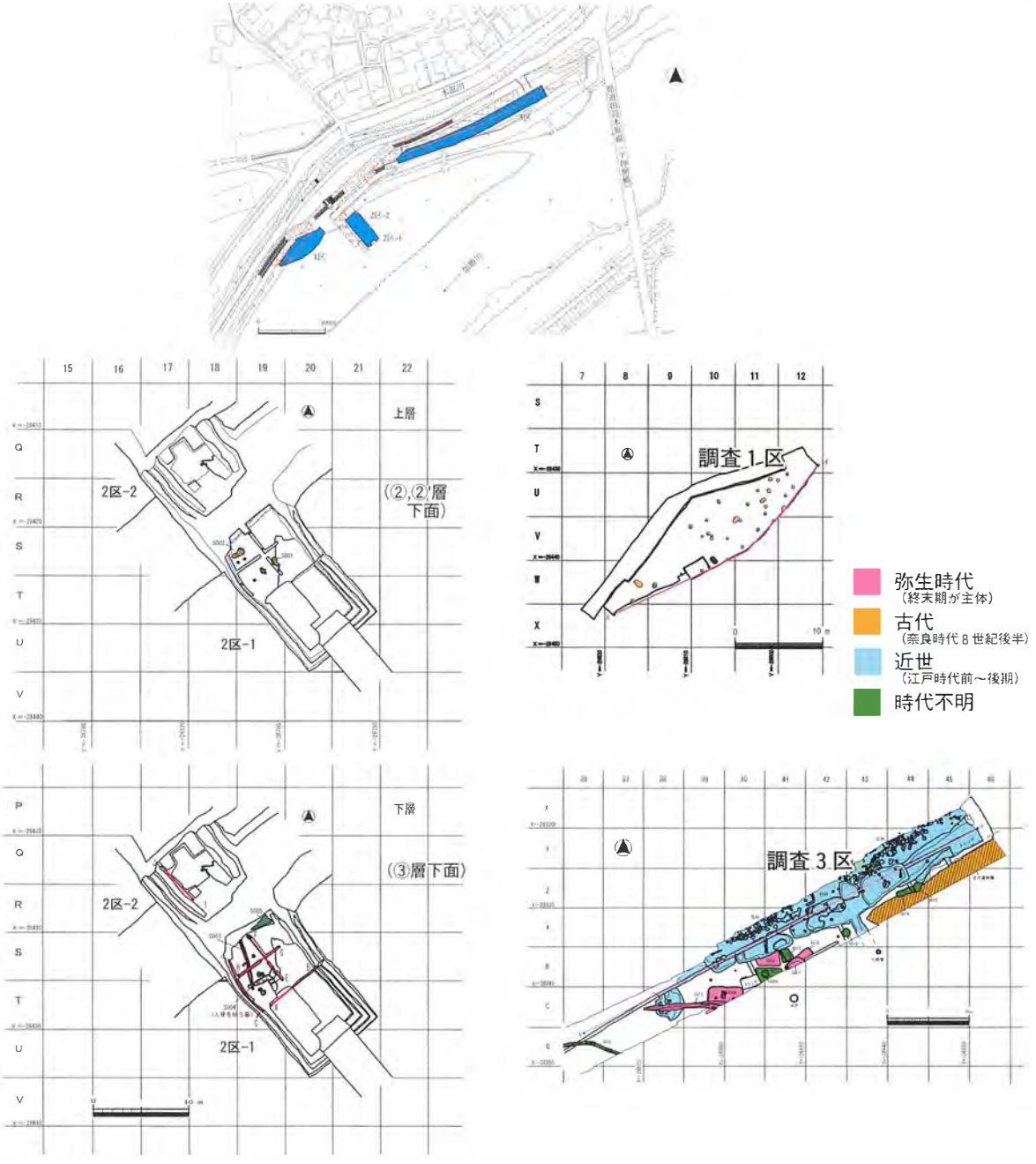
【調査のきっかけ】

この遺跡の上に国土交通省熊本河川国道事務所により、加勢川の堤防工事が行われる事になりました。この工事が行われることで遺跡が壊されたり、半永久的に埋もれてしまいます。この様な場合には「文化財保護法」に基づいて、事前に発掘調査を行い、遺跡の記録（報告書）を後世に残すための作業を行います。調査は、平成16年12月から平成17年３月まで行われ、約1,

としました。



図(Fig)①　周辺遺跡地図　S＝1／25,000



図(Fig)②　調査区と遺構配置図

【用語の説明】

石器…石で作った道具のこと。例ば石鏃（矢じり）など。

土器…粘土を焼いて作った器のこと。

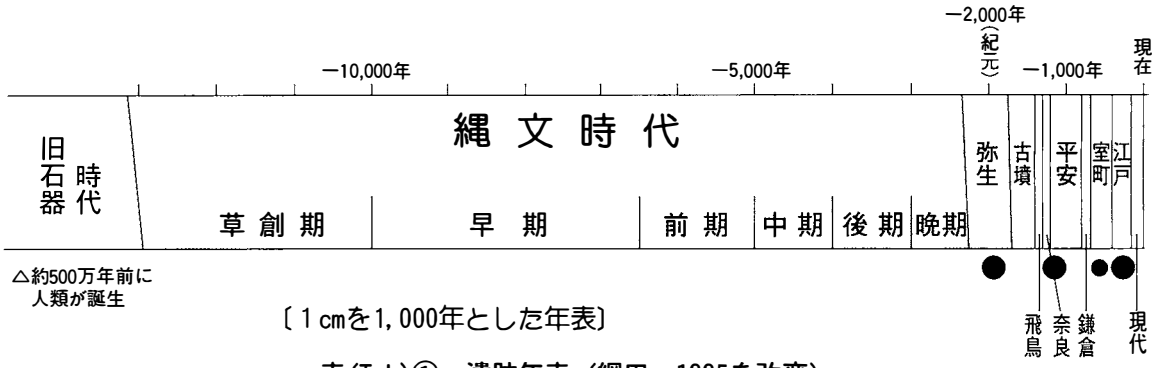
鉄器…鉄で作った道具のこと。

遺物…昔の人が使った土器、石器や鉄器のこと。

遺構…昔の人が残した生活の跡。例ば住居跡（家の跡）など。

遺跡…遺構や遺物が発見された場所のこと。

●は遺物や遺構が見つかった年代



表(Tab)①　遺跡年表（網田　1995を改変）

【調査でわかったこと】

調査の結果、弥生時代の後期後半～終末期（今から約1,800年～　　年前）江戸時代（今から約400年～140年前）にかけての人々の生活の跡を確認することができました。

特に弥生時代の後期後半～終末期（今から約1,800年～　　年前）奈良時代（今から約1,　　年前）と江戸時代（今から約400年～140年前）は遺物や遺構が確認されており、この遺跡の中心となる時代であることが判明しました。

また、はっきりとした時期は不明ですが、頭を北東方向に向けて埋葬された人骨（お墓）も発見されました。

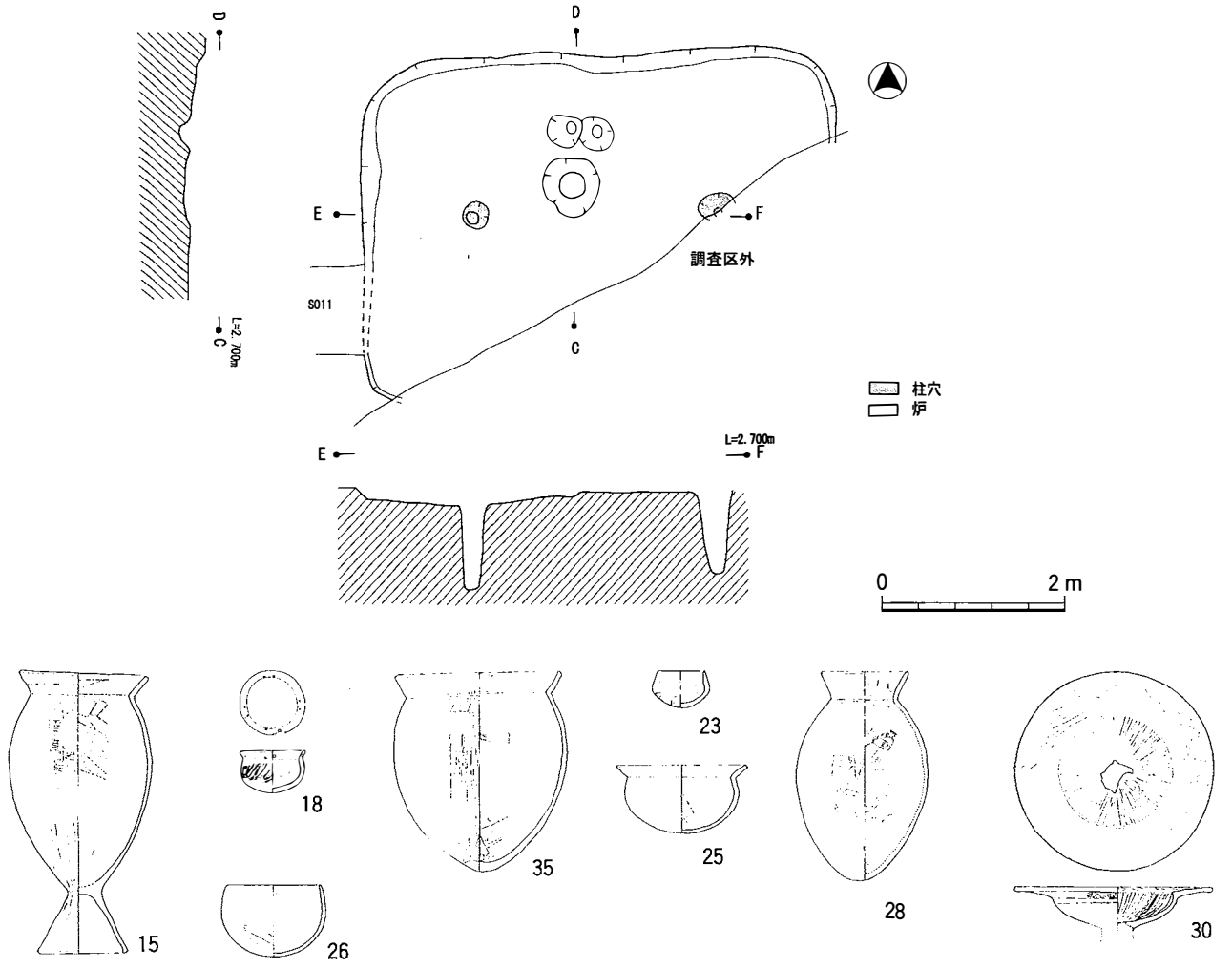
①弥生時代

〔住居の様子〕

弥生時代は、後期後半～終末期（今から約1,800年～　　年前）にかけての遺構が5基あり、住居跡は3軒、掘られた穴が1基、溝が1条確認されました。

調査3区で検出された住居跡からは、多数の土器片が出土し、住居の構造は幅約4～5mの長方形で、中央に炉、両端に2本の柱を持つ形態であることがわかりました。

また、調査1区では、弥生土器の破片を含んだ柱穴から柱材の一部が出土しました。深い撹乱により、住居の柱の一部が残されたと考えられます。

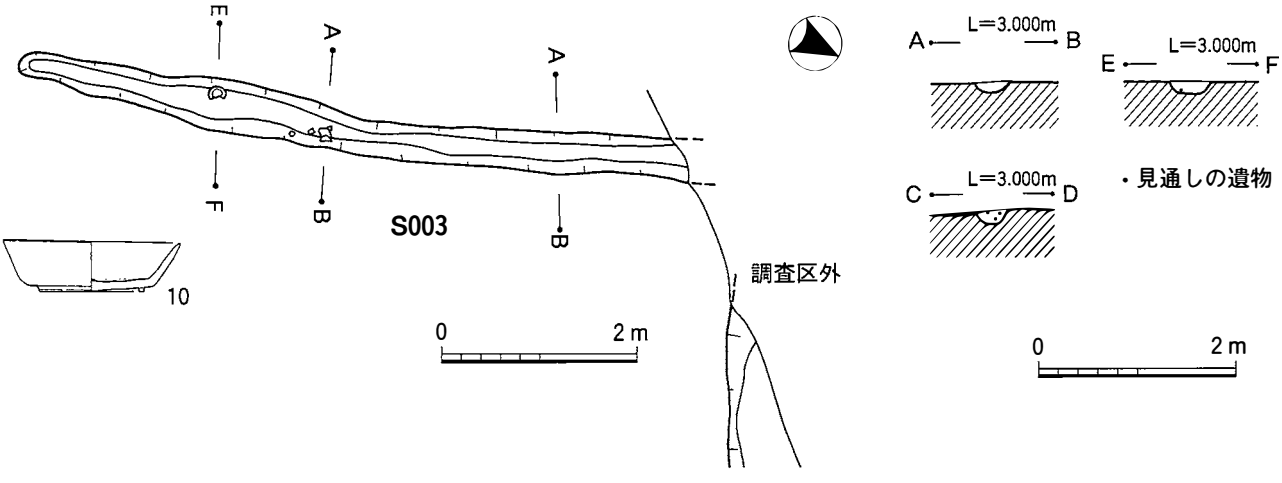


図(Fig)③　弥生時代の住居跡（S009）と出土遺物実測図

②奈良時代（図④を参照）

〔溝の存在〕

調査2区―1で確認された小さな溝からは、8世紀後半に作られたと考えられる完形に近い須恵器が出土しています。この溝は、ほぼ南側から北側に向かって流れていたと考えられ、当時、耕作に伴う小さな溝が存在した可能性が考えられます。



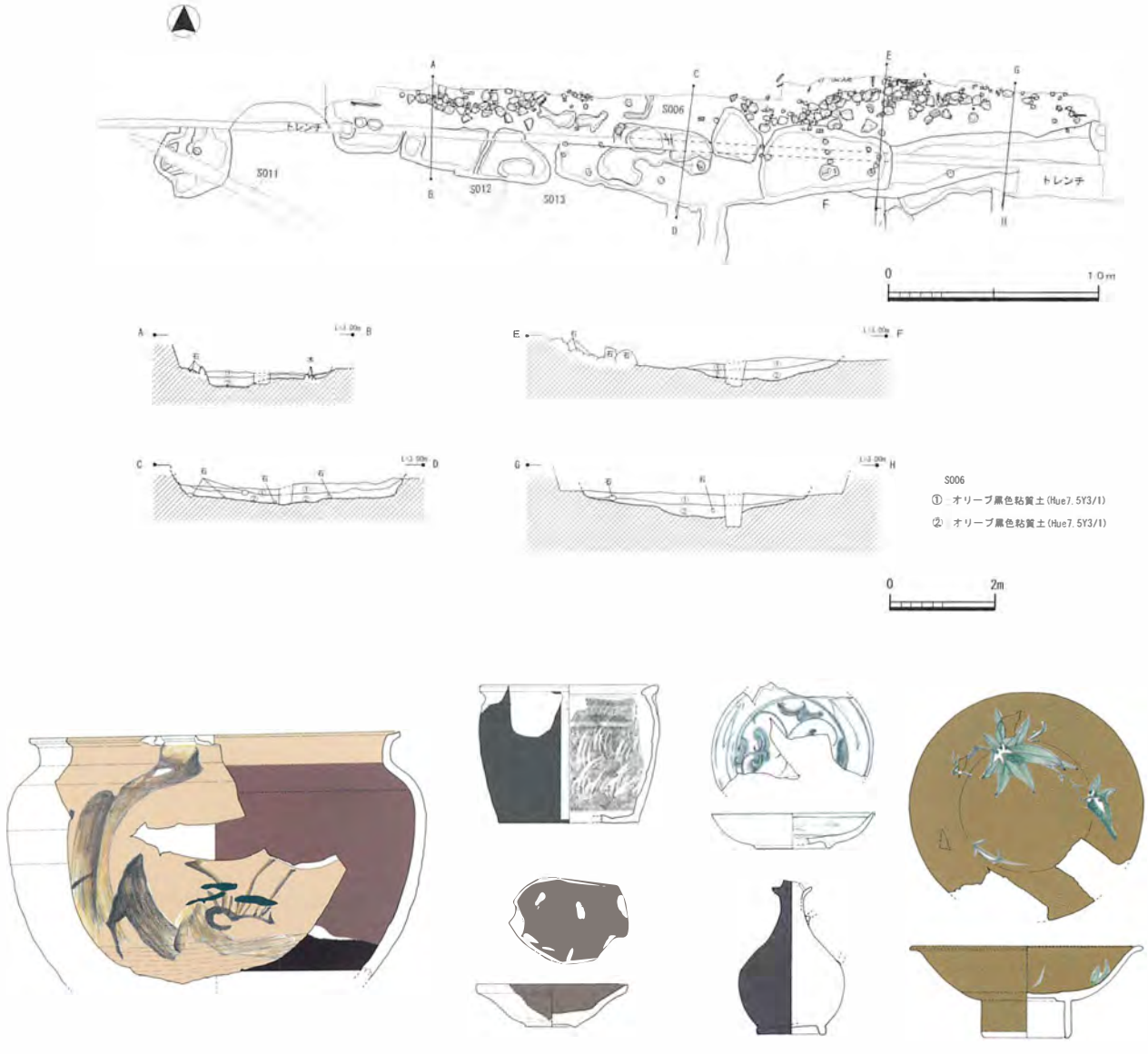
図(Fig)④　奈良時代の溝（S003）と出土遺物実測図

③江戸時代（図⑤を参照）

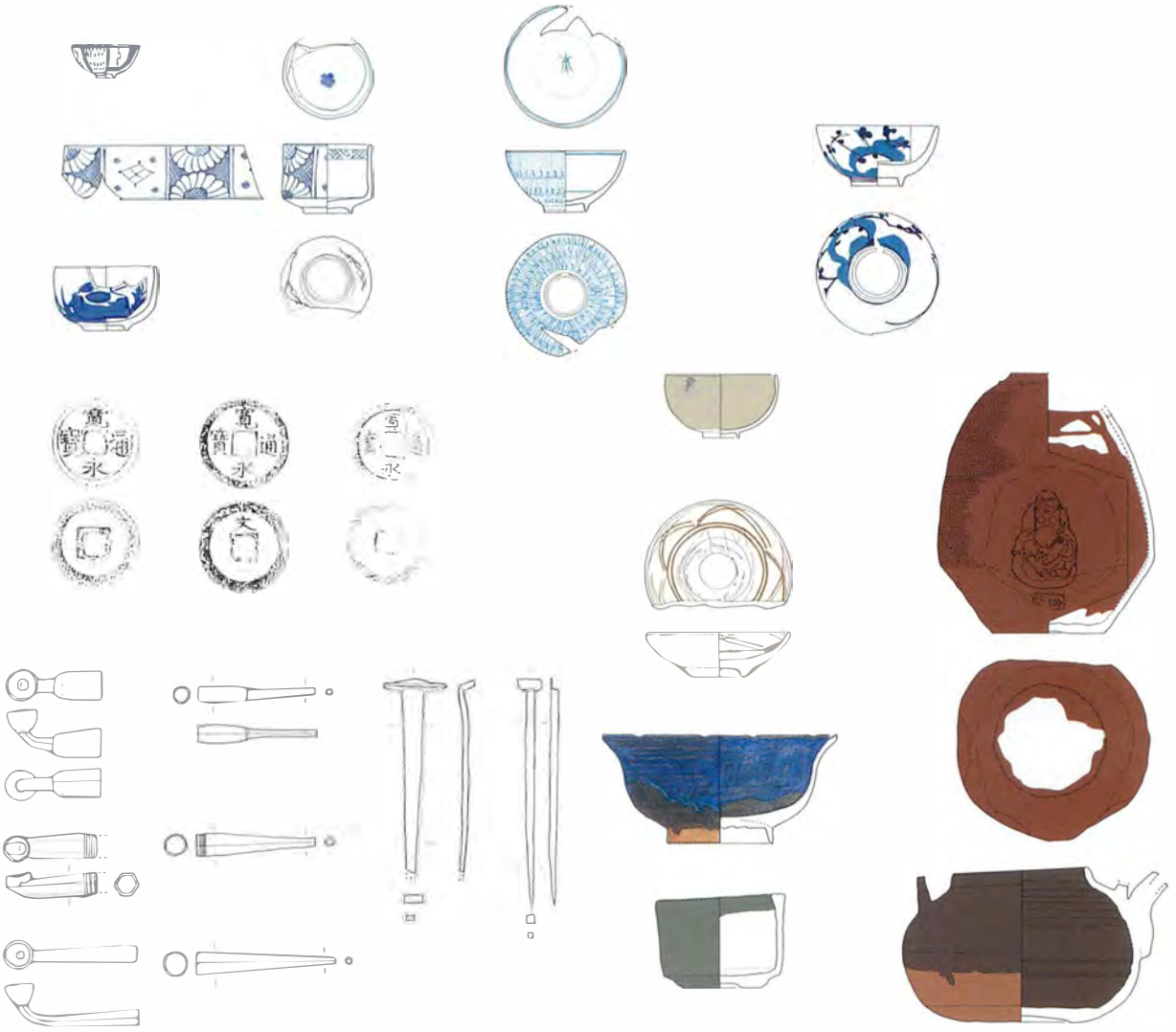
〔大溝の存在〕

調査３区から確認された大溝は、奈良時代や弥生時代の後期後半～終末期の包含層や遺構面を壊して作られていました。溝の中には矢穴を残した石垣が部分的に列をなして残っており、多量の陶磁器などが出土しました。矢穴の長さなどから江戸時代前期に築かれたことが想定され、出土した陶磁器の時期幅から江戸時代後期まで溝が存続したことが推定されます。その後、明治時代初期までには溝が埋められていたことが、「熊本県管轄肥後国託麻郡木部村（明治14年［1881年］までに作成）という絵図（図57参照）からわかります。

江戸時代、ここには村が存在し、この大溝は用水路として使用されたと推定されます。



図(Fig)⑤　江戸時代の大溝（S006）と出土遺物実測図（１）

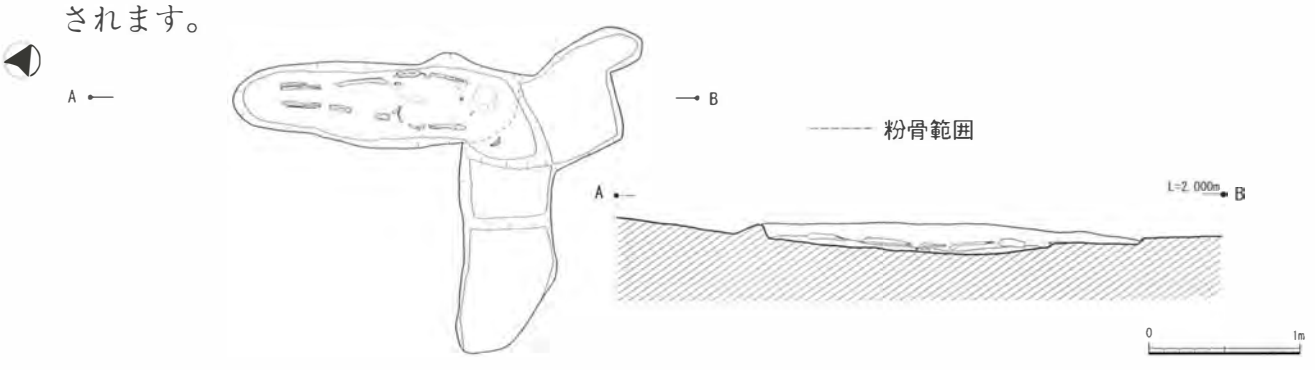


図(Fig)⑥　江戸時代の大溝（S006）出土遺物実測図（2）

④時期不明（図⑦を参照）

〔墓の存在〕

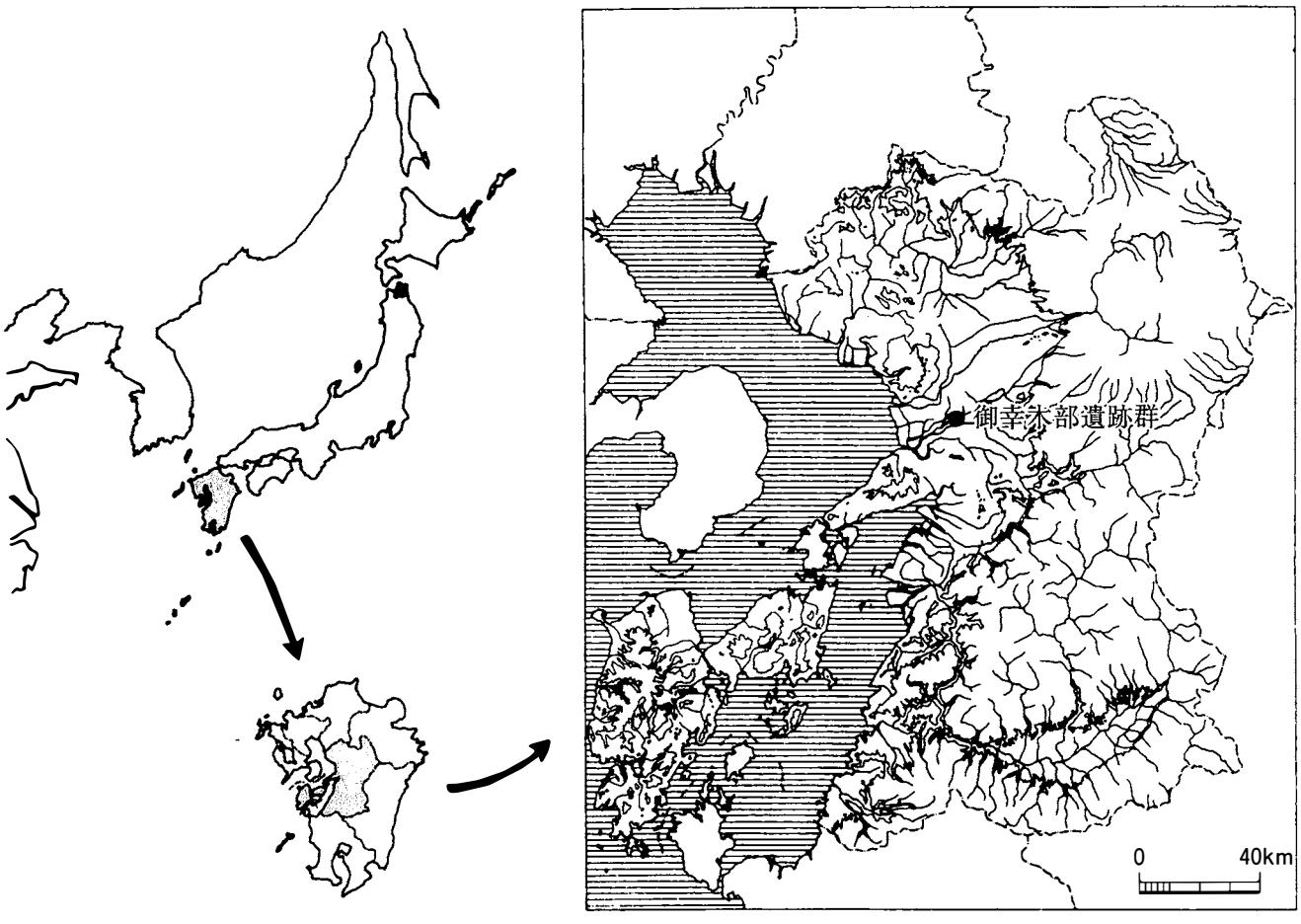
調査2区から埋葬された男性の人骨が発見されました。頭部を北東方向に向け、体はまっすぐに伸ばした状態で埋葬されていました。この墓に伴う遺物はありませんでしたが、上層から掘り込みの中に存在した炭化物による年代測定から、古墳時代の終わりころ（6世紀前半～7世紀初頭）より以前に作られたことが推定されます。



図(Fig)⑦　時期不明の土壙墓（S004）実測図

熊本県文化財調査報告第233集

御幸木部遺跡群（みゆききべいせきぐん）



2006

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、平成16年12月から平成17年3月まで、国土交通省熊本河川国道事務所加勢川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、熊本市御幸木部町に所在する御幸木部遺跡群の発掘調査を実施しました。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴式住居跡、近世の溝などの遺構を中心として、弥生時代中期～後期、古代、中世、近世の遺物が発見されました。特に近世の溝には安山岩や凝灰岩を加工した石組み遺構が確認されており、当時の水路の状況を窺うことができます。

この報告書が県民の皆様を始め多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解を深めて頂く一助となれば、喜びに堪えません。

なお、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導、助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成18年 3 月31日

熊本県教育長　　柿　塚　純　男

例　　言

1．本書は、平成16年（2004）12月20日～平成17年（2005）３月31日にかけて実施した熊本市御幸木部町に所在する御幸木部遺跡群の発掘調査報告書であり、熊本県文化財調査報告書第233集である。
2．調査は、平成16年度国土交通省熊本河川国道事務所加勢川改修事業に伴い実施した。
3．調査は、国土交通省熊本河川国道事務所の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施し、遺物の整理・保管は熊本県文化財資料室で行っ
4．整理報告は平成17年度（2005）に行った。
5．国土座標軸による測量基準杭の設定は、(株）旭測量設計に委託した。
6．本書で使用した航空写真は、九州航空株式会社に委託撮影したものである。
7．現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは、岡本真也、高野信子、林禎一郎が行い、今村明美、山田由美、前田和子がこれを補助した。遺物実測は、松本裕子、佐藤淳子、平川恵里子、手柴智晴、橋口冬美、戸田英佑、岡本が行い、一部を(有)九州文化財リサーチに委託した。遺構製図及び遺物製図は、松本、佐藤、平川、竹原麻美、高野、手柴、橋口が行った。図版の作成にあたっては、松本、佐藤、平川が行った。鉄器処理は、谷川亜紀子が行った。遺物写真撮影は、村田百合子、手嶋裕子が行った。
8．英文要約は、岡本が作成し、村田がこれを訂正した。
9．本文の執筆は、第Ⅴ章を㈱パレオ・ラボ、松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)、附論を池田朋生（熊本県立装飾古墳館）に委託し、それ以外を岡本が行った。
10．本書の編集は、岡本があたり、校正等に際しては松本、佐藤、平川がこれを補助した。
11．遺物は、熊本県文化財資料室に保管している。

凡　　例

1．写真図版のキャプションにある矢印は撮影方向を示す。
2．本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。
3．報告書に掲載した実測図の縮尺は不統一であるため、おのおのの頁に明記した。
4．出土遺物の観察表は、掲載分については全て巻末の遺物観察表に掲載している。

本　文　目　次

巻頭カラー写真

発掘調査でわかった御幸木部遺跡群の様子

序文

例言・凡例・本文目次

第Ⅰ章　調査の経過 ……1

第１節　調査に至る経緯…… 1

第２節　調査の組織…… 1

第３節　調査の過程…… 1

第Ⅱ章　位置と環境 …… 2 ～11

第１節　地理的環境…… 2

第２節　歴史的環境…… 2

第Ⅲ章　調査の概要 ……12～18

第１節　調査の方法……12

第２節　調査区の設定……12

第３節　層位と包含層……12

第Ⅳ章　調査の結果 ……19～72

第１節　はじめに……19

第２節　遺構……19

第３節　遺物……66

第Ⅴ章　諸分析 ……73～90

１．御幸木部遺跡群自然科学分析（年代測定、

２．熊本市御幸木部遺跡群出土の古墳人骨【土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　松下孝幸】……81

第Ⅵ章　総括……91

第１節　はじめに……91

第２節　各時代の考察……91

第３節　今後の課題……98

遺物観察表 ……99～108

引用・参考文献 ……109

Summary ……110～115

－附論－

御幸木部遺跡群で検出された石列遺構に残る加工痕跡について

【熊本県立装飾古墳館　池田朋生】……116～120

写真図版……121～158

あとがき ……159

報告書抄録 ……160

挿　図　目　次

図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F　……巻頭

図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F　ピット断面図及び出土遺物実測図（２）……23
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F　S009出土遺物実測図（１）……34
図(F
図(F　……36
図(F
図(F　……38
図(Fig)25　土坑（S007）実測図……38
図(Fig)26　溝（S011）実測図……39
図(Fig)27　溝（S006）実測図……40
図(Fig)28　石列実測図及び矢穴計測表……41・42
図(Fig)29　S006出土遺物実測図（17世紀の陶磁器）……44
図(Fig)30　S006出土遺物実測図（18世紀の陶磁器）……46
図(Fig)31　S006出土遺物実測図（18世紀～19世紀の陶磁器）（１）……48
図(Fig)32　S006出土遺物実測図（18世紀～19世紀の陶磁器）（２）……49
図(Fig)33　S006出土遺物実測図（近世）……51
図(Fig)34　S006出土遺物実測図（近世のきせる・鉄釘・古銭）……52
図(Fig)35　S006出土遺物実測図（古代・近世の瓦）……54
図(Fig)36　S006出土遺物実測図（輸入陶磁器）……55
図(Fig)37　S006出土遺物実測図（中世・近世）……56
図(Fig)38　S006出土遺物実測図（古代）……57
図(Fig)39　S006出土遺物実測図（弥生）……57
図(Fig)40　S006出土遺物実測図（石器）……58
図(Fig)41　S006出土遺物実測図（土製品）……59

図(F
図(F
図(F
図(F ……63
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F　2区－1出土遺物実側図（2）……69
図(F
図(F
図(F ……72
図(F ……91
図(F
図(F
図(F
図(F
図(F ……97

表　目　次

表(Tab)①　遺跡年表……巻頭
表(Tab) 1　周辺遺跡一覧表（1）…… 6
表(Tab) 2　周辺遺跡一覧表（2）…… 7
表(Tab) 3　周辺遺跡一覧表（3）…… 8
表(Tab) 4　周辺遺跡一覧表（4）…… 9
表(Tab) 5　周辺遺跡一覧表（5）……10
表(Tab) 6　土器観察表（1）……99
表(Tab) 7　土器観察表（2）……100
表(Tab) 8　土器観察表（3）……101
表(Tab) 9　土器観察表（4）……102
表(Tab)10　土器観察表（5）……103
表(Tab)11　土器観察表（6）……104
表(Tab)12　土器観察表（7）……105
表(Tab)13　石製品・砥石観察表……106
表(Tab)14　土製品観察表……106
表(Tab)15　きせる観察表……106
表(Tab)16　古銭観察表（1）……107
表(Tab)17　古銭観察表（2）……108
表(Tab)18　鉄・銅・その他製品観察表……108
表(Tab)19　瓦観察表……108

写　真　図　版

写真(PL) 1　空撮1（金峰山を望む）……巻頭
写真(PL) 2　空撮2（雲仙普賢岳を望む）…巻頭
写真(PL) 3　空撮3（平成17年3月10日）…巻頭
写真(PL) 4　空撮4（昭和37年8月7日）……巻頭
写真(PL) 5　空撮5（調査区全
写真(PL) 6　空撮6（調査3区）……巻頭
写真(PL) 7　空撮7（調査1・2区）……巻頭
写真(PL) 8　1区土層断面……巻頭
写真(PL) 9　2区－1土層断面……巻頭
写真(PL)10　3区土層断面……巻頭
写真(PL)11　3区S009遺物出土状況……巻頭
写真(PL)12　1区ピット31番柱材残存状況…巻頭
写真(PL)13　調査区外井戸検出状況……巻頭
写真(PL)14　S006出土遺物近世陶磁器
【17世紀～18世紀前半】……巻頭
写真(PL)15　S006出土遺物近世陶磁器
【18世紀～19世紀】（1）……巻頭
写真(PL)16　S006出土遺物近世陶磁器
【18世紀～19世紀】（2）……巻頭
写真(PL)17　調査区外出土遺物（古代包含層）……巻頭
写真(PL)18　3区出土遺物（墨書・刻書）…巻頭
写真(PL)19　3区出土輸入陶磁器……巻頭
写真(PL)20　S009出土遺物弥生（1）……巻頭
写真(PL)21　S009出土遺物弥生（2）……巻頭
写真(PL)22　1・2区調査前風景……121
写真(PL)23　1区完掘状況全景
写真(PL)24　1区完掘状況（1）……121
写真(PL)25　1区完掘状況（2）……122
写真(PL)26　1区ピット30番検出状況……122
写真(PL)27　1区ピット5番遺物出土状況……122

写真(PL)28　１区ピット20番遺物検出状況……123
写真(PL)29　１区ピット35番遺物出土状況……123
写真(PL)30　１区ピット31番半裁状況と
木質部残存状況……124
写真(PL)31　１区ピット７番完掘状況……124
写真(PL)32　１区ピット２番完掘状況……124
写真(PL)33　２区－２完掘状況……124
写真(PL)34　２区－１②層下面（１）……125
写真(PL)35　２区－１②層下面（２）……125
写真(PL)36　２区－１②層下面ピット検出状況（１）…125
写真(PL)37　２区－１②層下面ピット検出状況（２）…126
写真(PL)38　２区－１南西側土層断面……126
写真(PL)39　２区－１北西側土層断面……126
写真(PL)40　２区－１S001完掘状況……127
写真(PL)41　２区－１②層下面完掘状況（１）……127
写真(PL)42　２区－１②層下面完掘状況（２）……127
写真(PL)43　２区－１③層下面S003・4・5検出状況（１）…128
写真(PL)44　２区－１③層下面S003・4・5検出状況（２）…128
写真(PL)45　２区－１S003遺物出土状況（１）……128
写真(PL)46　２区－１S003遺物出土状況（２）……129
写真(PL)47　２区－１S003遺物出土状況（３）……129
写真(PL)48　２区－１S003土層断面図……129
写真(PL)49　２区－１S005土層断面図……130
写真(PL)50　２区－１S004人骨検出状況（１）……130
写真(PL)51　２区－１S004人骨検出状況（２）……130
写真(PL)52　２区－１S004人骨検出状況（３）……131
写真(PL)53　２区－１S004人骨検出状況（４）……131
写真(PL)54　２区－１S004人骨調査風景……131
写真(PL)55　２区－１S004完掘状況……132
写真(PL)56　２区－１③層下面完掘状況……132
写真(PL)57　２区調査風景……132
写真(PL)58　３区調査前……133
写真(PL)59　S018検出状況……133
写真(PL)60　３区完掘状況全景
写真(PL)61　３区完掘状況全景
写真(PL)62　S006完掘状況（１）……134
写真(PL)63　S006完掘状況（２）……134
写真(PL)64　S012・13・17検出状況……135
写真(PL)65　S006南側石列検出状況……135
写真(PL)66　S006北側遺物検出状況……135
写真(PL)67　S006木製品出土状況……136
写真(PL)68　S006鉄鎌・寛永通宝等出土状況…136
写真(PL)69　S006炭化材と木製品出土状況……136
写真(PL)70　３区杭及び石列検出状況……137
写真(PL)71　３区杭検出状況……137
写真(PL)72　S006石列矢穴13状況……137
写真(PL)73　S006石列矢穴11状況……138
写真(PL)74　S006石列矢穴29状況……138
写真(PL)75　S006石列矢穴30状況……138
写真(PL)76　S006掘削痕跡の検出状況……139
写真(PL)77　S009遺物出土状況……139
写真(PL)78　S009・11完掘状況……139
写真(PL)79　S008検出状況……140
写真(PL)80　S008獣骨検出状況……140
写真(PL)81　S012・17遺物出土状況……140
写真(PL)82　S012遺物出土状況……141
写真(PL)83　S013土層断面……141
写真(PL)84　S012・13・16・17・19完掘状況…141
写真(PL)85　S019土層断面……142
写真(PL)86　S010完掘状況……142
写真(PL)87　S006土層断面及び調査３区
北側土層断面……142
写真(PL)88　３区南側土層断面……143
写真(PL)89　調査区外井戸遠景……143
写真(PL)90　調査区外井戸内状況……143
写真(PL)91　調査区外の小便甕……144
写真(PL)92　調査区外の古代遺物層……144
写真(PL)93　作業員さん方との集合写真……144
写真(PL)94　空撮８（昭和23年１月21日
米極東空軍撮影）……145
写真(PL)95　１・２区出土遺物……146
写真(PL)96　S012出土遺物……146
写真(PL)97　S009出土遺物 弥生（１）……147
写真(PL)98　S009出土遺物 弥生（２）……147
写真(PL)99　S006出土遺物近世陶磁器
【18世紀後～19世紀】（１）……148
写真(PL)100　S006出土遺物近世陶磁器
【18世紀後～19世紀】（２）……148
写真(PL)101　S006出土遺物近世陶磁器
【18世紀】……149
写真(PL)102　S006出土遺物近世陶磁器
【17世紀】（１）……149
写真(PL)103　S006出土遺物近世陶磁器
【17世紀】（２）……150
写真(PL)104　S006出土遺物（近世のきせる）……150
写真(PL)105　S006出土遺物（鉄釘）……151
写真(PL)106　S006出土遺物
（鉄・銅・その他製品）……151
写真(PL)107　S006出土遺物（古銭）……152
写真(PL)108　S006出土遺物（瓦）……152
写真(PL)109　S006出土遺物（石器）……153
写真(PL)110　S006出土遺物（中世）……153
写真(PL)111　S006出土遺物（近世）……154
写真(PL)112　S006出土遺物……154
写真(PL)113　S006出土遺物（弥生・古墳・古代）…155
写真(PL)114　２区出土遺物（古代）……155
写真(PL)115　２区出土遺物……156
写真(PL)116　S006出土遺物（砥石）……157
写真(PL)117　S006出土遺物（石臼）……157
写真(PL)118　S006出土遺物（土製品）……158
写真(PL)119　S006出土遺物（木製品）と
ピット31の柱材の一部……158

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

本遺跡の調査は、国土交通省熊本河川国道事務所加勢川改良事業に伴う事前の記録保存を目的とした発掘調査である。

事業の実施に先立ち予定地内が御幸木部遺跡群の中に含まれ、埋蔵文化財が存在する可能性が高いことから、確認調査を実施した。その結果、古代、中世の遺構や遺物が発見され、遺跡の存在が確認された。その後、埋蔵文化財の発掘調査が必要な範囲を確認し、国土交通省と協議を重ねた上で、調査を行う運びとなった。

第２節　調査の組織

確認調査は平成14年度、発掘調査は、平成16年度、報告書作成及び印刷は平成17年度に行った。

【平成14年度（2002）確認調査】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
　島津義昭（教育審議員・課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第１係長）
調査事務局　小田信也（教育審議員・課長補佐）
　中村幸宏（主幹兼総務係長）
　天野寿久（主任主事）
　杉村輝彦（主　事）
調査担当　坂田和弘（参　事）

【平成15年度（2003）確認調査】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
　島津義昭（教育審議員・課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第１係長）
調査事務局　小田信也（教育審議員・課長補佐）
　欄杭正義（主幹兼総務係長）
　天野寿久（主任主事）
　杉村輝彦（主　事）
調査担当　坂田和弘（参　事）

【平成16年度（2004）本調査】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　島津義昭（文化課長）
　倉岡　博（課長補佐）
調査総括　高木正文（課長補佐兼調査第１係担当）
調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
　欄杭正義（主幹兼総務係長）
　天野寿久（主任主事）
　小谷仁志（主　事）
調査担当　岡本真也（参　事）
　高野信子（嘱　託）
　林禎一郎（嘱　託）

【平成17年度（2005）報告書作成】

調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　梶野英二（文化課長）
　倉岡　博（課長補佐）
調査総括　高木正文（課長補佐兼調査第１係担当）
調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
　四元正明（主幹兼総務係長）
　塚本健二（主任主事）
　小谷仁志（主　事）
調査担当　岡本真也（参　事）
　高野信子（嘱　託）
　手柴智晴（嘱　託）

調査指導及び協力者（順不同・敬称略）

松下孝幸（長門市人類学ミュージアム）、池田朋生（熊本県立装飾古墳館）、長井　勲（美里町文化財保護委員）、前川清一（熊本県立教育センター）・馬場正弘（熊本県教育庁文化課）、矢野裕介（装飾古墳館「歴史公園鞠智城・温故創生館」）、金田一精・林田和人（熊本市教育委員会）、林田鶴秋（熊本市御幸木部）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）

第３節　調査の過程

本調査は平成16年（2004）12月１日（火）から平成17年（2002）３月30日（水）まで行った。

以下に各月を前半と後半に分けて、調査日誌の中から特筆すべき事項や内容を簡単に述べたい。

【12月】

（前半）

１日から、前現場の新南部遺跡群から御幸木部遺跡への引越しを行う。

６日～17日、表土剥ぎ。調査区外にピンク色の石材で作成された井戸１基を確認。阿蘇ピンク石（馬門石）の可能性が高いと確信する。

（後半）

20日から、現場開始。４級基準点及びメッシュ杭も打つ。調査区内の表土剥ぎ。１、２区の清掃を中心に作業を行う。３区では石列を確認。調査区内に、以前住んでおられた林田鶴秋氏（昭和５年３月５日生まれ）が来跡。検出しているピンク色の石製の井戸は、林田氏は記憶にはないが、話は聞いていたとのこと。５・６代前は庄屋だったそうだ。屋敷や井戸は近世末に上る可能性がある。

27日、本年の作業終了する。

【１月】

（前半）

６日、作業開始。

12日、１区のピットの埋土を３種類に分類し、柱の位置を検討するがうまく並ばない。

（後半）

20日、１区のピットNo.31には柱の基部が残存していることが判明。弥生土器片も数点含まれる。住居の柱の可能性が考えられるが、他の柱の位置がうまく並ばない。

21日、文化課の文化財保護主事　馬場正弘氏に土層及び石製の井戸枠を見てもらう。１区の地山と考えられるガチガチの層は、かつて湿地帯の芦原だった証拠だという。また、ピンク色の石製枠は阿蘇溶結凝灰岩（いわゆるピンク石）と松尾地方で採集される安山岩が混入しているとの弁。

22日、第１回目の空撮実施。

【２月】

（前半）

10～11日、２区―１で古代の溝と人骨を伴う土壙墓を検出。人骨の残存状況はあまり良くない。共伴遺物はない。

（後半）

近くにある浄尊寺の住職さんに来ていただき、お経を上げてもらう。非常に徳の高い住職さんだった。

21日、土井ヶ浜ミュージアムの松下孝幸先生に人骨の取り上げにきてもらう。伸展葬。性別は大腿骨や頚骨の太さから男性と推定される。

22日から、２区―１を業者に引き渡す。３区の近世の溝の掘り下げを行う。陶磁器片、漆塗りの木製品、きせるや寛永通宝などが出土。調査区外に古代の包含層と遺構が存在することが判明。調査区外であるため、保存することにする。

【３月】

（前半）

近世の溝の完掘に向けて全力を挙げる。同時に石組み遺構の実測も行う。特に石組遺構については、前川先生、長井氏や池田氏に指導を仰ぐ。

弥生時代後期～終末期の住居跡等の掘削や実測に追われる。

（後半）

25日、荷物を県資料室に搬出する。実測作業の残りは４月上旬まで行う。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

御幸木部遺跡群が所在する熊本平野は、熊本県の中央部に位置し、市域の西側は島原湾（有明海）、東方には阿蘇火山、北西部には金峰火山を望み、島原湾と内陸部とを隔てている。また、南部は低地で占められ、北部・東部一帯には台地（火砕流台地や河成段丘）が広がり、これらは東方へ高度を増し、阿蘇火山の西側外輪山斜面へと続いている。

熊本平野には、白川、坪井川、井芹川や緑川とその支流である加勢川、秋津川、木山川や秋津川が流れる沖積平野である。

今回調査を行った御幸木部遺跡群（元々御幸木部遺跡、木部箱式石棺、阿弥陀来迎図像・芥川守拙観音図像線刻板碑などが存在する弥生時代から中世までの遺跡の総称）は、熊本市御幸木部町字外村屋敷及び古屋敷に所在する。緑川の支流である加勢川の下流域、緑川河口から約11km上流に位置し、標高は約５ｍである。この遺跡群は、対岸の嘉島町下仲間地区にも広がりをみせる。

第２節　歴史的環境

ここでは図１御幸木部遺跡群が所在する熊本平野を中心に各時代の歴史的環境を概観してみたい。

【旧石器時代】（～約13,000年前）

現在、熊本県下には300を越える旧石器時代の遺

跡が確認されている。河川流域に集中しており、その中でも白川を中心とする阿蘇外輪山一帯や球磨川上流域を中心とする球磨盆地一帯などが特に集中した地域である。

現在、熊本市には15遺跡以上が確認されている。その中でも石の本遺跡８区の後期旧石器初頭の石器群（刃部磨製石斧、台形様石器、鋸歯縁石器、ピックなど）は、日本でも最古級の石器群として位置付けられている。（包含層出土の木炭による放射性炭素年代で約32,000年前を示している。）

【縄文時代】（約13,000年前～2,300年前）

熊本平野周辺の縄文時代は、草創期を除き、各時代にわたる遺跡が存在している。

早期の押型文土器が出土する遺跡は、丘陵の裾や台地の縁辺に位置しているものが多い。竪穴住居跡が検出された庵ノ前遺跡がある。

前期になると中九州に広くみられる現象であるが、遺跡の数も少なく、規模も小さくなる。

縄文時代前期には気候の温暖化に伴い海水面が現在より３～５ｍ上昇（縄文海進）し、その後も気候の変動によりわずかな海進、海退を繰り返している。中期から後期はじめまでは縄文海進期の影響を受けて、熊本平野の奥地にまで貝塚が形成される。沼山津貝塚、カキワラ貝塚（嘉島町）、辺田見貝塚（御船町）などがその好例である。

後期になると中九州の縄文時代の遺跡は急激に増加する。その初頭には中期から継続して阿高式系の土器が作られていたが、新しい磨消縄文文化も伝来する。中葉になると磨消縄文文化が鐘ヶ崎式土器として定着する。それから中九州独特の北久根山式土器なども生み出され、太郎迫式まで磨消縄文文化が継続する。後葉になると、三万田式以降黒色磨研土器が作られ、晩期前半まで数多くの大規模集落を構成することとなり、日本全体でみても人口密度の高い地域であったと考えられる。その代表的遺跡として、四方寄遺跡、太郎迫遺跡、上南部遺跡、健軍上ノ原遺跡などが挙げられる。また、この時期には土偶や石棒など、祭祀に用いられたと考えられる遺物も数多く出土する様になる。

晩期前半は後期末葉から引き続き大規模遺跡がみられたが、中葉から後葉になると遺跡の数が激減し、その規模も小さくなる。黒川式土器以降みられるこの特徴は、次の新たな弥生文化の胎動期かとも考えられる。（1996　冨田）

御幸木部遺跡群から南に約５km、下益城郡城南町の浜戸川周辺には黒橋貝塚（縄文中期～後期）、阿高貝塚（縄文中期～後期）、御領貝塚（縄文後期）などが集中している。

【弥生時代】（約2,300年前～1,700年前）

弥生時代前期の遺跡は、近年熊本市立泉ヶ丘小学校のプール改修工事に先立ち調査がされ、報告書が刊行された江津湖遺跡群が、有名である。早期後半～前期初頭に位置付けられる墓地群で、土壙墓103基・甕棺・壺棺６基が確認された。（2005　金田）その他には黒髪町遺跡群、新屋敷遺跡群、御坊山遺跡などがあり、いずれも海や河川流域に位置している。このことは弥生文化が有明海を通して伝播した可能性が高いことを示唆するものと考える。

中期前半では、八ノ坪遺跡から熊本県内初となる青銅器の鋳型等、護藤遺跡群から朝鮮系無文土器等、白藤遺跡群から甕棺群が検出されている。前半期の中でも八ノ坪遺跡群→護藤遺跡群→白藤遺跡群という時期的変遷が捉えられる。

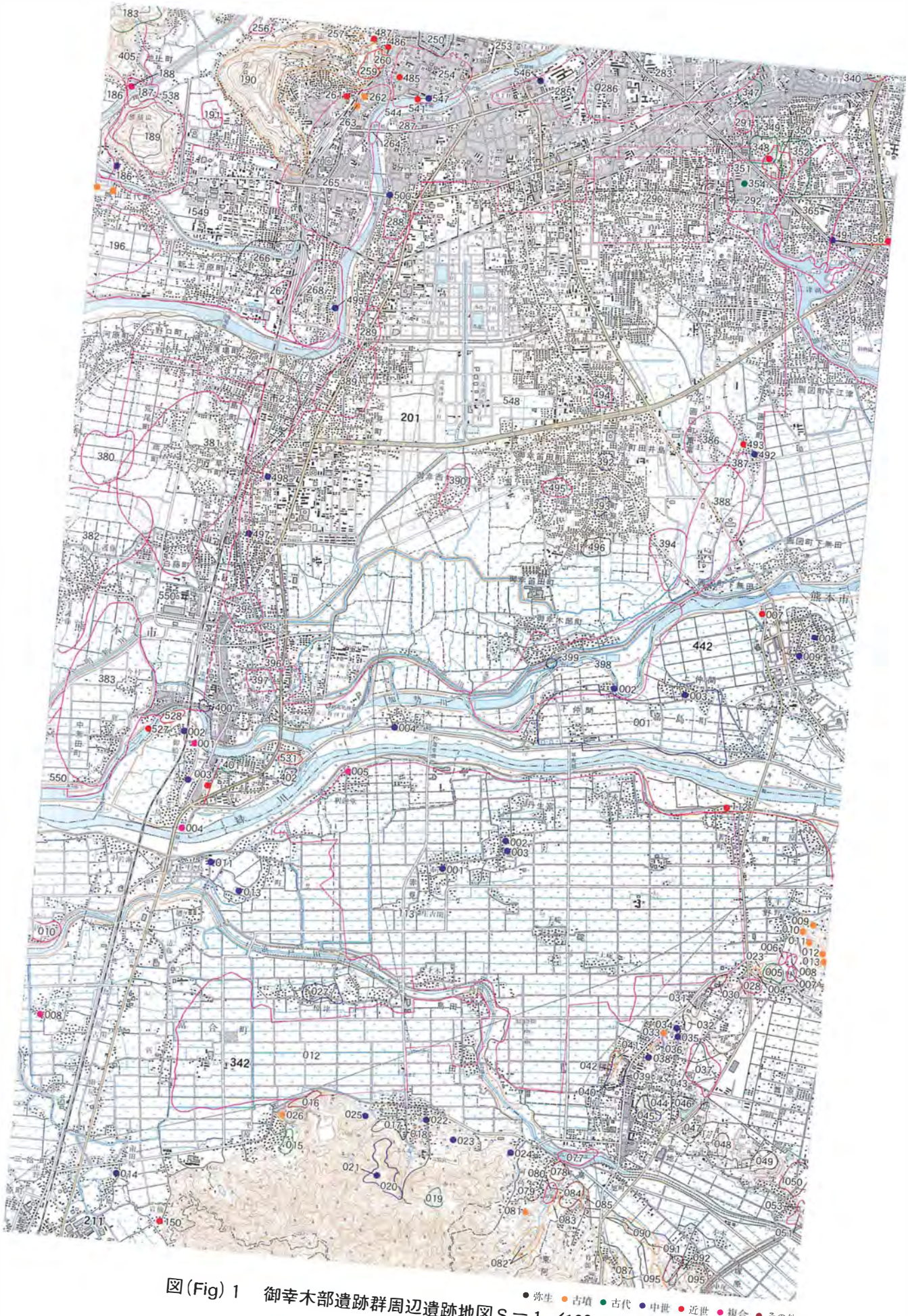
中期後半～後期初頭は、甕棺墓を主体に展開する。黒髪町遺跡、大江白川遺跡群、神水遺跡、白藤遺跡群などが挙げられる。

後期中葉～後葉は、石神原遺跡（島崎４丁目）、道城方遺跡（蓮台寺町、二本木４丁目）、上高橋高田遺跡などで遺物や遺構が確認されている。

御幸木部遺跡群では、加勢川川底から出土した前期後半～中期前半期の遺物、字古屋敷で出土した中期～後期にわたる遺物が確認されている。

【古墳時代】（約1,700年前～1,400年前）

古墳の原形といわれる周溝墓は、広木町・水源町一体に見られ、方形周溝墓と円形周溝墓が密集している。４世紀から７世紀頃にわたる高塚式古墳は西山に多く、その中には千金甲・稲荷山・富ノ尾のような装飾古墳も含まれている。いずれも幾何学文様の装飾を彩色しており、富ノ尾古墳にはかつて石人もたてられていた。古墳時代終末期の小円墳は立田



図(Fig) 1　御幸木部遺跡群周辺遺跡地図 S＝1／100,000

山麓に多く分布し、横穴墓も立田山麓をはじめとする白川の崖線および京町台地の凝灰岩の崖面に多い。(1987　鈴木）つつじヶ丘横穴墓群や古城横穴墓群が有名である。

【歴史時代】（約1,400年前～　）

古代は、律令体制の導入に伴い、肥後国においても行政組織の整備、条里の施行が進められ、その影響が周囲に及んでくる。

7世紀後半～8世紀初頭には託麻郡家と推定される渡鹿A遺跡（大江遺跡群)、8世紀前半には渡鹿廃寺（大江遺跡群）が創建されており、同遺跡群内において当該期の集落も形成される。

8世紀中葉～後半になると国分寺、国分尼寺が創建され、また託麻国府の設置や駅路の整備もその前後になされたと考えられる。大江遺跡群、黒髪町伊遺跡群においては南北に延びる西海道跡が検出されており、加えて黒髪町遺跡群は蚕養駅跡に推定されている。(2002　美濃口)

御幸木部遺跡群が所在する御幸木部町周辺は、「和名抄」による託麻郡の下井郷に比定される。(1987　鈴木)

また、周囲は熊本平野条里跡に推定されており、中世の「詫摩文書」に出てくる寺田里、丸田という地名は同遺跡群周辺に比定されている。現在も熊本市出仲間には七ノ坪、三ノ坪、北坪の地名が残っている。

鎌倉期になると、飽田郡には飽田郷・立田郷・鹿子木荘・活亀荘・河尻荘、託麻郡には安富荘・神蔵荘・六箇荘などが現れてくる。託麻郡内の大荘園は神蔵荘で、江津湖以西の部分を占め、さらに同荘の西側には安富荘があり、安富本荘がその中心地で、現在の本荘町がその地にあたり、神蔵・安富両荘の地頭は詫摩氏であった。(1987　鈴木）当時の御幸木部遺跡群周辺は、この詫摩氏の支配下に置かれたものと考えられる。

鎌倉期に入って建立された寺院には、川尻の大慈禅寺と大江の往生院がある。大慈禅寺は順徳天皇第3皇子の寒巌義尹が、河尻荘の地頭河尻泰明の外護によって弘安5年（1282）に建立した寺院で、義尹の頂相と文書は義尹文書として国重文に、石層塔・宝塔・宝篋印塔などは県重文に指定されている。

調査区の付近には北東から東方向、約100～200m地点に木部地蔵堂石造物群や天文元年（1532年）林田右京亮の創建といわれる木部神社がある。

木部地蔵堂石造物群には、文明7年（1475）12月3日銘の六地蔵石幢と天文2年（1533）4月7日銘の阿弥陀来迎図像線刻板碑及び寛政6年（1794）芥川守拙観音図像線刻板碑が立てられている。この六地蔵石幢は「願主沙門霊珠」が結縁衆を募り、文明7年（1475）12月3日に「結縁衆吉祥如意」を祈願して建立されたことが銘文から明らかであり、当時木部周辺に相当な人々が集まる場が存在していたことが想像される。そして結縁の中心となった「沙門霊珠」は『国郡一統誌』にみえる「道伝寺」の寺僧と推定される。阿弥陀来迎図像線刻板碑は、その銘文から「林田右京亮」が天文2年（1533）4月7日に「二世福願」を祈願して「西方無量寿仏尊」を刻んだ逆襲供養板碑である。この銘文の一節に「天宝現世安福後生善処漸湘之南潭之北中黄金充一国」とあり、禅宗系の表現用語や「黄金充一国」といった商業的文言が見られる。所在地の地形から「漸湘之南潭」は加勢川を示すものとみられ、「黄金充一国」ほど繁盛した加勢川河川交通の拠点津の一つであったものとみられる。「林田右京亮」は禅宗に帰依した、領主的側面を持つ有徳人（商人）と推定される。このように木部地蔵堂及び境内石造物群は中世加勢川河川交通や津の景観を考察する上で重要な資料を残す最重要の遺跡の一つと考えられる。(1996　青木)

近世に入り、加藤清正は肥後入国後、豊臣秀吉の命によって検地を実施し、また、土木・治水工事に力を入れ、白川筋・緑川筋の改修を開始した。清正は慶長5年（1600）の関ヶ原の戦では東軍につき、西軍の中心となった小西行長の宇土城・八代城を攻略し、次いで小西領を合わせて領することとなった。

清正の茶臼山新城の築城開始時期は明らかではないが、同12年（2007）熊本城が完成している。

慶長16年清正の死後、子の忠広が相続したが、幼少のため幕府の厳しい介入のもとでの統治が行われた。寛永9年（1632）加藤家は取り潰され、豊前小

熊本県（43）熊本市（201）

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
183	7-43	池辺寺塔遺跡群	池上町池上	古代					■			寺社		堂床遺跡・ババドン・ライゴウインビラ・池の上十三塚	
186	7-46	高橋町遺跡群	高橋町	古墳～平安				■	■			包蔵地		高坊古墳・皆城古墳群・二本松古墳群・小松山古墳群・烏帽子山古墳・堂ノ園古墳・高橋窯跡・上高橋堂園遺跡・上高橋高田遺跡・綿打遺跡・高橋貝塚・高橋南貝塚・官山古墳・聖徳寺跡・烏帽子山遺跡・上高橋遺跡・高坊遺跡・浦田坂遺跡・放牛阿弥陀像	
187	7-48	池の上	池上町池上	古代・中世					■	■		包蔵地			
188	7-49	池辺寺関係石造物	池上町池上	古代・中世					■	■		石造物	市		宝塔、一字一石碑、板碑、石灯篭、孤峰秀晃池辺寺再興碑
189	7-50	独鈷山遺跡群	池上町池上、城山上代町	古墳～中世				■	■	■		包蔵地		独鈷山山頂遺跡・独鈷山西麓遺跡・高野辺田遺跡・金光寺跡石碑・兜率石・妙椙水・高野辺田の洞仏・肥州高野山弥生遺跡・独鈷山中腹遺跡	
190	7-50	花岡山・万日山遺跡群	横手町、春日町	古墳				■				古墳		花岡山遺跡・万日山遺跡・万日山古墳群・万日山墳墓群・花岡山箱式石棺群・長谷寺跡・来迎院・長谷寺境内古塔碑群	万日山古墳群4基以上。長持型石郭、家形石棺横穴式石室
191	7-52	清水原	池上町	縄文～中世		■	■	■	■	■		包蔵地			
193		城山古墳群	城山町上代町城山	古墳				■				古墳	市	一～三の塚	円墳
196		上代町遺跡群	城山上代町	縄文～平安	■	■	■	■	■			包蔵地		上代町遺跡・下代遺跡・中代遺跡・お徳・徳兵衛古墳	弥生前期土器
250	8-58	船場町	新町2丁目、鍛冶屋町	弥生			■	■				包蔵地		新町2丁目甕棺	甕棺群
253	8-62	辛島町	辛島町	弥生・古墳			■	■				包蔵地			
254	8-63	古町（旧唐人町）	唐人町、古町ほか	弥生～明治			■	■	■	■	■	包蔵地		令永寺跡・勲院松林寺跡・本覚寺福聚山多聞院跡・護国寺常住院跡・霊山寺跡・古往生院跡・明十橋際遺跡	
256	8-65	戸坂御田尻	戸坂町	縄文～中世		■	■	■	■	■		包蔵地			
257	8-66	吉祥寺横穴群	横手町	古墳				■				古墳			
259	8-69	妙解寺細川家霊廟及び門	横手2丁目	江戸							■	建造物	国		
259	8-69	妙解寺細川家墓地	横手2丁目	江戸							■	建造物	県		
260	8-70	細川家菩提寺妙解寺跡	横手2丁目	江戸							■	建造物	市		市指定史跡
261	8-71	山由雲院（春日寺）	春日3丁目	江戸							■	寺社	市	細川忠利公火葬の地のみ市指定	市指定史跡
262	8-72	北岡神社境内古墳	春日1丁目	古墳				■				古墳			円墳鳥文鏡
263	8-107	北岡横穴群	春日1丁目	古墳				■				古墳			
264	8-74	石塘（白川橋）	二本木1・2丁目	弥生～中世			■	■	■	■		建造物			
265	8-75	二本木遺跡群	二本木1・2丁目ほか	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地		二本木国府跡及び関連遺跡・春日町遺跡・田崎本町遺跡・古町小学校校庭遺跡・延命寺塔心礎	二本木国府推定地
266	8-76	八島町遺跡	八島町	弥生			■					包蔵地			
267	8-77	道城方遺跡	蓮台寺町道城方	弥生・古代			■	■	■			包蔵地			
268	8-78	南新宮遺跡	蓮台寺町南新宮	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地			
283	8-93	大江遺跡群	大江3丁目	縄文～明治		■	■	■	■	■	■	包蔵地		大江遺跡・大江青葉遺跡・大江東原遺跡・白川中学校校庭遺跡・渡鹿旧電電波高校遺跡・熊高敷地遺跡・熊高通り遺跡・杉ノ本遺跡・託麻郡家推定地・渡鹿廃寺・熊本英学校跡・建設会館遺跡他	
285	8-95	本庄（熊大病院敷地）	本荘2丁目	古墳～平安				■	■			包蔵地			熊大埋文調査室調査
286	8-96	不動院跡の六地蔵塔	九品寺4丁目	中世						■		石造物	県		県指定重要文化財
287	8-97	本山城跡（本庄城跡）	本山町城の本	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地			元弘年間に詫麻宗直
288	8-98	世安池田遺跡	世安町池田	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地			輸入陶磁器など
289	14-2	平田町遺跡	平田1丁目	弥生～平安			■	■	■			包蔵地			甕棺群
290	8-100	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地			
291	9-65	西水前寺町	水前寺1丁目	縄文～中世		■	■	■	■	■		包蔵地		縄文阿高系	
292	9-72	国分寺跡	出水1丁目	縄文～中世		■	■	■	■	■		包蔵地		七重塔心礎石・宮園遺跡・労働金庫遺跡	県・市による多数の調査あり
293	9-75	江津湖遺跡群	神水町、画図町ほか	縄文～中世		■	■	■	■	■		包蔵地		上江津大曲遺跡・堀内邸石造遺物・神水若宮・神祇寺跡・弁天石古屋敷遺跡	
340	9-57	帯山遺跡群	帯山1丁目	縄文～平安								包蔵地		帯山遺跡・保田窪遺跡	布目瓦、曽畑、阿高、竹崎

表（Tab）1　周辺遺跡一覧表（1）

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
347	9-64	北水前寺	水前寺3丁目	奈良・平安					■			包蔵地			
348	9-66	水前寺廃寺跡	水前寺公園	奈良・平安					■			包蔵地			
349	9-67	水前寺廃寺塔心礎石	水前寺公園	奈良					■			寺社	市		塔（基壇・心礎・礎石群）部分について市指定史跡
350	9-68	水前寺成趣園	水前寺公園	江戸							■	庭園	国		国指定史跡及び名勝、細川忠利、山水式
351	9-69	古今伝授の間	水前寺公園	江戸							■	建造物	県		県指定重要文化財、細川藤孝古今集伝授、かやぶき茶室
352	9-70	隈山廃寺跡	水前寺公園	奈良・平安					■			寺社			国分尼寺推定地
354	9-73	肥後国分寺	出水1丁目　熊野神社	奈良					■			寺社	市		塔心礎並びに礎石が市指定
355	9-74	神水	神水本町・出水2丁目	縄文～平安		■	■	■	■			包蔵地			県・市調査、報告書あり
356	9-77	健軍神社杉馬場	健軍2丁目・神水1丁目	江戸							■	参道	市		市指定史跡
380	11-3	古護藤	八分字町	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地		須玖式甕棺	
381	11-4	白藤遺跡群	島町、白藤町ほか	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地		倉小路箱式石棺・倉小路甕棺遺跡・屋敷遺跡・今村遺跡・刈草遺跡・蔦町遺跡	白藤遺跡青銅器鋳型、ミニチュア青銅矛
382	14-8	護藤遺跡群	護藤町	古墳～中世				■	■	■		包蔵地		戸崎B（馬場）遺跡	
383	11-6	中無田遺跡群	護藤町	弥生・中世			■	■	■	■		包蔵地			
386	14-10	重富遺跡	画図町	古墳～平安				■	■			包蔵地			
387	13-3	所島大工免	画図町	弥生～平安			■	■	■			包蔵地			
388	14-24	山王遺跡	画図町	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地			
389	14-3	近見遺跡	近見町	縄文～中世		■	■	■	■	■		包蔵地			
390	14-6	西無田遺跡	御幸西無田町	弥生～平安			■	■	■			包蔵地			甕棺、石包丁
392	14-8	下乙地頭館跡	田迎町	中世						■		包蔵地			土塁残存
393	14-9	四才町隈屋敷遺跡	田迎町	中世						■		包蔵地			土塁残存
394	14-11	良町二石遺跡	田迎町	弥生・古墳			■	■				包蔵地			弥生前期土器出土
395	14-12	南高江西馬出遺跡	南高江町	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地			
396	14-13	中椎田遺跡	八幡町	古墳～中世				■	■	■		包蔵地			青磁
397	14-14	マツヒサ屋敷遺跡	八幡町	古墳～中世				■	■	■		包蔵地			土累残存
398	14-15	御幸木部遺跡群	御幸木部町	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地		御幸木部遺跡・木部箱式石棺・阿弥陀来迎図像・芥川守拙観音図像線刻板碑	地蔵文明7、阿弥陀天文2、観音寛政6
399	14-16	木部六地蔵塔	御幸木部町	中世						■		石造物	市	道伝寺跡	
399	14-16	木部六地蔵堂敷地	御幸木部町	中世						■		包蔵地	市		
400	14-17	川尻外城跡	川尻町	中世						■		城			川尻氏の居城、川尻城跡
401	14-18	学承院跡	野田町	平安					■			寺社			平安時代開創、天台宗
402	14-19	大慈寺の層塔	野田町508	鎌倉						■		石造物	県		2基、九重石塔本来は十三、永仁5年銘
402	14-19	大慈寺の宝篋印塔	野田町508	鎌倉						■		石造物	県		
402	14-19	大慈寺の宝塔	野田町508	鎌倉						■		石造物	県		
402	14-19	大慈寺境内	野田町508	鎌倉						■		寺社	県		弘安5年寒巌義伊創建、肥後最古の曹洞宗寺院
405	7-59	池辺寺関連遺跡群	池上町	平安～中世					■	■		寺社			
454	7-54	じゅうげんじ山古墳	城山上代町	古墳				■				古墳			
455	該当なし	うまの塚古墳	城山上代町	古墳				■				古墳			
456	該当なし	享禄の板碑	城山上代町	中世						■		石造物			
485	8-63	板屋町・細工町寺院群	板屋町、細工町	近世							■	寺社			
486	該当なし	願行寺跡	横手町	近世							■	寺社			
487	8-66	横手町寺院群	横手町	近世							■	寺社			
491	該当なし	八丁馬場板碑群	神水本町	中世						■		石造物			3基
492	該当なし	大光寺跡	画図町	中世						■		寺社			板碑、石仏
493	該当なし	所島神社石仏	画図町	近世							■	石造物			
494	14-20	田迎下乙遺跡	田迎町田井の島	古代・中世					■	■		包蔵地			六地蔵、一字一石
495	14-21	御幸笛田神社遺跡	御幸笛田町	弥生～中世			■	■	■	■		包蔵地			
496	14-22	良町遺跡	田迎町良町	弥生			■					包蔵地			

表(Tab) 2　周辺遺跡一覧表 (2)

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
497	該当なし	南高江六地蔵塔	南高江町居屋敷	中世						■		石造物			
498	該当なし	高江城跡	南高江町居屋敷	中世						■		城			
499	該当なし	蓮台寺桧垣塔	蓮台寺町居屋敷	中世						■		石造物			蓮台寺境内三重石塔
500	該当なし	無漏寺跡	世安町川端	中世						■		寺社			古塔碑
527	該当なし	御船手永会所跡	川尻町	江戸							■	包蔵地			出入船舶監視の役所
528	該当なし	川尻船着場跡	川尻町	近世							■	包蔵地			150m、13段の石垣
530	該当なし	大渡旧街道	野田町	江戸							■	交通			
531	該当なし	野田町旧寺跡	野田町	近世							■	寺社			
538	(7-50)	仁王堂板碑	池上町	中世						■		石造物			
541	8-63	光明寺跡	呉服町万2丁目ほか	近世							■	寺社			
544	8-75	熊本駅前の石塘	春日町	近世							■	建造物			
546	(8-95)	代継神社の層塔		中世						■		建造物			
547	(8-63)	浄信寺跡	呉服町万2丁目ほか	中世						■		寺社			
548	該当なし	熊本平野条里跡		古代・中世					■	■		生産			
549	該当なし	熊本平野条里跡		古代・中世					■	■		生産			
550	該当なし	熊本平野条里跡		古代・中世					■	■		生産			
	14-23	上ノ郷遺跡							■	■					

熊本県（43）城南町（341）

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
001		金福寺	赤見　前田	中世						■		寺社	町		薬師堂あり、青磁出土、石造物あり
002		高の石造六地蔵塔	高	中世						■		石造物			
003		高の石造宝塔	高	中世						■		石造物	町		正応四年銘、1基個人蔵
004		今村横穴群	今　吉野・東原	古墳				■				古墳			須恵器片
005		益城軍団推定地	坂野　西天神原	古代					■			包蔵地	町		
006		西天神原(a)	坂野　西天神原	縄文～古代		■	■	■	■			包蔵地			
007		西天神原（b)	坂野　西天神原	縄文～古代		■	■	■	■			包蔵地			399
008		東天神原	坂野　東天神原	縄文～古代		■	■	■	■			包蔵地			
009		東天神原甲古墳	坂野　東天神原	古墳				■				古墳	町		円墳、土製管玉、東天神原古墳群
010		東天神原乙古墳	坂野　東天神原	古墳				■				古墳	町		円墳、土製管玉、東天神原古墳群
011		東天神原丙古墳	坂野　東天神原	古墳				■				古墳	町		土製管玉、東天神原古墳群
012		大塚山西古墳	坂野　東天神原	古墳				■				古墳	町		円墳、大塚山古墳群
013		大塚山南古墳	坂野　東天神原	古墳				■				古墳	町		円墳、大塚山古墳群
023		西天神原横穴群	坂野　西天神原	古墳				■				古墳	町		
028		今東原	今　吉野・西原	弥生・古墳			■	■				包蔵地			
030		今村貝塚	今　吉野・西原	縄文		■						貝塚			縄文晩期土器
031		今西原	今　吉野・西原	弥生			■					埋葬			弥生中期甕棺
032		西福寺	宮地　宮本	弥生			■					寺社			弥生中期甕棺
033		熊寺古墳	宮地　宮本	古墳				■				古墳			
034		熊寺跡	宮地　宮本	中世						■		寺社	町		文永2年創造、最古の禅寺
035		七社宮の宝塔身	宮地　宮本	中世						■		石造物	町		天福二年銘
036		宮本横穴群	宮地　宮本	古墳				■				古墳			
037		新御堂	宮地　新御堂	縄文・弥生		■	■					包蔵地			縄文晩期、弥生中期土器・石庖丁
038		祇園寺跡	宮地　祇園寺	中世						■		寺社	町		隈牟田荘の初期荘寺、須恵器・石造物
039		囲貝塚	宮地　囲	弥生			■					貝塚	町		弥生後期、須恵土器・石庖丁、出土品のみ町指定
040		隈庄城跡	隈庄　古城	中世						■		城跡	町		瓦出土
041		城の鼻古墳群	隈庄　古城	古墳				■				古墳			
042		城の鼻横穴群	隈庄　古城	古墳				■				古墳			

表(Tab) 3　周辺遺跡一覧表 (3)

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
043		中尾貝塚	宮地　溝口	弥生			■					貝塚			
044		溝口	宮地　溝口	弥生			■			■		包蔵地			弥生中期土器、石庖丁
045		熊仁寺跡	下宮地　居屋敷	中世						■		寺社	町		文永２年創建、最古の禅寺
046		上ノ山	隈庄　上ノ山	弥生			■					埋葬	町		弥生中期甕棺
047		安幕	隈庄　安幕	弥生			■					包蔵地			弥生後・末期土器
048		向権現	下宮地　向権現	弥生			■					包蔵地			弥生後期土器
049		迎原西・東	沈目　迎原西・東	弥生			■					包蔵地			弥生土器・石庖丁
050		沈目池頭	沈目　池頭　塚本	縄文		■						包蔵地			縄文早期土器、押型波状文
051		沈目奥野	沈目　奥野	縄文・古墳		■	■	■				集落	町		県教調査地、沈目土器出土地
051		沈目奥野	沈目　奥野	縄文～古墳		■	■	■				集落			
053		沈目横穴群	沈目　奥野	古墳				■				古墳			土製管玉
077		黒橋貝塚	下宮地	縄文・弥生		■	■					貝塚	国		縄文・弥生・石器・土器
078		阿高貝塚	阿高　東原	縄文		■						貝塚	国		縄文中期土器・骨角器、阿高式発生地
079		西原	阿高　西原	弥生			■					埋葬			弥生壺棺
080		阿高火葬墓跡	東阿高　城山	中世・近世						■	■	墓地			骨製笄・蔵骨器
081		影熊古墳	阿高　影熊	古墳				■				古墳			円墳
082		阿弥陀尾横穴群	阿高　影熊・山口	古墳				■				古墳	町		須恵器・亀甲人骨
083		御領横穴群	東阿高　八ツ尾	古墳				■				古墳	町		須恵器
084		御領貝塚	東阿高　八ツ尾	縄文		■						貝塚	国		縄文晩期土器・土偶、御領式本拠
085		アンドン坂横穴群	東阿高　千々屋寺	古墳				■				古墳	町		亀甲
087		一位田横穴群	東阿高　一位田	古墳				■				古墳	町		須恵器
090		岸古墳群	東阿高　岸	古墳				■				古墳			
091		松手	塚原　松手	縄文		■						包蔵地			縄文後期土器
092		権現社	塚原　砥用	弥生			■					埋葬			弥生式甕棺
095		塚原古墳群						■							
095		丸山第1～4号古墳	塚原　丸尾	古墳				■				古墳	国		円墳
095		りゅうがん塚古墳	塚原　丸尾	古墳				■				古墳	国		円墳
095		将軍塚古墳	塚原　丸尾	古墳				■				古墳	国		円墳、鏡・玉・短甲など
095		くぬぎ塚古墳	塚原　丸尾	古墳				■				古墳	国		円墳
095		日焼塚古墳	塚原　北原	古墳				■				古墳	国		曲玉・管玉・小玉
095		北原第１～２号古墳	塚原　北原	古墳				■				古墳	国		２号は円墳
095		石ノ室古墳	塚原　北原	古墳				■				古墳	国		円筒状石製品、突起のある家型石棺
095		花見塚古墳	塚原　北原	古墳				■				古墳	国		鉄剣・鉄鏃・金環・銅鏃
095		琵琶塚古墳	塚原　丸山	古墳				■				古墳	国		円筒埴輪
095		三段塚古墳	塚原　丸山	古墳				■				古墳	国		円墳
095		丸山第１～５号古墳	塚原　丸山	古墳				■				古墳	国		円墳
095		土取塚古墳	塚原　丸山	古墳				■				古墳	国		前方後円墳
095		塚原	塚原　上ノ原	縄文・古墳		■	■	■				包蔵地	国		
113		条里跡		古代・中世					■	■		生産			

熊本県（43）富合町（342）

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
001		観音寺跡	杉島　中崎	古代・中世					■	■		寺社			開山日羅、道元とも『肥後国誌』に記
002		開眼の浜	御船手	中世						■		緑地			道元、船板に観音像を刻み開眼の地という
003		円通寺跡	杉島　久保田	中世						■		寺社			禅曇、観世音、本尊
004		福勝寺跡	杉島　南江	古代・中世					■	■		寺社			薬師三尊をまつる、台宗、天台延暦末寺
005		極楽寺跡	釈迦堂　天神免	古代・中世					■	■		寺社			曇洞禅、本尊釈迦仏
008		光明寺跡	志々水　天神免	古代・中世					■	■		寺社			大慈禅寺の末寺、1299中大慈三世鉄山士和尚/開墓

表(Tab) 4　周辺遺跡一覧表 (4)

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
010		国町	富合　国町	古墳・古代				■	■			寺社			地表下1.5m、土師器・須恵器
011		薬善寺跡	杉島　構口	中世						■		寺社			黄檗宗、薬師三尊、十二神将
012		榎津条里跡	榎津　四の坪	古代・中世					■	■		生産			
013		蒼門寺跡	大町　大岩	中世						■		寺社			宗旨・開基　外不明
014		長福寺跡	南田尻　裏口	中世						■		寺社			本尊阿弥陀２基、付近に大永７年板碑
015		平原窯跡	平原　本生	古代					■			生産			３基、登り窯、布目瓦・須恵器
016		ソヒエ石貝塚	木原　辨天・鯖塚	縄文		■						貝塚			縄文中・後・晩期
017		西蔵	木原　西口	弥生			■					埋葬			巨石、甕棺群
018		木原古墳群	木原　明熊	古墳				■				古墳			栗崎古墳、須弥堂古墳
019		宮山	木原　宮の谷	古代					■			包蔵地			蔵骨器
020		木原山城跡	木原　城山・小城	中世						■		城			仁平年中、為朝築くという、木原山上にあり
021		雁回山海上寺跡	木原　小城	中世						■		寺社			跡地釈迦堂あり、木原不動の奥院
022		阿弥陀寺跡	木原　居屋敷	中世						■		寺社			路地に板碑あり
023		早馬神社跡	木原　明熊	中世						■		寺社			木原山西据
024		玉屋寺跡	木原　玉屋寺	中世						■		寺社			
025		長泉寺跡	木原　長泉	中世						■		寺社			
026		神ノ上古墳	平原　神ノ上	古墳				■				古墳			横穴式石室
027		榎津城跡	榎津　中碇	中世						■		城			下屋敷・中屋敷・有り　　城跡は不明

熊本県（43）嘉島町（442）

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
001		加瀬川流域条里跡	下仲間	古代・中世					■	■		生産			
002		浄華寺跡	下仲間	中世						■		寺社			
003		善正寺跡	上仲間　居屋敷	中世						■		寺社			
004		大正寺跡	犬渕	中世						■		寺社			
007		鯰関所跡	鯰　浮明	近世							■	包蔵地			
008		光琳寺跡	鯰	中世						■		寺社			
009		本木寺跡	鯰　宮園	中世						■		寺社			

熊本県（43）宇土市（211）

県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸	種別	指定	旧遺跡名	備考
150		岩熊の観音堂	岩古曽	近世							■	建造物			七番札所、木造十一面観音菩薩立像

表（Tab）5　周辺遺跡一覧表 ⑸

倉から細川忠利が就封した。以後細川氏は明治維新まで12代240年余肥後を統治する。(1987　鈴木)

熊本城下は白川の右岸に構成され、城内の二の丸・三の丸は重臣の邸宅にあてられ、城の北側の京町台地から東面の坪井・子飼・千反畑・上林・手取・高田原一帯に侍屋敷が配置された。城の南手には古町と呼ばれる町屋、南西部には新町の町屋が並び、さらに坪井にも町屋が設けられた。城下の外郭は水濠と土居で囲まれ、城下から外への出口には番所が設けられ、夜間は門を閉じる決まりであった。城下町は、はじめその職種によって同業者を同じ地域に集めたため、古町には細工町・板屋町・鍛冶屋町・米屋町・魚屋町・紺屋町・大工町・呉服町・桶屋町・など、新町には塩屋町・檜物屋町・瓶屋町・鳥屋町・職人町・桶屋町・魚屋町など、坪井には米屋町・魚屋町・八百屋町・職人町・鳥町などがあったが、幕末になると本格的な職種に必ずしも拘束されなくなっている。(1987　鈴木)

近年、熊本市古町遺跡の調査成果(2004　美濃口・原田)が公表され、町屋の様子が明らかにされつつある。

熊本城下への日常生活必需品は主に海路で高橋港に運び込まれ、坪井川を経て輸送された。そのため高橋にも多くの運送業者や商店が軒を並べ、幕末にはさらに下手の小島が物資搬入保管の港町として栄えた。南の川尻も加藤氏の時代から藩の米倉庫が設けられ、緑川流域の年貢米が集積され、多くの労働者が集中し、そのにぎわいに拍車をかけた。年貢米を運んできた船は,帰りに農業および日常生活に必要な道具類を買い入れたため、川尻は刃物と木製品の製造ならびに木造船の製作が盛んで、高橋とともに五ヶ町のうちに加えられ商業の中心地ともなった。

飽田郡の南部と託麻郡の大半は水田地帯で米作の中心地であり、馬場楠井手・大井手などの取水によって用水を賄った。飽田郡北部の金峰山麓や託麻郡東部の台地では畑作が主体で、麦・大豆・小豆・粟などの穀物が主体であったが、中期頃には城下町へ供給するダイコン・ナス・カブ・唐芋・ニンジン・ゴボウ・などの野菜(主として根菜類)が近郊農村で栽培され、販売されるようになった(番太日記)。

幕末の特産品として「肥の後州名所名物数望附」のなかに松尾の唐芋、水前寺の晒し葛、熊本織、熊本白髪素麺、水前寺もやし、熊本生蕎麦切、水前寺苔、白川の鮎、江津の鯉鮒、はえ、熊本大小金具彫物、細工町キセル、象嵌鍔、加世以多、朝鮮飴、真珠丸などが見える。(1987　鈴木)

肥後藩における地方行政単位として手永制度が用いられていた。手永は郡と村の中間にあって、数村あるいは数十村を一つの単位とする行政単位であった。当時の御幸木部遺跡群周辺の木部村(802石余)、中木部村(524石余)、下木部村(414石余)は、託麻郡田迎手永に属していた。(2004　池上)

村を統括し、村を代表するのが庄屋である。村役人のうち庄屋・頭百姓・村横目を村方三役といった。村政は、郡代・惣庄屋を通して達せられる「法令」(村人への伝達方法は高札または口達)に基づいてなされる。村は村山・神田・用水路などの財産を持ち、自治的に運営された。村規約・村役人・座祭・年中行事・農作業などむらの重要な事柄は農民の寄り合いで決定された。とくに正月10日前後に開かれる初寄り合いはその年の基本的な約束事を決めるものとして重視された。寄り合いの決定事項は村規約として記録され、共同作業に多く依存した村社会では、違反者には出不足銭や過料銭その他の罰則が課せられた。

肥後では天草島原の乱後に武士・町人・農民をそれぞれ5人から7人ずつ組み合わせ、檀家名簿を作り誓詞を書かせた。もともとキリシタン宗門取締りを目的としていた五人組も、のちには農作業における相互扶助・連帯責任を義務づけられ、法を犯す者が出れば五人組は連帯責任を問われて罰せられた。(2004　松本)

以上を鑑みると今回調査した御幸木部遺跡群は、近世期には、託麻郡田迎手永に属しており、水田地帯で米作の中心地に位置していたことが窺われる。

【註】

(1)

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法

調査方法は、５ｍ四方のグリッド法を採用した。

まず、３つの調査区約1,100㎡【調査１区：約200㎡、調査２区：約200㎡（２区－１：約100㎡、２区－２：約100㎡）、調査３区：約700㎡】について表土層及び撹乱層までを重機で除去した後、以下の層を土層観察用ベルト（幅80㎝）を残しながら、一区画（５ｍ×５ｍ）毎に人力で掘り下げていく方法をとった。こうして掘り出した遺物は、必要に応じて一括取り上げまたは出土位置及び高度を記入した上で、取り上げを行った。ベルトは土層の確認をしながら遺物を取り上げた後に取り外した。存在が確認された遺構については、その都度調査を行い、全体を１／10，１／20の縮尺で実測図を作成したほか、
遺構の配置を確認するための全体図としては、１／100の地形測量図を作成した。

また、それぞれの調査段階において、適宜モノクロとカラースライドの２種類を用いて写真撮影を実施した。空中写真撮影は２回行い、調査１・２区と３区の完掘状況をデジタルモザイクで合成写真を作成した。

コンタ図は、河川周辺の土層堆積であるために調査区により若干異なり対比が困難であること、各調査区もほぼフラットであることから図化しなかった。土層断面図や遺構断面図からおおよそのレベルは読み取れるものと考える。

調査３区の西側、約300㎡はビニールやガラス片を含む近代以降の溝があったために表土剥ぎの際に掘削を行い、その下層の遺物や遺構検出に努めたが確認できなかったため、調査区から外した。ポイント的に土層断面図の作成のみ行った。

第２節　調査区の設定

本調査に先立ち平成14年度（2002）に事業予定地内において確認調査が可能な場所に任意にトレンチを設定し、重機を用いて遺跡の確認調査を実施した。その結果古代～中世の遺物や遺構が確認され、事業予定地が本調査対象範囲となった。

調査区（約1,100㎡）は、西側から調査１区（約200㎡）、調査２区（約200㎡）【２区－１（約100㎡）、２区－２（約100㎡）】、調査３区（約700㎡）とした。

なお、調査区には、測量の基準とするための調査用グリッド（区画）を５ｍ間隔で設置した。グリッド設定は、４級基準点測量によって導き出された国土座標Ⅱ系のメッシュの方向に沿ったもので、(株)旭測量設計への業務委託で行い、東西軸をアルファベットで、南北軸を算用数字で示した。図示したグリッドは新測地系（測地2000）の座標値である。

第３節　層位と包含層

本遺跡の基本的な層位は、調査区毎で全く異なる。よって同じ番号の土層でも違う調査区では違う層位を示す。これは沖積地の特性といえる。

ここでは調査１区、調査２区―１、２区―２、調査３区の順に土層断面図と共に示したい。遺物包含層は各調査区で時代と層位が異なり、層の説明の中で示した。

なお、調査３区の東端は、弥生・古代の包含層を近世の溝が切っているために近世の溝埋土より下層の層位を示した。

【調査１区】（図３・８参照）

Ｃ　層　暗灰黄色粘質土（Hue 2.5YR 4/2：6～25㎝）Ｂ層と比較してしまりがなくやわらかでフカフカしている。ピットＣの埋土と同じ。

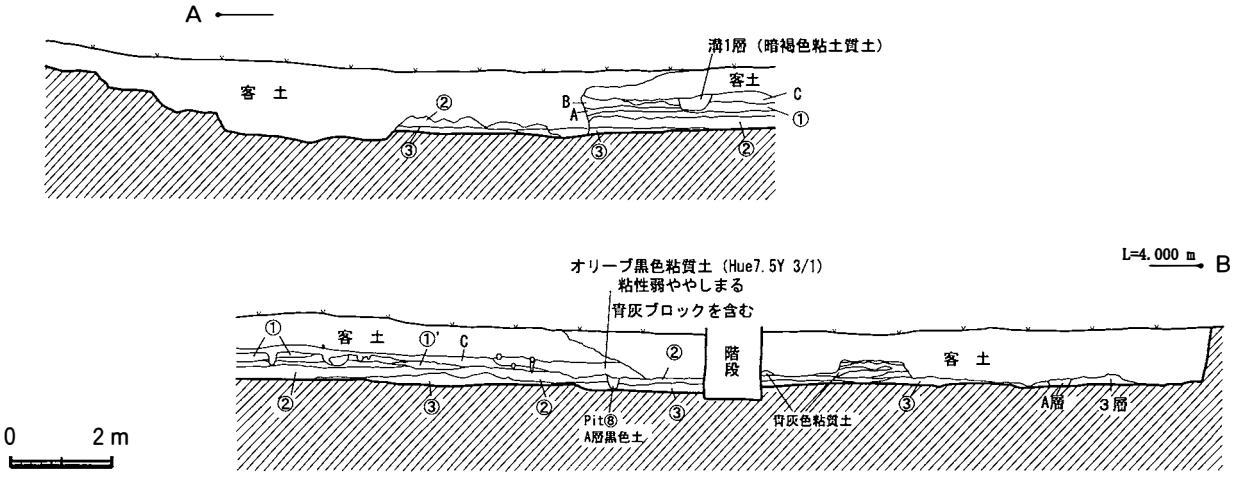
Ｂ　層　暗オリーブ灰色粘質土（Hue 5GY 4/1：4～20㎝）
色調は青色でややしまるが所々に黒褐色の粘質土（Hue 2.5YR 3/2）が混ざる。ピットＢの埋土と同じ。

Ａ　層　黒褐色粘質土（Hue 10YR 2/2：10～20㎝）
粘性があり、やわらかい。所々に青灰色のブロックを含む。ピットＡの埋土と同じ。

①　層　にぶい灰黄褐色砂質土（Hue 10YR 4/2：6～15㎝）やや硬くしまる粘質土。色調はやや黄色。

①’層　にぶい灰黄褐色砂質土（Hue 10YR 4/2：4～15㎝）やや硬くしまる粘質土。色調はやや青色。

図（Fig）2　御幸木部遺跡群周辺調査区配置図



C：暗灰黄色粘質土（Hue2.5YR４/2）
B：暗オリーブ灰色粘質土（Hue5GY４/1）
A：黒褐色粘質土（Hue10YR2/2）

①：にぶい灰黄褐色粘質土（Hue10YR４/2）
①'：　〃　（　〃　）
②：オリーブ黒色砂質土（Hue7.5YR３/1）
③：　〃　（　〃　）

図(Fig)３　調査１区東西土層断面図　S＝１／150

②　層　オリーブ黒色砂質土（Hue 7.5YR 3/1：5～22cm）非常に硬くしまり、やや粘性のある砂質土。色調は深緑色の粒子を上層に多く含む灰緑色を呈しているが、しばらくすると酸化して褐色に変化する。

③　層　オリーブ黒色砂質土（Hue 7.5YR 3/1：5～22cm）非常に硬くしまり、やや粘性のある砂質土。色調は深緑色の粒子を含まないことが②層との違いである。しばらくすると酸化して褐色に変化する。

【調査２区－１】（図４・12参照）

①　層　にぶい黄橙色砂質土（Hue10YR 4/3：10～25cm）近世以降の遺物を含む砂質土。粒子が細やかでやや粘質がある。

①'層　灰褐色粘質土（Hue 7.5YR 4/2：4～16cm）３～５㎜大のマンガン粒を多く含む。場所により砂質が強くなる。近世以降の遺物包含層。

①"層　灰褐色粘質土（Hue 7.5YR 4/2：6～18cm）①'層と比較してやや色調が薄い。３～５㎜大のマンガン粒が多い。

②　層　黄暗褐色粘質土（Hue10YR 4/3：6～40cm）３～５㎜大のカーボンと焼土を含み、硬くしまる。古代の遺物包含層。

②'層　黄暗褐色粘質土（Hue10YR 4/3：10～23cm）色調はやや黄色でややしまり、所々は砂質である。古代遺構の埋土に酷似。

③　層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR 5/4：15～50cm）硬くしまる粘質土。色調がやや白っぽい。場所により青灰色を呈する。

④　層　暗褐色砂質土（Hue7.5YR 3/4：35～86cm）きめの細かい砂質でやわらかい。下層ほど砂の粒子がやや粗くなる。

⑤　層　暗灰黄色砂質土（Hue2.5YR 4/2：10～30cm）きめの細かいやや粗い。所々に粘質土やカーボンの層が帯状に入る。

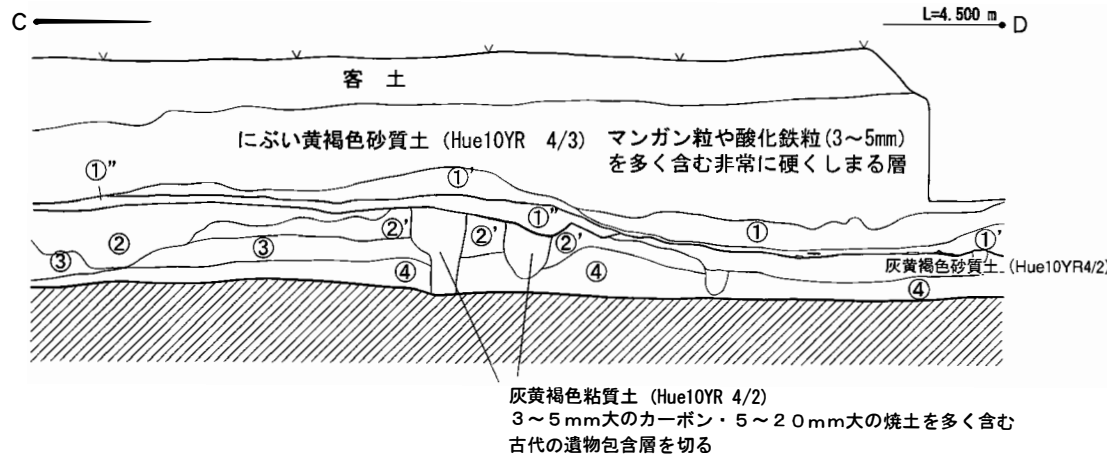
⑥　層　黄灰色粘質土（Hue2.5YR 4/1：18cm～）色調はやや暗い。粘質土主体だが所々に砂層が入る。まばらにカーボンが入る。

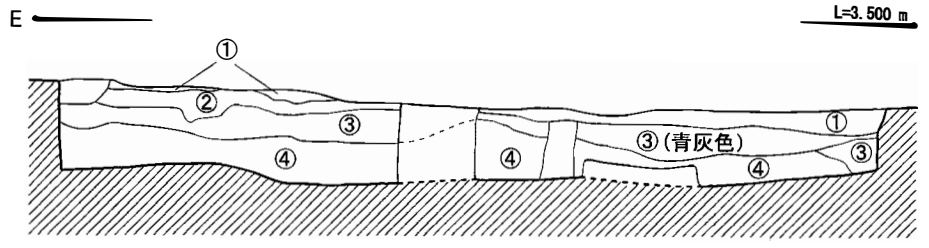
【調査２区－２】（図５・12参照）

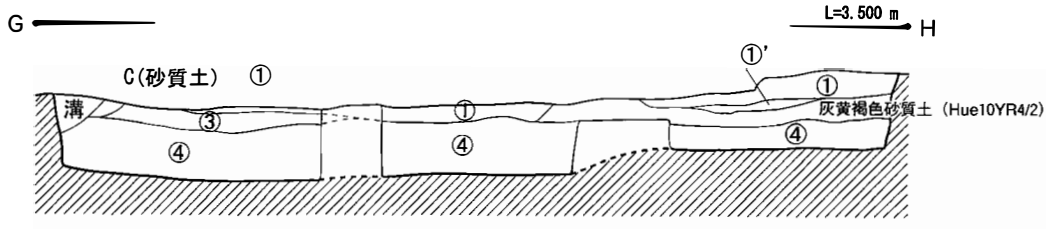
1　層　暗緑灰色粘質土（Hue7.5GY 3/1：20～50cm）粘質と砂質が混じる。水の影響を受けて色調が青い。

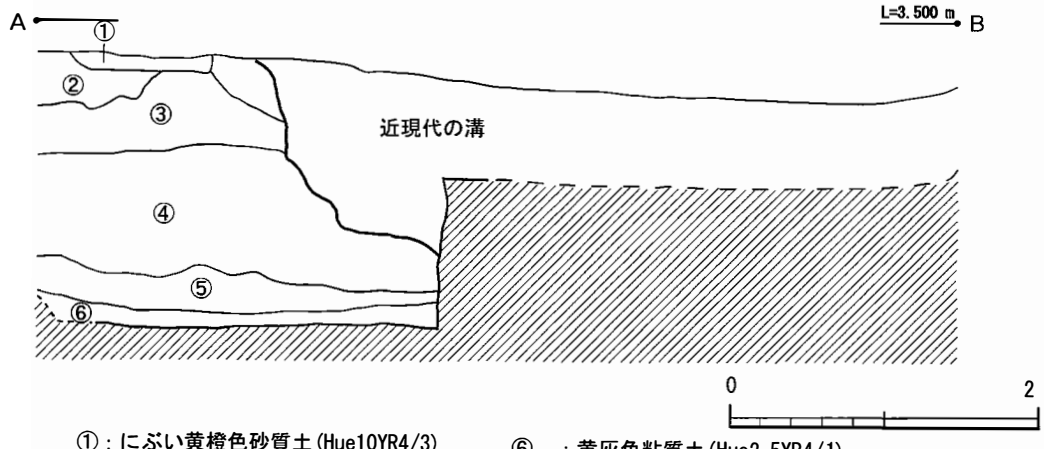
2　層　灰黄褐色粘質土

3　層　暗褐色砂質土（Hue7.5YR 3/4：35～86cm）きめの細かい砂質でやわらかい。下層ほど砂の粒子がやや粗くなる。２区―１の④層と同じ。



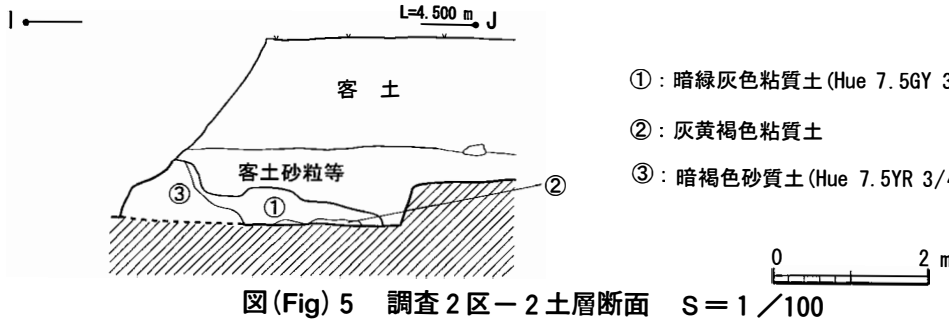






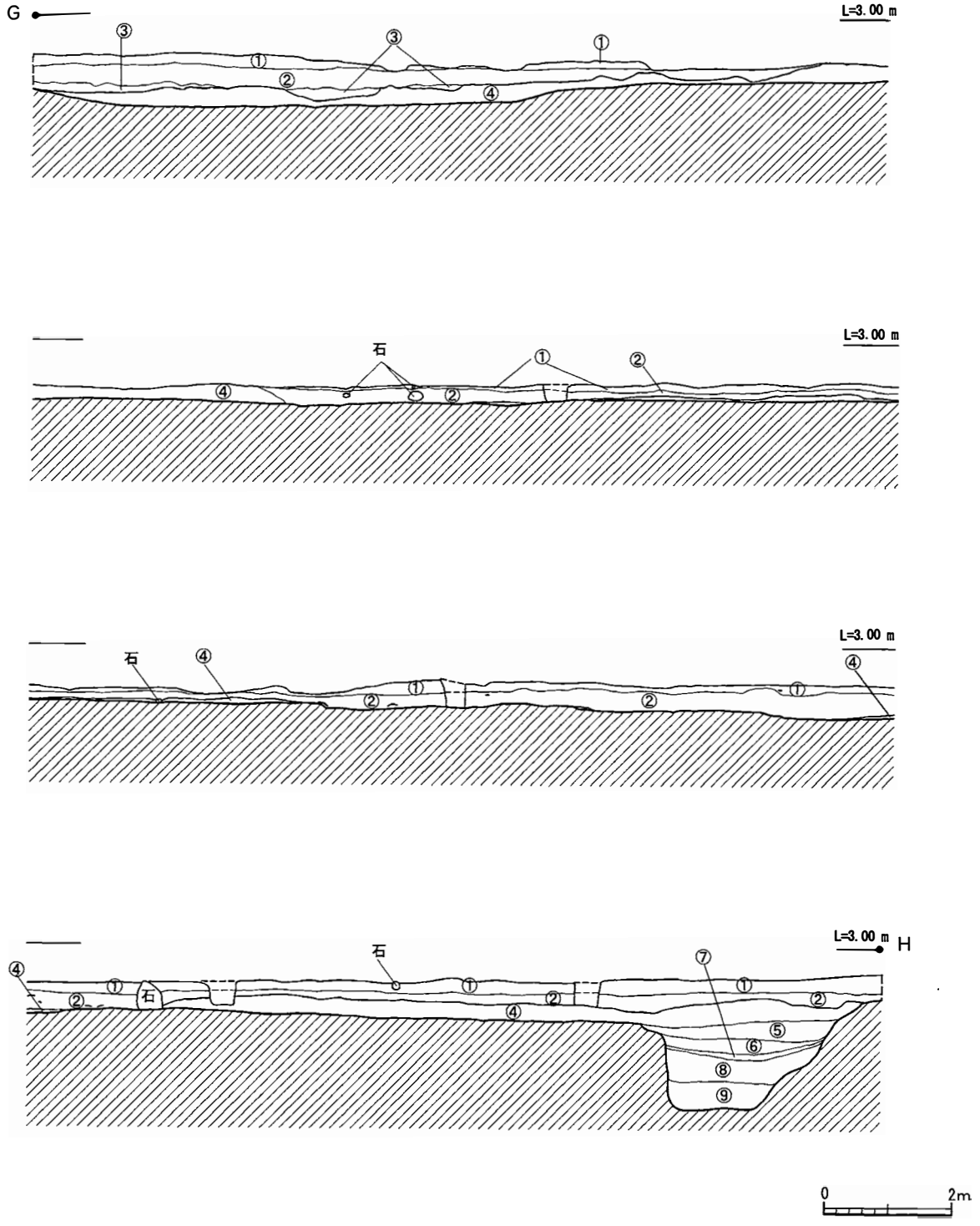
①：にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR4/3)
②：黄暗褐色粘質土(Hue10YR4/3)
古代の遺物包含層
③：にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR5/4)
④：暗褐色砂質土(Hue7.5YR3/4)
⑤：暗灰黄色砂質土(Hue2.5YR4/2)
⑥　：黄灰色粘質土(Hue2.5YR4/1)
①'　：灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)
①"　：灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)
②'　：黄暗褐色粘質土(Hue10YR4/3)

図(Fig) 4　調査２区－１土層断面　S＝１／50



①：暗緑灰色粘質土(Hue 7.5GY 3/1)
②：灰黄褐色粘質土
③：暗褐色砂質土(Hue 7.5YR 3/4)

図(Fig) 5　調査２区－２土層断面　S＝１／100



①：オリーブ黒色粘質土（Hue7.5Y3/1）
②：オリーブ黒色粘質土（Hue7.5Y3/1）
③：黒色粘質土（Hue5Y2/1）
④：黒色砂質土（Hue7.5Y2/1）
⑤：黒色砂質土（Hue7.5Y2/1）
⑥：オリーブ黒色砂質土（Hue7.5Y3/2）
⑦：オリーブ黒色砂質土（Hue5Y3/2）
⑧：黒褐色砂質土（Hue2.5Y3/1）
⑨：褐色粘質土（Hue7.5YR4/3）

図(Fig) 6　調査３区東西土層断面図　Ｓ＝１／100

【調査３区】（図６・７参照）

（第１地点）Ｇ－Ｈ

① 層　オリーブ黒色粘質土（Hue7.5Y 3/1：30㎝～）きめが細かくやわらかい粘質土だが、部分的に硬くしまる所もある。乾燥すると非常に硬くしまる。近世の陶磁器を中心に弥生～近世の遺物を含む。S006の埋土。

② 層　オリーブ黒色粘質土（Hue7.5Y 3/1：10～25㎝）きめが細かく粘質が強い層。上層と比較して色調が暗い。青黒色のブロックを所々に含む。近世の陶磁器を中心に弥生～近世の遺物を多く含む。S006の埋土。

③ 層　黒色粘質土（Hue5Y 2/1：5～25㎝）きめ非常に粘性が強く部分的にしかみられない層。マンガンと考えられる粒子や青色のブロック（２～３㎝大）が含まれる。

④ 層　黒色砂質土（Hue7.5Y 2/1：17～35㎝）きめが細かく、ガチガチに硬くしまる。ガチガチに硬くしまることから当時芦原等の湿地帯の環境下に置かれていたことが推測される。(1)

⑤ 層　黒色砂質土（Hue7.5Y 2/1：15～30㎝）きめが細かく非常に硬くしまる。上層と比較すると色調がやや明るい。この層も当時芦原等の湿地帯の環境下に置かれていたことが推測される。

⑥ 層　オリーブ黒色砂質土（Hue7.5Y 3/2：4～24㎝）非常に硬くしまる。色調がやや明るく、褐色に近い。この層も当時芦原等の湿地帯の環境下に置かれていたことが推測される。

⑦ 層　オリーブ黒色砂質土（Hue5Y 3/2：4～10㎝）上層と同様にきめが細かく非常に硬くしまる。ラミナ構造がみられ、上下層と共に縞模様のラインがみられる。この層も当時芦原等の湿地帯の環境下に置かれていたことが推測される。

⑧ 層　黒褐色砂質土（Hue2.5Y 3/1：36～48㎝）きめが細かく非常に硬くしまる砂質土。この層も当時芦原等の湿地帯の環境下に置かれていたことが推測される。

⑨ 層　褐色粘質土（Hue7.5Y 4/3：52㎝～）きめが細かくやわらかい粘質土。所々に棒状の酸化鉄の塊を含む。これより下層にも遺物包含層が存在する可能性はあるが、出水が激しくこれ以上の掘削は不可能である。

（第２地点）Ａ－Ｂ

① 層　オリーブ黒色粘質土
青灰と黒灰の混合土。パサパサしている。新しい溝の堆積物。

② 層　黄色粘質土
ややしまる。

③ 層　青灰色粘質土
ややしまる。

④ 層　オリーブ黒色粘質土
粘性が強い。

（第３地点）Ｃ－Ｄ

① 層　客土

② 層　黄色粘質土
粘質が強いがややしまる。

③ 層　青灰色粘質土
やや砂質が強い。

④ 層　オリーブ黒色粘質土
粘性が強い。溝の堆積物。

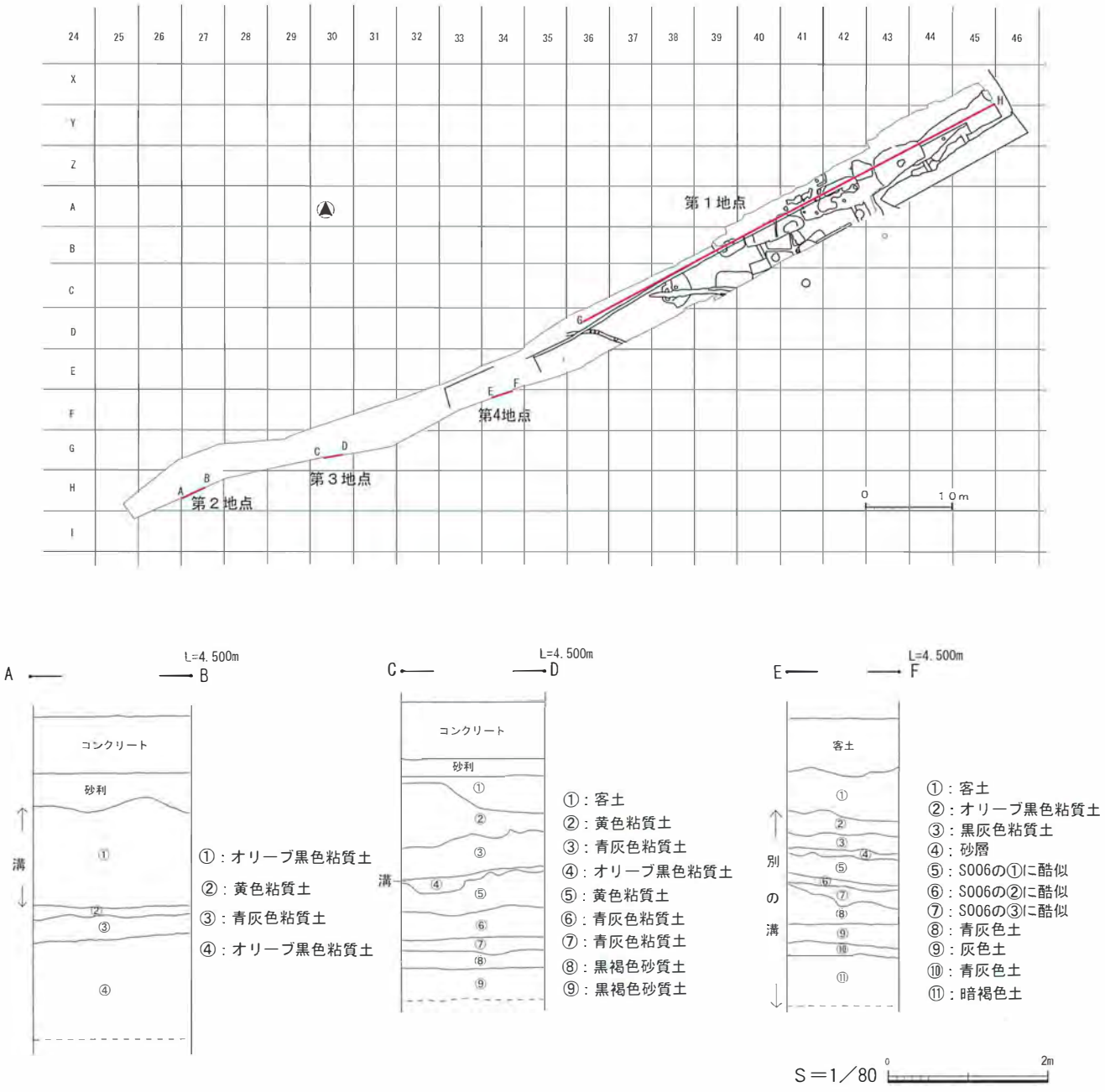
⑤ 層　黄色粘質土
パサパサしてややしまる。

⑥ 層　青灰色粘質土
ややしまる。

⑦ 層　青灰色砂質土
ややわらかい。

⑧ 層　黒褐色粘質土
ガチガチに硬くしまる。

⑨ 層　黒褐色粘質土
ガチガチに硬くしまる。上層と比較して色調がやや明るい。



図(Fig) 7　調査３区土層断面図

（第４地点）Ｅ－Ｆ

①　層　客土

②　層　オリーブ黒色粘質土
　　粘質がある。

③　層　黒灰色粘質土
　　砂質が強い。

●　層　砂層

●　層　S006の①層に酷似（図27参照）

⑥　層　S006の②層に酷似（図27参照）

●　層　S006の③層に酷似（図27参照）

⑧　層　青灰色土
　　ガチガチに硬くしまる。

⑨　層　灰色土
　　ガチガチに硬くしまる。色調がやや茶色。

⑩　層　青灰色土
　　ガチガチに硬くしまる。

●　層　暗褐色土
　　ガチガチに硬くしまる。

【註】

(1) 県文化課の馬場正弘氏のご教示による。

第Ⅳ章　調査の結果

第１節　はじめに

【遺　構】

この遺跡で確認された遺構は、ピットを省いて17基である。遺構番号はS001～S017までである。検出したピットは、56基（調査１区：37基，調査２区：18基）にのぼる。

調査１区は38基のピットのみで、弥生時代の土器片を含むピットが16基確認された。埋土は３種類に分かれる。

調査２区は、②層を中心にした上層と②’層を中心にした下層に分かれるが、古代の土抗２基・溝１条、時期不明の土壙墓１基・溝１条が確認された。

調査３区は、弥生時代の住居跡３基・溝１条・土抗１基・不明遺構１基、近世の溝１条・土抗１基、時期不明の土抗４基・溝１条・不明遺構１基が確認された。また、調査区との境に古代の遺物を含む包含層及び遺構が確認されたが、調査区外にあたるため掘削は避けた。

遺構内から出土した遺物については、基本的に主要な遺物、床面近くの遺物や遺構に伴うと考えられる遺物を平面図に実測し、レベルを記録して、点上げ遺物とした。しかし、中には一括で遺物を上げてしまった遺構もある。

遺構の時期区分としては、①弥生時代後期～終末期、②古代、③近世、④時期不明として調査区毎に扱うことにした。

【遺　物】

出土遺物は、遺構、包含層を含めて、網コンテナ（46㎝×61㎝×20㎝の大きさ）に約20箱分の量であった。ほとんどが調査３区の遺物であり、近世の陶磁器や弥生の土器であった。

これらの遺物も調査区、時期別に扱うことにした。

取りあげる遺構を調査区毎、時期別、種別毎に並べると以下のとおりになる。

１）調査１区

①時期不明

ピット（37基）

２）調査２区

①古代

S001・002（土坑）、003（溝）

②時期不明

S004（土壙墓）、005（溝）

３）調査３区

①弥生時代

S009・012・016（竪穴式住居）、007（土坑）、011（溝）

②近世

S006（溝）、014（土坑）

③時期不明

S008・010・013・015（土坑）、018（溝）、017（不明遺構）

４）調査区外

①近世以降

井戸（１基）

第２節　遺　構

１）調査１区（図８参照）

①時期不明

ピットは、37基確認された。埋土は、３種類に分類できる。土層断面図にあるＡ，Ｂ，Ｃの層に酷似しているので、それぞれの時期に掘り込まれたピットと考えられる。そのうち弥生土器を含むピットが12基あり、カット痕跡を持つ柱の先端部を残存しているピットも１基ある。地下水脈があり常に水の影響があったことが木質部の原因だと考えられる。弥生土器片を含んでいる事から弥生時代の可能性が高いが、断言はできないため、ここでは時期不明のピットとしておきたい。

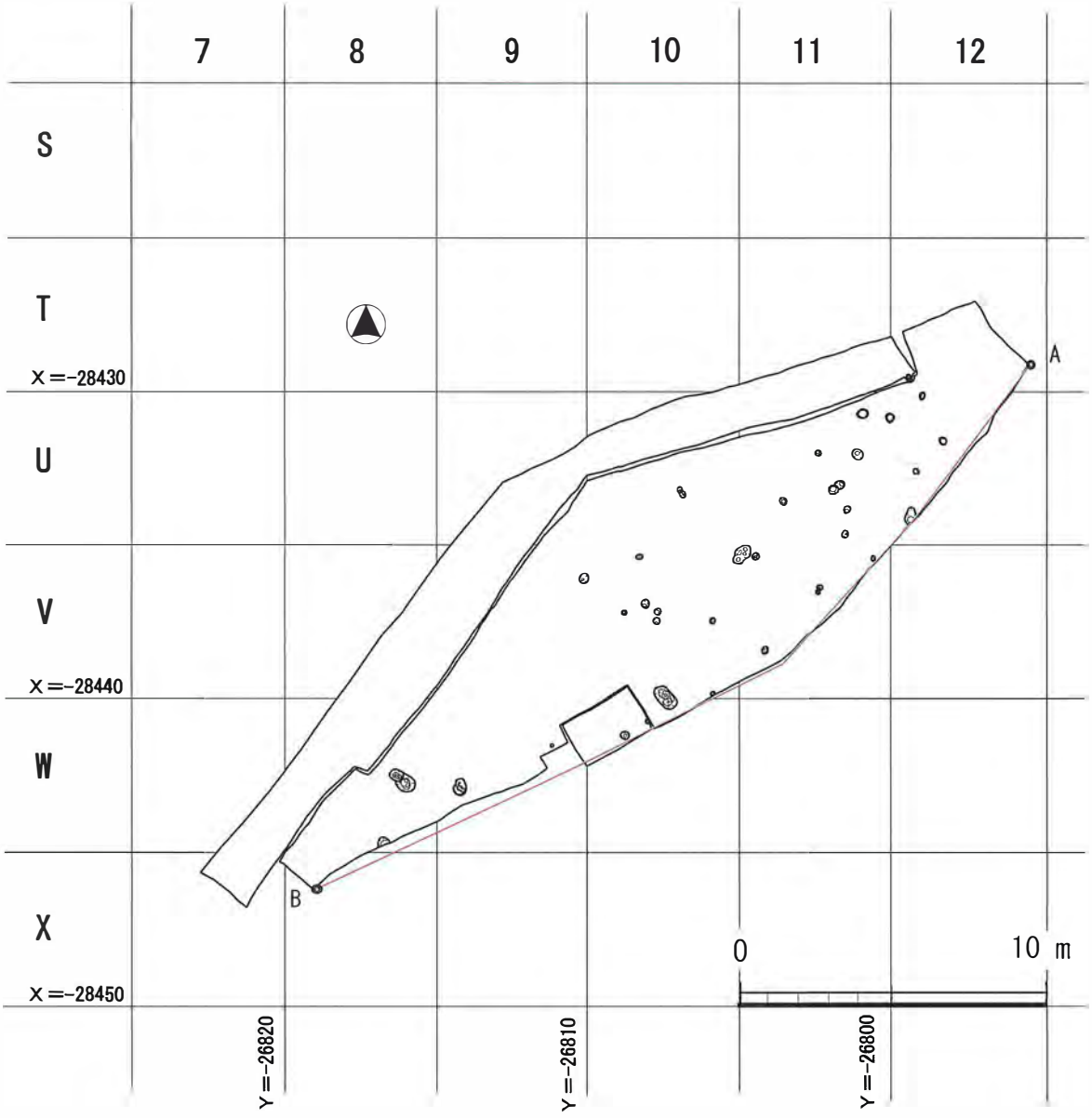
ピット31は、柱材を含んでいる事から、掘立柱建物や竪穴住居跡の柱痕の可能性が考えられるが、うまく並ばないので、詳細は不明である。

なお、柱材の樹種は、アワブキ属であり、温帯に広く分布する常緑または落葉性の小木または高木であることが樹種同定の結果判明している。詳細は第Ⅴ章の自然科学分析の結果を参照されたし。

【覆土Ａ層のピット】（図９～11参照）

（覆土の特徴）

覆土Ａ層のピットは、黒褐色粘質土（Hue 10YR 2/2：10～20㎝）で、粘性があり、やわらかい。所々



図(Fig) 8　調査１区遺構配置図

に青灰色のブロックを含む土である。土層断面では、３層のうち一番古い堆積層にあたる。

（形状・数・位置など）

22基存在する。調査区の南側に多い傾向がみられる。大きさは径20～100cm、深さ８～48cmで、土坑状のものも含まれる。

（出土遺物など）

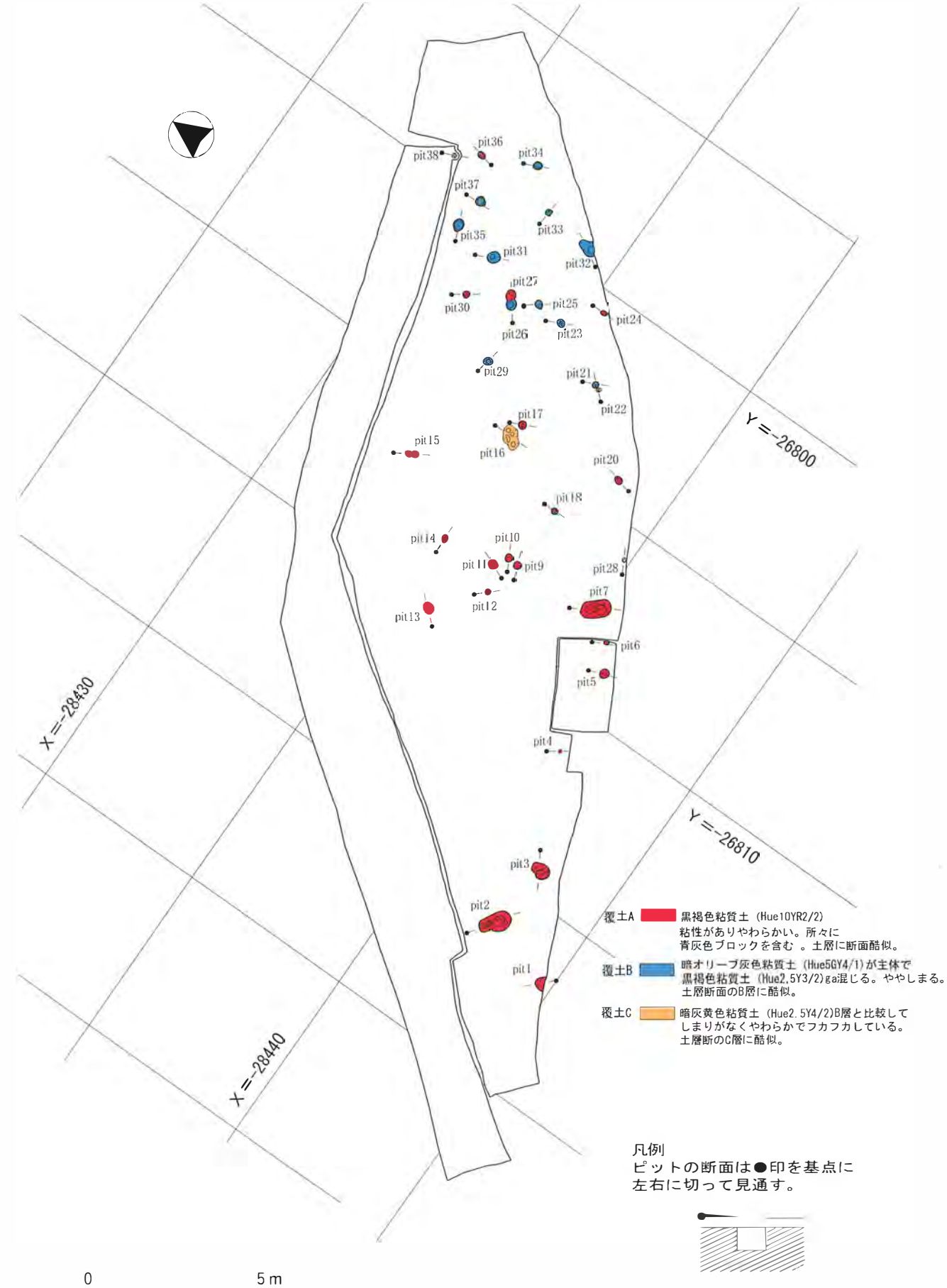
出土遺物を含んでいたピットは、ピット２（３点：内１点は黒髪式土器の口縁部）、７（小片１点）、９（１点）、12（小片１点）、17（甕の口縁部１点）、20（５点）、27（２点：内１点は丹塗り土器片）で全て弥生土器片であった。

４は、ピット27から出土した弥生土器である。鉢形土器か高杯形土器の口縁部と考えられる。

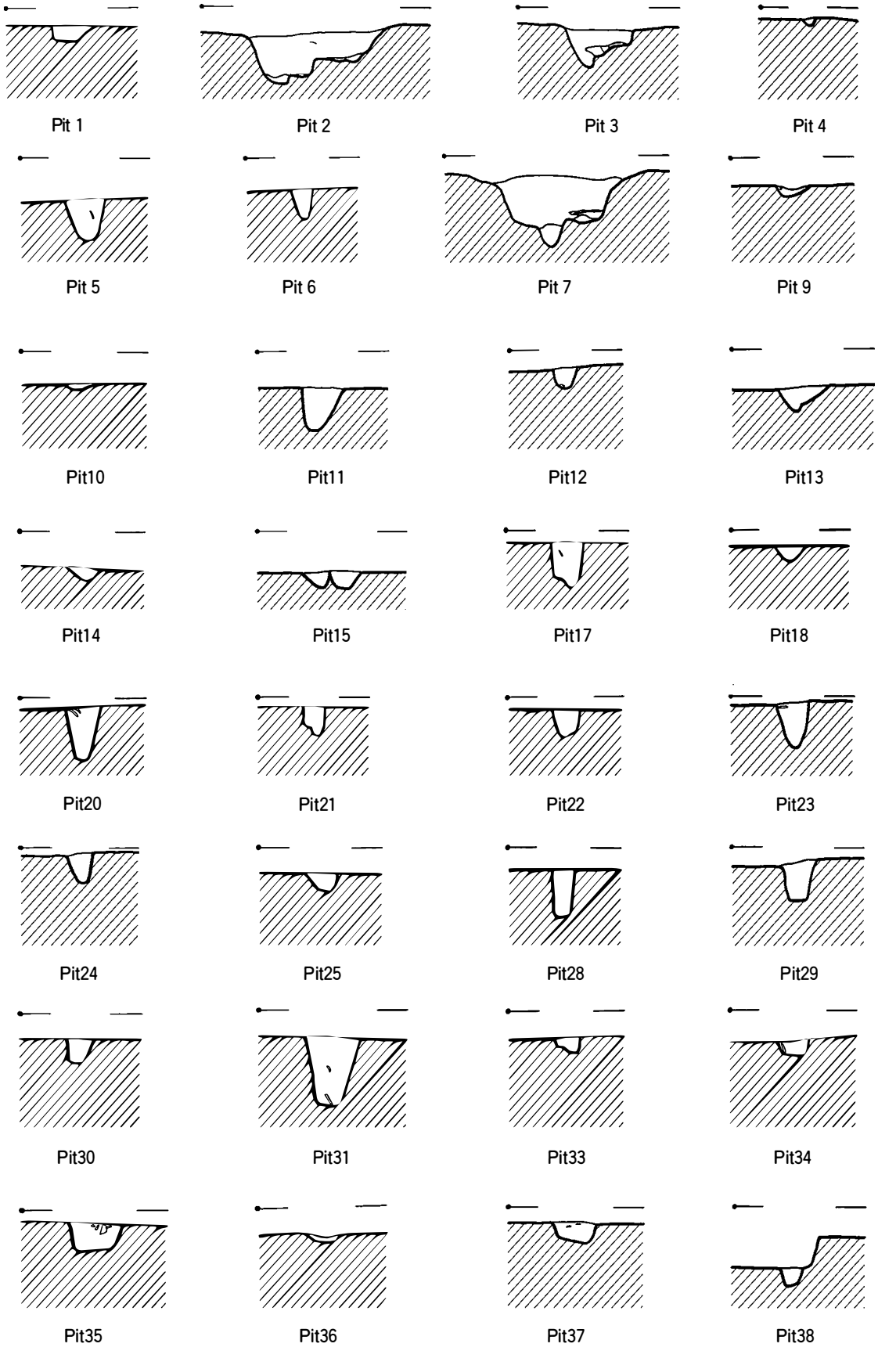
【覆土Ｂ層のピット】（図９～11参照）

（覆土の特徴）

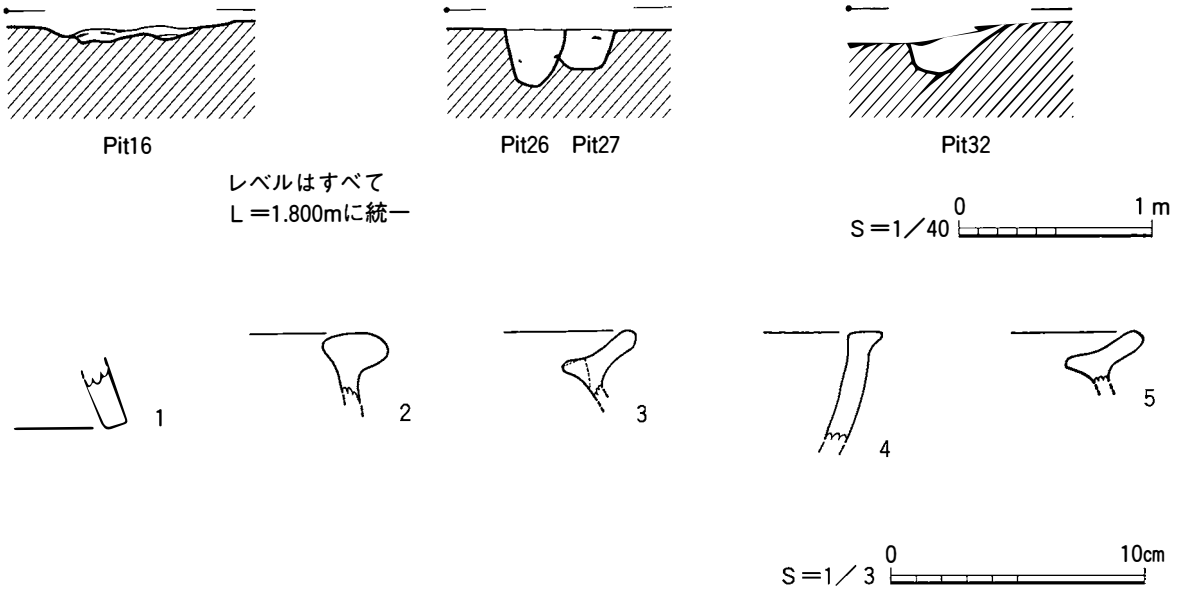
覆土Ｂ層のピットは、暗オリーブ灰色粘質土（Hue 5GY 4/1：4～20cm）色調は青色でややしまるが所々に黒褐色の粘質土（Hue 2.5YR 3/2）が混ざる土である。土層断面では、Ａ層の上層にあたる。



図（Fig）9　ピット実測図



図(Fig)10　ピット断面図（1）



図(Fig)11　ピット断面図及び出土遺物実測図（２）

（形状・数・位置など）

11基存在する。調査区の北側に多い傾向がみられる。大きさは径20～40cm、深さ５～20cmで、土坑状のものも含まれる。

（出土遺物など）

出土遺物を含んでいたピットは、ピット25、26、31、32、34、35、37であり、１～３点の弥生土器片を含んでいた。なお、ピット31には、カット痕跡を持つ柱の先端部が残存していた。

３はピット26から、５はピット32から出土した弥生土器である。いずれも甕形土器の口縁部で、内側に細長く突起が伸び、外側にも同様に伸び上がるという弥生時代中期後半期の黒髪式土器の特徴を備えている。

【覆土Ｃ層のピット】（図９～11参照）

（覆土の特徴）

覆土Ｃ層のピットは、暗灰黄色粘質土（Hue 2.5 Y 4/2：6～25cm）Ｂ層と比較してしまりがなくやわらかでフカフカしている土である。土層断面では、３層のうち一番新しい堆積層にあたる。

（形状・数・位置など）

４基存在する。調査区の北側にみられる。大きさは径15～70cm、深さ５～22cmで、土坑状のものも含まれる。

（出土遺物など）

出土遺物を含んでいたピットは、ピット16（３点）、22（１点）であり、全て弥生土器片であった。

１はピット16から出土した弥生土器である。器台の脚部だと考えられる。

２はピット16から出土した弥生土器である。甕形土器の口縁部で、肥厚することから弥生時代中期前半期の様相を示す土器である。

２）調査２区（図12参照）

遺構検出面のレベルの違いから上層と下層に分かれる。上層の覆土は②層、下層の覆土は②’が基本になっている。

①古代

・土坑（２基）：上層

【ＳＯＯ１】（図13参照）

[確認位置] 調査２区－１、Ｓ－19グリッド。

標高約2.9m。

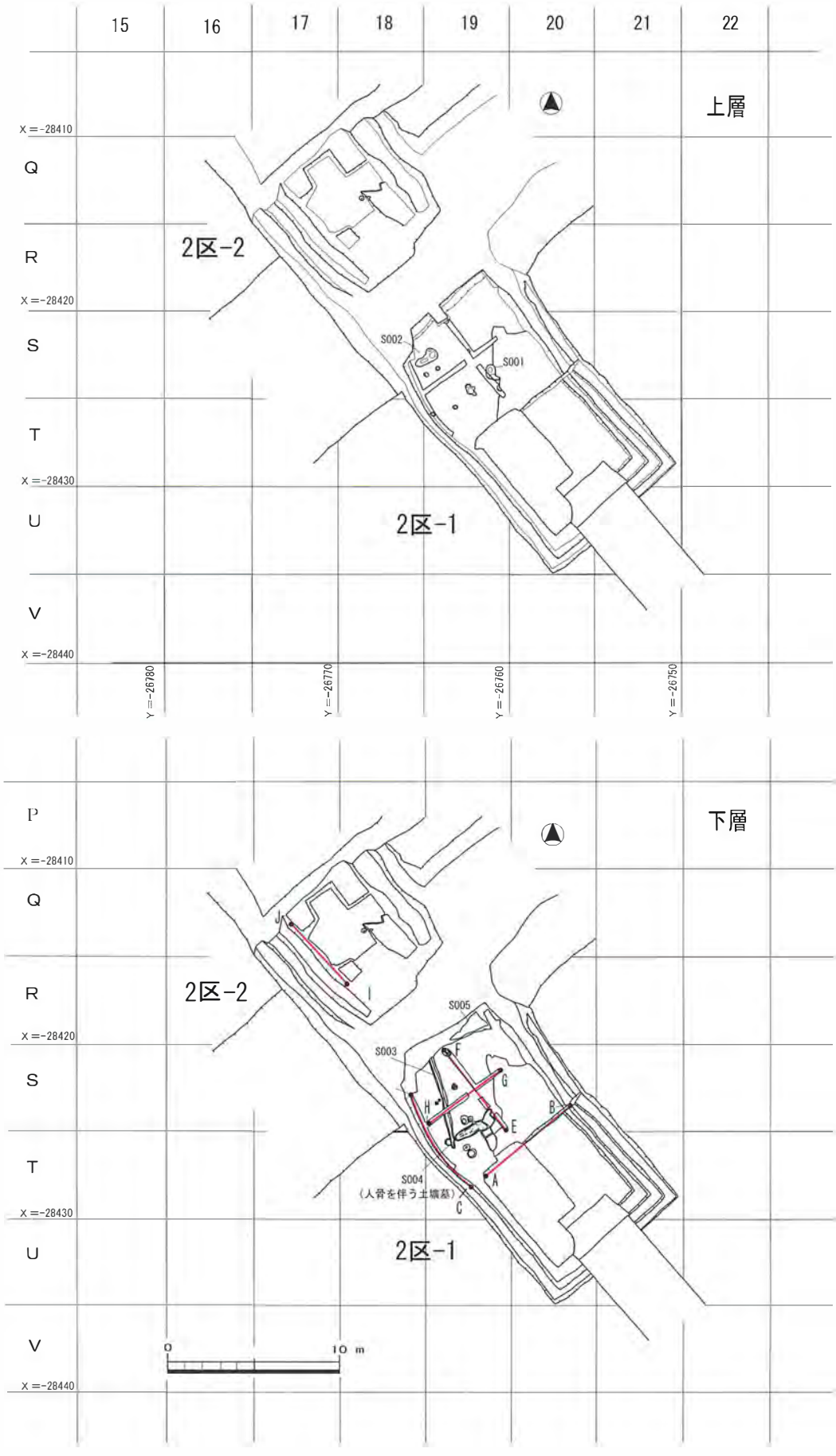
[形状] 楕円形

[大きさ] 長軸：約90cm～、短軸：約60cm、深さ：約10cm。

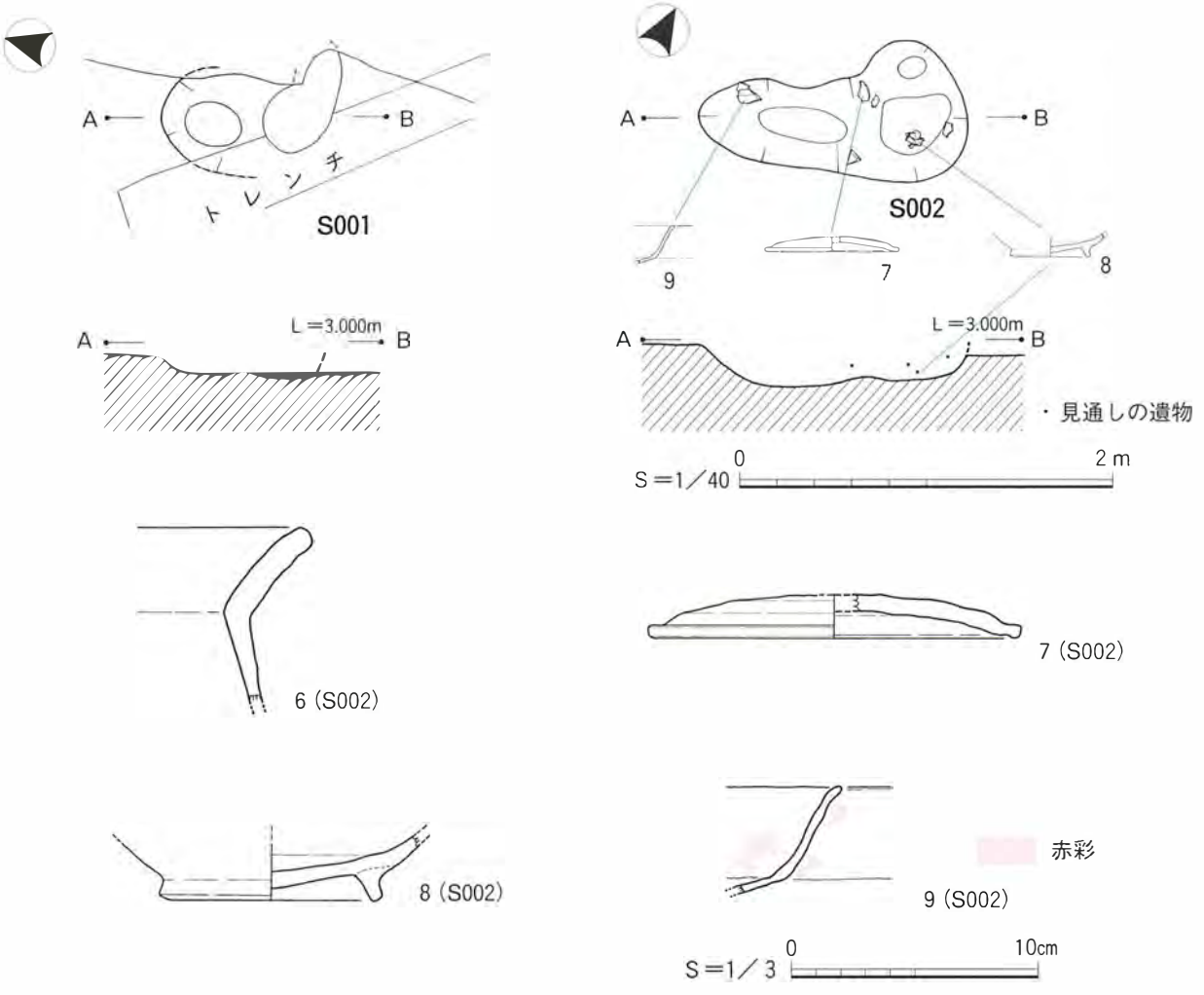
[覆土] １層：（焼土混じりの暗褐色土）

[切り合い関係] 近代以降の新しい溝に部分的に切られる。

[遺物の出土状況] 床面からやや浮いた状態で出土。



図(Fig)12　調査２区上層（上）・下層（下）遺構配置図



図(Fig)13　土坑（S001・002）実測図及び出土遺物実測図

［出土遺物量］

S001から出土した遺物は、古代土師器の甕片が11点であった。小片の為紹介しない。

［遺構の性格］

切り合いがあり、正確な全体プランは不明だが、あまり大きくないと考えられる。覆土が焼土混じりの暗褐色土であり、部分的に焼土が強いことから、古代の焼土坑の可能性も考えられる。土師器は小片の為、詳細な時期は不明である。

【Ｓ００２】（図13参照）

［確認位置］調査２区－１、S－18・１9グリッド。標高約３ｍ。

［形状］楕円形

［大きさ］長軸：約143cm、短軸：約78cm、深さ：約20cm。

［覆土］１層：（カーボン混じりの暗褐色粘質土）

［切り合い関係］なし。

［遺物の出土状況］床面からやや浮いた状態で出土。この遺構にほぼ伴うものと考えられる。

［出土遺物量］

S009から出土した遺物は、古代の須恵器と土師器片が９点であった。

［出土遺物の観察］

紹介する遺物は土師器３点、須恵器１点である。

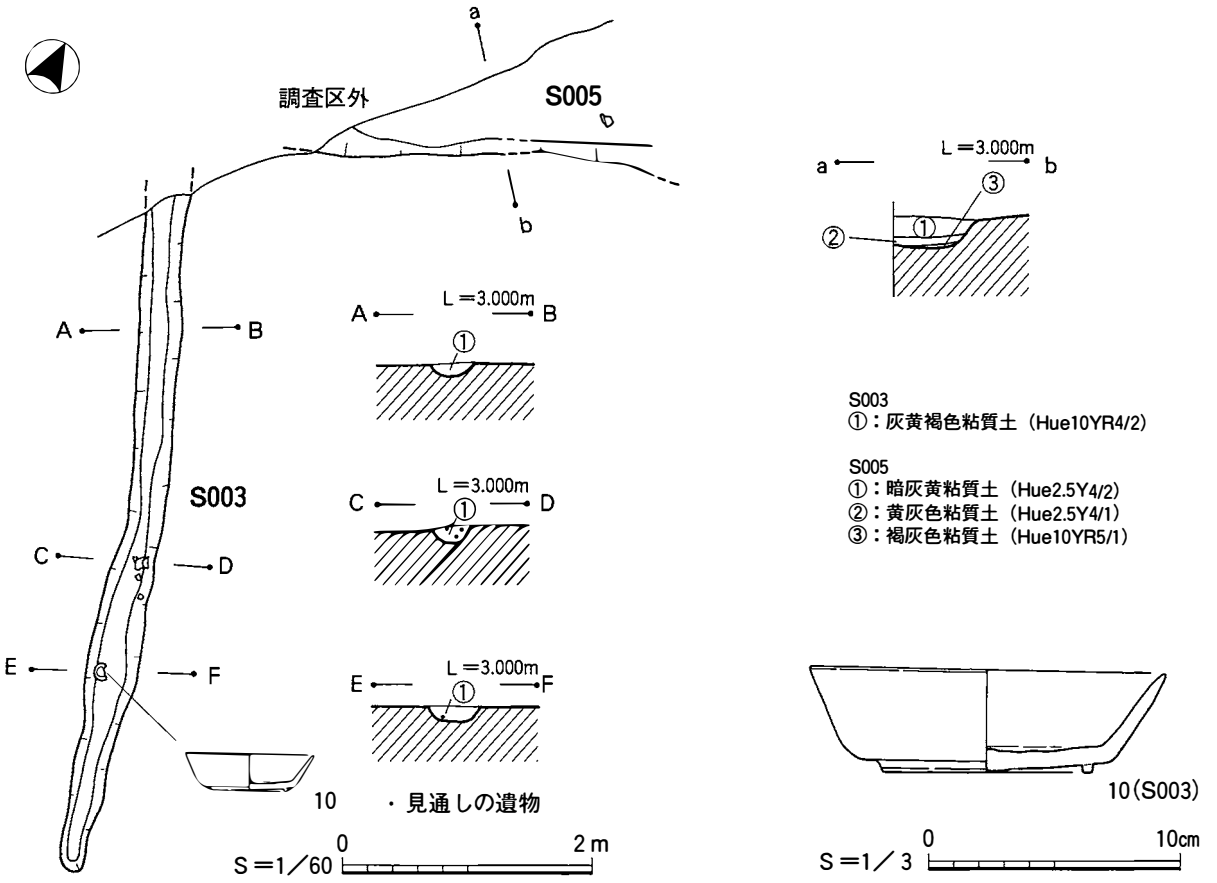
６は、土師器の甕で口縁部である。外面ハケ後ナデ調整を行っている。

７は、須恵器の杯蓋である。網田氏の研究成果（1994・2003　網田）に照らせば、８世紀後半期の範疇で捉えることが可能と考えられる。

８は、土師器の高台付き杯の高台部である。復元底径が8.0cmである。

９は、土師器の杯もしくは高杯の杯部である。内外面に赤彩が残る。

［遺構の性格］



図(Fig)14　溝（S003・005）実測図及び出土遺物実測図

覆土は、カーボンを多く含む暗褐色粘質土である。形状もややいびつであり、詳細は不明である。

・溝（１条）：下層

【Ｓ００３】（図14参照）

［確認位置］調査２区－１、Ｓ・Ｔ－19グリッド。標高約2.6～2.8m。

［大きさ］長さ：540㎝～、幅：30～40㎝、深さ：10～15㎝。

［覆土］１層：灰黄褐色粘質土（Hue10YR4/2）0.5～２㎜大のカーボン、５～10㎜大の焼土を所々に含むややしまる粘質土。色調がやや白く、部分的に砂粒も含む。

［切り合い関係］無し。

［遺物の出土状況］須恵器は、ほぼ溝の床面に貼り付いた形で出土。溝廃絶後の時期に伴うものと考えられる。

［出土遺物量］

S003から出土した遺物は、古代の須恵器と土師器片が10点であった。

［出土遺物の観察］

紹介する遺物は須恵器１点のみである。土師器は、胴部のみであることから割愛する。

10は、須恵器の高台付きの杯でほぼ完形ある。網田氏の研究成果に照らせば、８世紀後半期の範疇で捉えることが可能と考えられる。

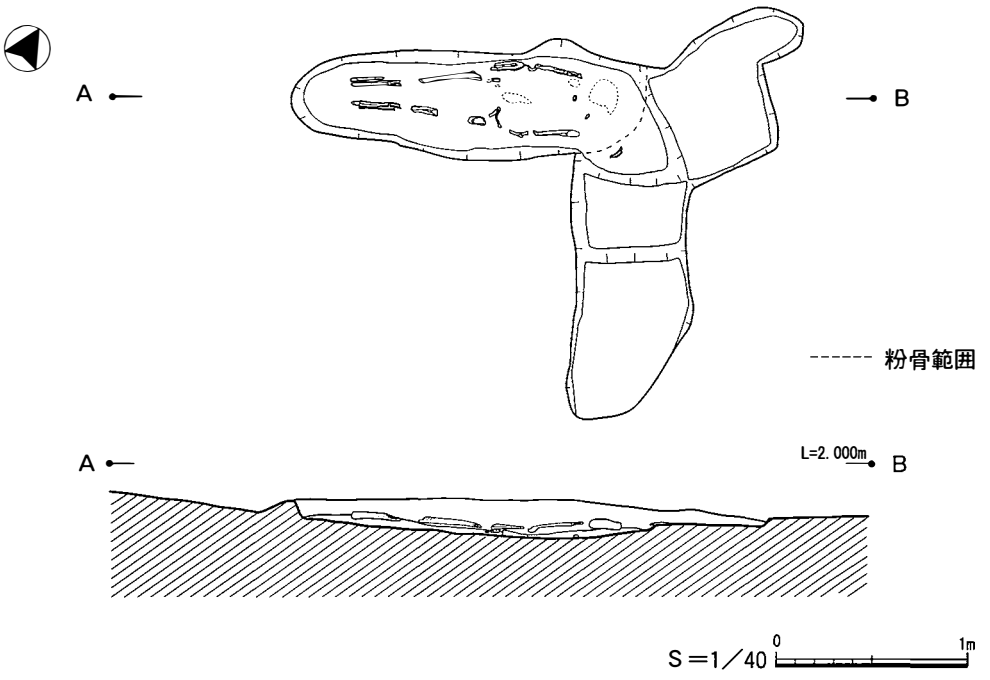
［遺構の性格］

溝にはレベル差があり、南側から北側へ落ちている。レベル差や溝の覆土に部分的に砂粒も混じることから水が流れていたことが推定される。耕作等に関するものであろうか？

また、南側が途切れているのは高いために削平されているからであろう。旧地形は、元々南側が高く続いていたものと考えられる。北側はS005と直交すると考えられるが、調査区外のために切りあい関係も含めて不明である。時期は出土遺物から８世紀後半期と考えられる。

②時期不明

・土壙墓（１基）：上層



図(Fig)15　土壙墓（S004）実測図

【Ｓ００４】（図14参照）

［確認位置］調査２区－１、Ｓ、Ｔ－19グリッド。
標高約1.85m。

［形状］楕円形

［大きさ］長軸：約190cm、幅：約60cm、深さ：約10～20cm。

［覆土］１層：(②’層に酷似)

［切り合い関係］土壙墓の頭部周辺を上層からのピット状の撹乱（炭化物を多く含む）があった。また、この土壙墓の覆土と酷似する色調が白っぽい粘質が広がっていたので、掘削を行ったが切りあい関係は不明であった。

［出土遺物］この遺構に伴うものはない。ただし、切りあい関係がはっきりしない土壙墓の覆土と酷似する色調が白っぽい粘質の中から１点の須恵器が出土した。高台付き杯の高台部と考えられる。

［遺構の性格］

この土壙墓の詳細な所見は、第Ⅴ章に譲ることにするが、埋葬姿勢が仰臥状態の男性であることが判明した。時期は土壙墓の頭部周辺を上層からのピット状の撹乱（炭化物を多く含む）があったので、その炭化物で放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、較正年代がAD530年という数字が出た。この数値を信用するならば、６世紀前半以前の土壙墓ということになる。

・溝（１条）：下層

【Ｓ００５】（図14参照）

［確認位置］調査２区－１、Ｒ－19グリッド。
標高約2.6m。

［大きさ］長さ：270cm～、幅：110cm～、深さ：10～15cm。

［覆土］３層に分層

１層：暗灰黄色粘質土（Hue2.5YR4/2）色調がやや白く、ややしまる粘質土。５㎜大のマンガン粒を多く含む。５～10㎜大のカーボン粒も所々に含む。

２層：黄灰色粘質土（Hue2.5YR4/1）１層と比較すると色調は青く、粘性もやや強い。マンガン粒は約10㎜大と大きく所々に含む。

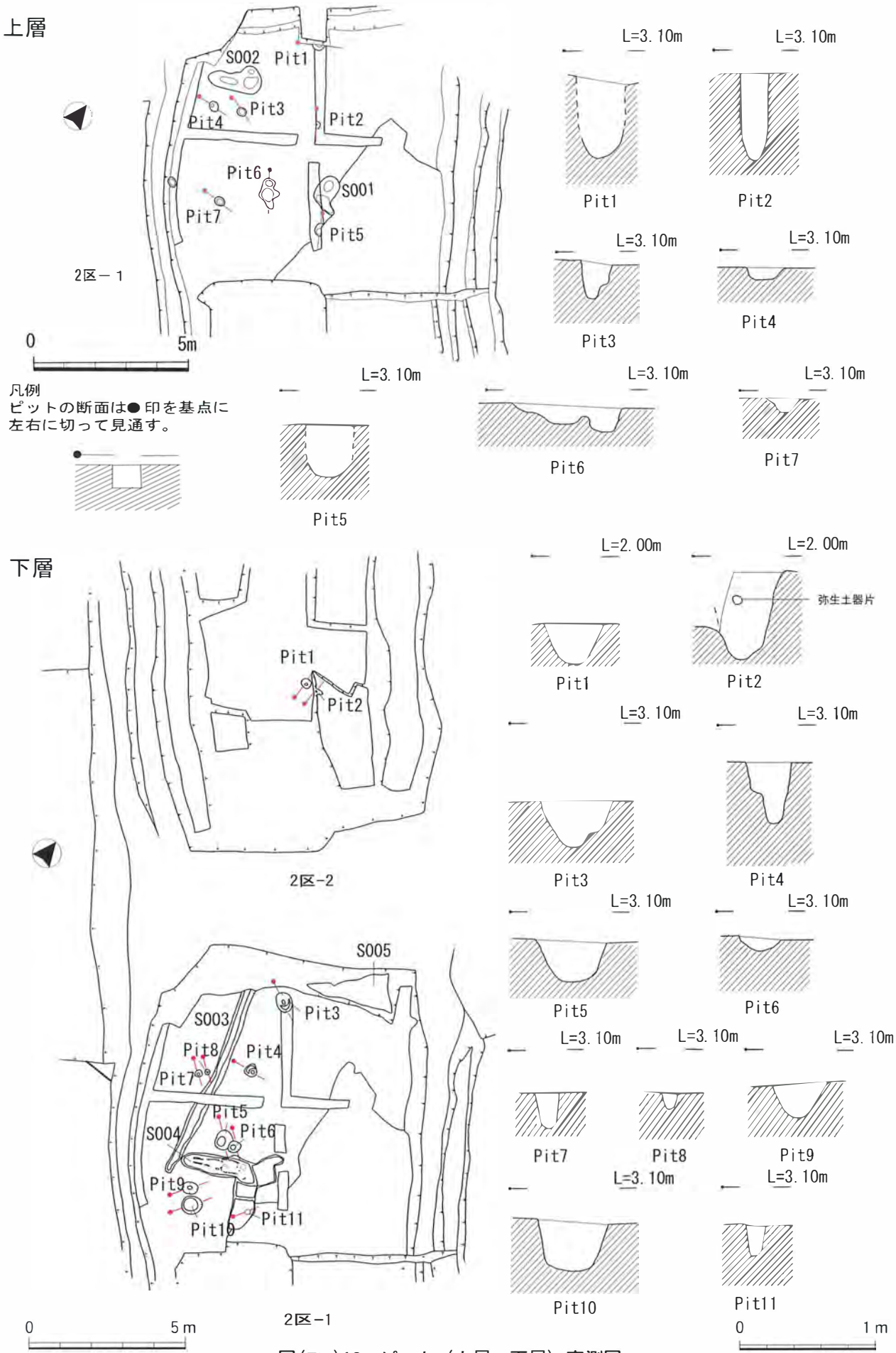
３層：褐灰色粘質土（Hue10YR5/1）粘性が強いが所々に砂粒を含む。下層のマンガンを含む層にかなり近く、褐色を呈する。

［切り合い関係］近代以降の新しい溝に切られる。

［遺物の出土状況］なし。

［遺構の性格］

溝にはレベル差がほとんどないが、北東から南西側に流れていた可能性が考えられる。調査区外につながっているために溝の幅は不明だが、さほど大きな溝ではなさそうである。マンガン粒が多いことか



図(Fig)16　ピット（上層・下層）実測図

ら水が流れたり枯れたりしていた可能性が高い。S003同様、耕作等に関する溝の可能性が考えられる。覆土の色調がS003と似ているため同時期の可能性が考えられるが、出土遺物がないために詳細は不明である。

・ピット（７基：上層、９基：下層、２基：２区―２の下層）（図16参照）

【７基：２区―１上層】

（覆土の特徴）

覆土は、②層であるが、カーボンや焼土を含むものもある。

（形状・数・出土遺物など）

７基存在する。大きさは約12～35cm、深さ５～30cmで、土坑状のものも含まれる。ピット６は、焼土坑の可能性が高く、遺物は古代土師器の小片が数点出土したのみである。

【９基：２区―１下層】

（覆土の特徴）

覆土は、基本的に②’層である。

（形状・数・出土遺物など）

９基存在する。大きさは約12～50cm、深さ10～45cmで、土坑状のものも含まれる。遺物は出土しなかった。

【２基：２区―２下層】

（覆土の特徴）

覆土は、灰黄褐色粘質土である。

（形状・数・出土遺物など）

２基存在する。２区―２では遺構はこの２基のみである。大きさは約30～40cm、深さ30～60cmで遺物もピット２から弥生土器片が１点出土しているのみである。レベルは調査１区のピットとほぼ同じである。

３）調査３区（図17参照）

調査３区の南側は、撹乱やビニール等を含む新しい溝が大方を占めており、その下層も遺物や遺構が確認できなかったため、北側の約450㎡の調査を行った。

弥生の遺構等を切った近世の溝が中心をなしており、一部施行区外になる古代の包含層及び遺構等は未調査のままである。しかし、表土剥ぎの際に出土した古代包含層上部の遺物は紹介を行うことにした。

①弥生時代

・竪穴住居跡（３軒）

【Ｓ０１２】（図18参照）

［確認位置］Ｂ－40・41グリッド。

標高約2.4ｍ。

［形状］やや隅丸方形

［大きさ］長軸：300cm、短軸：190cm～、深さ：20～25cm。

［住居内覆土］１層：暗褐色粘質土（やや色調が黒く、粘質だがややパサパサしている。）

［主柱穴］２本？。１本のみ確認、径20cm、深さ24cm。

［炉］１つ確認、大きさ50～×90cm、深さ８～10cm。

［硬化面］無し。

［貼り床］無し。

［切り合い関係］S006（近世の溝）から切られる。

［遺物の出土状況］床面からやや浮いた状態で出土。遺構廃絶後間もない遺物として捉えたい。

［出土遺物量］

S012から出土した遺物は、弥生土器のみ約50点（3.673g）であった。

［出土遺物の観察］

ここでは、４点の土器を紹介する。

11は、甕形土器の口縁部から胴部上半部である。口縁部がくの字状に外反していることから、後期の様相を示している。内外面にハケ目が残る。

12は、鉢形土器で約2/3が残存している。調整はハケ目が中心だが、外面の下半部にはタタキがみられる。後期終末期の様相をみせる。

13は、甕形土器の脚部である。11とは胎土が違うので別個体と考えられる。

14は、器台の脚部で残存率は約1/4である。外面はハケ目が残るが、内面はナデ消してあり、指ナデ痕が残る。

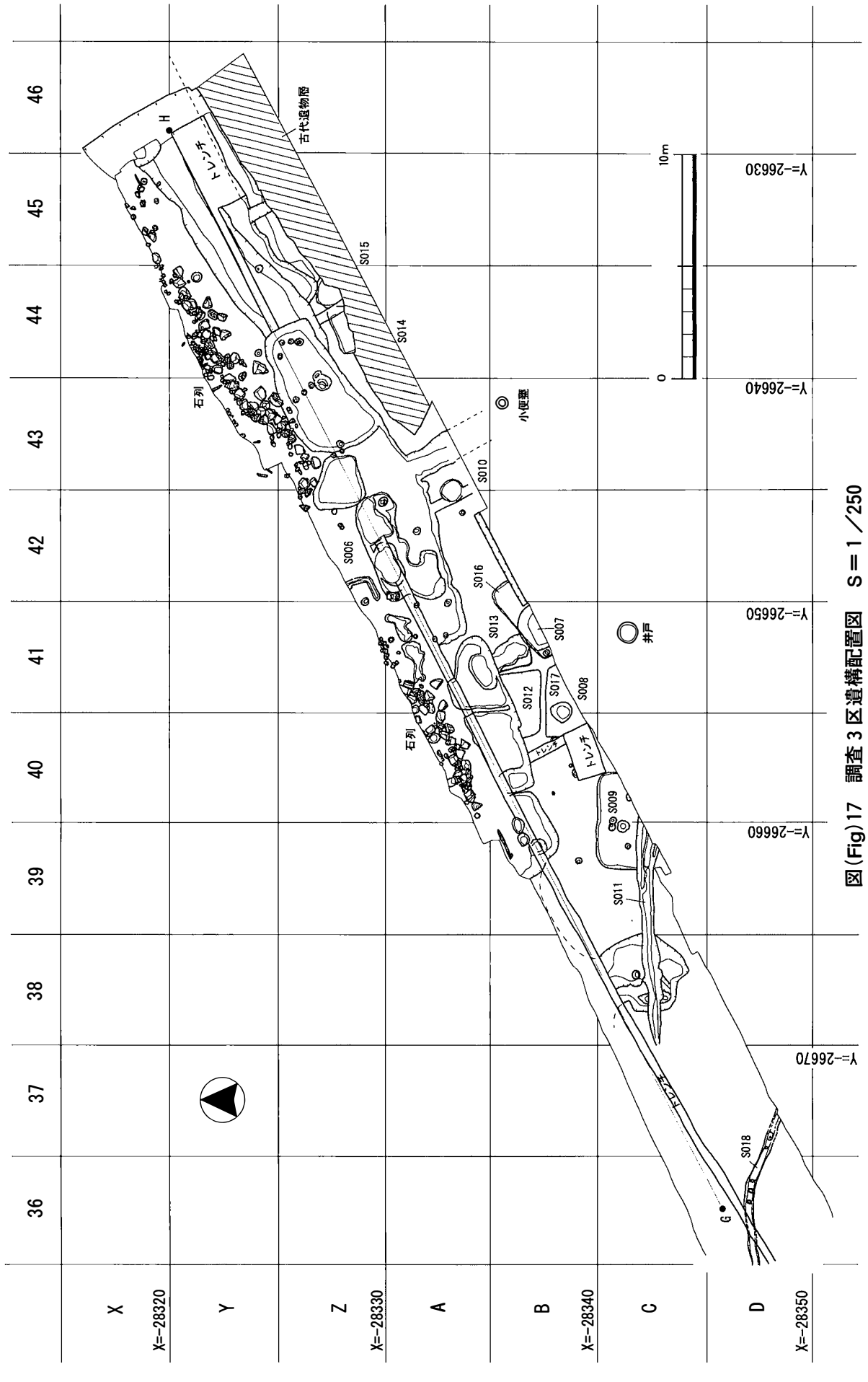
【Ｓ００９】（図19参照）

［確認位置］Ｂ、Ｃ－39・40グリッド。

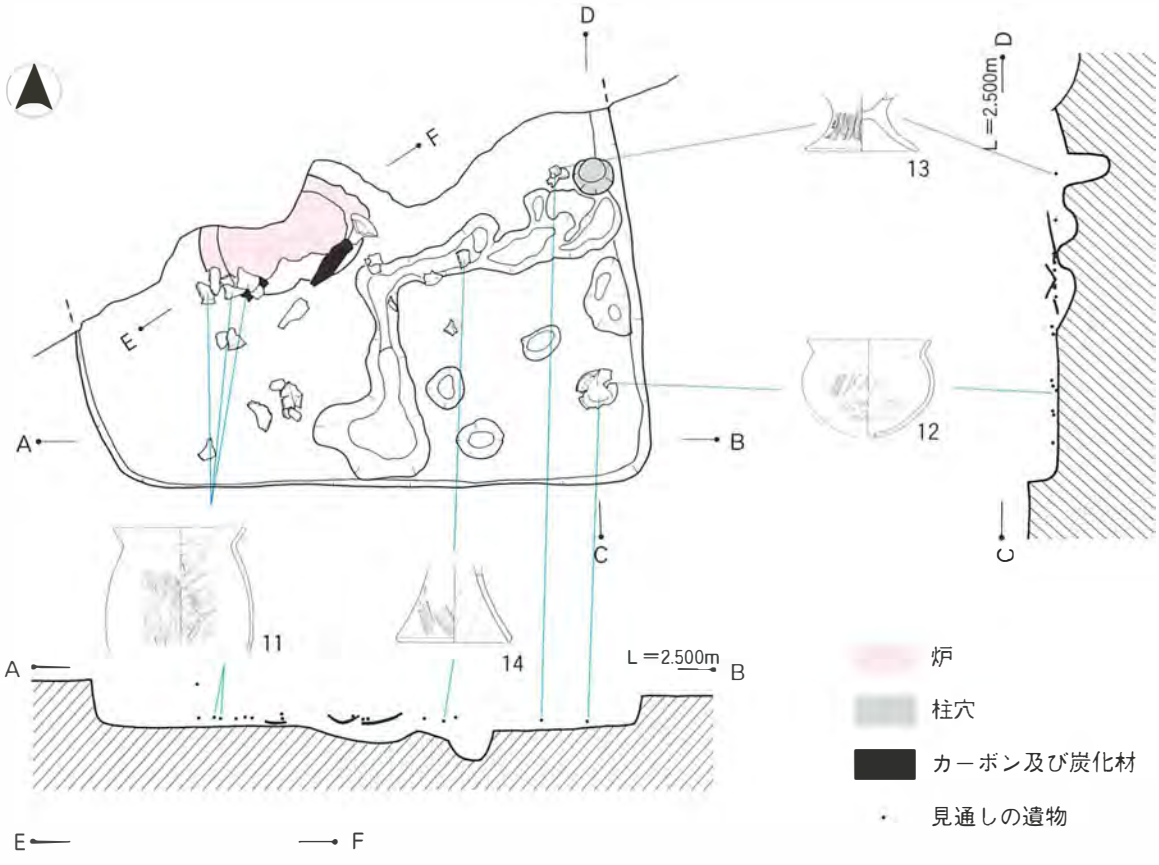
標高約2.48ｍ。

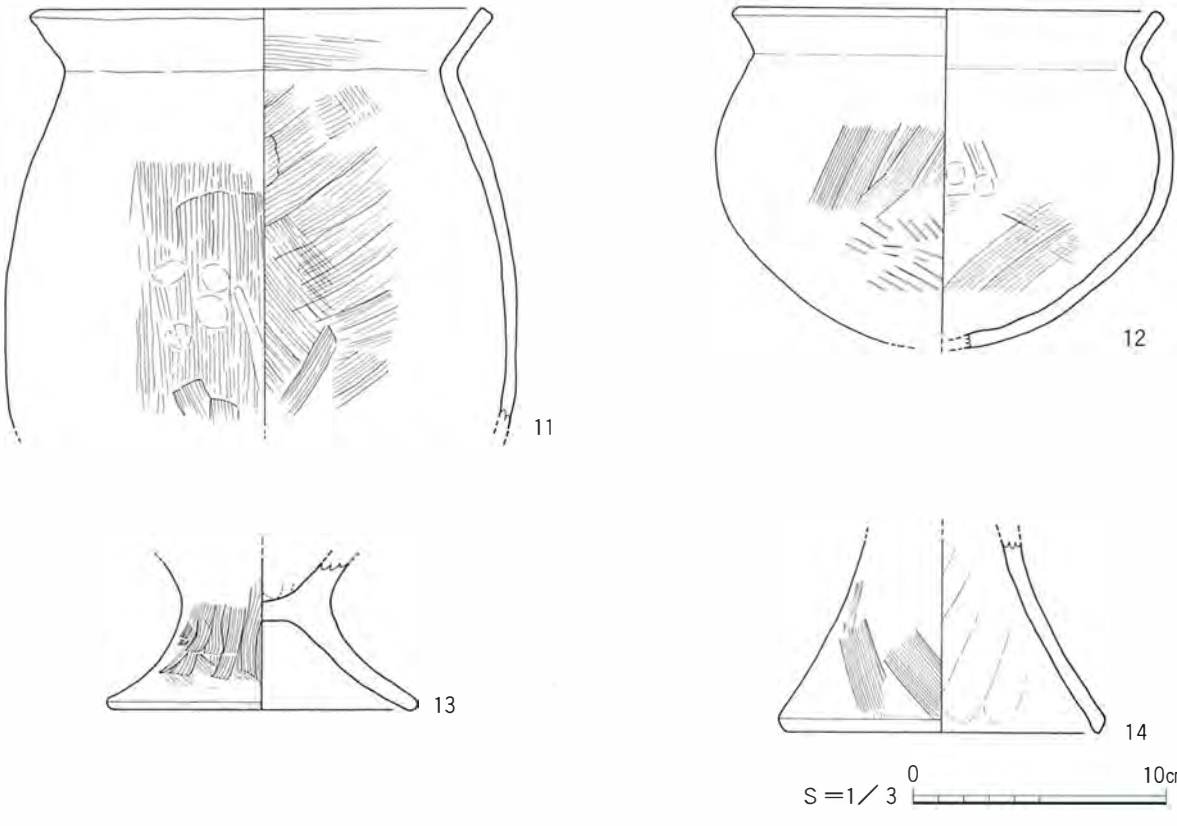
［形状］隅丸方形

［大きさ］長軸：330cm、短軸：230cm～、深さ：10～30cm。



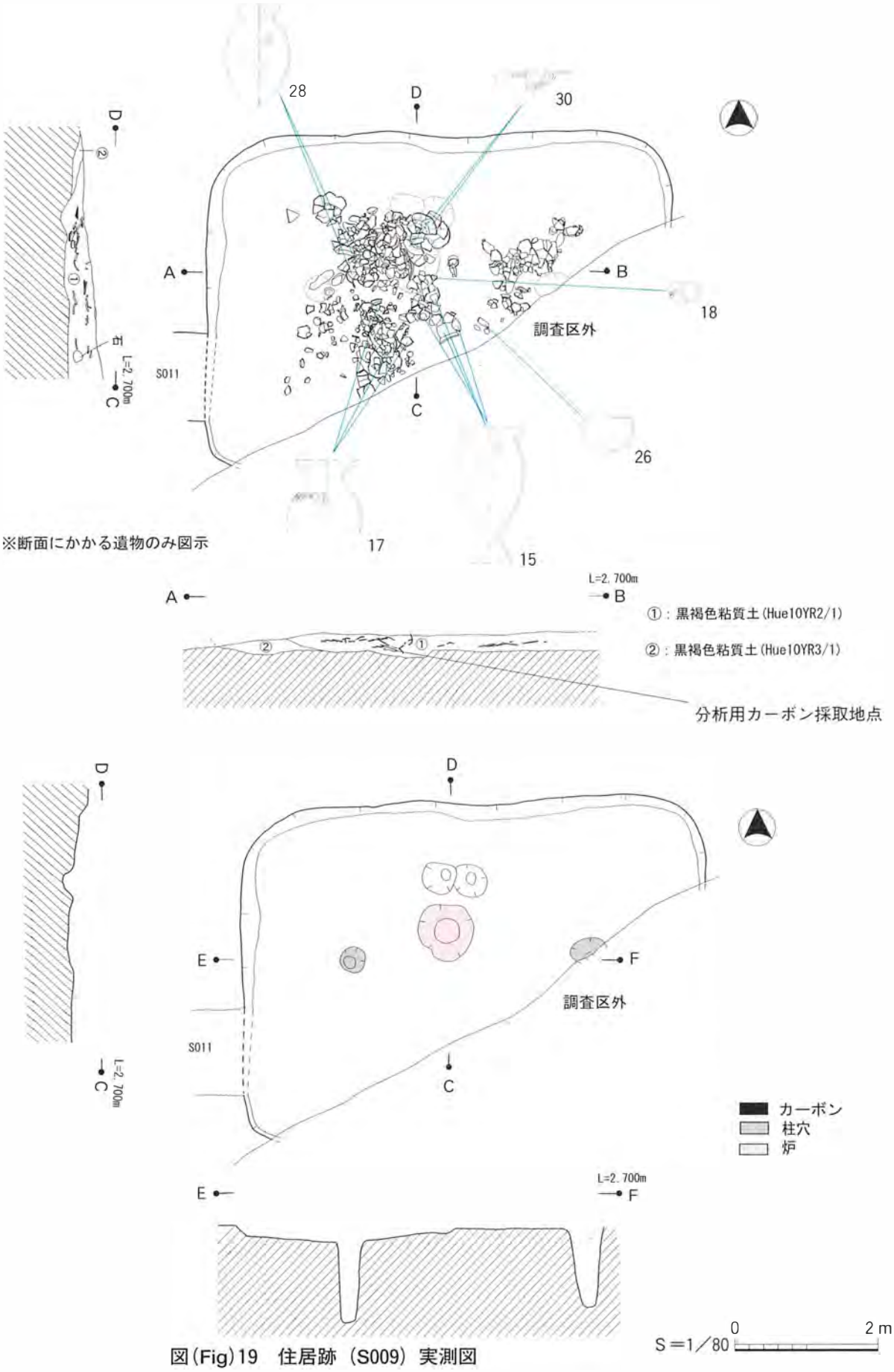
図(Fig)17　調査3区遺構配置図　S＝1／250



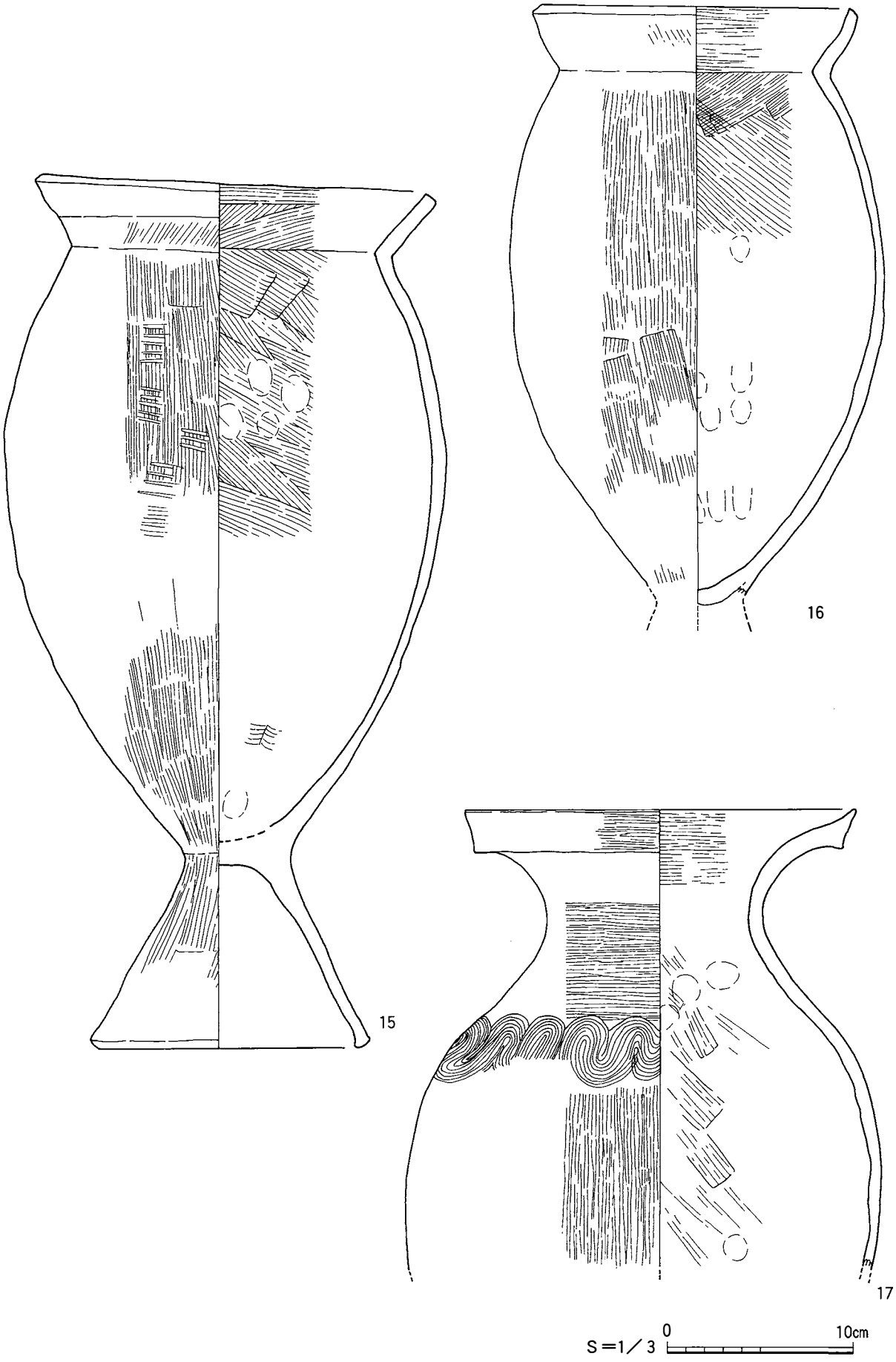


図(Fig)18　住居跡（S012）実測図及び出土遺物実測図

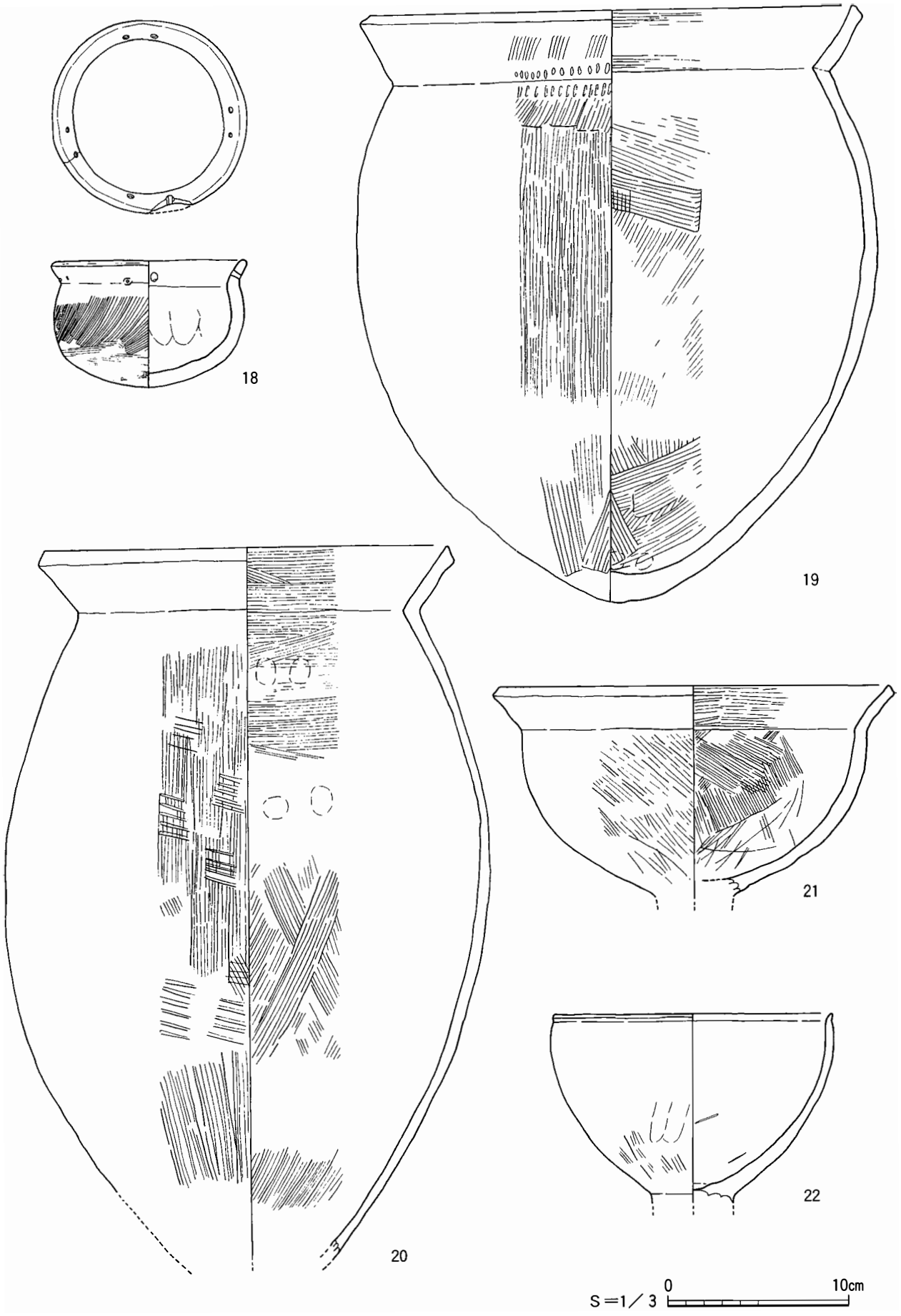
［住居内覆土］ ２層に分層可能。
１層：黒褐色粘質土（Hue10YR2/1）所々に5㎜大のカーボンを含む粘質土。ややパサパサしている。
２層：黒褐色粘質土（Hue10YR3/1）地山に近いややしまる粘質土。色調はやや黄色と灰色気味。所々に緑の粒子が入る。
［主柱穴］ ２本。径38～50cm、深さ約110cm。
［炉］ １つ確認、大きさ80×80cm、深さ約10cm。
［硬化面］ 無し。
［貼り床］ 無し。
［切り合い関係］ S011を切る。
［遺物の出土状況］ 床面からやや浮いた状態で出土。遺構廃絶後間もない遺物として捉えたい。
［年代］
①層最下面出土の炭化物（図19参照）を試料とした放射性炭素年代測定（AMS法）の結果、55AD（95.4%）135AD（^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲）という年代が出ている。出土遺物からは、弥生後期～終末期の様相を呈しており、若干のズレが生じている。
［出土遺物量］
S009から出土した遺物は、中グレーコンテナ（38cm×58cm×14cm）に５箱分で、総重量40.852gであった。内訳は弥生土器39.615g、須恵器227g、陶磁器802g、瓦質土器208gであった。弥生土器以外は、上層からの撹乱などによる混入である。
［出土遺物の観察］
ここでは、16点の土器を紹介する。
15は、ほぼ完形の甕形土器である。口縁部はくの字状に外反し、脚台が長く伸びてより終末期の白川流域の地域的特性を呈している。外面にハケ目後ナデやタタキ、内面はハケ目後ナデや指頭圧痕が残る。
16は、脚台を除きほぼ完形の甕形土器である。口縁部はくの字状に外反しているが、やや内傾ぎみである。15と同様、脚台が長く伸びていたと考えられるが、底部にススが付着していることから、脚部を故意に欠いて丸底の甕として使用したことが考えられる。
17は、壺形土器の口縁部から胴部上半部である。外面は、ハケ目後櫛書き波状文、内面はハケ目後ナデや指頭圧痕が残る。口縁部がくの字状に直立しており、後期の壺の口縁形態を呈している。
18は、ほぼ完形の小型の鉢形土器である。口縁部の４隅に２つずつの穿孔がある。別に蓋があったと考えられる。
19は、ほぼ完形の甕形土器である。脚台はなく、円形に近い楕円形状をしている。口縁部はくの字状に外半し、後期の様相を呈している。内外面ともにハケ目後ナデ調整を行っているが、外面の頸部に工具による刺突が２条巡る。内面はハケ目後ナデや指頭圧痕が残る。
20は、甕形土器の口縁から胴部である。口縁部はくの字状に外反している。脚台を欠損しているが、17と同様、脚台が長く伸びていたと考えられる。外面はハケ目後ナデやタタキ、内面はハケ目後ナデや指頭圧痕が残る。
21は、台付き鉢の鉢部である。内外面ともにハケ後ナデ調整を施している。口縁はややくの字状に外反する。
22は、台付き鉢の鉢部である。内外面ともにハケ後ナデ調整を施している。
23は、完形の小型の鉢形土器である。外面はハケ目後ナデ、内面は指頭圧痕が残る。
24、26は、鉢形土器である。ほぼ同じ大きさの土器である。内外面ともハケ目後ナデ調整、内面には指頭圧痕が残る。
25は、鉢形土器である。口縁はくの字状に外反する。内外面ともハケ目後ナデ調整、内面には指頭圧痕跡が残る。
27は、甕形土器の口縁から胴部である。口縁部はくの字状に外反している。脚台を欠損しているが、15と同様、脚台が長く伸びていたと考えられる。外面はハケ目後ナデやタタキ、内面はハケ目後ナデや指頭圧痕が残る。
28は、ほぼ完形の甕形土器である。15、16、20、27の資料とは異なり脚台が無く、丸底である。口縁部はくの字状に外反している。内外面ともハケ目後ナデ調整、内面には指頭圧痕が残る。
29は、壺形土器の胴部の肩部である。内外面ともハケ目調整があるが、外面には斜めに刻み目のある



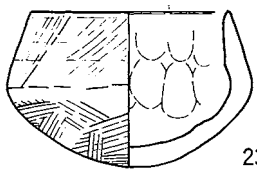
図(Fig)19　住居跡（S009）実測図

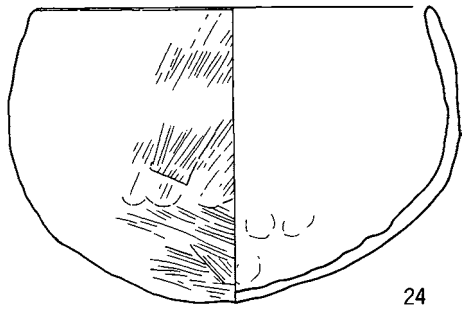


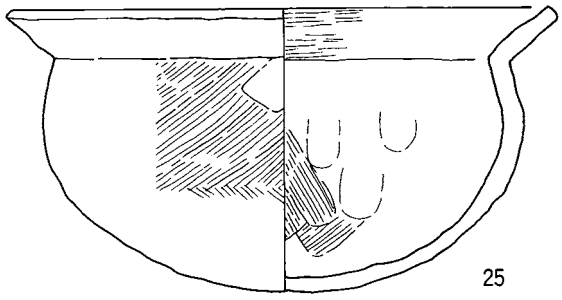
図(Fig)20　S009出土遺物実測図（1）

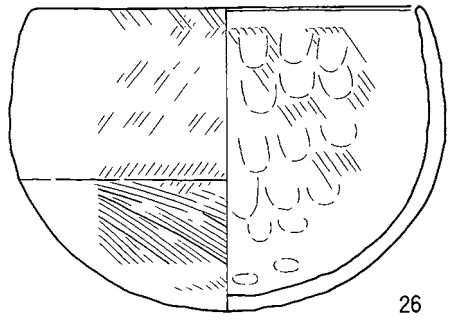


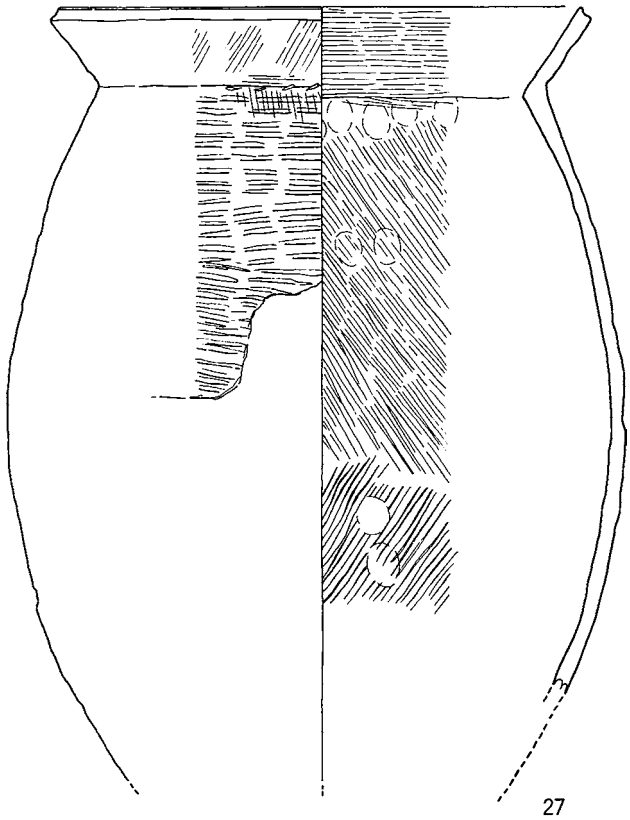
図(Fig)21　S009出土遺物実測図（２）

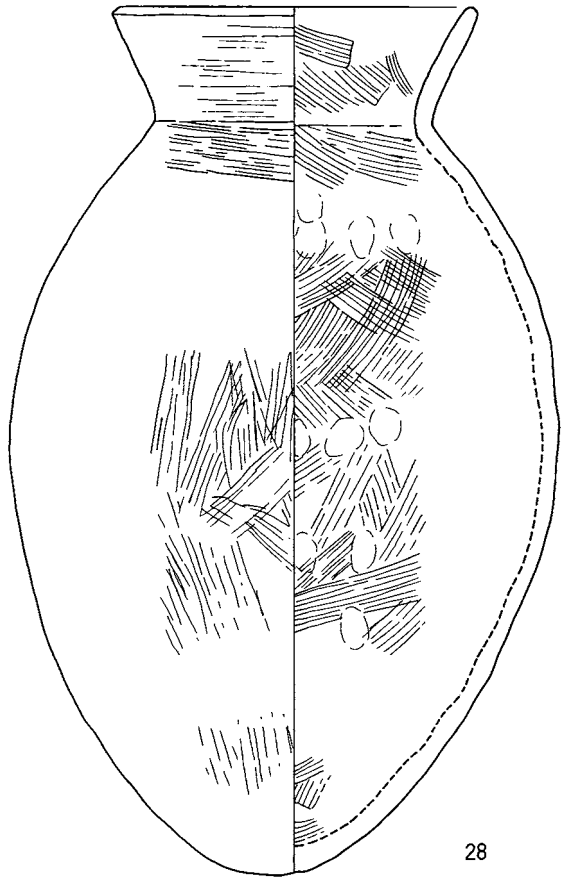






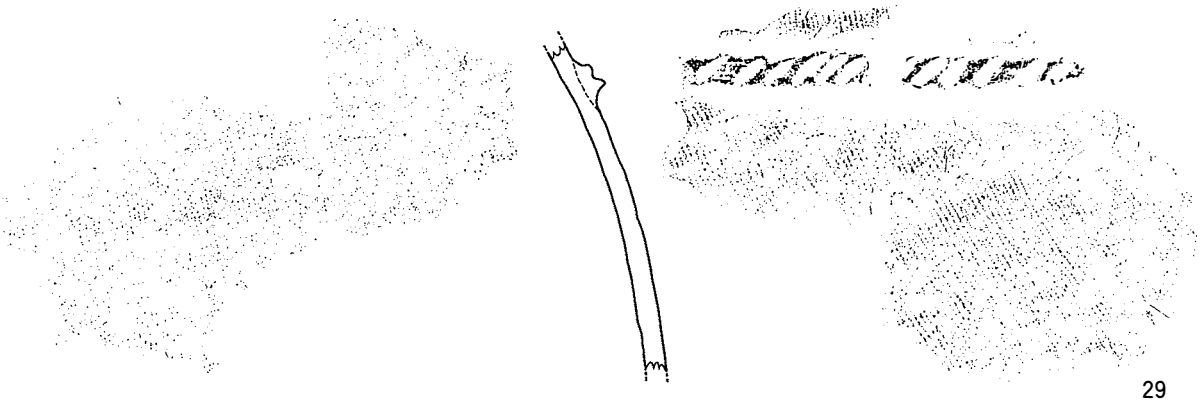




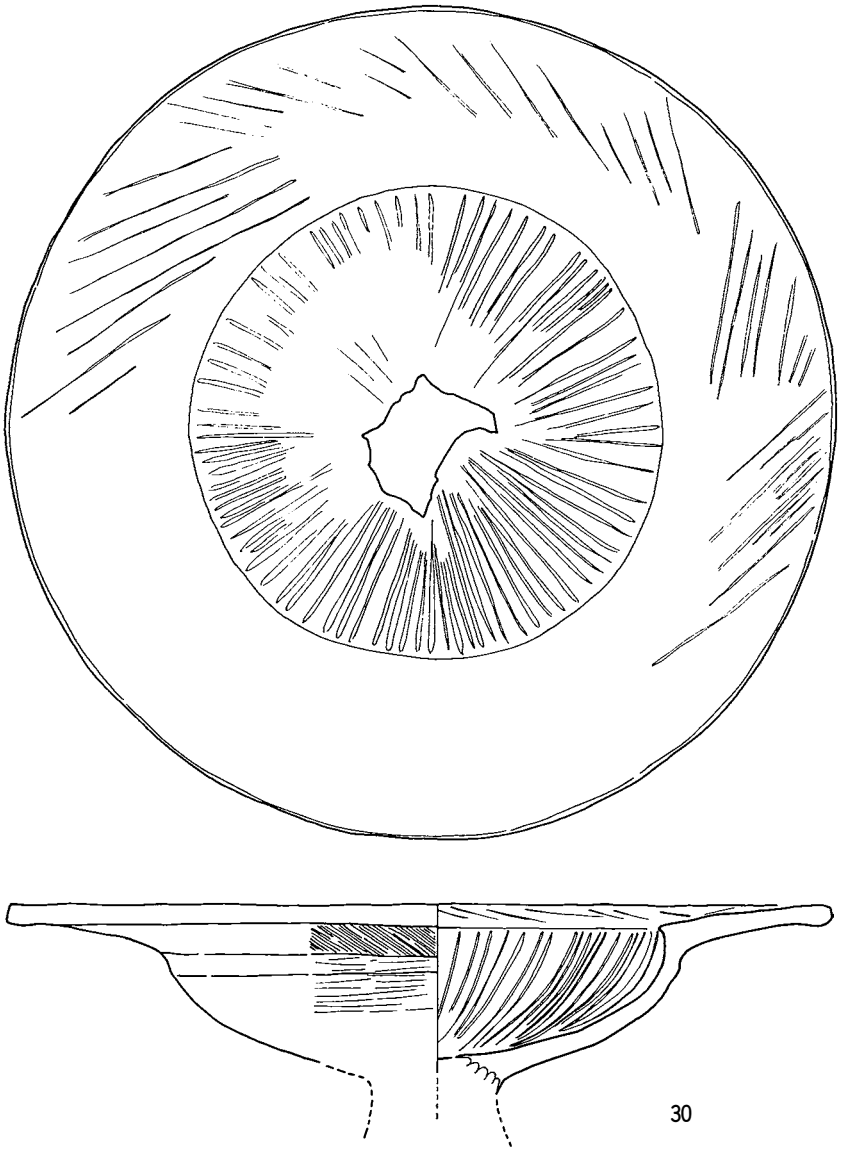


S＝1／3　0　10cm

図(Fig)22　S009出土遺物実測図（3）



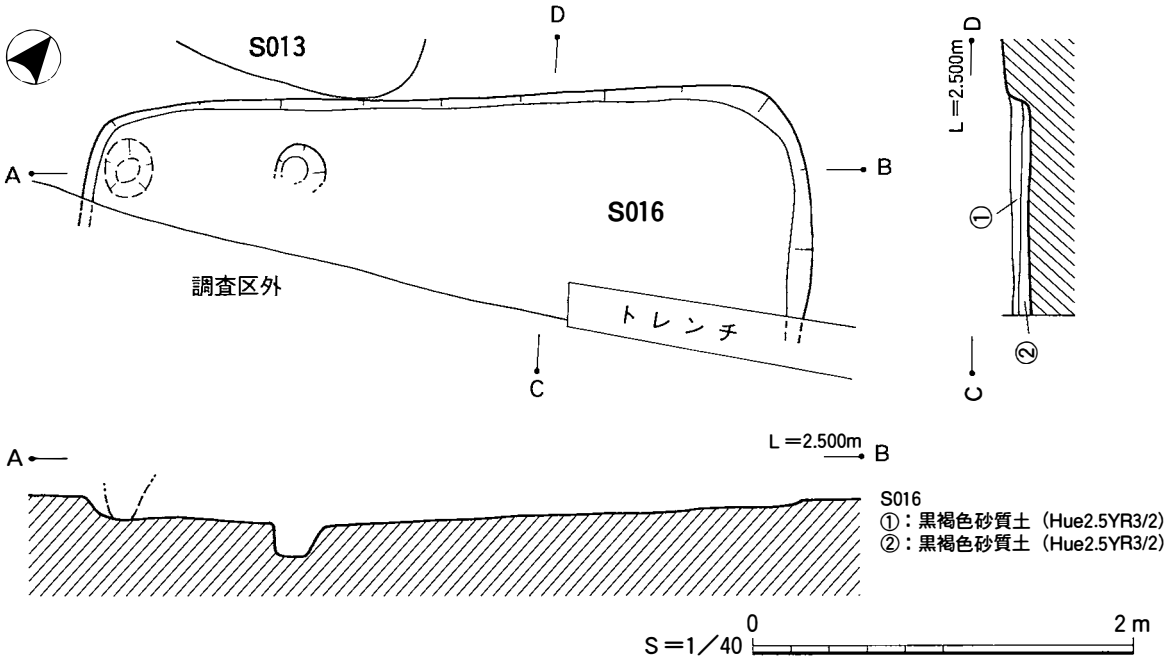
29



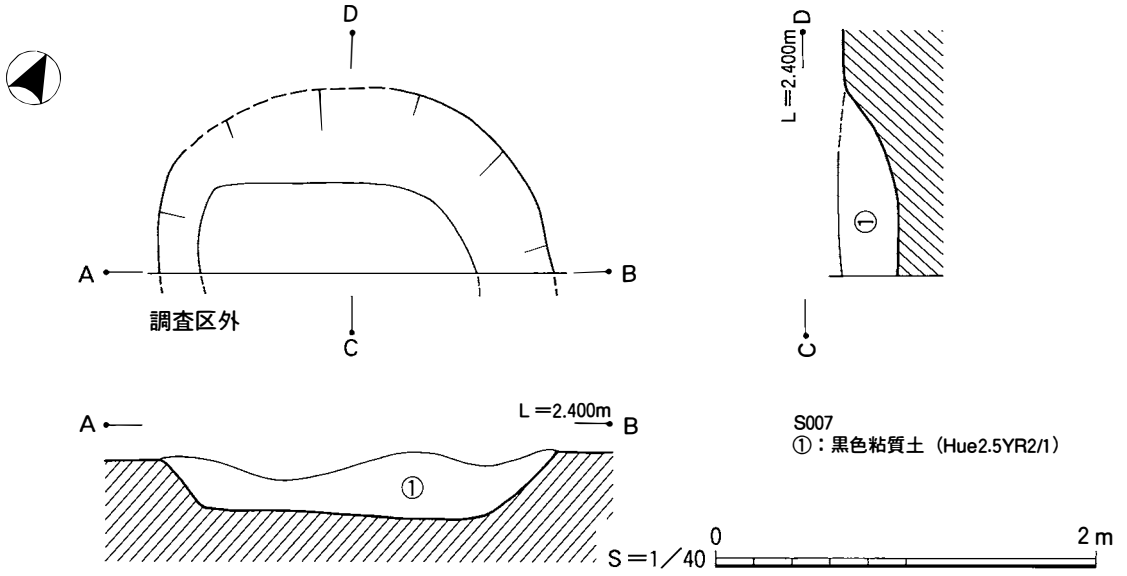
30

S＝1／3　0　10cm

図(Fig)23　S009出土遺物実測図（４）



図(Fig)24　住居跡（S016）実測図



図(Fig)25　土坑（S007）実測図

１条の貼り付け突帯が巡る。

30は、高杯の杯部である。外面は、ハケ目後ナデ調整、内面は杯内部が放射状のミガキ、口縁内部は斜めのミガキ痕が見られる。

【Ｓ０１６】（図24参照）

［確認位置］ Ｂ－41・42グリッド。

標高約2.3m。

［形状］ やや隅丸方形

［大きさ］ 長軸：390cm、短軸：140cm～、深さ：10～15cm。

［住居内覆土］ ２層に分層可能。

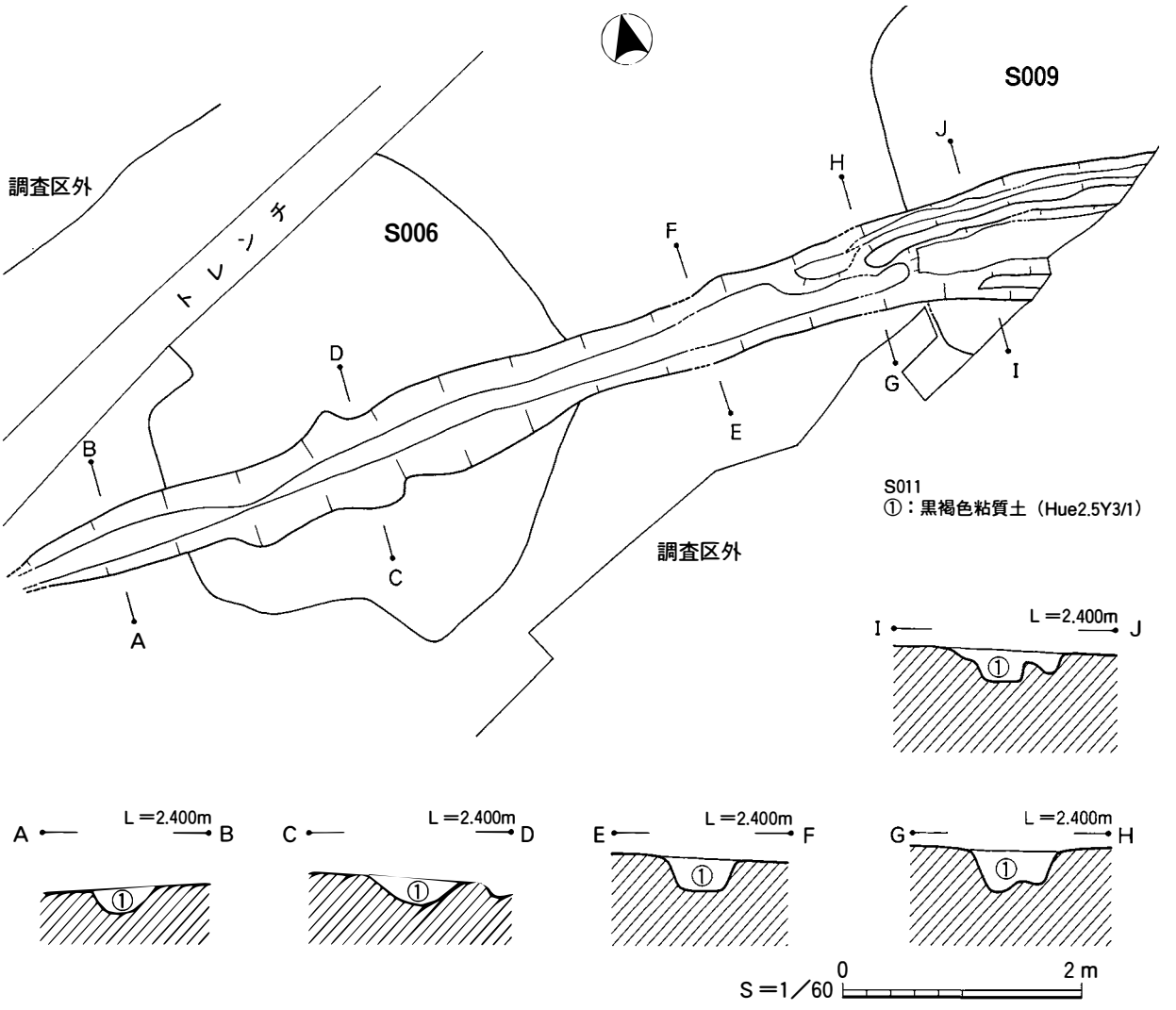
１層：黒褐色砂質土（Hue2.5YR3/2）きめが細かくパサパサしている。

２層：黒褐色砂質土（Hue2.5YR3/2）上層よりやや色調が暗く粘性が強い。

［主柱穴］ 不明。

［炉］ 不明。

［硬化面］ 無し。



図(Fig)26　溝（S011）実測図

［貼り床］無し。

［切り合い関係］S007を切る。

［出土遺物量］

S016から出土した遺物は、全て弥生土器のみで20点（176g）であった。

［出土遺物の観察］

小片の為、紹介はしない。

［遺構の性格］柱穴、炉、などは確認できていないが、隅丸の方形プランであることから、竪穴式住居跡と判断した。

・土坑（１基）

【Ｓ００７】（図25参照）

［確認位置］Ｂ－41グリッド。

標高約2.25m。

［形状］楕円形

［大きさ］長軸：210cm、短軸：98cm～、深さ：約35cm。

［覆土］１層：黒色粘質土（Hue2.5YR2/1）粒子が細かくてやわらかい。

［切り合い関係］S016から切られる。

［遺物の出土状況］安山岩質の石片１点のみ。人工的な加工痕はない。

［遺構の性格］

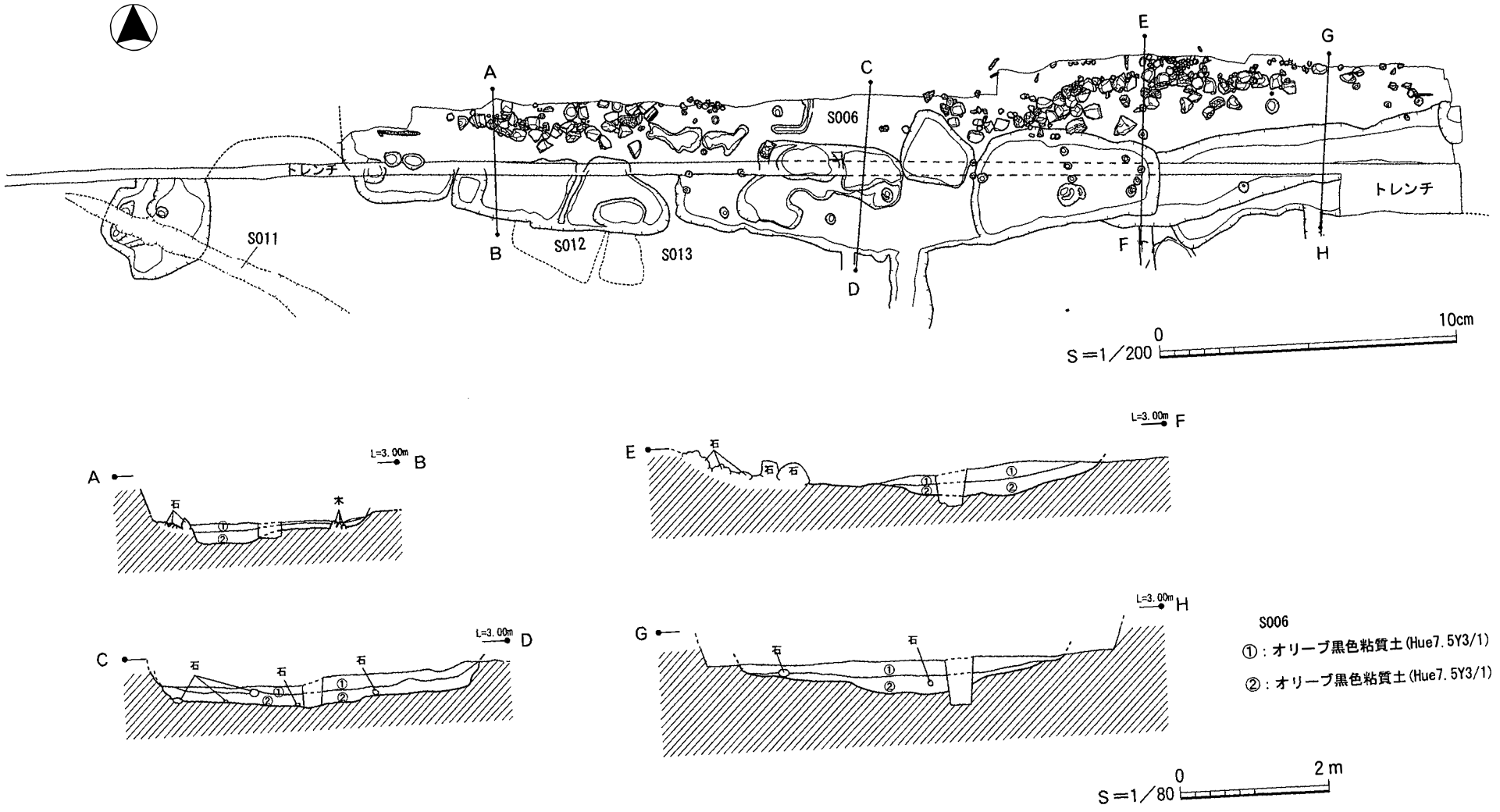
S016との切り合い関係から、弥生時代後期以前と考えられる。出土遺物がなく、性格を判断するには材料が不足している。

・溝（１条）

【Ｓ０１１】（図26参照）

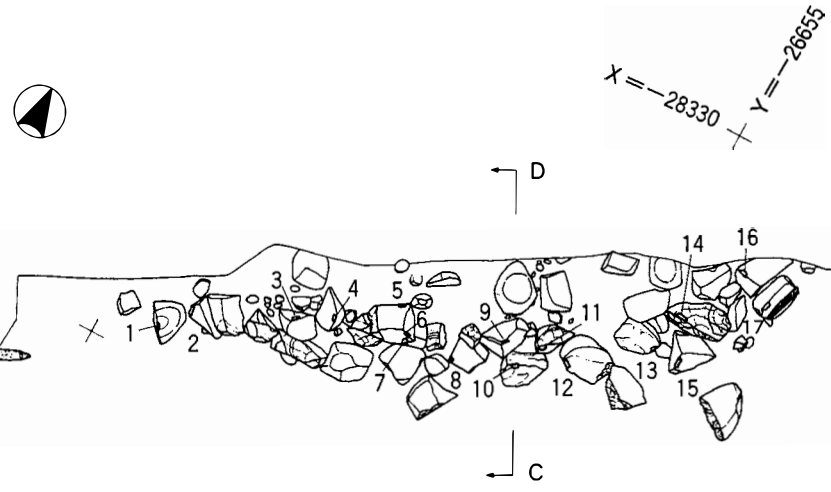
［確認位置］Ｃ－38・39・40グリッド。

標高約1.9～2.3m。

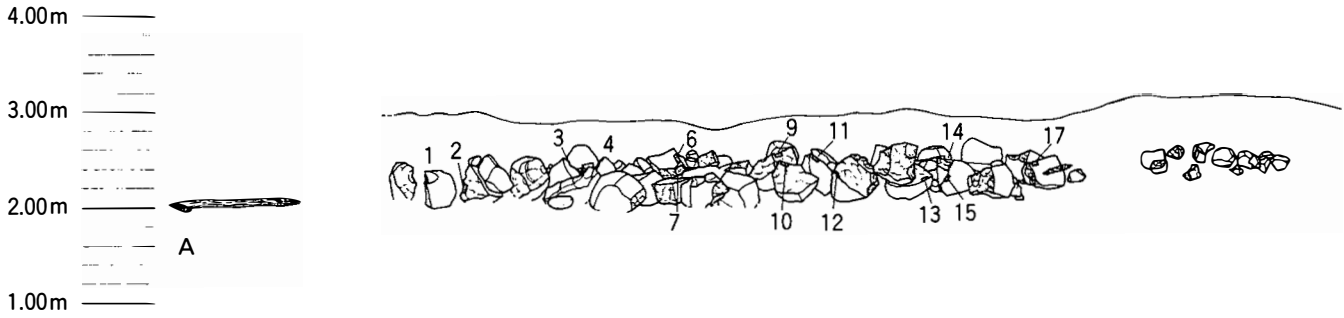


図(Fig)27　溝（S006）実測図

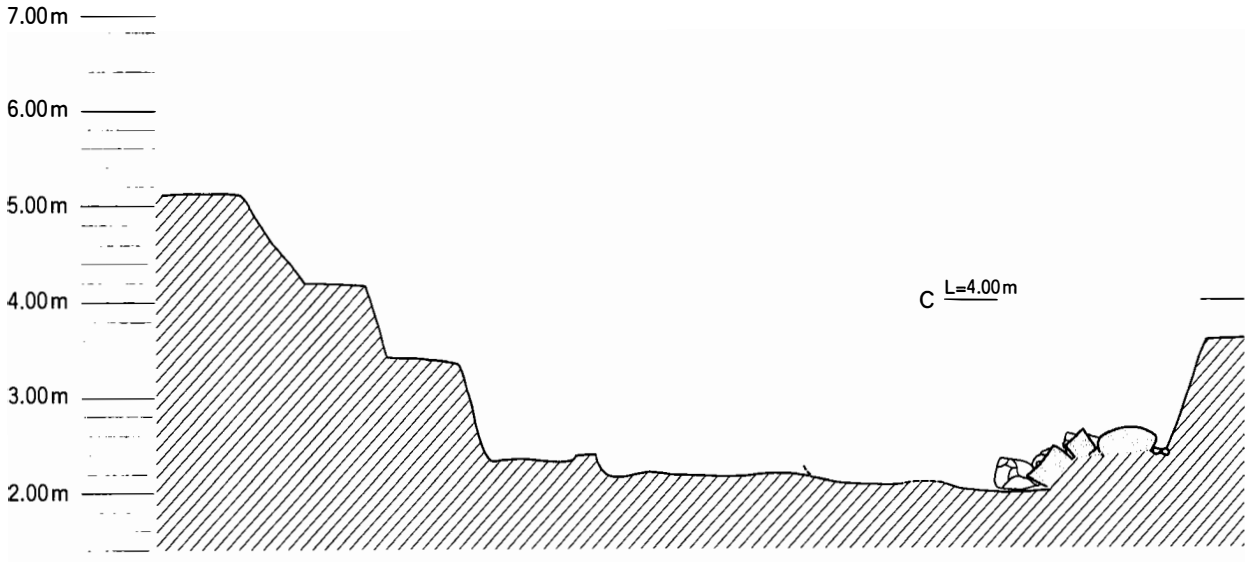
（平 面 図）



（側 面 図）



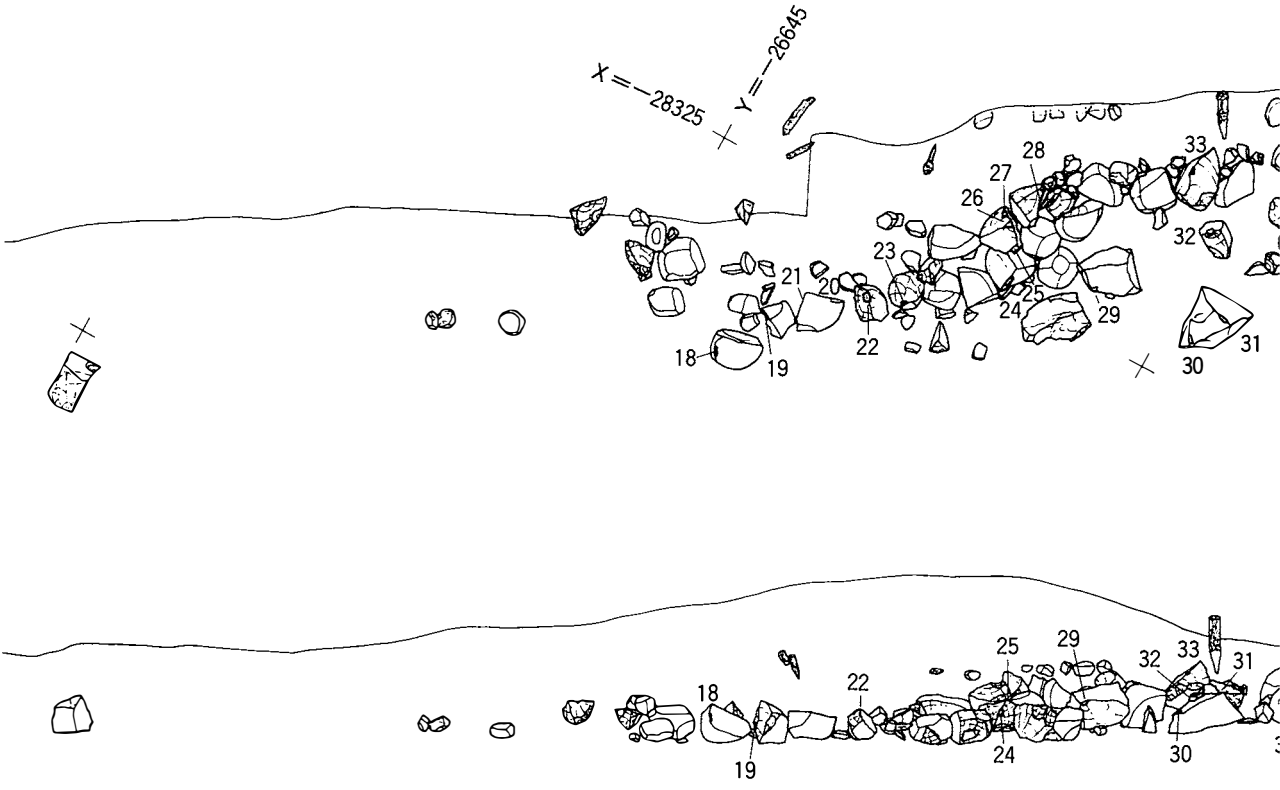
（断 面 図）

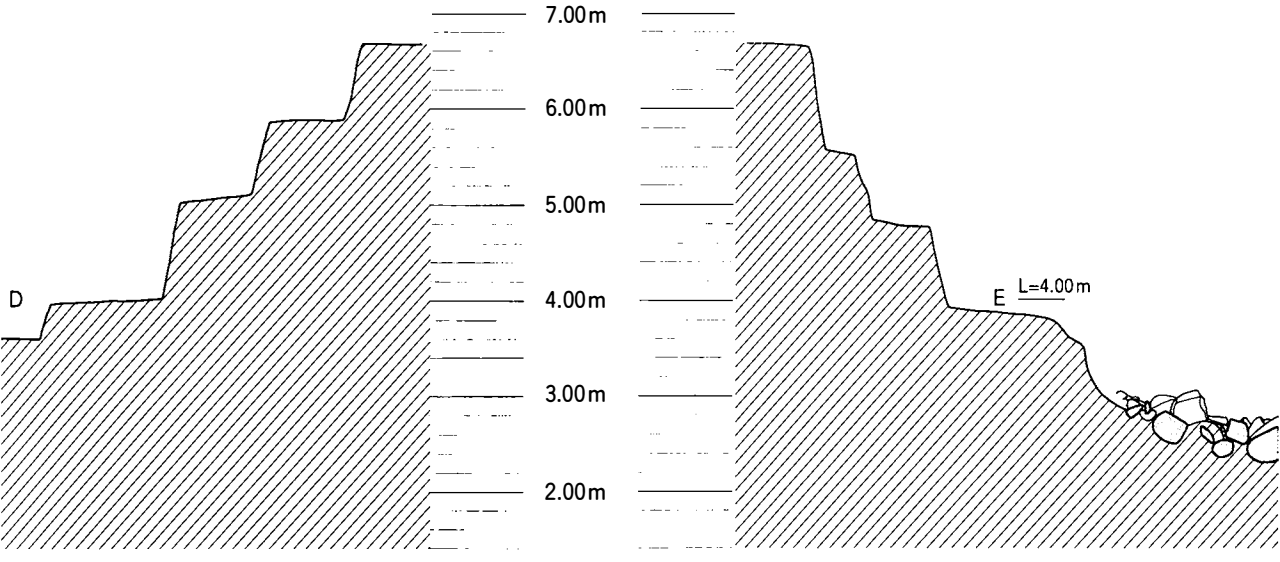


矢穴計測表

No.	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	工具痕			
				縦筋状ノミ痕	円形状ノミ痕	径(mm)	数
1	9.0	2.5～	6.0	○	○	10～12	4
2	10.5	3.0～	8.0		○	5	7
3	9.5	2.0～	4.0		○	5～8	6
4	9.0	1.5～	7.0		○	9～13	4
5	9.5	2.0～	4.5		○	8	2
6	9.5	2.0～	6.8		○	5～8	4
7	10.0	0.5～	8.0			—	—
8	8.8	1.8～	5.0		○	5～8	3
9	9.0～	2.0～	5.5		○	7～8	2
10	8.5	1.8～	3.5			—	—
11	9.0	3.2	4.7		○	8～10	6

No.	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(
12	8.0～	1.9～	5.0
13	9.5	1.5～	3.5
14	10.0	1.2～	6.2
15	8.8	2.5～	5.5
16	9.5	1.5	5.0
17	10.0	2.5～	6.8
18	9.0	1.3～	5.0
19	10.0	1.0～	9.5
20	9.8	2.0～	3.2
21	9.0	0.8～	5.0
22	9.5	2.0～	6.0





:m)	工具痕			
	縦筋状ノミ痕	円形状ノミ痕	径(mm)	数
		○	10	—
	○	○	5～8	—
			—	—
		○	8	—
		○	5～8	5
		○	5	4
	○		—	—
		○	5～8	4
		○	5～6	—
			—	—
		○	5～6	4

No.	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	工具痕		
				縦筋状ノミ痕	円形状ノミ痕	径(r
23	8.7	1.0～	4.3		○	5～
24	10.5	3.5～	7.7		○	4～
25	10.0～	0.8～	8.0			–
26	8.5	1.3～	5.5		○	?
27	9.2	3.0～	4.5		○	5～
28	10.0	1.5～	4.5		○	3～
29	7.0	3.0	6.5			–
30	9.0	3.0	5.0		○	3～
31	10.0	2.2～	6.0		○	5～
32	9.0	2.0～	5.0		○	8～
33	8.5	1.0～	3.5		○	5

図(Fig)28　石列実測図及び矢穴計測表

No.	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	工具痕			
				縦筋状ノミ痕	円形状ノミ痕	径(mm)	数
34	9.0	1.8～	7.5		○	5～7	4
35	9.5	3.5～	7.0		○	6～8	5
36	10.3	1.8～	6.0		○	5～6	4
37	9.3	1.2～	5.0	○	○	5	7
38	9.0	1.3～	4.5			—	—
39	9.5	1.2～	3.5		○	5～6	4
40	9.0～	2.0～	6.0			—	—
41	9.5	2.0～	5.5			—	—
42	8.5	2.5～	4.5		○	5～7	6
43	10.0	3.5～	7.3		○	4～5	7

m)	数
8	4
8	4
	—
	?
8	6
6	8
	—
4	10
7	7
10	4
	6

［大きさ］長さ：1120㎝～、幅：65～105㎝、深さ：25～35㎝。

［覆土］１層：黒褐色粘質土（Hue2.5YR3/1）粘性は強く、パサパサしている。所々に５～10㎜大の青灰色のガチガチに硬いブロック粒子を含む。きめは細かい。

［切り合い関係］S009（弥生終末期の住居跡）、S006（近世の溝）から切られる。

［出土遺物量］

S011から出土した遺物は、10点（総重122g）であった。内訳は弥生土器４点、古代の土師器４点、古代の須恵器１点、瓦質土器１点であった。弥生土器以外は、S006（近世の溝）からの混入である。

［出土遺物の観察］

全て小片であることから紹介しない。

［遺構の性格］

溝にはレベル差があり、東側から西側へ水が流れていたことと推定される。東側が二股に分かれていることから溝の分岐点である可能性もある。耕作等に伴うものであろうか？

②近世

・溝（１条）

【Ｓ００６】（図27・28参照）

［確認位置］X～Ｃ－38～46グリッド。

標高約3.8m。

［大きさ］長さ：46m～、幅：５m～、深さ：1.8m～。但し手掘りによる掘削は遺物が多い約50～60㎝（２層に分層）。

［覆土］１層：オリーブ黒色粘質土（Hue7.5Y3/1）きめが細かくやわらかい粘質土だが、部分的に硬くしまる所もある。乾燥すると非常に硬くしまる。弥生～近世の遺物を多く含む。

２層：オリーブ黒色粘質土（Hue7.5Y3/1）きめが細かく粘質が強い層。上層と比較して色調が暗い。青黒色のブロックを所々に含む。弥生～近世の遺物を多く含む。

［切り合い関係］S011・012・013を切り、調査区外に続く。

［遺構の性格など］

溝は、近世の溝で幅約５m、深さ約1.8m（断面確認）、長さ46m以上にわたる。そしてＡ－43グリッドの位置で南東から幅約1.4mの溝が合流している。レベル差があることから、北東側から南西側へ水が流れていたと考えられる。また、溝の右岸側に長さ約30mにわたり石垣が1～２段築かれていた。石垣には石を割るときにつけた矢穴、石の面をそろえるための剥離痕が確認された。特に矢穴は43個確認され、矢穴を掘るときについたノミの痕跡も残存していた。詳細は附論にある池田朋生氏の秀逸な論考に譲りたい。

矢穴の長さ、幅、深さの平均値は、それぞれ9.3㎝（3.1寸）、３㎝（１寸）、5.5㎝（1.8寸）であった。矢穴の幅が３寸を超えることから江戸前期に構築された可能性が考えられる。

この溝は、農業用水路としての機能が考えられ、上流の加勢川から水を引き、右岸の水田地帯を潤していたものと推定される。また、石垣の上にあたる部分は、明治初年（1867年）に編纂された郡村図によると「塘」が築かれ道となっていることから、当時も「塘」であった可能性が高い。石垣も数段高かったことであろう。更に、この溝の上を埋め立てて家が築かれていることから、溝内出土の一番新しい陶磁器及び郡村図では既に市街地という標記になってからいることから、19世紀の前半期（幕末期）に溝が埋め立てられて宅地になったと考えられる。

［遺物の出土状況］溝の底近くに貼り付くような状況で弥生～近世の遺物が出土した。

［出土遺物量］

S006から出土した遺物は、中グレーコンテナ（38㎝×58㎝×14㎝）に約30箱分で、総重量271.765gであった。内訳は弥生土器・土師器100.280g、須恵器50.859g、近世の陶磁器74.126g、瓦質土器46.408g、その他92gであった。

［出土遺物の観察］

近世の溝であることから、近世の陶磁器を中心に108点の弥生～近世の遺物を紹介する。

大橋康二氏の陶磁器編年ではⅠ期（1580年～1600年代）、Ⅱ期（1600年～1650年代）、Ⅲ期（1650年～1690年代）、Ⅳ期（1690年～1780年代）、Ⅴ期（1780年～1860年代）に区分される。この溝からはⅠ～Ⅴ

図（Fig）29　S006出土遺物実測図（17世紀の陶磁器）

期まで全ての時期の等式が含まれるが、主体的には、Ⅳ、Ⅴ期にあたる18世紀後半期の遺物量が多く見受けられた。

31は、1630年～1640年に焼かれた肥前産の磁器で染付けの皿である。いわゆる初期伊万里である。復元口径は13.2㎝、復元高台径は5.2㎝、器高は2.8㎝である。畳付には砂が付着しており、砂目積痕の可能性が考えられる。内面及び見込みには植物と考えられる文様が描かれている。大橋編年ではⅡ期にあたる。

32は、1640年～1650年に焼かれた肥前産の磁器で染付けの皿である。いわゆる初期伊万里である。口径は14.0㎝である。畳付には砂が付着しており、砂目積痕の可能性が考えられる。内面及び見込みには草花と考えられる文様が描かれている。大橋編年ではⅡ期にあたる。

33は、1590年～1630年に焼かれた肥前産の陶器で天目の椀である。復元口径は12.0㎝である。内外面には鉄釉がかかるが、外面の体部下半部は無釉である。大橋編年ではⅠ期～Ⅱ期にあたる。

34は、17世紀の第２・第３四半期に焼かれた肥前産の陶器で擂鉢である。復元口径は21.0㎝である。口縁上部にのみ鉄釉がかかる。大橋編年ではⅡ期～Ⅲ期にあたる。

35は、17世紀後半期に焼かれた肥前産の青磁で三脚付きの香炉である。復元口径は9.8㎝、高台径は4.7㎝、器高は7.5㎝である。釉は外面全面と内面の上部にのみかかる。大橋編年ではⅢ期にあたる。

36は、1590年～1610年に焼かれた肥前産の陶器で皿である。復元口径は13.0㎝、復元高台径は4.4㎝、器高は3.5㎝である。見込みには４箇所の胎土目跡が残る。釉は目跡以外の内面全面と外面の一部にかかる。大橋編年ではⅠ期～Ⅱ期にあたる。

37は、17世紀第４四半期～18世紀前半期に焼かれた肥前産の陶器で椀である。独特の青緑の釉がかかる嬉野内野山産である。復元口径は11.5㎝、高台径は4.6㎝、器高は6.5㎝である。釉は高台周辺を除き全面にかかる。大橋編年ではⅢ期～Ⅳ期にあたる。

38は、17世紀前半期に焼かれた肥前産の陶器で椀である。復元口径は10.8㎝、高台径は5.0㎝、器高は8.5㎝である。畳付には砂が付着しており、砂目積痕の可能性が考えられる。釉は全面に塗られているが、ムラがあり、高台には釉が垂れているために不安定である。大橋編年ではⅡ期にあたる。

39は、1580年～1610年に焼かれた肥前産の陶器で片口鉢である。復元口径は15.1㎝、復元底径は12.2㎝、器高は12.0㎝である。須恵器に近い焼きで内面には当て具痕が残る。残存率は約1/6で、注ぎ口は欠損している。釉は口縁周辺以外全面にかかる。大橋編年ではⅠ期～Ⅱ期にあたる。

40は、17世紀後半～18世紀前半期に焼かれた肥前産の陶器で二彩手の甕である。復元口径は32.0㎝、残存高は22.2㎝～、残存率は約1/5である。釉は内面に鉄釉、外面には乳白色の釉の上に鉄釉と緑色の釉で山水図と考えられる文様が描かれている。大橋編年ではⅢ期～Ⅳ期にあたる。

41は、18世紀前半期に焼かれた肥前産の陶器で火入れである。復元口径は7.3㎝、高台径は4.0㎝、器高は4.7㎝残存率は約2/3である。釉は鉄釉で、外面と口縁内部の一部にかかる。大橋編年ではⅣ期にあたる。

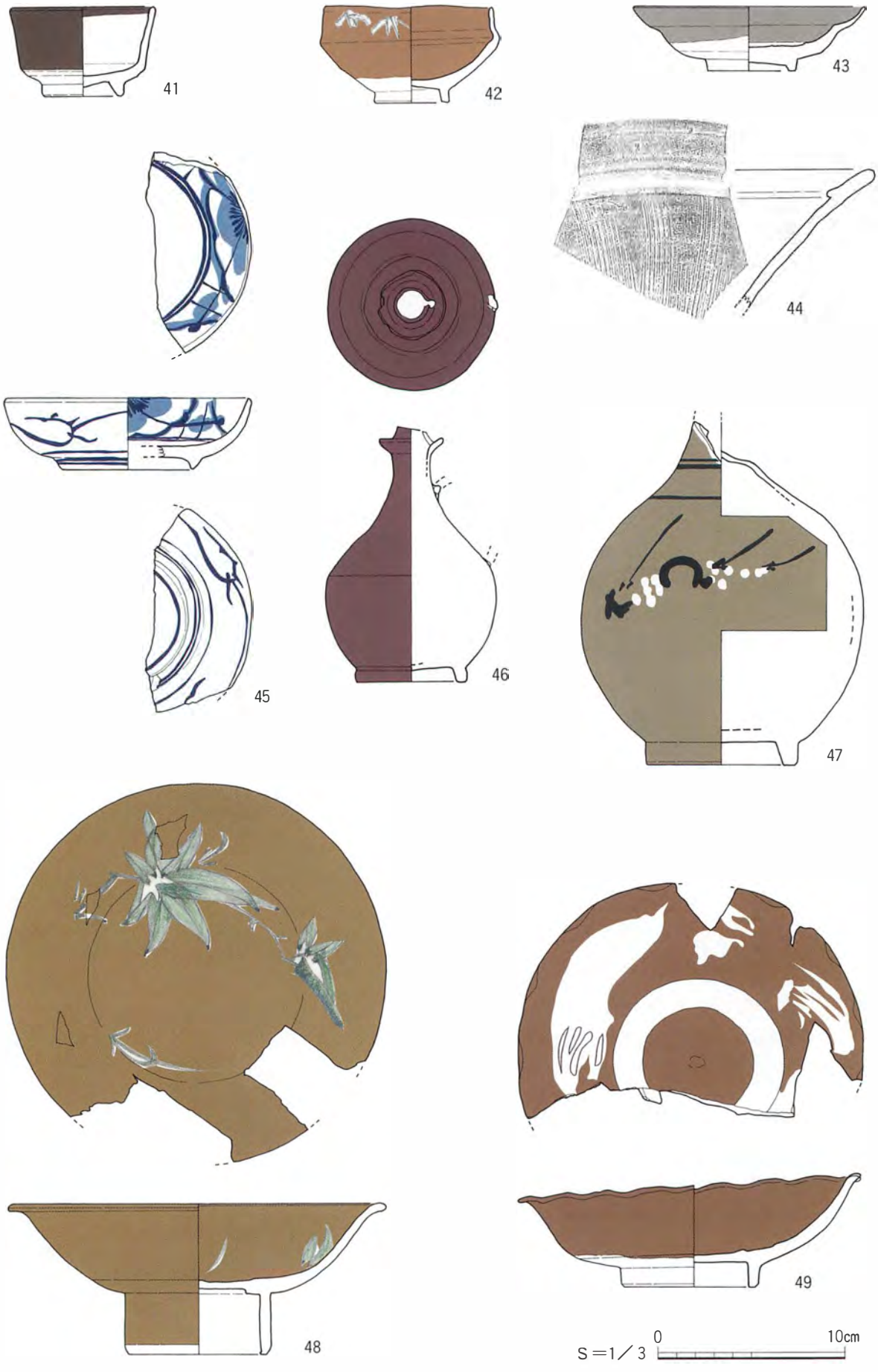
42は、18世紀前半期に焼かれた肥前産の陶器で小鉢である。口径は、8.8㎝、高台径は3.8㎝、器高は5.1㎝である。釉は高台部以外全面に塗られ、その上に外面体部上面に鉄釉による笹の葉とみられる文様が２つ描かれている。大橋編年ではⅣ期にあたる。

43は、18世紀前半期に焼かれた肥前産の陶器で皿である。見込みは蛇の目釉はぎで嬉野内野山産である。復元口径は12.1㎝、高台径は4.5㎝、器高は3.4㎝である。釉は乳白色で見込みと高台周辺を除き全面にかかる。大橋編年ではⅣ期にあたる。

44は、18世紀の第２・第３四半期に焼かれた肥前産の陶器で擂鉢である。復元口径は34.0㎝、残存高7.0㎝である。内外面の口縁部周辺にのみ鉄釉がかかる。大橋編年ではⅣ期にあたる。

45は、18世紀前半期に焼かれた肥前産の磁器で染付けの皿である。復元口径は13.0㎝、復元高台径は6.8㎝、器高は3.7㎝である。内面は梅、外面は唐草文が描かれている。大橋編年ではⅣ期にあたる。

46は、18世紀前半期に焼かれた肥前産の陶器で油



図（Fig）30　S006出土遺物実測図（18世紀の陶磁器）

用の瓶である。把手を除き、ほぼ完形である。口径は3.4cm、高台径は6.0cm、器高は13.4cmである。全面に鉄釉かかる。大橋編年ではⅣ期にあたる。

47は、18世紀の第２・第３四半期に焼かれた肥前産の陶器で徳利である。高台径は8.0cm、最大胴径は15.0cm、残存高18.0cmである。外面には暗青灰色の釉の上に呉須と白化粧土で草花とみられる文様が描かれている。大橋編年ではⅣ期にあたる。

48は、18世紀前半期に焼かれた肥前産の陶器で台付き皿である。口径は20.0cm、高台径は7.8cm、器高は8.0cmである。高台以外はオリーブ黒の釉が全面に塗られており、内面にはその上から呉須でもみじの文様が描かれている。高台高は3.1cmと高く、皿を作製後、高台部と接着させている。大橋編年ではⅣ期にあたる。

49は、18世紀前半～中頃に焼かれた肥前産の陶器で皿である。口縁部は輪花で見込みは蛇の目釉はぎである。口径は18.6cm、高台径は7.8cm、器高は4.8～6.1cmとやや歪がみられる。釉はオリーブ褐色で見込みと高台周辺を除き全面にかかり、その上からハケによる灰白色の釉がさらに塗られている。大橋編年ではⅣ期にあたる。

50は、1780年～1810年に焼かれた肥前産の磁器で染付けの小杯である。復元口径は5.6cm、復元高台径は1.0cm、器高は2.7cmである。外面には２重の縦線で８つに区画して網目文と幾何学文が交互に描かれている。大橋編年ではⅤ期にあたる。

51は、1780年～1820年に焼かれた肥前系の磁器で染付けの湯飲み椀（丸型椀）である。口径は8.5cm、高台径は3.7cm、器高は5.3cmである。外面には草と切り株と見られる文様が描かれている。内外面に貫入が多い。大橋編年ではⅤ期にあたる。

52は、1780年～1810年に焼かれた肥前系の磁器で染付けの湯飲み椀（筒型椀）である。口径は7.4cm、高台径は4.0cm、器高は5.6cmである。外面には２重の縦線で４つに区画して半分の菊花を向かい合わせた文様と菱形文が交互に、また屈曲した底面には唐草文描かれている。内面の口縁部には四方襷、見込みにはコンニャク印判による五弁花が描かれている。大橋編年ではⅤ期にあたる。

53は、18世紀末～19世紀初頭に焼かれた肥前系の磁器で染付けの椀である。口径は11.8cm、高台径は4.4cm、器高は5.3cmである。外面には丸に斜線を施した文様と襷文が交互に描かれ、高台の上部に三重圏線が描かれている。内面は蛇の目釉剥ぎでアルミナを塗布し、その内側にコンニャク印判による五弁花、外側に一重圏線が描かれている。アルミナを塗布した蛇の目釉剥ぎの上には重ね焼きをした痕跡が残る。大橋編年ではⅤ期にあたる。

54は、18世紀後半に焼かれた波佐見産の磁器で染付けの椀である。いわゆる「くらわんか手」と呼ばれる国内向けの日用雑器である。口径は10.0cm、高台径は4.0cm、器高は5.5cmである。外面には二重の網目文、高台の上部に三重圏線が描かれている。大橋編年ではⅣ～Ⅴ期にあたる。

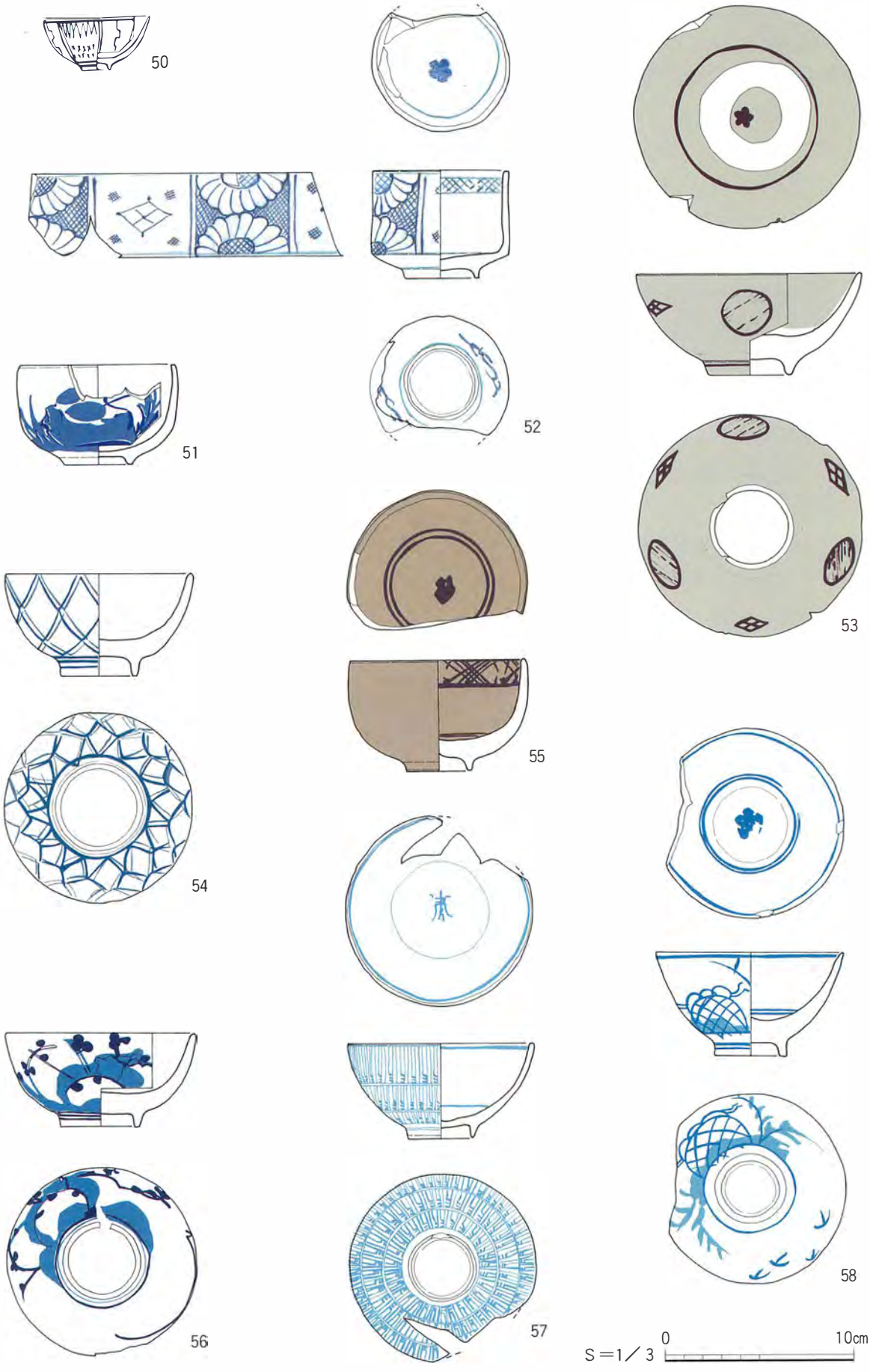
55は、18世紀後半に焼かれた肥前系の青磁で染付けの椀である。口径は9.5cm、高台径は3.5cm、器高は5.8cmである。内面の口縁には、四方襷文、見込みには二重圏線とコンニャク印判による五弁花文が描かれている。大橋編年ではⅣ～Ⅴ期にあたる。

56は、18世紀後半に焼かれた波佐見産の磁器で染付けの椀である。いわゆる「くらわんか手」と呼ばれる国内向けの日用雑器である。口径は10.0cm、高台径は4.1cm、器高は4.9cmである。外面には梅の文様が描かれている。大橋編年ではⅣ～Ⅴ期にあたる。

57は、1770年～1820年に焼かれた肥前産の磁器で染付けの椀である。口径は9.9cm、高台径は3.4cm、器高は5.0cmである。外面には３段に区画した梵字文、高台の上部に二重圏線が描かれている。内面には口縁部に二重圏線、見込みに一重圏線と梵字が描かれている。大橋編年ではⅣ～Ⅴ期にあたる。

58は、18世紀中頃～後半期に焼かれた肥前系の磁器で染付けの椀である。口径は10.0cm、高台径は3.8cm、器高は5.4cmである。外面には草木と鳥とみられる文様が描かれている。内面には高台の上部に一重圏線、見込みに二重圏線とコンニャク印判による五弁花文が描かれている。大橋編年ではⅣ～Ⅴ期にあたる。

59は、18世紀後半に焼かれた関西系の陶器で椀である。口径は9.0cm、高台径は3.0cm、器高は5.2cmで



図(Fig)31　S006出土遺物実測図（18世紀～19世紀の陶磁器）（１）

図(Fig)32　S006出土遺物実測図（18世紀～19世紀の陶磁器）（２）

ある。灰白色の釉が高台部周辺を除き全面にかかる。外面上部に鉄釉による笹と見られる文様があるが、はっきりとしない。

60は、18世紀後半に焼かれた波佐見産の磁器で染付けの皿である。いわゆる「くらわんか手」と呼ばれる国内向けの日用雑器である。口径は12.0cm、高台径は4.5cm、器高は3.7cmである。内面は蛇の目釉剥ぎでアルミナを塗布し、その外側に二重圏線と二重斜格子文が描かれている。蛇の目釉剥ぎの上には、重ね焼きをした痕跡が残る。大橋編年ではⅣ～Ⅴ期にあたる。

61は、18世紀後半～19世紀前半期に焼かれた関西系の陶器で薬用酒（保命酒）を入れるための徳利である。最大胴径は18.0cm、残存高は20.6cmである。胴部にへこみが４箇所あり、その一番大きなへこみに布袋像を貼り付けられ、下方に「宝山」という刻印がみられる。底部以外の全面に鉄釉がかかる。

62は、18世紀後半～幕末期に焼かれた小代焼（陶

器）で皿である。復元口径は10.6cm、復元高台径は8.6cm、器高は8.9cmである。高台部以外に暗オリーブ褐色の独特な釉がかかる。口唇部は約7.5cmの間隔で上から押さえて輪花状になる。断面に高台を貼り付けた痕跡が窺える。

63は、18世紀に焼かれた肥前産の青磁で火入れである。復元口径は10.4cm、高台径は6.4cm、器高は7.7cmである。釉は畳付と内面を除いた全面にかかる。大橋編年ではⅣ～Ⅴ期にあたる。

64は、18世紀後半～幕末期に焼かれた陶器で土瓶である。産地は肥後産の可能性もあるが、薩摩産の可能性が高い。口径は10.9cm、最大胴径は19.6cm、器高は12.6cmである。外面の体部下半部以外の全面に鉄釉がかかる。

65は、陶器で椀か皿の高台部である。産地と時期は不明である。底径は3.8cm、残存高は2.0cmである。高台部周辺を除きオリーブ褐色の釉がかかり、高台内に「十」の墨書が見られる。

66は、土師質の小皿で、いわゆる「カワラケ」である。産地と時期は不明である。器厚は1.5～3.0㎜と薄く、中世には見られない薄さであることから近世の所産であろう。口径は8.3cm、底径は5.3cm、器高は1.3cmである。内面にはロクロ成形時のナデの際についたと考えられる突起が一重あり、底部は糸切り離し痕が見られる。

67は、瓦質の高杯と考えられるが、脚中央部に約１cmの穴が空いていることから棒状のものを差込み燭台状に使用した物の脚部である可能性も考えられる。内外面は黒色に磨研されている。類例がないため、産地と時期は不明であるが、中世には見られない物であることから近世の所産であろう。復元口径（もしくは復元底径）は26.2cm、残存高は19.7cmである。

68は、土師質の焙烙（ほうろく）である。「煎る」とか「炒める」とかいった水分を加えずに加熱がなされる調理具である。生産地は不明であるが、生産時期は17世紀後半～18世紀前半期と推定（2001　柏書房）される。外面にはススが付着しており、直径約８㎜の穿孔が１ヶ所確認される。把手を固定するためのものか？復元口径は30.2cm、残存高は8.0cmである。

69は、肥前産の陶器で甕の口縁部～体部上半部である。復元口径は25.4cm、残存高は14.5cmである。外面は鉄釉がかかり、内面には格子目の当て具痕が残る。東中川忠美氏の編年では、17世紀後半期に位置付けられる。

70は、肥前産の陶器で甕の口縁部である。復元口径は20.0cm、残存高は9.2cmである。内外面には鉄釉がかかり、内面には同心円の当て具痕が残る。東中川忠美氏の編年では、17世紀前半期に位置付けられる。

71は、瓦質の大甕の口縁部である。復元口径は49.2cm、残存高は12.8cmである。生産地及び生産時期は不明である。

72、73、74は、羅宇きせるの雁首である。８点出土した中から３点を紹介する。いずれも銅に金メッキを施してある。1988年にたばこと塩の博物館から刊行された「きせる」の類例から、72は江戸中期、73は江戸後期、74は江戸初期～中期に属すると考えられる。

75、76、77は、羅宇きせるの吸口である。９点出土した中から３点を紹介する。いずれも銅に金メッキを施してある。1988年にたばこと塩の博物館から刊行された「きせる」の類例から、75は江戸中期、76と77は江戸後期に属すると考えられる。

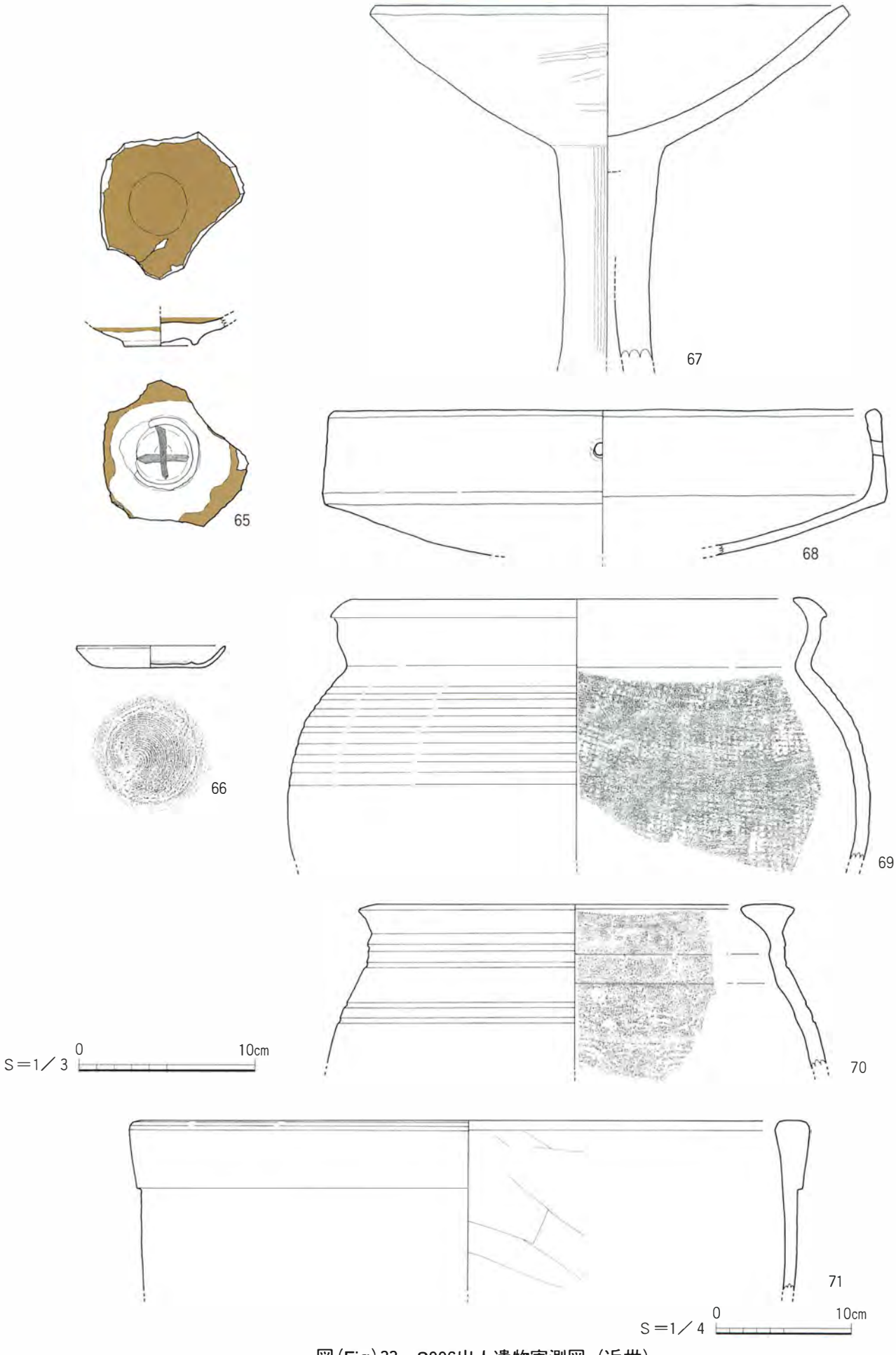
78、79は、鉄釘である。78は、長さ10.7cm、幅3.4cm、厚さ0.6cmであり、幅があることから船釘の可能性も考えられる。79は、長さ12.9cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmである。この他の鉄製品は、釘２点、船釘６点、鎌３点、不明２点であり、銅製品２点、真鍮製品１点、耳環状金属製品１点が確認された。

80～87は、「寛永通寶」である。S006から出土した判読可能な「寛永通寶」は46点で、２点は劣化して判読不明であった。

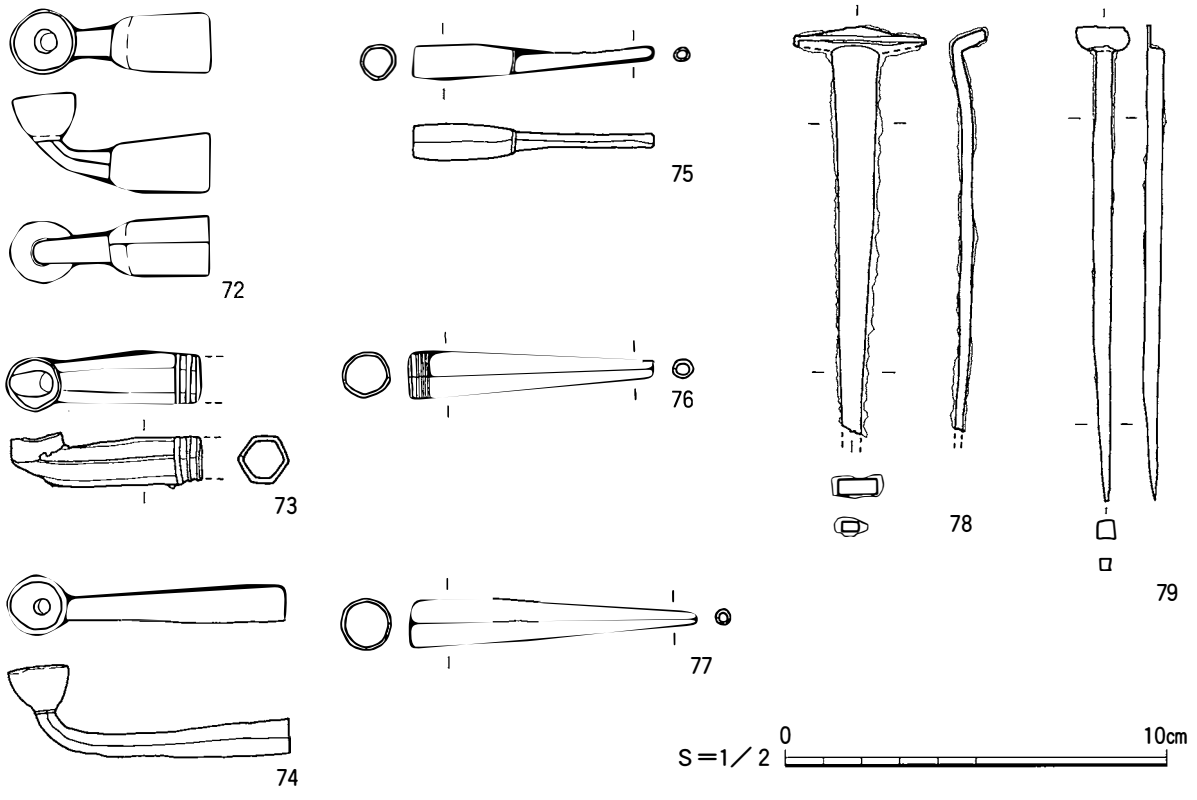
「寛永通寶」には、鋳造年代や形態から以下の５種類に分別可能である。（熊本大学文学部の小畑弘己助教授のご教示による）

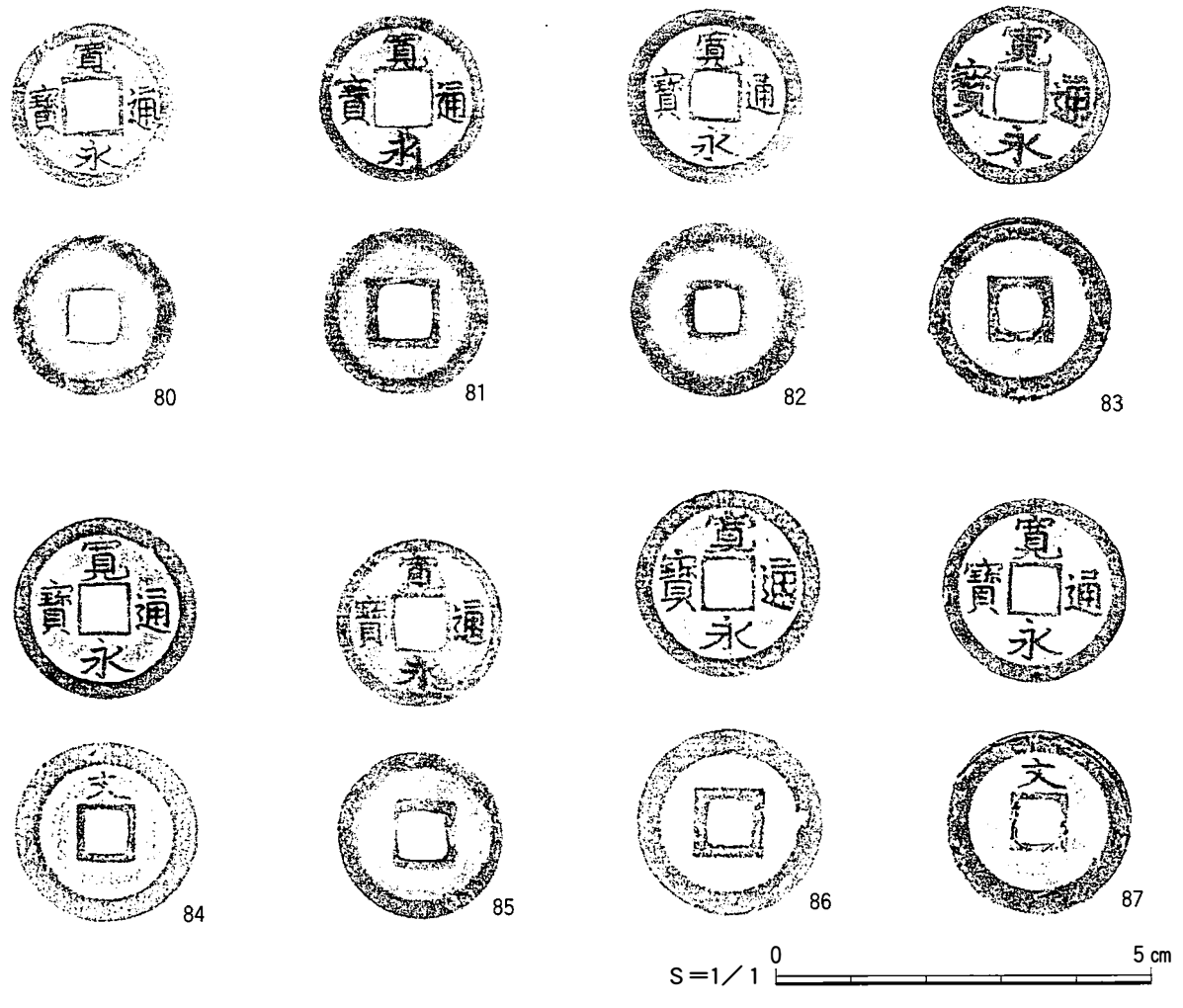
１：古寛永（1636年～1659年）「寛」の12と13画、「寶」の18と19画がつながる。

２：文銭（1668年～1683年）裏面に「文」が刻まれる。



図(Fig)33　S006出土遺物実測図（近世）





図(Fig)34　S006出土遺物実測図（近世のきせる・鉄釘・古銭）

3：新寛永（1697年～1747年、1767年～1781年）「寛」の12と13画、「寶」の18と19画がつながらない。

4：鉄銭（1739年～）素材が鉄である。

5：四文銭（1768年～）銭の直径がやや大きく、裏面に「波の文様」が刻まれる。波銭ともいう。

出土した「寛永通寶」46点をこの5種類に分類したところ、古寛永が15枚、文銭が6枚、新寛永が22枚、新寛永の可能性が高いものが2枚、鉄銭の可能性が高いものが1枚であった。四文銭は確認できなかった。

83、86は古寛永、80、81、82、85は新寛永、84、87は文銭である。

88は、丸瓦である。断面形状は確認できるが、長さは不明である。内面の一部には縄目が残る。91の口径と同じであり、17世紀初頭～中頃の所産と考えられる。

89は、丸瓦である。断面と長さの形状が不明である。内面には縄目が残る。近世期の所産であるが、19世紀まで下る可能性も考えられる。

90は、軒丸瓦の瓦当の一部である。残存状況は悪いが、「加藤氏」の家紋である「桔梗紋」である。約1/2程残存している。17世紀前半期の所産と考えられるが、どうしてここで出土したのかは不明である。

91は、軒丸瓦の瓦当の一部である。90と同様に残存状況は悪いが、「巴紋」である。90の口径と同じであり、17世紀初頭～中頃の所産と考えられる。

92は、平瓦の一部である。残存状況は悪く長さや幅が不明である。外面には製作時に工具で調整したと考えられる痕跡が確認される。近世期の所産であるが、時期は不明である。

93は、古代の布目瓦の一部である。内面には布目、外面には縄目のたたき痕が確認される。古代の瓦はこの1点のみであり、時期は不明である。

94は、輸入磁器の皿か椀の高台部である。高台径4.1cm、残存高は2.0cm。見込みと高台内には花や葉とみられる文様が確認される。粗製であることから福建省漳州窯系の染付けである可能性が高い。16世紀末～17世紀初期で捉えることが可能と考える。

95は、輸入磁器、明の染付けの皿か椀の高台部である。復元高台径4.6cm、残存高は1.5cm。見込みには牡丹と見られる花と葉、底部には「富貴長春」の文字が確認される。景徳鎮窯系で1580年～1600年に製造された染付けと考えられる。

96は、輸入磁器、明の染付け皿の口縁部から体部上半部の資料である。復元口径11.6cm、残存高は2.7cm。外面には唐草、口縁内面には四方襷と見られる文様が確認される。小野正敏氏の染付けの編年模式図によれば皿Ｂ2群に属すると考えられ、16世紀後半で捉えることが可能と考える。

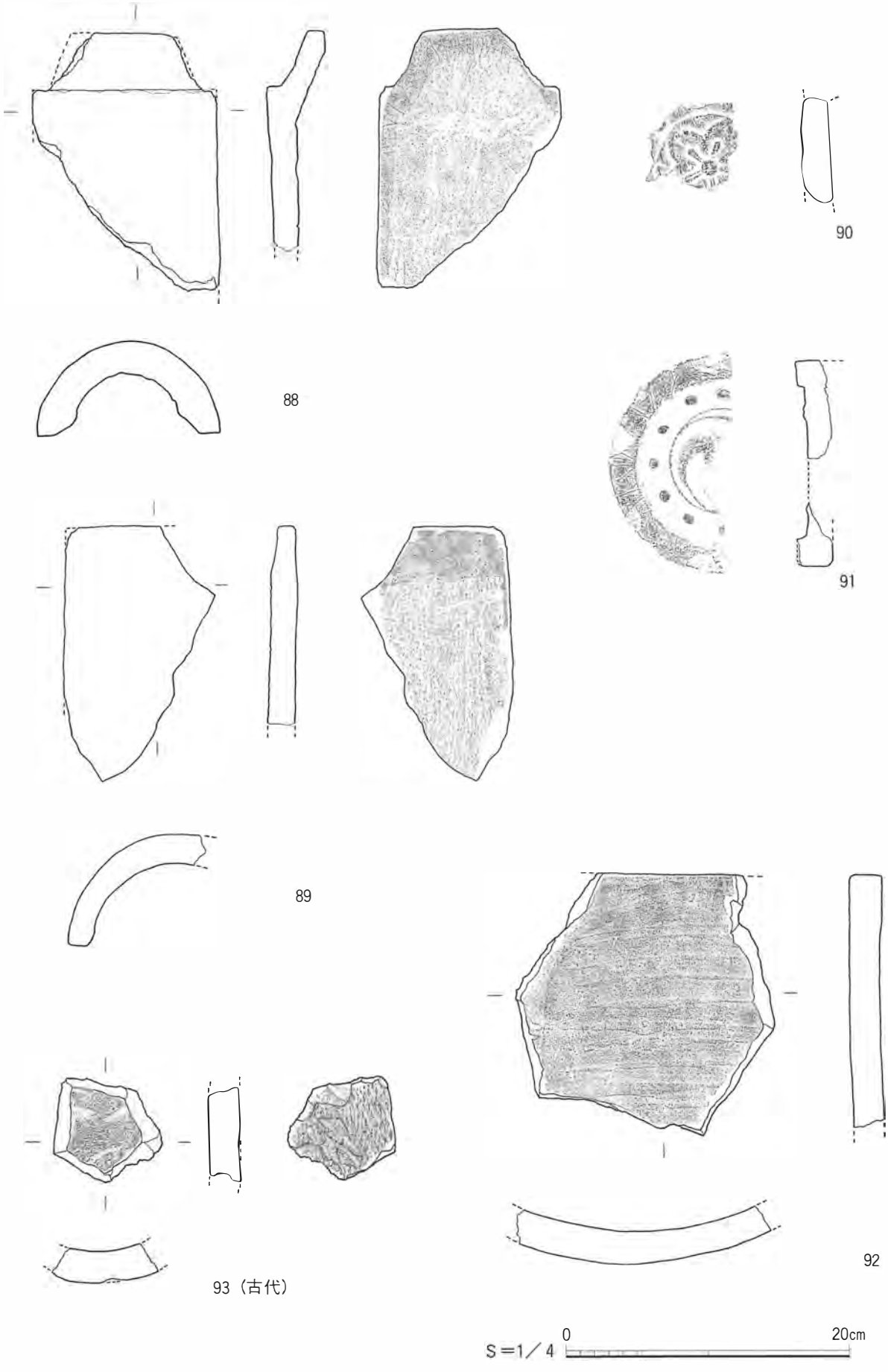
97は、輸入陶器の皿か椀の高台部である。高台径4.3cm、残存高は1.1cm。見込みには胎土目の跡が4箇所あり、高台内には「一」という数字が確認される。高台の畳付けが4箇所にわたり削られていることに特徴が見出される。15世紀代で捉えることが可能と考える。

98は、輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅱ―ｂ類の口縁部から体部上半部の資料である。復元口径は14.8cm、残存高は5.4cm。内外面には釉がかかり、外面にはヘラの片彫りによる鎬蓮弁文が確認される。山本氏の太宰府土器形式と国産陶器・貿易陶器編年による時期区分ではD期（12世紀中頃～後半）にあたる。

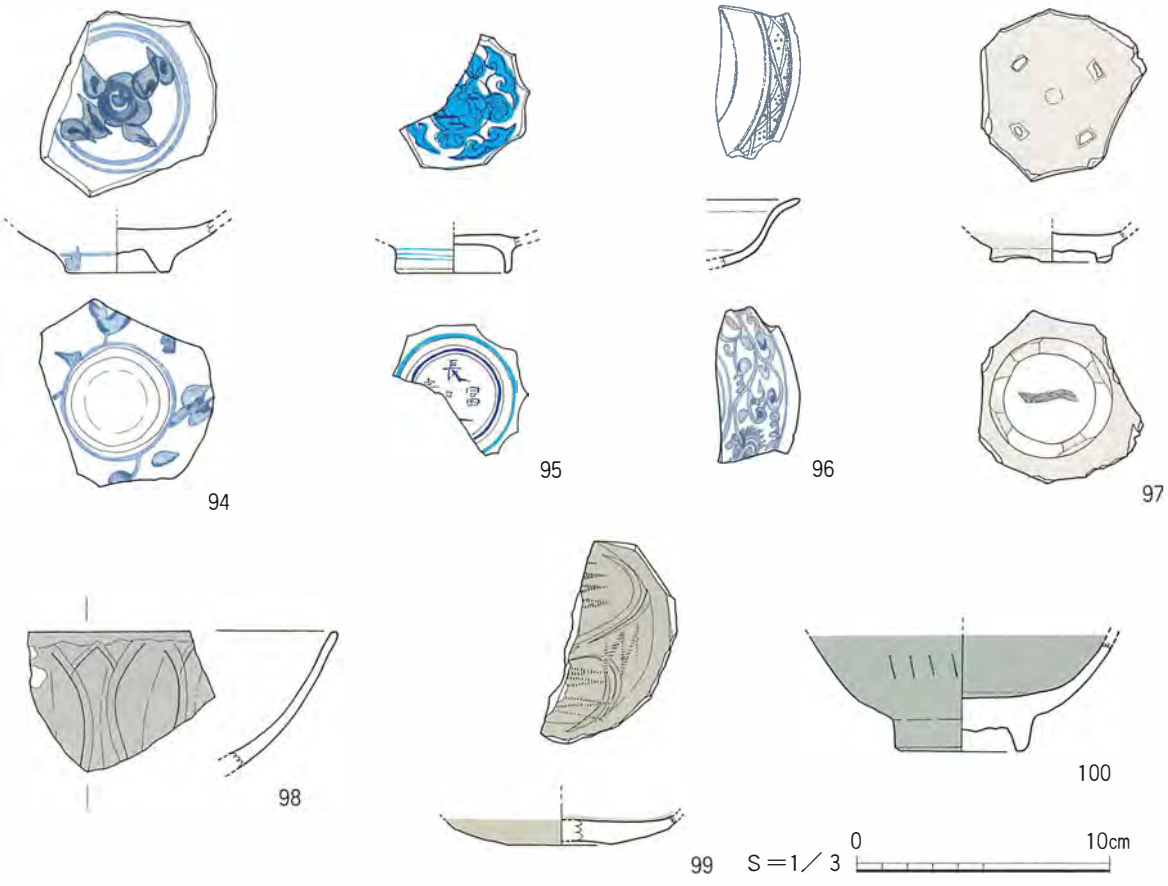
99は、輸入磁器で同安窯系青磁皿Ⅰ―1ｂ類の底部の資料である。復元底径は4.0cm、残存高は1.1cm。内外面には釉がかかるが、底部のみ釉を削りとっている。また内面は、ヘラによる文様とジグザグ状の櫛点描文片が確認される。山本氏の太宰府土器形式と国産陶器・貿易陶器編年による時期区分ではD期（12世紀中頃～後半）にあたる。

100は、輸入磁器で龍泉窯系青磁椀C類の高台部から体部下半部の資料である。高台径は4.7cm、残存高は4.3cm。内外面には釉がかかり、外面にはわずかな線蓮弁文が確認される。小野正敏氏の染付けの編年模式図によれば15世紀中頃～16世紀前半で捉えることが可能である。

101は、中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。二重の突帯が確認され、Ｘ字状のスタンプが施されている。残存高は9.6cmである。



図(Fig)35　S006出土遺物実測図（古代・近世の瓦）



図（Fig）36　S006出土遺物実測図（輸入陶磁器）

102は、中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。二重の突帯が確認されるが、ほとんどが剥落している。巴状と格子状のスタンプが施されている。残存高は6.7cmである。

103は、中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。一重の突帯が確認されるが、ほとんどが剥落している。同心六角形状と格子状のスタンプが施されている。残存高は4.5cmである。

104は、中世の瓦質土器で擂鉢の口縁部である。内面に４～７本のクシ目が確認される。残存高は8.8cmである。

105は、中世の瓦質土器で火鉢の口縁部である。二重の突帯が確認される。菊花状のスタンプが施されており、波状のクシ描きが残る。火鉢の中では一番残りがよく、復元口径が34.6cm、残存高は15.9cmである。

106は、中世の瓦質土器で擂鉢の底部である。内面に５本のクシ目が確認される。残存高は6.4cmである。

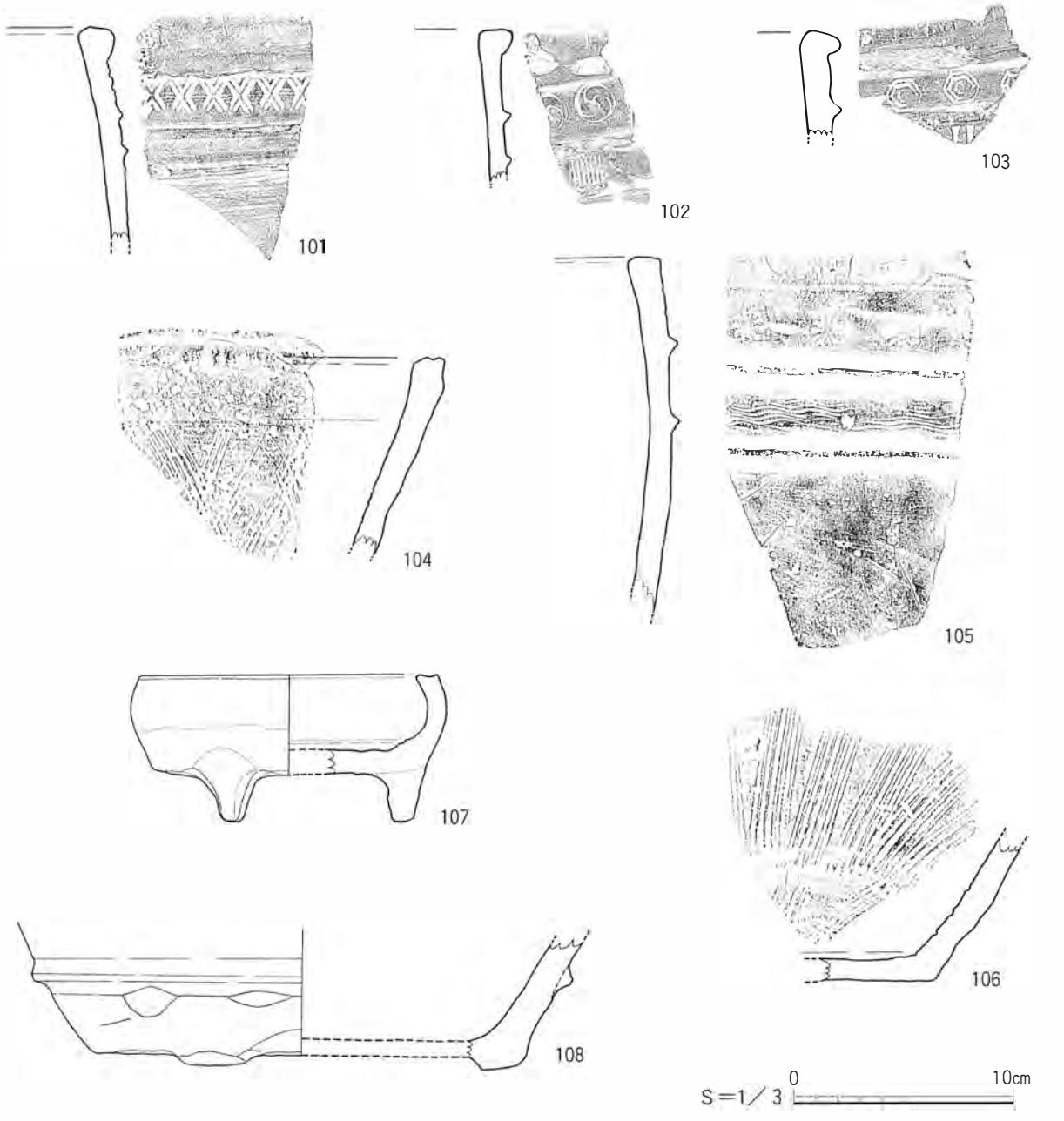
107は、中世の瓦質土器で小型火鉢だと考えられる。瓦質土器というよりやや須恵器に近い。線香立ての様な用途が考えられる。全体の約1/4が残存している。三脚であった可能性が高い。復元口径が13.3cm、復元最大胴径は14.2cm、残存高は6.5 cm、脚高は2.2cmである。

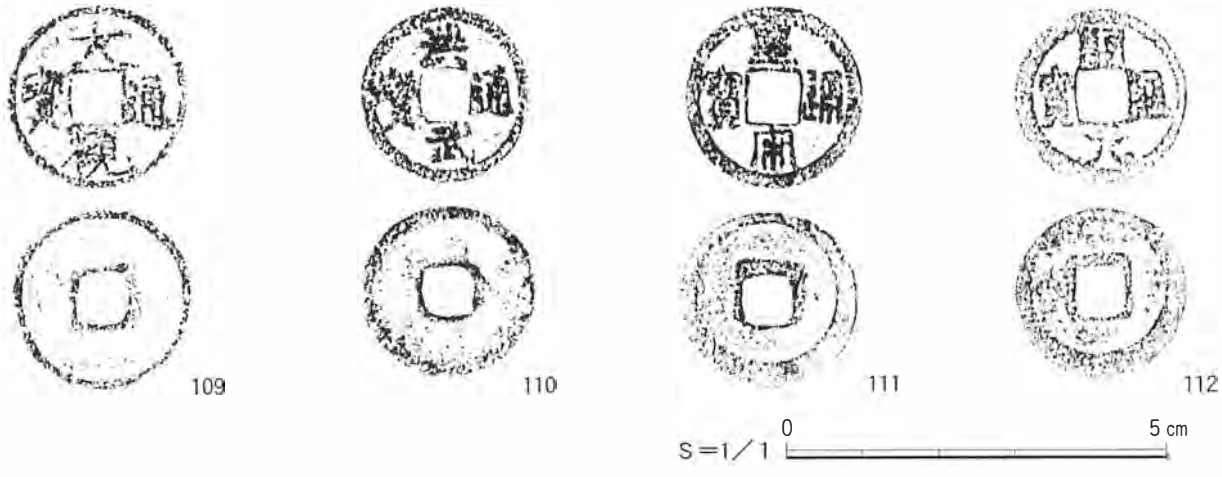
108は、中世の瓦質土器で火鉢の底部である。一重の突帯が確認される。火鉢の底部の中では一番残りがよく、復元底径が19.2cm、残存高は5.7cmである。三脚は使い込まれて擦れている。

109は、中国の北宋銭である。「大観通寶」という銘がレリーフ状に刻まれている。初鋳は西暦1107年である。

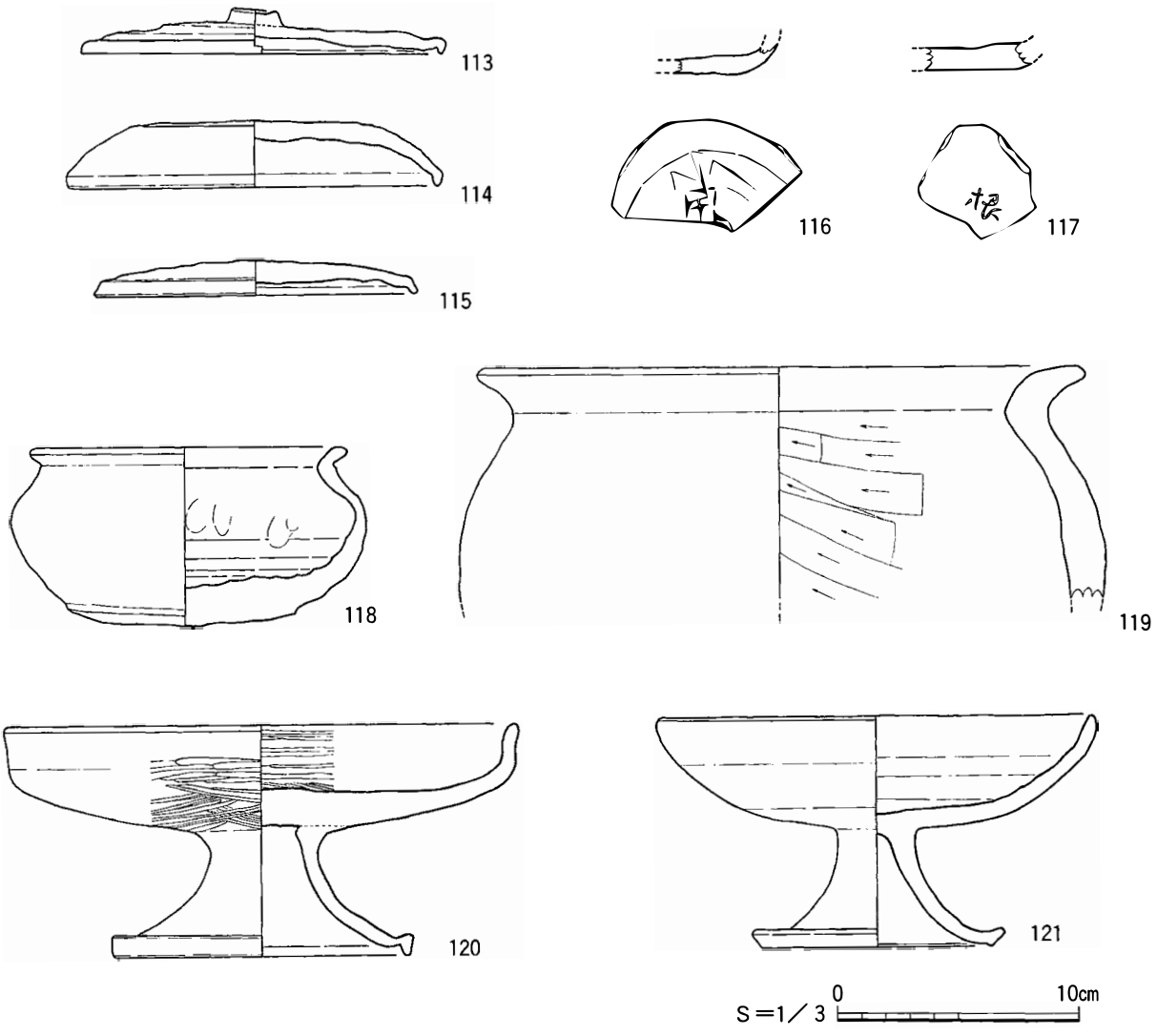
110は、中国の明銭である。「洪武通寶」という銘がレリーフ状に刻まれている。初鋳は西暦1368年である。ビタ銭の可能性も考えられる。

111は、中国の北宋銭である。「皇宋通寶」という

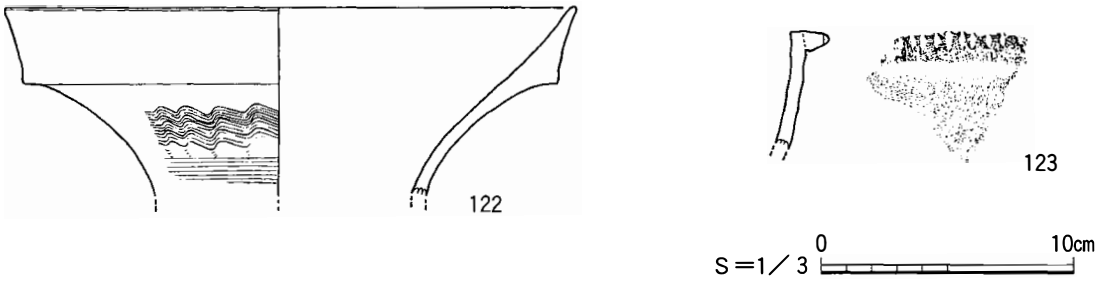




図(Fig)37　S006出土遺物実測図（中世・近世）



図(Fig)38　S006出土遺物実測図（古代）



図(Fig)39　S006出土遺物実測図（弥生）

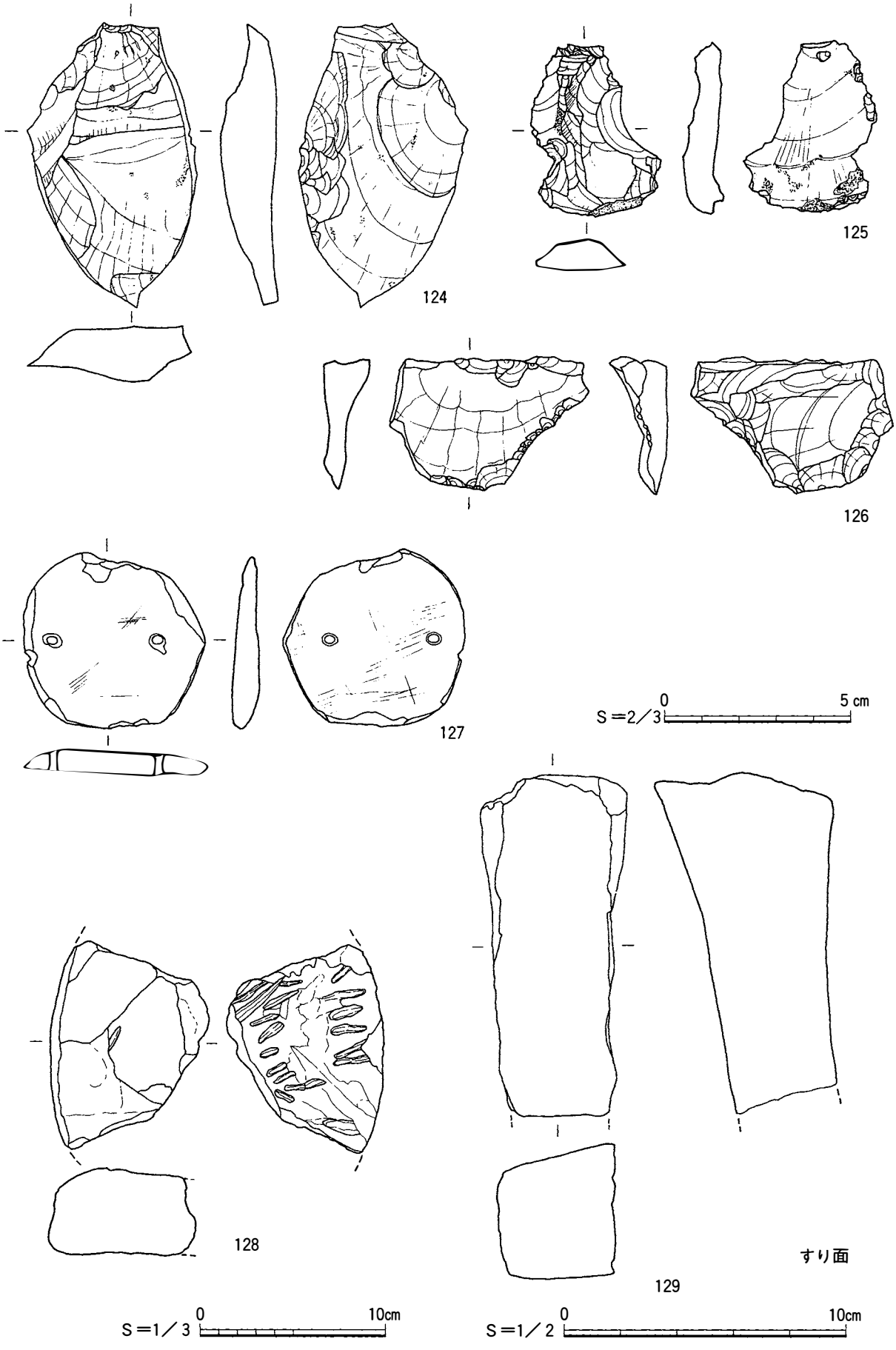
銘がレリーフ状に刻まれている。初鋳は西暦1039年である。やや歪があり、ビタ銭の可能性も考えられる。

112は、中国の唐銭である。「開元通寶」という銘がレリーフ状に刻まれている。初鋳は西暦621年である。やや小さくて歪みがあることから、ビタ銭の可能性も考えられる。

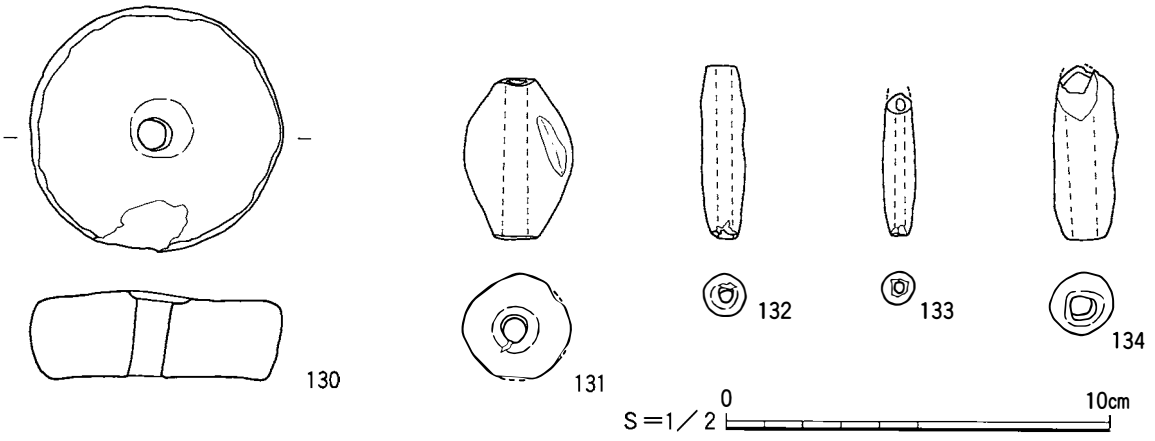
113は、古代の須恵器でつまみのある杯の蓋である。全体の約1/2が残存している。復元口径が14.7cm、つまみ径は1.9cm、器高は1.8cmである。８世紀後半期の所産と考えられる。

114は、古代の須恵器でつまみのない杯の蓋である。全体の約1/3が残存している。焼きが良く良質である。復元口径が15.0cm、器高は2.7cmである。８世紀後半期の所産と考えられる。

115は、古代の須恵器でつまみのない杯の蓋である。全体の約2/3が残存している。復元口径が13.1cm、器高は1.4cmである。８世紀後半期の所産と考



図(Fig)40　S006出土遺物実測図（石器）



図(Fig)41　S006出土遺物実測図（土製品）

えられる。

116は、土師器で杯の底部と考えられる。底部に「用」と判読可能なヘラ書きが確認できる。残存高は1.3cmである。古代の所産と考えられる。

117は、土師器で杯の底部と考えられる。底部に「根」と判読可能なヘラ書きが確認できる。残存高は1.2cmである。古代の所産と考えられる。

118は、土師器で小型の鉢である。全体の約2/3が残存している。復元口径が12.4cm、復元底径が9.3cm、残存高は7.3cmである。古代の所産と考えられる。

119は、古代の土師器で甕の口縁部から体部上半部である。復元口径が24.2cm、残存高は9.5cmである。内面にケズリが残る。

120は、古代の土師器で高杯である。全体の約2/3が残存しており、杯部の内外面には丁寧なミガキ痕が残る。復元口径が20.8cm、脚部径が12.0cm、器高は9.4cmである。８世紀後半期の所産と考えられる。

121は、古代の土師器で高杯である。全体の約2/3が残存している。復元口径が18.0cm、脚部径が13.0cm、器高は9.4cmである。８世紀後半期の所産と考えられる。

122は、弥生時代後期の二重口縁壺の口縁部である。外面にはハケ目と櫛描波状文が残る。復元口径が23.2cm、残存高は7.4cmである。

123は、弥生時代中期前半期の二重口縁壺の口縁部である。城ノ越式土器の範疇で捉えられると考えられる。口縁部には刻み目突帯が一条巡る。残存高は4.6cmである。

124は、二次加工剥片である。石材はサヌカイト質安山岩で、西北九州産と考えられる。

125は、やや寸詰まりの縦長剥片である。打面と先端部に礫面が残る。石材は腰岳産黒曜石と考えられる。

126は、火打ち石の可能性が高い二次加工石器である。石材は白色と灰緑色が混ざるチャートである。二次加工の他に使用痕とおぼしき小さな剥離が多く観察される。近世の可能性が高いと考えられる。

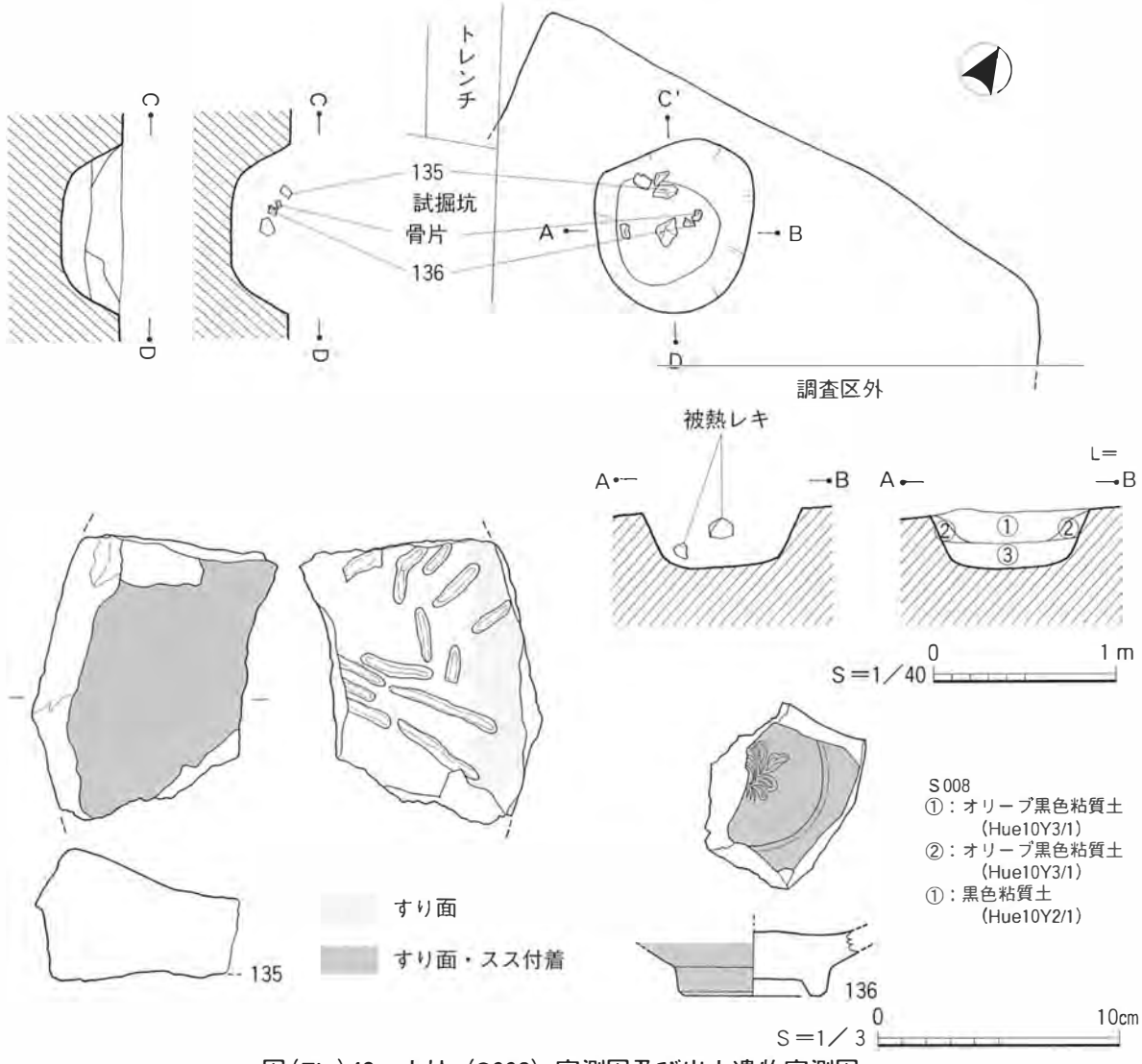
127は、古代の石製模造鏡と考えられる。二箇所に径２㎜の穿孔がある。石材は緑泥変岩と考えられる。長さ4.2cm、幅4.3cm、厚さ0.7cm、重さ16.9ｇである。

128は、石臼を転用した砥石の破片である。上面に磨り面、下面に石臼の溝が確認できる。石材は砂岩である。時期は不明である。

129は、砥石である。磨り面は３面有り、被熱による黒色化と赤色化が確認される。石材は、流紋岩で天草砥石と考えられる。時期は不明である。

130は、土製の紡錘車である。穿孔径は0.9cmで、一面には径1.6cm深さ0.15cmの段がある。長さ6.5～6.7cm、厚さ2.3ｃｍである。時期は不明である。

131～134は、土錘である。幅はそれぞれ、2.9cm、1.1cm、0.9cm、1.7cmであり、穿孔径はそれぞれ、0.7cm、0.4cm、0.3cm、0.7cmである。時期は不明である。



図（Fig）42　土坑（S008）実測図及び出土遺物実測図

③時期不明

・土坑（５基）

【Ｓ００８】（図42参照）

［確認位置］ Ｂ－40・41グリッド。

標高約2.25m。

［形状］ やや楕円形

［大きさ］ 長軸：90cm、短軸：84cm、深さ：30cm。

［覆土］ ３層の分層。

１層：オリーブ黒色粘質土（Hue10Y3/1）

２層：オリーブ黒色粘質土（Hue10Y3/1）

３層：黒色粘質土（Hue10Y2/1）

［切り合い関係］ S017を切る。

［遺構の性格］

時期不明の土器片、青磁、石臼を転用した砥石、獣骨、被熱礫などが出土。円形に近い掘り込みであることから井戸の可能性も考えられるが詳細は不明である。時期についても、一番新しい青磁片から中世以降（14世紀初頭～後半）と考えられるが、詳細は不明である。

［遺物の出土状況］

床面からやや浮いた状態で出土。遺構廃絶後、しばらく時間が経過した段階での遺物と考えられる。

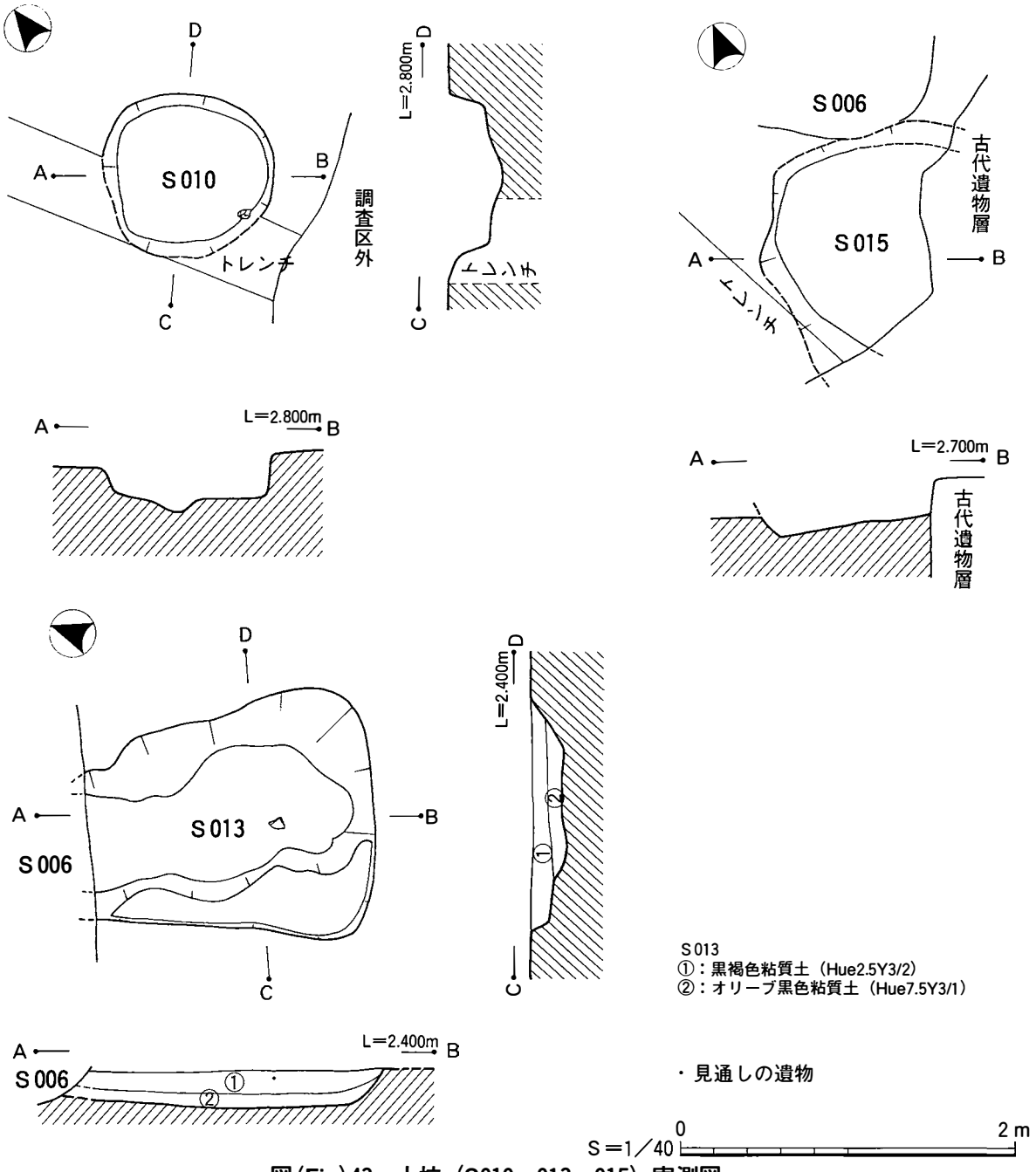
［出土遺物量］

S008から出土した遺物は、土器の小片（時代不明）14点、古代の須恵器１点、青磁片１点、砥石１点、被熱した礫４点、獣骨（足骨か？種類は不明）１点であった。

［出土遺物の観察］

ここでは、青磁と砥石を紹介する。

135は、石臼を転用した砥石である。砂岩製で石臼の溝が確認できる。被熱しており部分的にススが付着している。



図(Fig)43　土坑（S010・013・015）実測図

136は、輸入磁器で龍泉窯系青磁椀Ⅳイ類の高台部の資料である。底径は5.6cm、残存高は2.7cm。高台内を除き内外面には釉がかかり、見込みには花文のスタンプとみられる文様が確認される。山本氏の太宰府土器形式と国産陶器・貿易陶器編年による時期区分ではG期（14世紀初頭～後半）にあたる。

【Ｓ０１０】（図43参照）

［確認位置］Ａ－42・43グリッド。

標高約2.65m。

［形状］円形

［大きさ］長軸：105cm、短軸：95cm、深さ：30～40cm。

［覆土］１層：（暗褐色粘質土）

［切り合い関係］なし。

［遺構の性格］

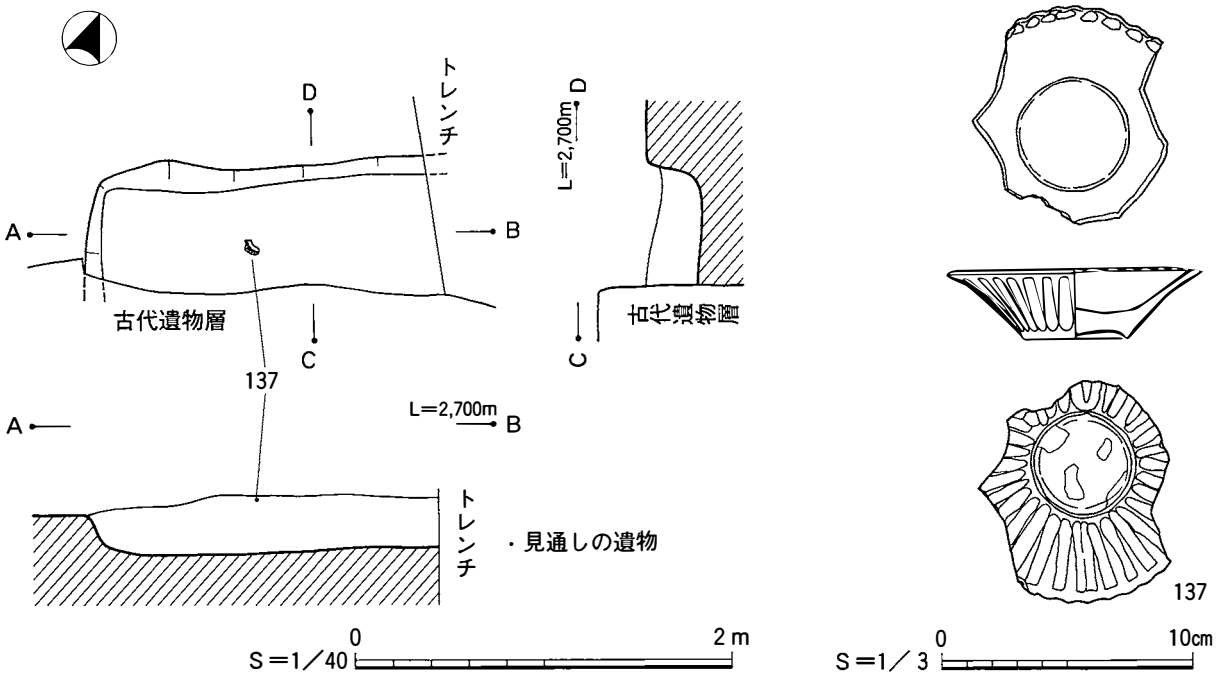
ほぼ円形であることから井戸の可能性も考えられるが、時期も性格について詳細は不明である。

［遺物の出土状況］

床面からやや浮いた状態で出土。

［出土遺物量］

S010から出土した遺物は、弥生土器片５点、古代の土師器10点の計15点であった。



図(Fig)44　土坑（S014）実測図及び出土遺物実測図

［出土遺物の観察］

いずれも小片であることから紹介はしない。

【Ｓ０１３】（図43参照）

［確認位置］Ｂ－41グリッド。

標高約2.3m。

［形状］不定形

［大きさ］長軸：173㎝～、短軸：110～150㎝、深さ：20㎝。

［覆土］２層に分層。

１層：黒褐色粘質土（Hue2.5Y3/2）色調が明るい。きめが細かくパサパサしている。

２層：オリーブ黒色粘質土（Hue7.5Y3/1）色調は暗い。きめが細かく、粘性が強い。

［切り合い関係］S007を切り、S006に切られる。

［遺構の性格］

詳細は不明である。

［遺物の出土状況］

床面からやや浮いた状態で出土。

［出土遺物量］

板状の石片が１点のみであった。

［出土遺物の観察］

紹介遺物はない。

【Ｓ０１５】（図43参照）

［確認位置］Ｚ－44グリッド。

標高約2.4m。

［形状］楕円形

［大きさ］長軸：120㎝～、短軸：100㎝～、深さ：5～13㎝。

［覆土］１層。

［切り合い関係］S014を切り、S006に切られる。

［遺構の性格］

床面が平らではなく、傾斜している。詳細は不明である。

［遺物の出土状況］

床面からやや浮いた状態で出土。

［出土遺物量］

弥生土器片が14点と７世紀初頭と考えられる杯身の須恵器１点の計15点の遺物が出土。

［出土遺物の観察］

紹介遺物はない。

【Ｓ０１４】（図44参照）

［確認位置］Ｚ－44グリッド。

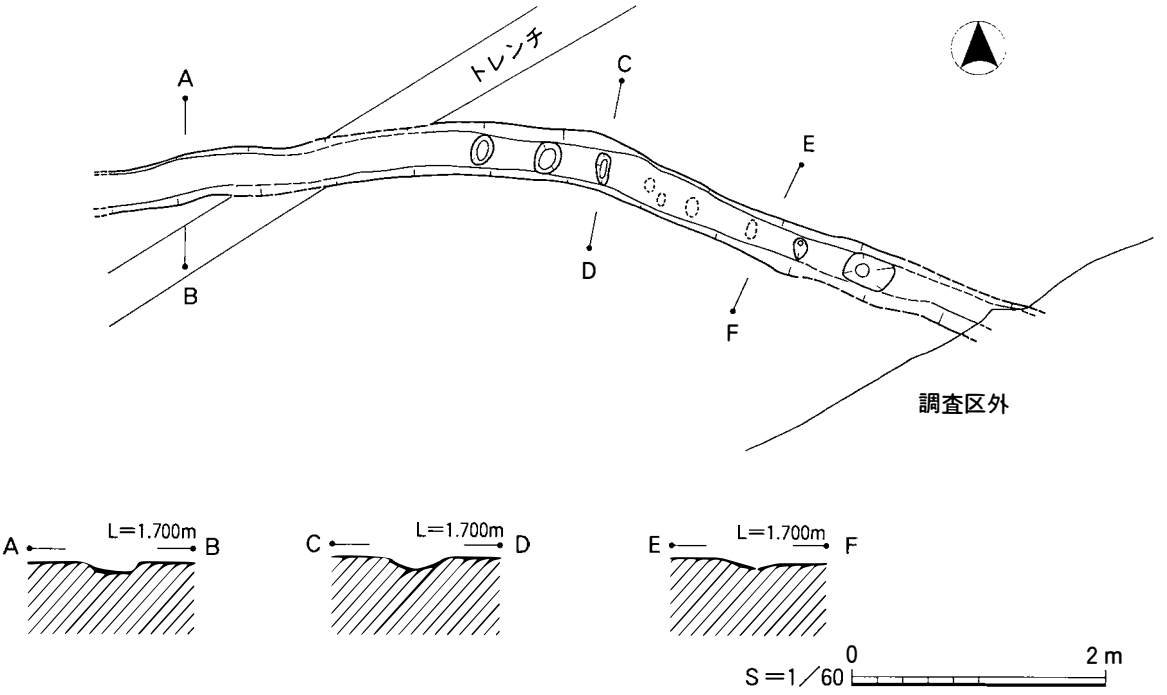
標高約2.25m。

［形状］方形？

［大きさ］長軸：185㎝～、短軸：70㎝～、深さ：25～30㎝。

［覆土］１層：（暗褐色粘質土）

［切り合い関係］S015から切られる。



図(Fig)45　溝（S018）実測図

［遺構の性格］

弥生から近世の遺物が混在しており、近世磁器片が含まれているため、近世以降の可能性が高いが、S006（溝）に近接するため混入も考えられ、断定はできない。また、遺構は方形の様相を示すが、一部であり、全体形状、及び性格は不明である。

［遺物の出土状況］

床面から浮いた状態で出土。遺構廃絶後、時間がかなり経過した段階での遺物と考えられる。

［出土遺物量］

S014から出土した遺物は、弥生土器片12点、古代の須恵器３点、中世の擂鉢片１点、輸入磁器１点、近世の陶磁器片３点の計20点であった。

［出土遺物の観察］

ここでは、１点の輸入磁器を紹介する。

137は、輸入白磁の皿である。復元口径10.1cm、高台径4.1cm、器高は2.7cm。輪花で花弁状の成形を施している。粗製であることから福建省?州窯系の染付けである可能性が高い。16世紀末～1630年で捉えることが可能と考える。

・溝（１条）

【Ｓ０１８】（図45参照）

［確認位置］Ｃ－37～40グリッド。

標高約1.6m。

［大きさ］長さ：680cm～、幅：38～42cm、深さ：３～９cm。

［覆土］１層のみ。

［切り合い関係］なし。

［遺構の性格など］

出土遺物も無く時期は不明。所々に溝を掘削した際についた掘削痕と考えられる窪みが残る。高低差はあまりないが、東側から西側へ流れていたと考えられる。

［出土遺物量］なし。

・不明遺構

【Ｓ０１７】（図46参照）

［確認位置］Ｂ－40・41グリッド。

標高約2.35m。

［大きさ］長軸：325cm～、短軸：185cm～、深さ：10～20cm。

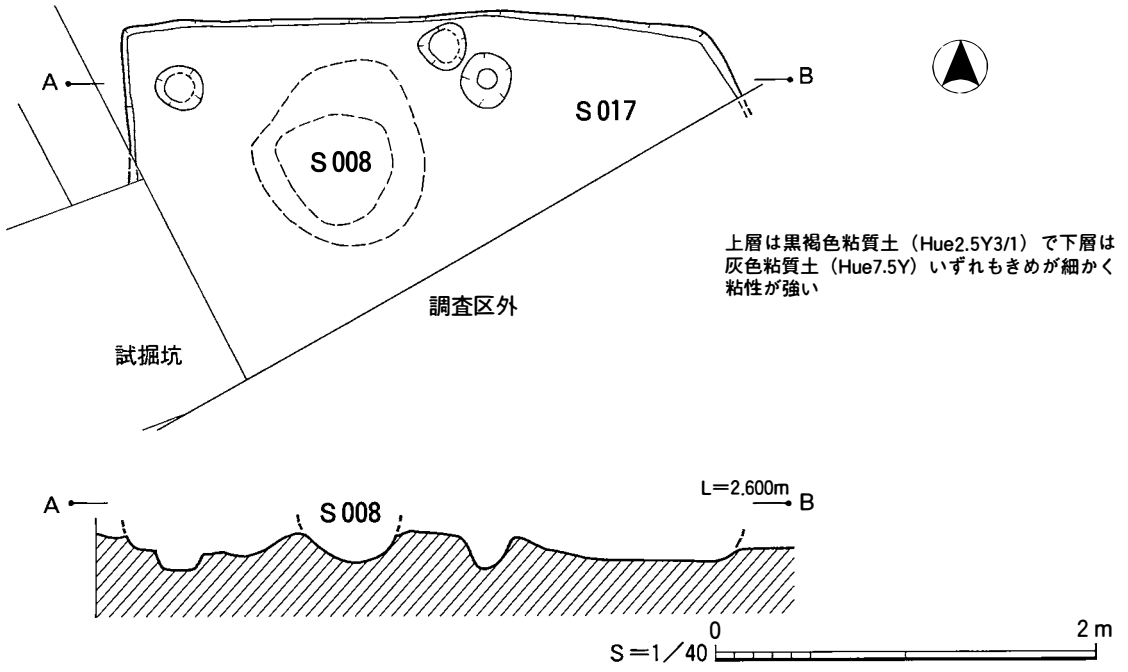
［覆土］２層に分層。

上層は黒褐色粘質土、下層は灰色粘質土でいずれもきめが細かく粘性が強い。

［切り合い関係］S008に切られる。

［遺構の性格など］

プランは住居跡に酷似するがやや歪であり、凹凸が激しい。出土遺物から、時期は古代以前と考えられるが、詳細は不明である。



図(Fig)46　不明遺構（S017）実測図

［遺物の出土状況］

床面からやや浮いた状態で出土。

［出土遺物量］

S017から出土した遺物は、弥生土器片20点、古代の土師器５点の計25点であった。

［出土遺物の観察］

紹介する遺物はない。

４）調査区外

①近世以降

ここでは調査３区外にあった井戸と小便甕（便所）について述べたい。

元々調査３区及び区外にかけて家が建っており、林田鶴秋（はやしだつるあき）氏（昭和５年３月５日生まれ）らが住んでおられた。

林田氏は、井戸及び小便甕はご覧になられたことはなかったそうだが、林田さんのお父さん（寿七（じゅしち）氏：明治23年生まれ）からその存在は聞かれていたそうだ。12才上のお兄さん（秋盛（あきもり）氏：大正７年生まれ）も同様だったことから、井戸及び小便甕は大正時代以前には埋没していたと考えられる。

林田氏のお話では、祖父（次郎八（じろうはち）氏：安政３年【1856年】頃生まれ：昭和20年【1945年】に89才で逝去）の時代に造ったものではないだろうかということであった。５～６代前は庄屋だったことが過去帳からも窺えるとのことで、井戸枠の石材が阿蘇ピンク石（馬門石）であることも頷ける。

【１】井戸

［確認位置］Ｃ－41グリッド。(図17参照)

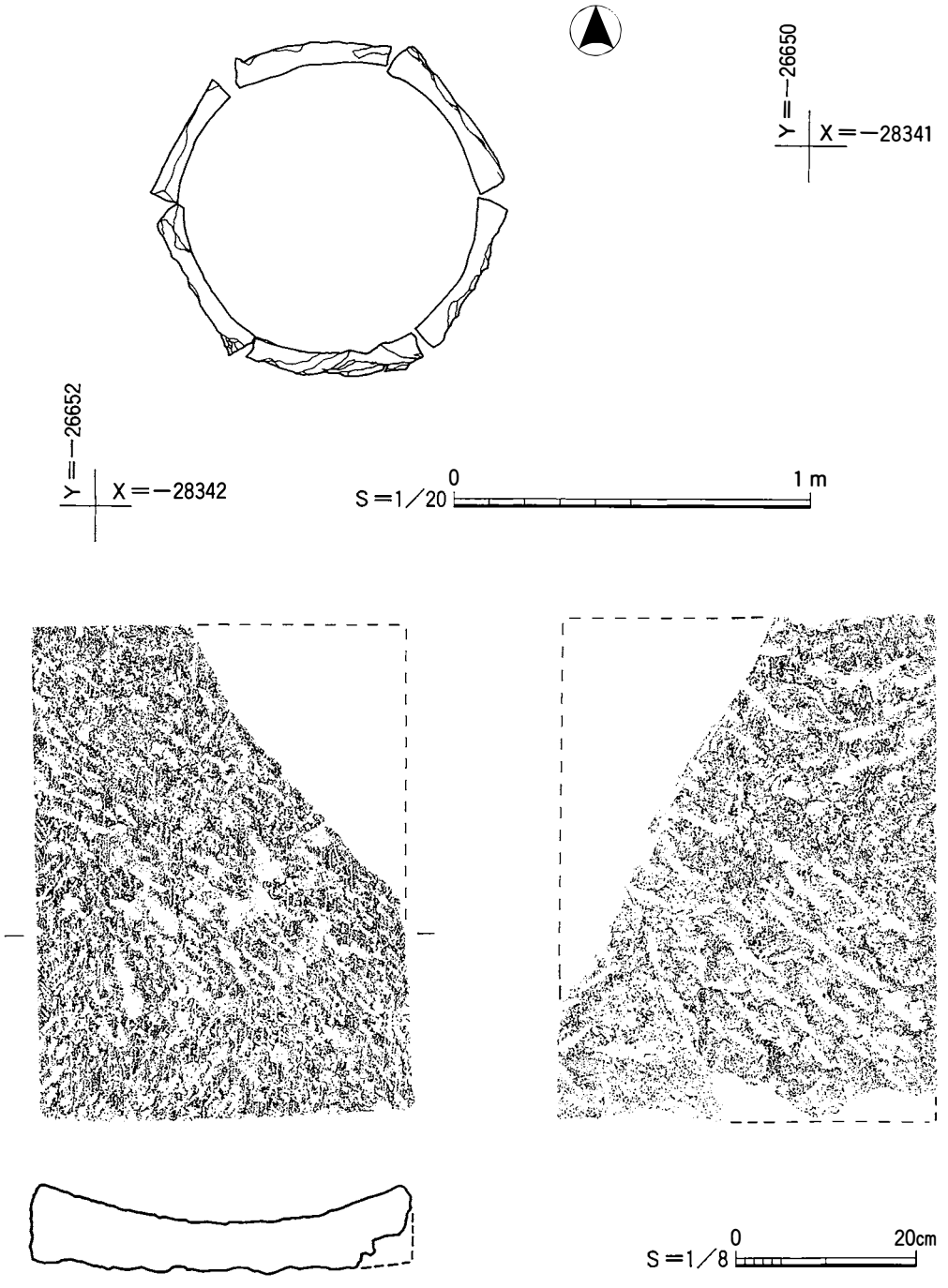
標高約5.2m。

［構造等］（写真89・90参照）

１枚の井戸枠は内面が曲面、外面が直面に加工した阿蘇溶結凝灰岩（馬門石）である。大きさは縦54㎝、横44㎝、幅５～８㎝で、６枚合わせて、内面が円形になるように加工されており、６段目まで確認できる。下段は井戸枠を半分ずつずらして、安定配置されている。

井戸枠６枚の内面の直径は、約80㎝であり、深さは確認面から約270㎝、６段目の上部まで確認できる。一部の石材が落ち込んでおり、上段は更に１段以上、底部も１段以上深かったと考えられるが、詳細は不明である。但し６段目の構造は、内面が円形ではなく、６角形になっており、最下段の可能性も考えられる。

林田氏の聞き取り調査から、元々林田家は、南側にあったが、加藤清正の河川改修において北側に家を移動したという。おそらく北側に最近まであった用水路のことを指すと思われるが、加藤清正が河川改修を行ったとすれば、それが推定される17世紀初



図(Fig)47　井戸（調査区外）平面及び石材断面実測図

頭まで遡るかどうかは不明である。

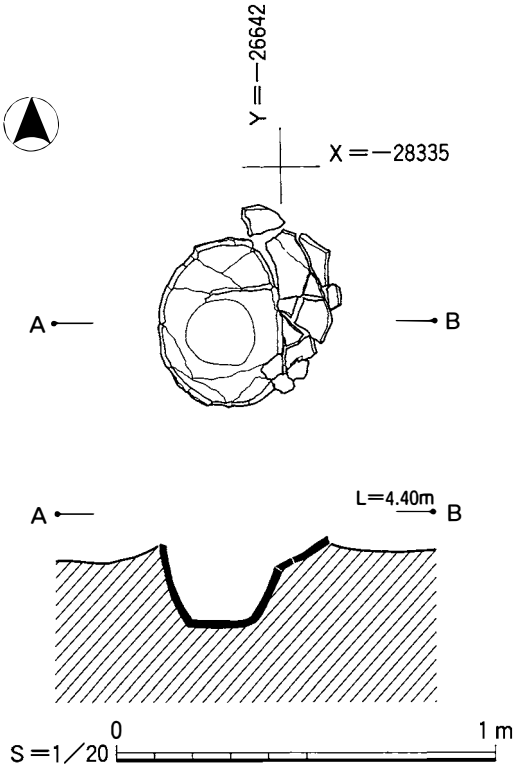
しかし、S009を埋めた後に家が建てられていることは事実である。S009から出土した一番新しい陶磁器は19世紀の前半と考えられることから、それ以降に家が建てられていることがいえる。しかし、この井戸が家創建期のものなのか、それ以前のものなのかは不明である。

なお、この井戸は国土交通省熊本河川国道事務所のご協力により、現地に現状保存されている。

[井戸枠の観察]

ここに示した井戸枠は、井戸の底に落ちていたものである。

縦54cm、横44cm、幅５～８cmで、内面は曲面、外面は直面に加工した阿蘇溶結凝灰岩である。色調がピンク色で阿蘇ピンク石（馬門石）といわれる石材である。内外面には工具による加工痕跡が見られる。



図(Fig)48　小便甕実測図

なお、石材の鑑定には馬場正弘氏のご協力を得た。

【２】小便甕

［確認位置］Ｂ－43グリッド。(図17参照)

標高約4.3m。

［構造等］(写真91参照)

瓦質の甕を埋め込んだ状態の小便用の甕である。

大きさは、底部径が約18cm、残存高が22cmであった。上部は破壊されているが、元々完形の甕が埋め込まれていたと考えられる。小便甕であった証拠に甕の内部に結晶状の固形物が付着している。おそらく、ここに便所があったと考えられるが、大便用の便槽が確認できないことから、大便用の便槽が既に破壊されているか、小便のみの便所であった可能性が考えられる。井戸が使用されていた時期と重なるものと推定される。

第３節　遺　物

１）調査２区（２区－１）

調査２区－１から出土した出土した遺物は、中グレーコンテナ（38cm×58cm×14cm）に約６箱分で、総重量46.373gであった。内訳は弥生土器から近世の陶磁器まで様々であったが、古代の土師器と須恵器が主体であったため、古代の遺物を31点、それ以外を４点報告する。

①古代

［出土遺物の観察］

138は、古代の土師器で甕の口縁部である。復元口径は17.8cm。①層からの出土で、２点が接合している。時期は８世紀後半と考えられる。

139は、古代の土師器で甕の口縁部である。②層からの出土で、内面にはケズリの痕跡が残る。時期は８世紀後半と考えられる。

140は、古代の土師器で甕の口縁部である。復元口径は25.0cm。②層出土の点上げ遺物で、３点が接合している。内外面にはハケ目が残る。時期は８世紀後半と考えられる。

141は、古代の土師器で甕の口縁部である。①層と撹乱層から出土した２点が接合している。内面にはわずかにケズリの痕跡が残る。時期は８世紀後半と考えられる。

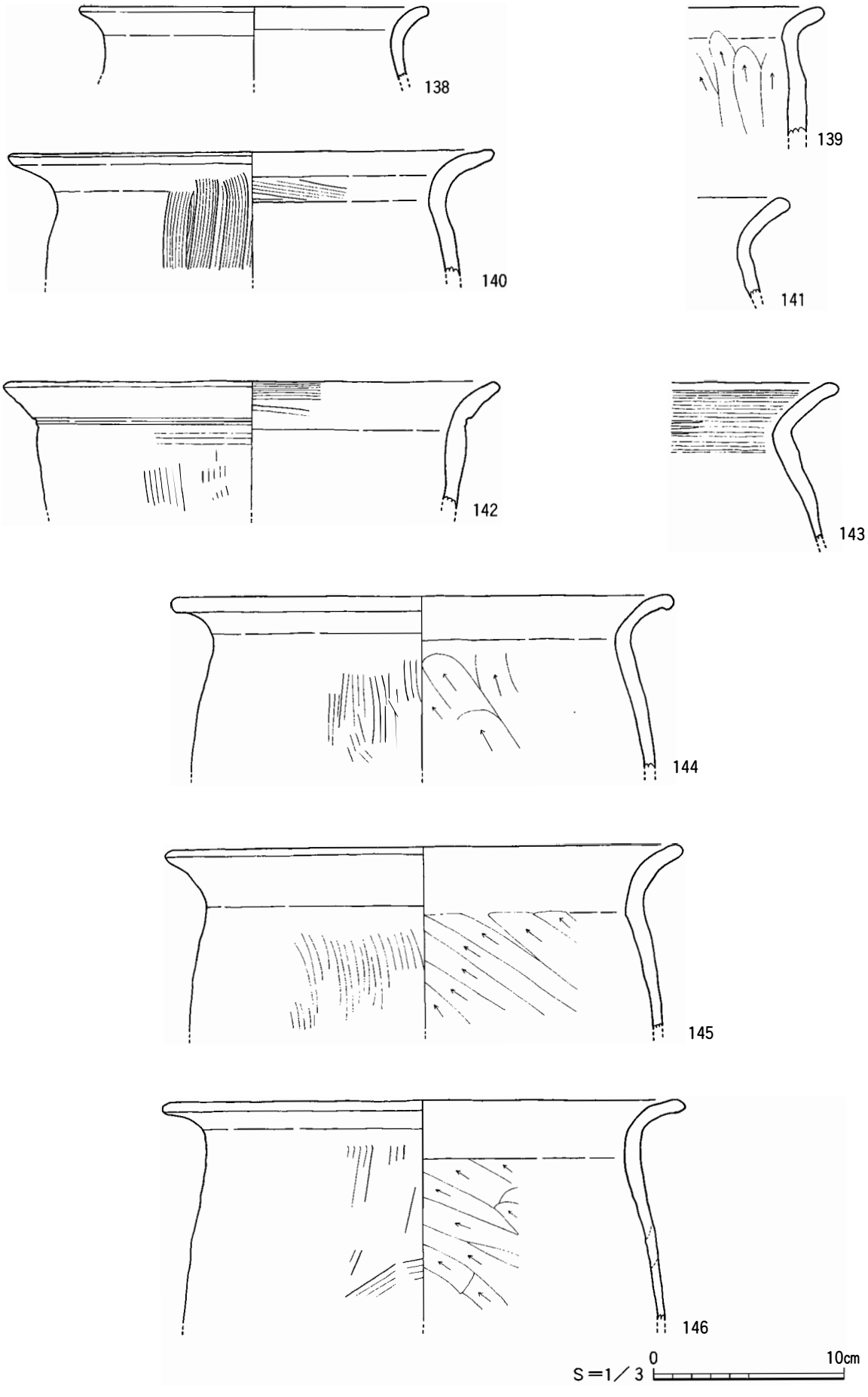
142は、古代の土師器で甑の口縁部と考えられる。①層から出土した３点が接合している。復元口径は25.0cm。内外面にはハケ目が残る。頚部に工具による凹線状のへこみが１条めぐる。時期は８世紀後半と考えられる。

143は、古代の土師器で甕の口縁部である。③層からの出土で、内外面にはハケ目が残る。他の甕の口縁部と比較してやや直線に近い立ち上がりをみせる。時期は８世紀後半と考えられる。

144は、古代の土師器で甕の口縁部と胴部上半部である。①層から出土した６点が接合している。復元口径は25.4cm。口縁端部がナデによる影響のためか、ふくらみが見られる。外面にはハケ目、内面にはケズリの痕跡が残る。時期は８世紀後半と考えられる。

145は、古代の土師器で甕の口縁部と胴部上半部である。①、②層から出土した７点が接合している。復元口径は26.0cm。外面にはハケ目、内面にはケズリの痕跡が残る。時期は８世紀後半と考えられる。

146は、古代の土師器で甕の口縁部と胴部上半部である。②層出土の点上げ遺物２点が接合している。復元口径は26.2cm。口縁部は、曲線的に大きく外反している。外面にはハケ目、内面にはケズリの痕跡が残る。時期は８世紀後半と考えられる。



図(Fig)49　2区－1　出土遺物実測図（1）

147は、古代の須恵器で杯の蓋である。①層や撹乱層の遺物7点が接合している。復元口径は15.4cm。器高は1.4cm。つまみ部は輪状、体部はほぼ水平であり、時期は8世紀後半期と考えられる。

148は、古代の須恵器で杯の蓋である。①、②層出土の遺物7点が接合している。復元口径は19.6cm。つまみ部はおそらくないと考えられるが詳細は不明である。体部は緩やかに立ち上がる。時期は8世紀後半期と考えられる。

149は、古代の須恵器で杯の蓋である。②層出土の点上げ遺物2点と②層出土1点の計3点が接合し、ほぼ完形になっている。口径は13.0cm、つまみ径は3.3cm、器高は2.5cmである。時期は8世紀後半期と考えられる。

150は、古代の須恵器で杯の蓋である。①層出土の遺物2点が接合している。復元口径は14.0cm。つまみ部はおそらくないと考えられる。焼きはやや不良である。体部は緩やかに立ち上がる。時期は8世紀後半期と考えられる。

151は、古代の須恵器で杯の蓋である。②層出土の点上げ遺物で、ほぼ半分残存している。復元口径は15.2cm、器高は2.1cm。つまみ部はない。時期は8世紀後半期と考えられる。

152は、古代の須恵器で高台付きの杯である。①層出土の遺物2点が接合し、約1/4が残存している。復元口径は17.0cm、復元底径は6.5cm、器高は5.7cmである。器面が赤く焼けており、荒尾産須恵器の可能性が高い。時期は8世紀後半期と考えられる。

153は、古代の須恵器で高台付きの椀である。①層出土の遺物2点が接合している。復元口径は14.8cm、復元底径は6.2cm、器高は6.0cmである。焼きはやや不良である。時期は8世紀後半～9世紀前半期と考えられる。

154は、古代の須恵器で杯である。①、②層出土の遺物3点が接合している。復元口径は12.0cm、底径は6.2cm、器高は3.8cmである。焼きは不良である。時期は8世紀後半～9世紀前半と考えられる。

155は、古代の須恵器で高台付きの椀である。②層出土の点上げ遺物である。復元口径は11.2cm、底径は6.4cm、器高は3.5cmであるが、高台端部は全面に磨り痕が残るため、器高はあと数ミリ高かったと考えられる。意図的な磨り痕と考えられ、時期は8世紀後半であろう。

156は、古代の須恵器で高台付きの杯である。①”層出土であり、約1/3が残存している。復元口径は13.2cm、復元高台径は9.0cm、器高は4.7cmである。器面が赤く、須恵器にしては、焼成はやや不良である。高台端部外面を「く」字形に仕上げられた「萩尾型椀」といえよう。時期は8世紀前半期と考えられる。

157は、古代の須恵器で二重口縁壺の口縁部から頸部にかけての資料である。①層出土の遺物2点が接合している。口縁の外面には、2条の櫛描き波状文が見られる。復元口径は27.2cm、残存高は5.1cm。時期は8世紀後半と考えられる。

158は、古代の土師器で杯である。①層から出土した2点が接合しており、約1/3が残存している。復元口径は12.7cm、復元底径は6.1cm、器高は3.3cmである。底部にはハケ目が、内外面には部分的に赤彩が残存している。

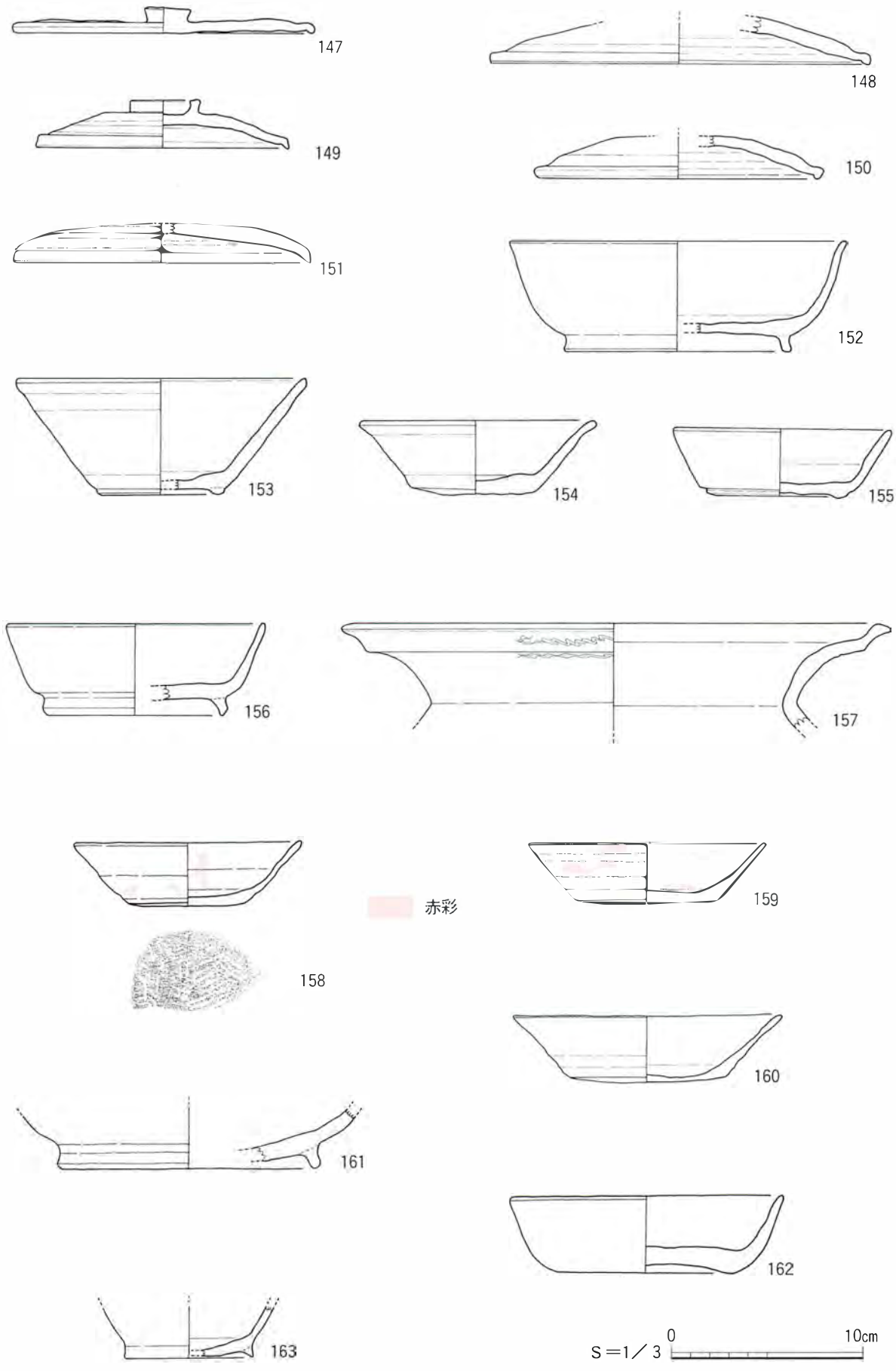
159は、古代の土師器で杯である。②層からの出土で、約1/2が残存している。復元口径は12.1cm、底径は7.4cm、器高は3.2cmである。内外面には部分的に赤彩が残存している。

160は、古代の土師器で杯である。①層から出土した5点が接合しており、約1/2が残存している。復元口径は13.8cm、底径は8.0cm、器高は3.4cmである。底部にはハケ目が部分的に残存している。

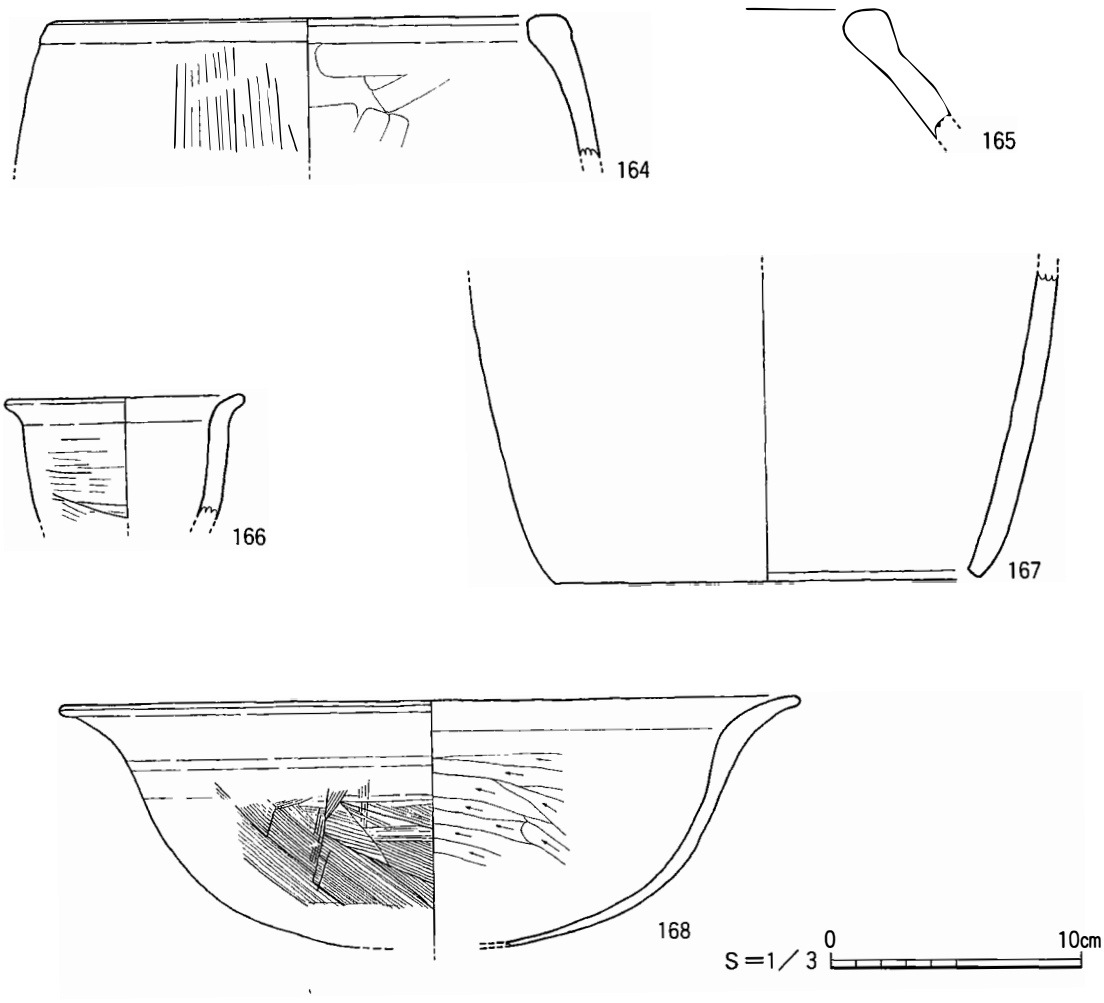
161は、古代の土師器で高台付き杯の底部である。一括遺物2点が接合しており、底部の約1/2が残存している。復元底径は12.8cm、残存高は3.2cmである。内外面には部分的に赤彩が残存している。かなり大きな杯である。

162は、古代の土師器で杯である。②層から出土した10点が接合しており、約4/5が残存している。口径は13.8cm、底径は9.0cm、器高は4.1cmである。底部にはヘラ切りの痕跡が見られる。

163は、古代の土師器で高台付き椀の底部である。①層出土遺物である。復元底径は6.5cm、残存高は2.7cmである。



図(Fig)50　2区－1　出土遺物実測図（2）



図(Fig)51　２区－１　出土遺物実測図（３）

164は、古代の土師器で鉢の口縁部である。復元口径は19.6㎝、残存高は5.6㎝である。①層出土遺物２点と④層出土遺物１点の計３点が接合している。外面にはハケ目、内面にはケズリ痕が見られる。

165は、古代の土師器で鉢の口縁部と考えられる。①層出土遺物で、残存高は5.1㎝である。164と比較すると口唇部が厚く、外面にくびれが見られる。

166は、古代の土師器でミニチュア甕の口縁部から胴部上半部の資料である。①層出土遺物２点が接合している。外面にはハケ目、内面にはケズリが見られる。復元口径は9.1㎝、残存高は4.8㎝。

167は、古代の土師器で甑の胴部下半部から底部の資料である。復元底径は16.7㎝、残存高は11.7㎝である。②層出土遺物３点が接合している。甑の底は桟橋状の形態であろう。

168は、古代の土師器で鉢である。①、②層から出土した11点が接合しており、約1/2が残存している。復元口径は29.3㎝、残存高は9.6㎝である。外面にはハケ目、内面にはケズリ痕が見られる。

②古代以降

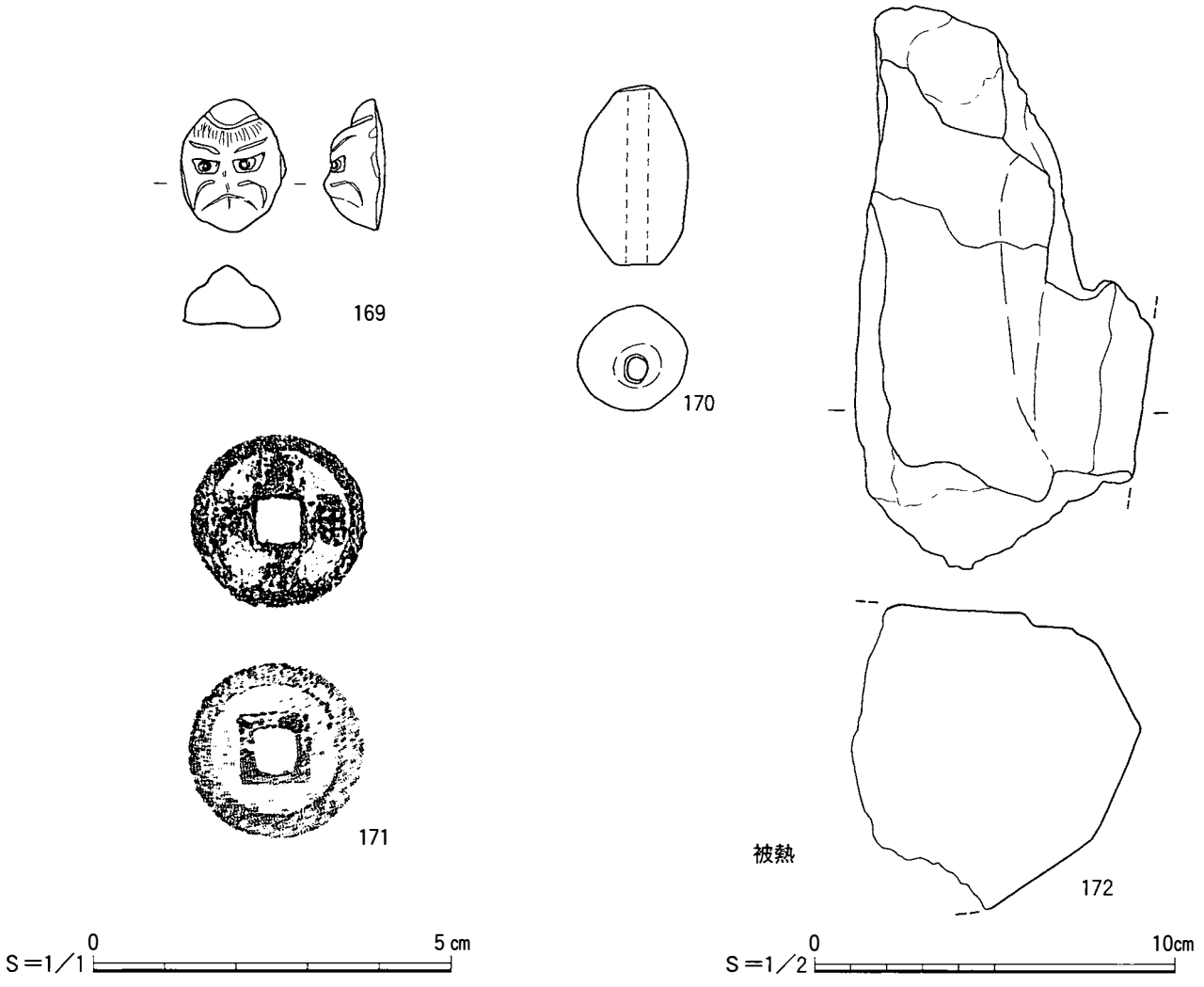
［出土遺物の観察］

169は、泥めんこである。カラス天狗を模したものと考えられる。縦1.8㎝、横1.5㎝、厚さ0.85㎝である。①層からの出土で、時期は近世以降と考えられる。

170は、土錘である。出土層は不明である。長さは５㎝、厚みは2.9～3.15㎝である。

171は、近世の古銭、「寛永通寶」である。「寛」の12と13画、「寶」の18と19画がつながる特徴から古寛永（1636年～1659年）と考えられる。①層からの出土である。

172は、砂岩製の砥石である。４面に擦り面が確認されるが、被熱して赤変し、破損しており、全体の形状は不明である。③層からの出土である。



図(Fig)52　2区－1　出土遺物実測図（4）

2）調査3区

調査3区には事業予定地外に古代の包含層が存在していた。表土剥ぎの際に出土した遺物を紹介する。出土した遺物は、中グレーコンテナ（38cm×58cm×14cm）に約1箱分で、総重量9.948gであった。

内訳は古代の土師器4.577g、古代の須恵器4.883g、陶磁器355g、瓦質土器133gであった。但し、陶磁器や瓦質土器は後世の紛れ込みである。

ここでは11点の遺物を紹介する。

①古代

[出土遺物の観察]

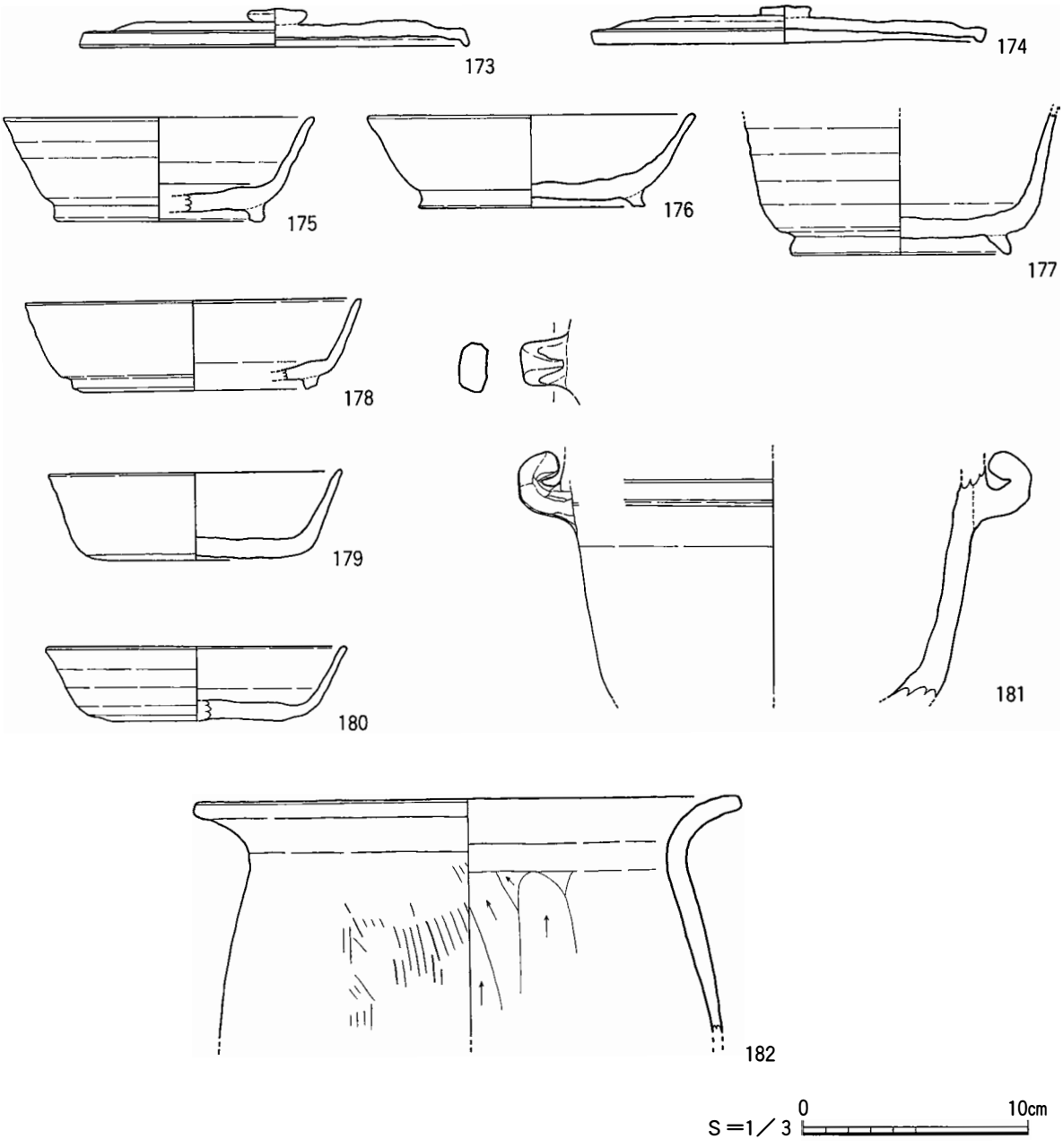
173は、古代の須恵器で杯の蓋である。約1/2が残存している。口径は16.9cm、器高は1.7cm。焼きがやや甘く、全体の色調が土師器の様に赤い。つまみ部は輪状で体部はほぼ水平である。時期は8世紀後半期と考えられる。

174は、古代の須恵器で杯の蓋である。約1/2が残存している。口径は16.8cm、器高は1.6cm。色調は灰色だが、焼きがやや甘い。つまみ部は輪状で体部はほぼ水平である。時期は8世紀後半期と考えられる。

175は、古代の須恵器で高台付きの杯である。約1/3が残存している。復元口径は13.4cm、復元高台径は9.0cm、器高は4.5cmである。焼きはやや不良だが、内面は丁寧なミガキが施されている。時期は8世紀後半期と考えられる。

176は、古代の須恵器で高台付きの杯である。約1/3が残存している。復元口径は14.2cm、復元高台径は9.9cm、器高は4.1cmである。焼きは非常に良好である。時期は8世紀後半期と考えられる。

177は、古代の須恵器で高台付きの杯である。約1/2が残存しているが、口縁の最先端部が欠損している。復元高台径は9.4cm以上、器高は6.2cmである。



図(Fig)53　古代遺物実測図

175、176、178と比較して立ち上がりがきつく高台もやや内側についている。時期は8世紀前半期まで溯る可能性が高い。

178は、古代の須恵器で高台付きの杯である。約1/4が残存している。復元口径は14.6cm、復元高台径は9.8cm、器高は3.9cmである。時期は8世紀後半期と考えられる。

179は、古代の土師器で杯である。約2/3が残存している。復元口径は12.7cm、底径は9.6cm、器高は3.8cmである。底部にはヘラ切りの痕跡が見られる。

180は、古代の須恵器で杯である。約2/5が残存している。復元口径は12.8cm、復元底径は7.4cm、器高は3.3cmである。底部にはヘラ切りの痕跡が見られる。

181は、古代の須恵器で把手付きの鉢である。把手は器面に接する程に内傾する。復元最大胴径は22.5cm、残存高は10.8cmである。

182は、古代の土師器で甕の口縁部と胴部上半部である。復元口径は24.0cm、残存高は10.3cmである。外面にはハケ目、内面にはケズリの痕跡が残る。時期は8世紀後半と考えられる。

第Ⅴ章　諸分析

1、御幸木部遺跡群自然科学分析
（年代測定・樹種同定）

株式会社パレオ・ラボ
Paleo･Labo Co., Ltd.

2、熊本市御幸木部遺跡群出土の古墳人骨

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　　松下　孝幸

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・
Zaur　Lomtatidze・Ineza　Jarjoliani

1．はじめに

御幸木部遺跡群の遺構から検出された炭化物について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調査データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ・コンパクトAMS：NEC製　1．5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表1　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前　処　理	測　　定
PLD-4384	試料No.① 遺構：S004 土壙墓内	試料の種類：炭化材小片 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-4385	試料No.② 遺構：S009 弥生後期住居跡	試料の種類：炭化材小片 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo： NECコンパクトAMS・1.5SDH

3．結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C年代誤差（$\pm 1\sigma$）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C年代がその ^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCa13.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、0xCa1の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2

σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確立を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す(図1)。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-4384	−27.69±0.15	1515±20	1517±18	535AD(68.2%)580AD	440AD(8.2%)490AD 530AD(87.2%)610AD
PLD-4385	−28.82±0.16	1900±20	1901±18	75AD(68.2%)125AD	55AD(95.4%)135AD

4．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

試料①のS004の土壙墓内の炭化物は、調査の所見では古代から中世と予想されていたが、年代測定では、1σ歴年代範囲においてAD535-580年、2σ歴年代範囲においてAD530-610年と測定され、古墳時代の終わりあるいは原始古代に相当する年代である。

一方、試料②のS009の弥生時代後期住居跡の最下層炭化物は、1σ歴年代範囲においてAD75-125年、2σ歴年代範囲においてAD55-135年と測定された。

なお、いずれの炭化物も炭化材の小片であり、伐採年代を示す最外年輪部分を測定していないことから、数十年程度の古い年代を示している可能性は考えられる。

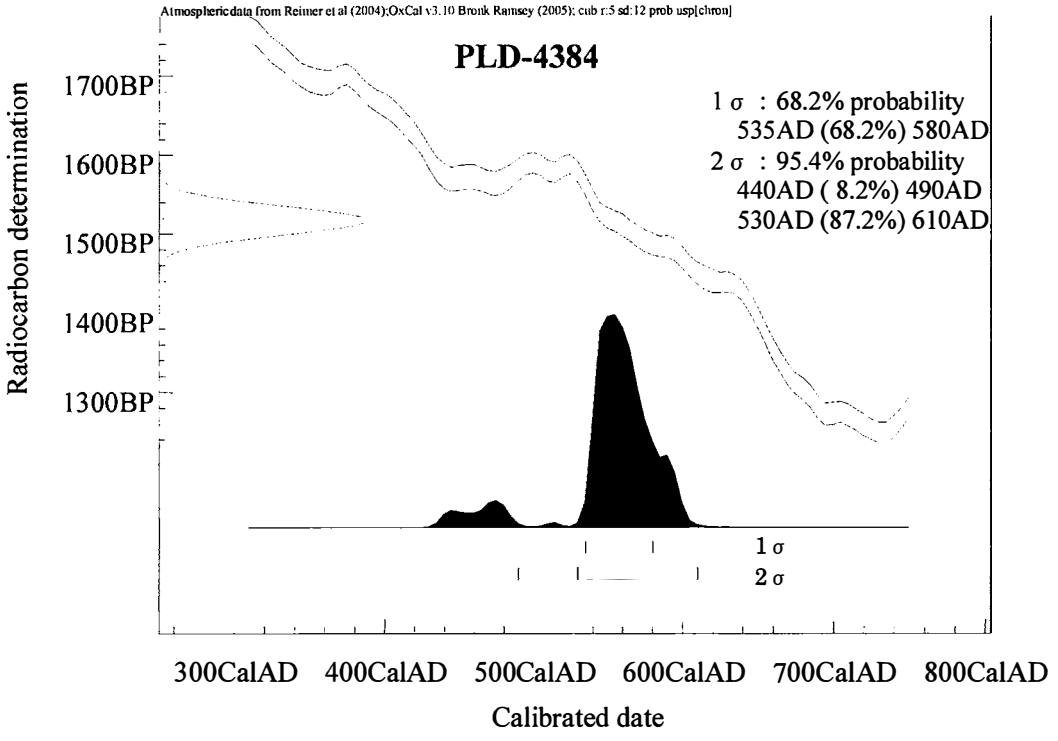
参考文献

Bronk Ramsy C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C年代, 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, BKromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele JR, Southon, MStuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-4384
1σ : 68.2% probability
535AD (68.2%) 580AD
2σ : 95.4% probability
440AD (8.2%) 490AD
530AD (87.2%) 610AD
1700BP
1600BP
1500BP
1400BP
1300BP
Radiocarbon determination
1σ
2σ
300CalAD
400CalAD
500CalAD
600CalAD
700CalAD
800CalAD
Calibrated date

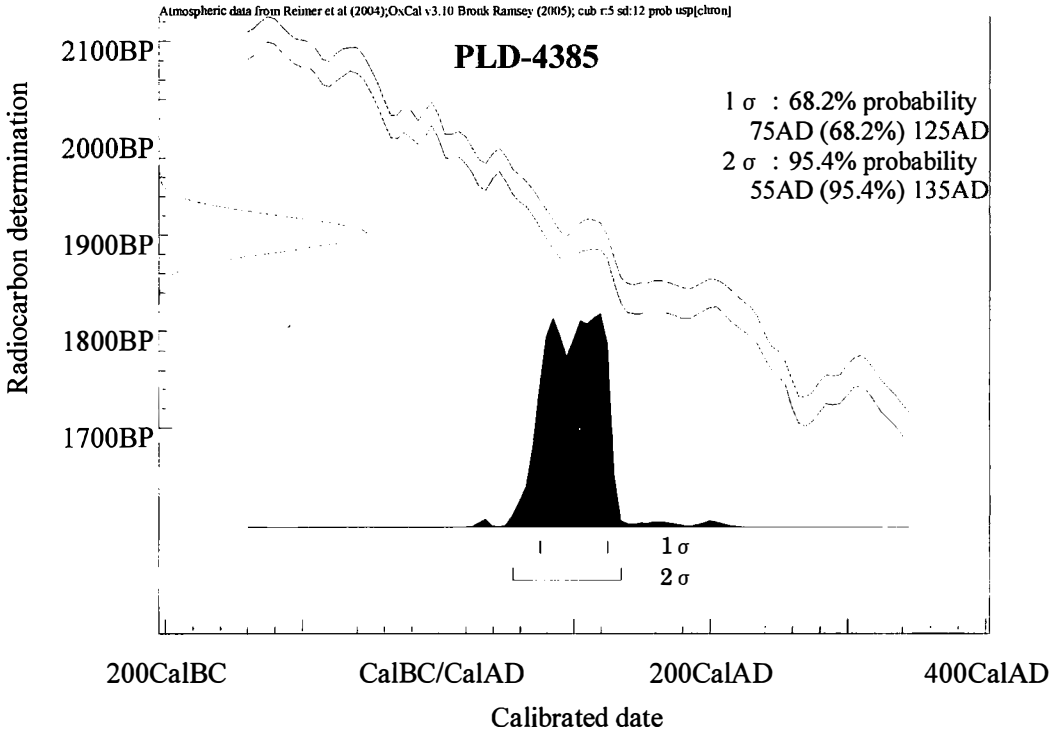
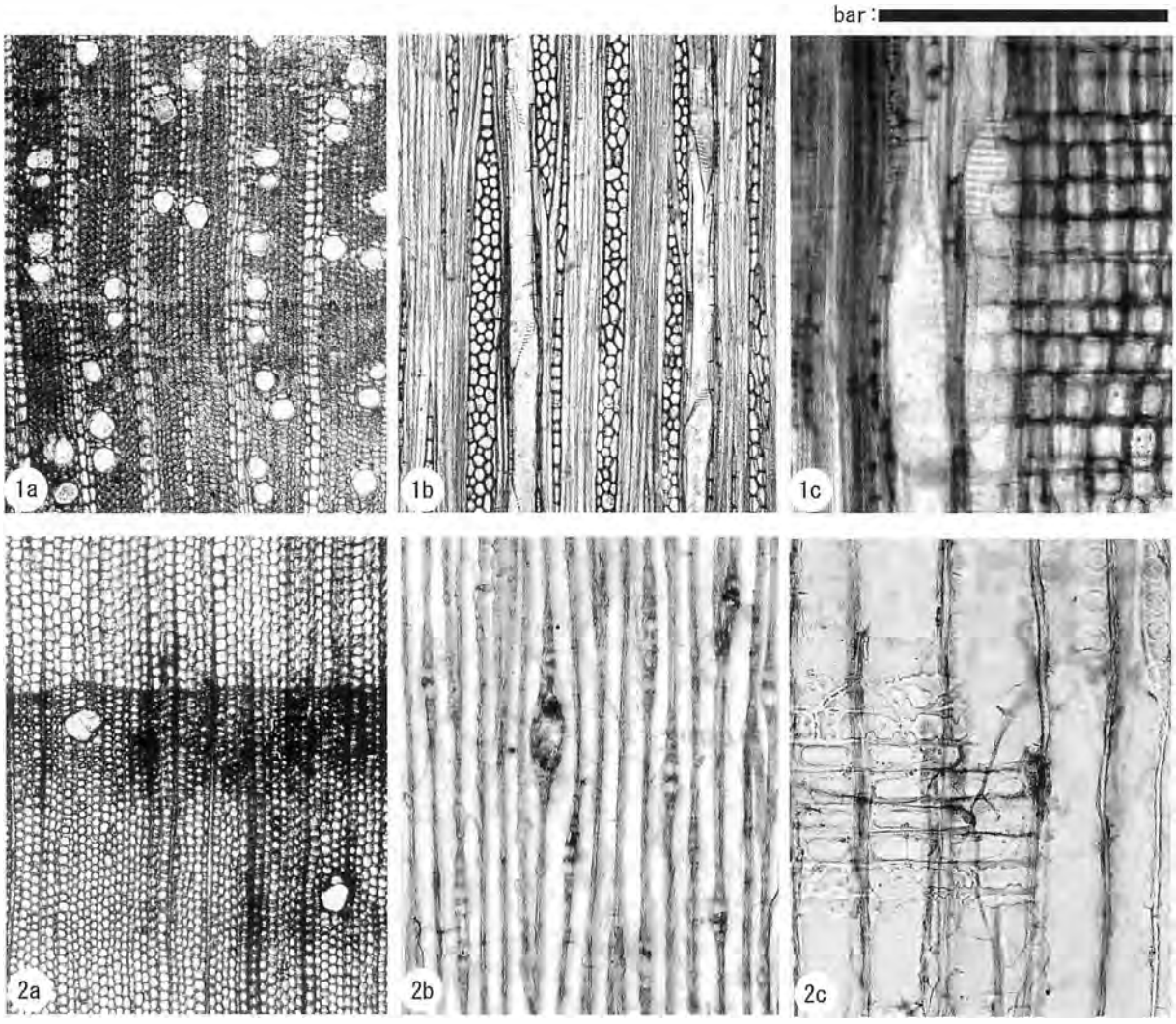

Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-4385
1σ : 68.2% probability
75AD (68.2%) 125AD
2σ : 95.4% probability
55AD (95.4%) 135AD
2100BP
2000BP
1900BP
1800BP
1700BP
Radiocarbon determination
1σ
2σ
200CalBC
CalBC/CalAD
200CalAD
400CalAD
Calibrated date

図１　暦年較正結果



図版１　御幸木部遺跡群出土木製品材組織の光学顕微鏡写真

1a-1c：アワブキ属（１区　ピット31番）　2a-2c：アカマツ（S006. Y-44. No3）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面　bar：a･1b=１㎜　1c･2b=0.4㎜　2c=0.2㎜

御幸木部遺跡群出土木製品の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1．はじめに

ここでは、弥生時代以降であるが時期は特定できていない柱材（1区　ピット31番）1点と、堤防沿いに打ち込まれていた近世以降の杭材3点の樹種同定結果を報告する。

2．試料と方法

木製品から材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、熊本県教育庁に保管されている。

3．結果

柱材はアワブキ属、杭材3点はすべてカマツであった。

表1　御幸木部遺跡群木製品樹種同定結果一覧

木製品	遺構　遺物	樹　種
柱材	1区　ピット31番	アワブキ属
杭①	S006.y-43．No.1	アカマツ
杭②	S006.y-44．No.3	アカマツ
杭③	S006.y-43．No.3	アカマツ

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1)　アワブキ属　*Meliosma*　アワブキ科　図版1　1a-1c（柱材：1区　ピット31番）

非常に小型でやや厚壁の管孔が単独または柔細胞を介して放射方向に2個複合し、疎らに散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状、階段数が少ない階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅、背が非常に高く、縁辺に直立細胞が多く、道管との壁孔は小型で交互状である。

アワブキ属は、常緑または落葉性の小木または高木で、暖帯に多く分布する。フシノハアワブキ・ヤマビワ・アワブキ・ミヤマハハソなどが属する。

(2)　アカマツ　*Pinus densiflora Sieb.* et Zucc.　マツ科　図版1　2a-2c（杭材②：S006．Y-44．No.3）

垂直と水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材である。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った鋸歯状の肥厚が顕著であることからアカマツと特定した。

アカマツは自然林が人間活動や自然災害で破壊・崩壊された跡地に、いち早く二次林を形成する。

4．まとめ

アワブキ属は九州地方の遺跡からも散見され、杭や建築材に使われている（山田　1993、パリノ・サーヴェイー株式会社　200 1）。当遺跡においても、柱材に利用されていた事が判った。

縄文時代～古代の杭材は利用する樹種の種類数が多く多様であるが、近世の杭材はクリとマツ属複維管束亜属（アカマツとクロマツが属する）の 2 種類が多い。当遺跡の近世以降の杭材 3 点もすべてアカマツの材であった。

引用文献

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成―用材から見た人間・植物関係史．1-242．植生史研究特別第 1 号．

パリノ・サーヴィー株式会社（2001）柳町遺跡から出土した木製品の樹種について．6-34．「柳町遺跡 I 第 2 分冊　分析・考察・附論編　写真図版編」．

熊本市御幸木部遺跡群出土の古墳人骨

松下　孝幸*

【キーワード】：熊本県、古墳人骨、土壙墓、保存不良、四肢骨、扁平脛骨

はじめに

熊本市御幸木部町に所在する御幸木部（みゆききべ）遺跡群の発掘調査が、加勢川改修事業に伴っておこなわれ、2005年（平成17年）に人骨が1体出土した（S004）。この人骨は副葬品を伴っていなかったが、後述しているように古墳時代に属する人骨と推測されている。

筆者が調査に携わったり報告書を書いた熊本県内の古墳時代人骨については、益城町の福原横穴墓群（松下・他、1985a）、玉名市小路石棺（松下、1985b）、熊本市古城横穴墓群（松下・他、1985c）、鹿本町津袋大塚東側1号石棺（松下・他、1986a）、山鹿市湯の口横穴墓群（松下・他、1986b、1988）と舞野遺跡（松下・他、1989c）、七城町瀬戸口横穴墓（松下・他、1989a）、中央町四十八塚5号墳（松下・他、1989b）、宇土市西潤野（にしうるの）2号墳（松下・他、1992）、熊本市五丁中原遺跡群（松下、1997）、鹿央町広諏訪原遺跡（松下、2004）、益城町城の本2号墳、合志町豊岡宮本横穴群（松下、2006）があるが、横穴墓は盗掘を受けているものが多く、人骨の保存状態はあまりよくなかった。この中で保存状態が比較的よかったのは、津袋大塚東側1号石棺、中央町四十八塚5号墳、西潤野2号墳、豊岡宮本横穴群から出土した人骨である。このほかに、八代市清水1号古墳（内藤・他、1980）、城南町丸尾5号墳（内藤、1975）からも古墳人骨が出土しているが、保存状態はよくない。

本例は保存状態が必ずしも良好なものではなかったが、四肢骨の一部について計測や観察ができたので、その結果を報告しておきたい。

資　料

今回の調査で出土した人骨は1体のみである（S004）。この人骨を後述している所見から男性人骨と推定した。年齢は不明であるが、参考までに年齢区分を表1に示した。

この1体の人骨は、考古学的所見より、古墳時代に属する人骨と推測されている。保存状態は悪いが、大腿骨と脛骨の一部で計測ができた。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

人骨の発掘調査は、筆者の他に当館の松下真実が、人骨の整理・復元・計測値の計算などは、磯部美恵子、松下玲子、中野江里子が担当した。

所　見

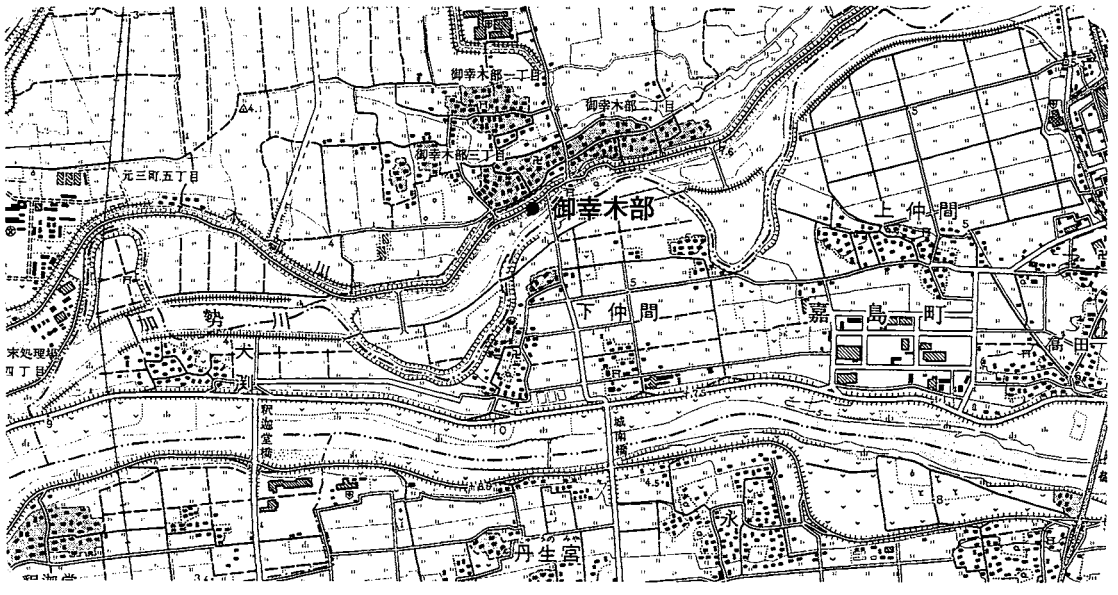
1．人骨の出土状況

埋葬遺構は土壙墓である。埋葬姿勢は仰臥。人骨は一部を除いて埋葬された状態を保って出土した。残存していたのは頭蓋、左側鎖骨、左右の上腕骨、橈骨と尺骨、寛骨片および左右の大腿骨、脛骨、腓骨である。肘関節はほぼ伸展状態で、膝関節も伸展状態であった。

頭蓋部分は、攪乱を受けて、ほとんど残存していない。頭蓋片に混ざって木炭片が多数認められた。

＊ Takayuki　MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum 〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕



遺跡の位置（1／25000）（Fig. 1 Location of the Miyukikibe sites, Kumamoto City, Kumamoto Prefecture）

この炭化物は人骨の上層部でも確認されているが、頭蓋以下の埋土からは検出されていない。埋葬後、頭蓋部分が攪乱を受けた際に、上層の炭化物を含んだ土が混入したものと推測される。

表１　年齢区分　(Table 1. Division of age)

年齢区分		年　　齢
未成人	乳児	１歳未満
	幼児	１歳～５歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	６歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳（60歳未満）
	老年	60歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

２．人骨の形質

①上腕骨

左右の骨体が残存していたが、保存状態は悪い。計測はできないが、径はかなり太く、三角筋粗面の発達もよさそうである。

②大腿骨

両側とも残存していたが、左側は一部が残っていたにすぎない。取り上げて、観察や計測が可能だったのは、右側のみである。

計測値は、骨体中央矢状径が32㎜（右）、横径は31㎜（右）で、骨体中央断面示数は103.23（右）となり、粗線の発達は良好である。骨体中央周は98㎜（右）で、骨体はかなり太い。また、上骨体断面示数は90.63（右）となり、骨体上部には扁平性は認められない。

③脛骨

両側とも残存していた。径は大きく、ヒラメ筋線の発達も良好である。

計測は右側のみができた。中央最大径は35㎜（右）、中央横径は21㎜（右）で、中央断面示数は60.00（右）となり、骨体は扁平である。骨体周は91㎜（右）で、骨体はかなり大きい。最小周は計測できない。

３．性別・年齢

性別は、四肢骨の径がかなり大きいことから、男性と推定した。年齢は頭蓋がほとんど残存していなかったので、推測できない。

考　察

本人骨は頭蓋が残存していなかったので、頭型や顔面の特徴および鼻根部の様態などは不明であるが、四肢骨の特徴は明瞭である。すなわち、径がかなり大きく、頑丈であることである。計測ができたのは大腿骨と脛骨のみであったが、上腕骨の径も大きい。計測ができた大腿骨と脛骨を熊本県出土の古人骨と比較してみた。なお、豊岡宮本、福原、湯の口、古城は横穴墓である。

１．大腿骨

表２（２－１、２－２）は大腿骨の比較表である。本例の骨体中央周は98㎜もあり、かなり大きく、計測値は表２では最大値である。90㎜を超えて、骨体が大きいものは、合志町の豊岡宮本３－ＦＥ－２、９－Ｙ－

1、宇土市の西潤野古墳人、八代市の清水古墳人①で、他の古墳人よりも大腿骨が大きい。熊本県では古墳時代から大腿骨の大きい人が存在していたことは注意しておきたい。骨体中央断面示数は103.23となり、表2では豊岡宮本3－FE－2と清水古墳人③に最も近く、粗線や骨体両側面の後方への発達はやや弱いようである。また、上骨体断面示数は表2では最大値となり、本例の骨体上部には扁平性は認められない。

表2－1　大腿骨計測値（男性、右、mm）(Table2-1. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		御幸木部	豊岡宮本			四十八塚				福　原				湯の口	古　城
		古代人	古墳人			古墳人				古墳人				古墳人	古墳人
		熊本県	熊本県			熊本県				熊本県				熊本県	熊本県
		熊本市	合志町			中央町				益城町				山鹿市	熊本市
			(松下)			(松下・他)				(松下・他)				(松下・他)	(松下・他)
		S-004	3-FE-2	9-Y-1	11-FE-3	2号	4号	5号	6号	A	B	C	D	53.2-B	37-1-1号
6.	骨体中央矢状径	32	31	31	29	31 (左)	28	28 (左)	26	28	30	25	25 (左)	—	26
7.	骨体中央横径	31	30	28	26	25 (左)	25	25 (左)	25	25	26	29	30 (左)	—	31
8.	骨体中央周	98	95	92	86	90 (左)	84	83 (左)	81	84	87	84	88 (左)	—	—
9.	骨体上横径	32	33	32	31	—	—	28 (左)	27	33	32	32	—	34 (左)	—
10.	骨体上矢状径	29	25	27	23	—	—	24 (左)	24	23	26	23	—	26 (左)	—
6／7	骨体中央断面示数	103.23	103.33	110.71	111.54	124.00(左)	112.00	112.00(左)	108.00	112.00	115.38	86.21	83.33(左)	—	83.87
10／9	上骨体断面示数	90.63	75.76	84.38	74.19	—	—	85.71(左)	88.89	69.70	81.25	71.83	—	76.47(左)	—

表2－2　大腿骨計測値（男性、右、mm）
(Table2-2. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		御幸木部	西潤野2号	津袋1号	小　路	清　水		
		古代人	古墳人	古墳人	古墳人	古　墳		
		熊本県	熊本県	熊本県	熊本県	熊本県		
		熊本市	宇土市	鹿本町	玉名市	八代市		
		(松下)	(松下・他)	(松下・他)	(松下)	(内藤・他)		
		S-004	1号人骨	1号	1号	①	②	③
6.	骨体中央矢状径	32	27 (左)	27	26	32	28	26
7.	骨体中央横径	31	33 (左)	25	28	30	24	25
8.	骨体中央周	98	(93) (左)	81	86	97	85	83
9.	骨体上横径	32	39 (左)	27	32	—	32	—
10.	骨体上矢状径	29	23 (左)	24	24	—	25	—
6／7	骨体中央断面示数	103.23	81.82 (左)	108.00	92.86	106.67	116.67	104.00
10／9	上骨体断面示数	90.63	58.97 (左)	88.89	75.00	—	78.13	—

2．脛骨

表3（3－1、3－2）は脛骨の比較表である。本例の骨体周は91mmで、表3では最大値である。大腿骨同様、脛骨の径もかなり大きい。骨体断面示数は60.00となり、この示数値は表3では最小値を示しており、この時代としては骨体はかなり扁平である。

表３－１　脛骨（男性、右、㎜）(Table3-1. Comparison of measurements and indices male right tibiae)

		御幸木部	豊岡宮本			四十八塚				福　原			
		古代人	古墳人			古墳人				古墳人			
		熊本県	熊本県			熊本県				熊本県			
		熊本市	合志町			中央町				益城町			
		(松下)	(松下)			(松下・他)				(松下・他)			
		S-004	3-TB-1	9-Y-1	11-TB-4	2号	4号	5号	6号	A	B	C	D
8．	中央最大径	35	－	30	30	31　(左)	30	27	26	29	29	33	27
9．	中央横径	21	－	22	21	22　(左)	19	20	21	22	22	22	21
10．	骨体周	91	－	85	80	85　(左)	79	74	75	80	80	84	80
10b．	最小周	－	－	78	74	78　(左)	67	69	70	74	74	78	75
9／8	中央断面示数	60.00	－	73.33	70.00	70.97(左)	63.33	74.07	80.77	75.86	75.86	66.67	77.78

表３－２　脛骨（男性、右、㎜）
(Table3-2. Comparison of measurements and indices male right tibiae)

		御幸木部	西潤野2号	津袋1号	小　路	清　水
		古代人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人
		熊本県	熊本県	熊本県	熊本県	熊本県
		熊本市	宇土市	鹿本町	玉名市	八代市
		(松下)	(松下・他)	(松下・他)	(松下)	(内藤・他)
		S－004	1号人骨	1号	1号	
8．	中央最大径	35	27	29	30	30　(左)
9．	中央横径	21	－	19	20	20　(左)
10．	骨体周	91	－	76	85	－
10b．	最小周	－	－	68　(左)	80	－
9／8	中央断面示数	60.00	－	65.52	66.67	66.67 (左)

要　約

熊本市御幸木部町に所在する御幸木部（みゆききべ）遺跡群の発掘調査が2005年（平成17年）におこなわれ、人骨が１体出土した（S004)。本人骨は古墳時代に属する人骨であったが、保存状態はよくなかった。頭蓋の保存状態は著しく悪かったが、大腿骨と脛骨の計測が可能であった。人類学的観察と計測をおこない、次のような興味ある所見を得た。

１．埋葬遺構は土壙墓で、埋葬姿勢は仰臥の伸展葬である。

２．この人骨は古墳時代に属する人骨と推定されている。本人骨は男性骨であるが、年齢は不明である。

３．頭蓋は撹乱を受け、ほとんど残っていなかったが、上腕骨、大腿骨、脛骨が残存していた。計測ができたのは大腿骨と脛骨である。

４．大腿骨の骨体中央周は98㎜、脛骨の骨体周は91㎜もあり、骨体は太く、頑丈である。脛骨体はこの時代としては珍しく扁平であった。また、上腕骨の径も大きい。

５．本例は頭型や顔面の形態を明らかにすることはできなかった。しかし、上肢骨も下肢骨も太く、頑丈であり、筋の発達も良好で、脛骨は扁平であった。このような四肢骨を持つ古墳人や中世人は熊本県内では見当たらない。大腿骨の骨体中央周は98㎜もあるが、古墳人では広島県本郷町の陣開古墳人が98㎜であった。これ以上大きい大腿骨は、筆者が知っている限りでは、沖縄県宜野湾市のテラガマ洞穴のグスク時代人の100㎜というのが存在するだけである。また、脛骨の骨体周も91㎜あり、これはかなり太い。これに近いのは長崎県大村市の小佐古古墳人の89㎜と沖縄県北谷町の後兼久原遺跡のグスク時代人（１号人骨）の89㎜があるに過ぎない。また、これ以上の例は、広島県本郷町の陣開古墳人の97㎜があるだけである。本被葬者がどのような階層に属し、どのような職業に就いていたか気になるが、今回の発掘調査での情報量には限りがあり、推測することもできなかった。

謝辞

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の皆様方に感謝致します。≫

参考文献

≪古墳人骨≫

1．松下孝幸・他、1985a：熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集）：29-42.

2．松下孝幸、1985b：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺･本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第 6 集）：32-48,57-61.

3．松下孝幸・他、1985c：熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集）：129-146.

4．松下孝幸・他、1986a：熊本県鹿本町津袋大塚東側 1 号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側 1 号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第 2 集）：5-33.

5．松下孝幸・他、1986b：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書（１）（山鹿市立博物館調査報告書第 5 集）：111-122.

6．松下孝幸・他、1988a：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群（Ⅱ）菊池川中流域古墳･横穴群総合調査報告書（３）（山鹿市立博物館調査報告書第 8 集）：53-63.

7．松下孝幸・他、1988b：大村市小佐古遺跡出土の古墳時代人骨。小佐古石棺群－Ｂ地点－発掘調査報告書（大村市文化財調査報告第13集）：27-48.

8．松下孝幸・他、1989a：熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨。北上原古墳・瀬戸口横穴墓群（熊本県文化財調査報告第104集）：97-107.

9．松下孝幸・他、1989b：熊本県下益城郡中央町四十八塚 5 号墳出土の古墳時代人骨。堅志田城跡・四十八塚古墳（熊本県下益城郡中央町文化財調査報告第 1 集）：77-114.

10．松下孝幸・他、1989c：熊本県山鹿市舞野遺跡出土の古墳時代人骨。銭亀塚古墳ほか（菊池川中流域古墳･横穴群総合調査報告書（４））（山鹿市立博物館調査報告書第 9 集）：71-82.

11．松下孝幸・他、1992：熊本県宇土市西潤野 2 号墳出土の古墳時代人骨。立岡古墳群（宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集）：71-84.

12．松下孝幸、1993：広島県本郷町陣開遺跡出土の古墳時代人骨。陣開遺跡（本郷町教育委員会文化財調査報告書第 2 集）付篇：1-5.

13．松下孝幸、1997：熊本市五丁中原遺跡群第 1 次調査区 3 号墳周溝内墓壙出土の古墳時代人骨。五丁中原遺跡（五丁中原遺跡第 1 次調査区発掘調査概要報告書）：25-26.

14．松下孝幸、2004：熊本県鹿央町広諏訪原遺跡出土の古墳人骨。鹿央町文化財報告書広諏訪原遺跡（町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業農道 7 号工事に伴う埋蔵文化財調査報告書）：27-34.

15．松下孝幸、2006：熊本県合志町豊岡宮本横穴群出土の古墳人骨。豊岡宮本横穴群（熊本県合志町文化財調査報告第 2 集）：57-84.

16．内藤芳篤・他、1980：清水 1 号古墳出土の人骨。清水古墳・野寺遺跡・林源衛門墓（熊本県文化財調査報告書第41集）：22-28.

17．分部哲秋・他、1991：熊本県菊鹿町灰塚古墳出土の人骨。灰塚古墳（県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査）（熊本県文化財調査報告第114集）：49-59.

≪その他≫

18. Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag, Stuttugart：429-597.

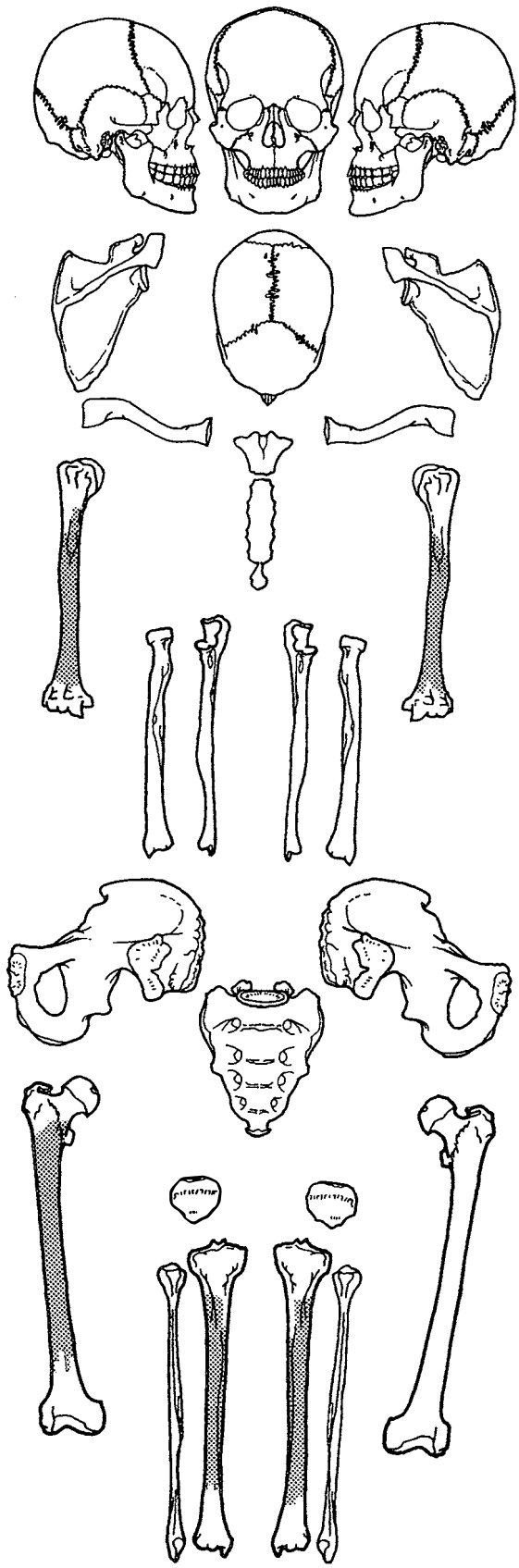
19. 松下孝幸、2004：「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』：444-454. 朝倉書店

表4　大腿骨（㎜）（Femur）

		御幸木部 S-004 男性 右
1.	最大長	—
2.	自然位全長	—
3.	最大転子長	—
4.	自然位転子長	—
6.	骨体中央矢状径	32
7.	骨体中央横径	31
8.	骨体中央周	98
9.	骨体上横径	32
10.	骨体上矢状径	29
15.	頚垂直径	—
16.	頚矢状径	—
17.	頚周	—
18.	頭垂直径	—
19.	頭横径	—
20.	頭周	—
21.	上顆幅	—
8／2	長厚示数	—
6／7	骨体中央断面示数	103.23
10／9	上骨体断面示数	90.63

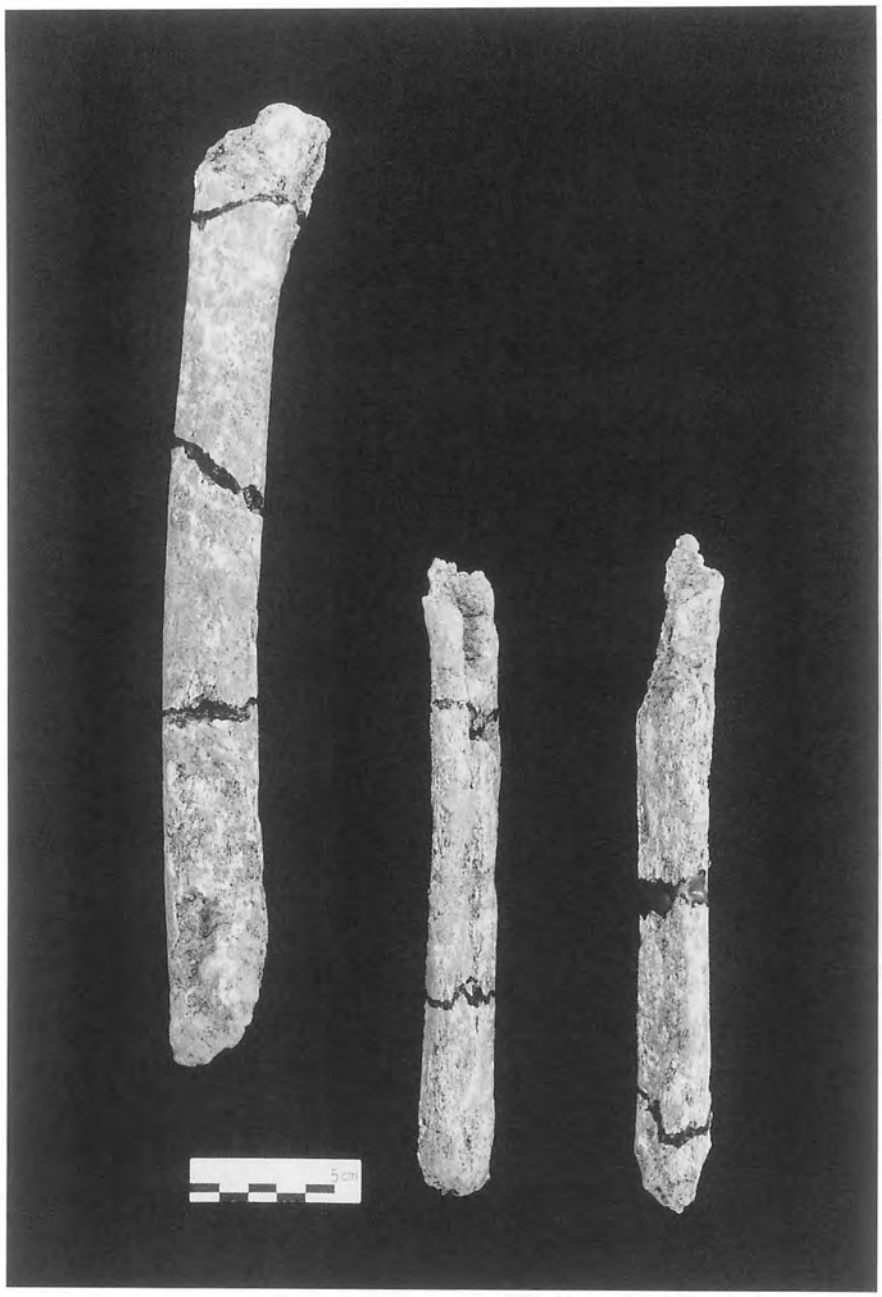
表5　脛骨(㎜）（Tibia）

		御幸木部 S-004 男性 右
1.	脛骨全長	—
1a.	脛骨最大長	—
1b.	脛骨長	—
2.	顆距間距離	—
3.	最大上端幅	—
3a.	上内関節面幅	—
3b.	上外関節面幅	—
4a.	上内関節面深	—
4b.	上外関節面深	—
6.	最大下端幅	—
7.	下端矢状径	—
8.	中央最大径	35
8a.	栄養孔位最大径	—
9.	中央横径	21
9a.	栄養孔位横径	—
10.	骨体周	91
10a.	栄養孔位周	—
10b.	最小周	—
9／8	中央断面示数	60.00
9a／8a	栄養孔位断面示数	—
10b／1	長厚示数	—



S004人骨

図2　人骨残存図アミかけ部分
(Fig. 2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



大腿骨（右）（the femur）・徑骨（両側）（The Tibia）
御幸木部S004人骨（男性）
（The Miyukikibe S004, male）

第Ⅵ章　総　括

第１節　はじめに

調査区は、平成２年度（1990年度）の調査区の約100～200m北東にあたる。（図54参照）

今回の発掘調査により19基の遺構が確認された。（図13～46参照）その内訳は弥生時代後期後半～終末期５基（竪穴住居跡：３軒、土坑：１基、溝：１条）と調査１区の弥生土器を伴うピット16基、古代３基（土坑：２基、溝：１条）、近世１基（溝：１条）、時期不明10基（土坑：５基、土壙墓：１基、溝：２条、不明遺構：２基）である。

ここでは確認された遺構や遺物をもとに時代別に考察を試みたい。

第２節　各時代の考察

１　弥生時代

遺構数は、５基（竪穴住居跡：３軒、土坑：１基、溝：１条）と調査１区の弥生土器を伴うピット16基であった。

調査１区の弥生土器を伴うピット16基の中には、中期前半期の城ノ越式土器、中期後半期の黒髪式土器を伴うものも見られた。また、ピット31からは、弥生土器の小片を伴いながら、カット痕跡を持つ柱材の一部（写真12及び119参照）が出土した。竪穴住居跡の柱穴と推定される。このことは、弥生時代中期前後に集落が存在したことを示唆するものと考えられる。

調査３区では、５基の遺構が確認され、特にS009やS012の住居跡からは弥生時代後期後半～終末期の様相を示す遺物が出土している。

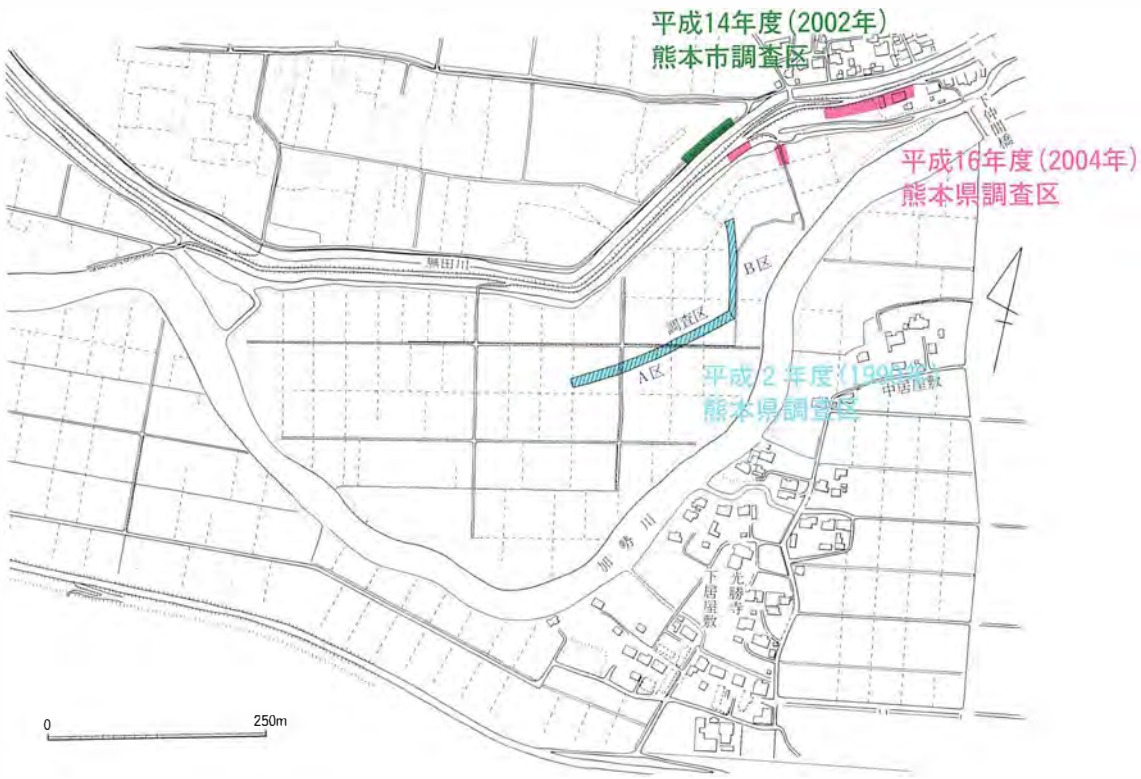
また、調査１区の北東約100m地点では平成15年度（2003）に熊本市が調査を行った際に弥生時代後期の環濠と考えられる溝状の遺構が検出されている。

これらのことを総合すると、弥生時代の当地は、中期前半期～終末期に集落が形成されていたことが推定される。

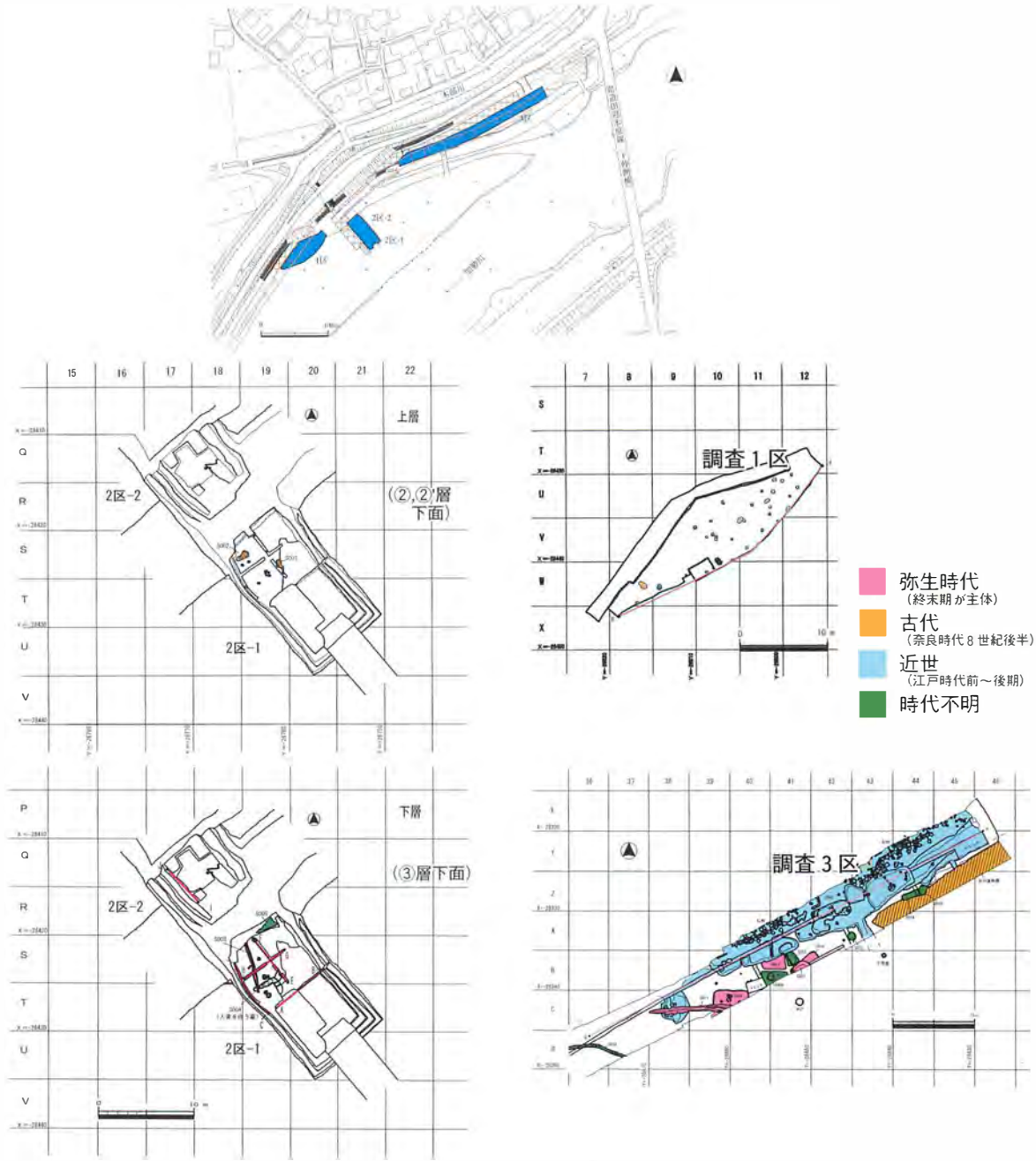
２　古代

１）歴史的背景

８世紀中葉～後半になると国分寺、国分尼寺が創建され、また託麻国府の設置や駅路の整備もその前後になされたと考えられる。大江遺跡群、黒髪町伊遺跡群においては南北に延びる西海道跡が検出されており、加えて黒髪町遺跡群は蚕養駅跡に推定されている。（2002　美濃口）



図（Fig）54　遺跡位置図（磯野　1993に加筆）



図(Fig)55　遺構配置図

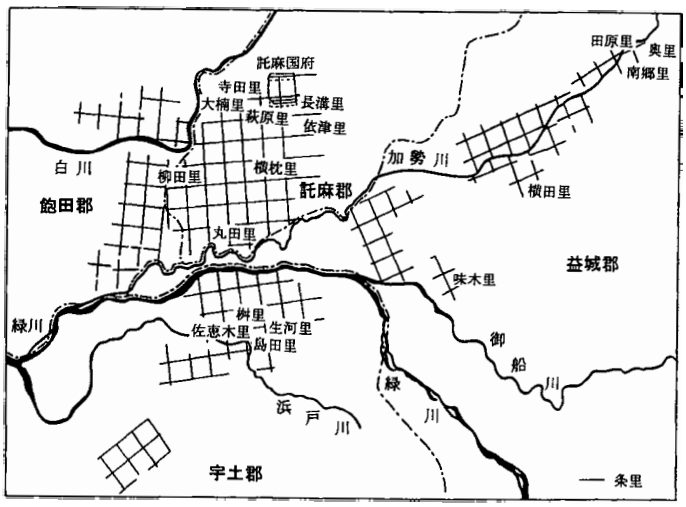
御幸木部遺跡群が所在する御幸木部町周辺は、「和名抄」による託麻郡の下井郷に比定される。(1987　鈴木)

また、周囲は熊本平野条里跡に推定されており、中世の「詫摩文書」に出てくる寺田里、丸田という地名は同遺跡群周辺に比定されている。また、現在も熊本市出仲間には七ノ坪、三ノ坪、北坪の地名が残っている。

2）発掘調査による推定

遺構数は、3基（土坑：2基、溝：1条）であり、時期の特定が可能と考えられるものは、調査2区―1で確認したS003の溝である。南側から北側へ高低差があり、耕作に伴う可能性が考えられる。また、調査3区の北側の調査区外では古代遺物包含層が確認されている。いずれも奈良時代8世紀後半期の遺物であり、この時期に画期があったことは否めない。

また、付近は古代～中世の条里推定地（図56参照）にあたり、石帯（1999　網田）や布目瓦が採集されていることから、古代に役所寺院があったことも考えられる。



熊本市内条里地名

地区名	条里関係地名
出仲間	七ノ坪　三ノ坪　北坪
長溝	大坪
田迎	八反坪
八王寺	五反田
木部	二ノ坪　西二ノ坪
本荘	中ノ坪
近見	三十六　八ノ坪　六条
高江	中ノ坪
江津	十九　南十九
良町	十七

図(Fig)56　熊本平野の条里（島津　1996）

3　中世

1）歴史的背景

木部地蔵堂石造物群には、文明7年（1475）12月3日銘の六地蔵石幢と天文2年（1533）4月7日銘の阿弥陀来迎図像線刻板碑及び寛政6年（1794）芥川守拙観音図像線刻板碑が立てられている。この六地蔵石幢は「願主沙門霊珠」が結縁衆を募り、文明7年（1475）12月3日に「結縁衆吉祥如意」を祈願して建立されたことが銘文から明らかであり、当時木部周辺に相当な人々が集まる場が存在していたことが想像される。そして結縁の中心となった「沙門霊珠」は『国郡一統誌』にみえる「道伝寺」の寺僧と推定される。阿弥陀来迎図像線刻板碑は、その銘文から「林田右京亮」が天文2年（1533）4月7日に「二世福願」を祈願して「西方無量寿仏尊」を刻んだ逆襲供養板碑である。この銘文の一節に「天宝現世安福後生善処漸湘之南潭之北中黄金充一国」とあり、禅宗系の表現用語や「黄金充一国」といった商業的文言が見られる。所在地の地形から「漸湘之南潭」は加勢川を示すものとみられ、「黄金充一国」ほど繁盛した加勢川河川交通の拠点津の一つであったものとみられる。「林田右京亮」は禅宗に帰依した、領主的側面を持つ有徳人（商人）と推定される。このように木部地蔵堂及び境内石造物群は中世加勢川河川交通や津の景観を考察する上で重要な資料を残す最重要の遺跡の一つと考えられる。(1996　青木)

2）発掘調査による推定

今回の調査では、中世の遺構は検出されず、調査3区で検出された近世の溝（S006）の中から青磁、擂鉢や火鉢などの遺物が出土したに過ぎなかった。

しかし、1990年の発掘調査では、ほぼ平行する溝による区画が見られ、井戸、土坑群の集中（墓坑群と想定）・柱穴群（建物を構成するものと想定）が存在している。おそらくは、有力な中世在地領主の居館跡の一部を調査したものと考えられ、それは、加勢川加工付近の水利を意識して選定されたものと想像される。遺物は、土師器・輸入陶磁器の特徴からみて13世紀末～14世紀前半のものが主体となっている。(2006　美濃口)

4　近世

1）歴史的背景

近世に入り、加藤清正は肥後入国後、豊臣秀吉の命によって検地を実施し、また、土木・治水工事に力を入れ、白川筋・緑川筋の改修を開始した。清正は慶長5年（1600）の関ヶ原の戦では東軍につき、西軍の中心となった小西行長の宇土城・八代城を攻略し、次いで小西領を合わせて領することとなった。

清正の茶臼山新城の築城開始時期は明らかではないが、同12年（2007）熊本城が完成している。

慶長16年清正の死後、子の忠広が相続したが、幼少のため幕府の厳しい介入のもとでの統治が行われた。寛永9年（1632）加藤家は取り潰され、豊前小倉から細川忠利が就封した。以後細川氏は明治維新

まで12代240年余肥後を統治する。(1987　鈴木)

熊本城下は白川の右岸に構成され、城内の二の丸・三の丸は重臣の邸宅にあてられ、城の北側の京町台地から東面の坪井・子飼・千反畑・上林・手取・高田原一帯に侍屋敷が配置された。城の南手には古町と呼ばれる町屋、南西部には新町の町屋が並び、さらに坪井にも町屋が設けられた。城下の外郭は水濠と土居で囲まれ、城下から外への出口には番所が設けられ、夜間は門を閉じる決まりであった。城下町は、はじめその職種によって同業者を同じ地域に集めたため、古町には細工町・板屋町・鍛冶屋町・米屋町・魚屋町・紺屋町・大工町・呉服町・桶屋町・など、新町には塩屋町・檜物屋町・瓶屋町・鳥屋町・職人町・桶屋町・魚屋町など、坪井には米屋町・魚屋町・八百屋町・職人町・鳥町などがあったが、幕末になると本格的な職種に必ずしも拘束されなくなっている。(1987　鈴木)

近年、熊本市古町遺跡の調査成果(2004　美濃口・原田)が公表され、町屋の様子が明らかにされつつある。

熊本城下への日常生活必需品は主に海路で高橋港に運び込まれ、坪井川を経て輸送された。そのため

図(Fig)57　熊本県管轄肥後国託麻郡木部村地図(熊本市　1993)　■ 調査地点

195

肥後国託麻郡木部(キベ)村

本村古時不詳。中古本荘(ホンシヤウ)庄ニ属シ、寛永十年癸酉田迎手永ニ属ス。明治四年手永ヲ郷ニ改ム。本村元上・中・下三村ニ別レタリシカ明治四年辛未一村ニ合シ、明治八年乙亥又同郡小原ノ一村ヲ併ス。

疆域　東南ハ加勢川中央ヲ以テ界シ、上益城郡仲間(ナカマ)村・犬淵村ニ対ス。西ハ託麻郡元三(モトミ)村耕地ヲ以テ界トシ、北ハ同郡良町(ヤマチ)・笛田(フエタ)村耕地并溝ヲ以テ界トス。

幅員　東西十九丁五十六間、南北九丁三十七間三尺、面積未詳。

管轄沿革　中古以上不詳。天文元年壬辰林田左京亮能次肥後ニ下リ、木部村ヲ領ス。里俗云伝。佐々氏以来本荘村ニ同シ。

里程　熊本県庁ヨリ巽。本村字下屋敷三千百八十八番宅地ノ西北隅元標ヘ一里三十四丁四十八間、四隣笛田村元標ヘ十六丁四十四間、良町村ヘ十六丁一間三尺、元三村ヘ二十六丁四十四間、下仲間村ヘ十一丁四間三尺。

地勢　四方平坦、東南、加勢川ヲ帯、運輸便ナリト雖モ薪炭乏シ。

地味　其色白黒混ス。其質可也。稲粱及諸穀物ニ可也。水利便ナリト雖モ、時々水害ニ苦ム。

税地
田　旧反別百二十三丁八反四畝十二歩。新検反別百四十一丁九反歩。
畑　旧反別五十四丁六反九畝二十七歩。新検反別五十五丁六反二畝二十三歩。
宅地　旧反別五丁四反九畝六歩。新検反別八丁八反九畝六歩。
林

飛地　ナシ。

字地
獺江(ウソノエ)　本村ノ艮。東西一丁五十九間七合、南北一丁三間。
北獺江(キタウソノエ)　同上。東西二丁五十間一合、南北四十二間。
岩出(イハテ)　同上。東西三丁四十間五合、南北一丁三十四間五合。
南岩出(ミナミイハテ)　同上。東西三丁五十一間、南北一丁五十二間四合。
船底(フナソコ)　同上。東西四丁二十二間五合、南北一丁八間三合。
上六津(カミムツ)　本村ノ艮。東西一丁七間二合、南北一丁五十五間五合。
彼岸田(ヒガンタ)　本村ノ東。東西三丁四十二間六合、南北五十二間五合。
六津(ムツ)　本村ノ北。東西三丁五十五間二合、南北一丁十五間六合。
裏田(ウラタ)　同上。東西一丁五十九間七合、南北二丁六間。
南郷土(ミナミガウト)　同上。東西二丁十四間四合、南北一丁二十八間二合。
郷土　同上。東西四丁三十間九合、南北四十三間。
小田(ヲタ)　同上。東西二丁四十二間七合、南北一丁二十六間一合。
迎田(ムカヘタ)　同上。東西一丁十一間四合、南北一丁二十七間二合。
園田(ソノタ)　同上。東西三丁二十三間七合、南北一丁三十四間五合。
福園(フクソノ)　同上。東西一丁三十二間四合、南北一丁四十間八合。
迎園田(ムカヘソノタ)　同上。東西三丁三十三間二合、南北五十四間六合。
尾坪(ヲツボ)　本村ノ乾。東西三丁三十間、南北一丁九間三合。
竹林(タケハヤシ)　同上。東西二丁五十八間五合、南北一丁三間。
北竹林　同上。東西五十六間七合、南北三丁十四間三合。
井尻(キシリ)　同上。東西一丁五十九間七合、南北三丁六間九合。
西井尻　同上。東西一丁七間二合、南北三丁十三間二合。
築切(ツキキリ)　本村ノ乾。東西五十間四合、南北四丁十二間。
鉾町(ホコマチ)　本村ノ西。東西一丁六間二合、南北五丁二十一間三合。
堤口(トモクチ)　同上。東西五十四間六合、南北三丁二間七合。
高町(タカマチ)　同上。東西一丁六間二合、南北三丁六合。
丸田(マルタ)　本村ノ西。東西一丁四十五間、南北二丁五十八間五合。
二坪(ニノツボ)　本村ノ坤。東西二丁五十二間二合、南北二丁十二間三合。
西二坪　同上。東西三丁五十一間、南北二十八間一合。
野中(ノナカ)　本村ノ西。東西二丁六間、南北五丁十九間二合。
源海(ケンカイ)　本村ノ乾。東西四丁四十七間七合、南北一丁五十五間五合。
西(ニシ)原海　同上。東西一丁六間六合、南北五丁六間六合。
汐入(シホイリ)　本村ノ西。東西一丁二十八間二合、南北五丁十五間。
西(ニシ)汐入　同上。東西五十四間六合、南北二丁五十間一合。
無田(ムタ)　本村ノ坤。東西五丁二十九間七合、南北二丁五十八間五合。
飛田(ヒタ)　同上。東西三十一間五合、南北三丁十一間一合。
馬場(バ)　同上。東西一丁五十六間六合、南北一丁五十三間四合。
南古屋敷(ミナミフルヤシキ)　同上。東西五十間四合、南北二丁五十六間四合。
古屋敷　本村ノ西。東西五丁二十五間五合、南北一丁二十四間。
外村屋敷(ホカムラヤシキ)　本村ノ南。東西三丁十九間五合、南北二十九間四合。
下屋敷(シモヤシキ)　本村ノ中央。東西三丁三十間、南北一丁三十四間五合。
上屋敷(カミヤシキ)　同上。東西四丁四十一間四合、南北一丁二十四間。
西久保(ニシクボ)　本村ノ東。東西五丁四十六間五合、南北三十七間八合。
南久保(ミナミクボ)　本村ノ巽。東西二丁三間九合、南北三丁三十間。
久保(クボ)　本村ノ東。東西三丁二間七合、南北一丁五十七間六合。

貢租
地租　旧租米千七石六斗七升一合。
改租金　金三千七十三円七銭七厘　百分ノ三。同二千六百四十六円一銭三厘　百分ノ二分五厘。
雑税　金十七円。
税外納金　金二円八十銭。

戸数
本籍百五十五戸　士族十三戸。平民百四十二戸。
社一戸　村社一坐。
総計百五十六戸。

人数
男三百九十一口　士族三十六口。平民三百五十五口。
女三百六十三口　士族四十口。平民三百二十三口。
総計七百五十四口。

牛馬　牝馬九十八頭。

舟車　日本形船三十一艘　五十石未満荷船二十九艘、渡舟一艘、漁舟一艘。

山　ナシ。

川
加勢川(カセカハ)　深処二間五尺、浅処一間三尺、広処四十間、狭処二十五間。流緩、水清、味淡。舟筏通ス。堤防アリ、村ノ東、重富村界ヨリ来リ、南流シ半ヨリ西流シ元三村界ニ入。其間二十七丁三十間。
木部渡(キベノワタシ)　村道ニ属ス。本村ヨリ三丁二十七間、広三十間。皆深シ。本村ノ南、加勢川ノ下流ニアリ、本村ヨリ下仲間村ニ通ス。渡舟一艘、私渡。
下無田(シモムタ)落溝　本村ノ東、重富村界ヨリ来リ、元三村界ニ入。長二十五丁三十三間、幅六間、数村ノ悪水ヲ瀉下ス。
龍江溝(タツノエ)　同上ヨリ来リ、笛田村界ニ入、長十七丁三十間、幅五間、同上。重富村ニテハ餅溝ト称ス。

森林　ナシ。

原野　ナシ。

牧場　ナシ。

鉱山　ナシ。

湖沼　ナシ。

道路
仲間(ナカマ)村道　一等里道ニ属ス。本村ノ北、笛田村界ヨリ、村中ヲ貫キ南方上益城郡上仲間村界加勢ツニ至ル。長十一丁十四間、幅一間二尺。
掲示場一箇所　本村ノ南入口ニアリ。

堤塘
加勢川堤　加勢川ニ沿ヒ、村ノ東、重富村界ヨリ西、元三村界ニ至ル。長二十五丁三十三間、馬踏二間、堤敷十三間、水門二ヶ所。根堅女竹及櫨並木アリ、修繕官民合費。

港　ナシ。

出崎　ナシ。

島　ナシ。

暗礁　ナシ。

灯明台 附灯明船　ナシ。

滝　ナシ。

温泉　ナシ。

冷泉　ナシ。

公園　ナシ。

陵墓　ナシ。

社
木部(キベ)阿蘇神社　村社。社地東西三十七間、南北八間三尺、面積一反八歩。本村ノ坤ニアリ。健磐龍命・阿蘇津媛命神・八井耳命・比咩命・神倖名川耳命・五十鈴依媛命・速甕玉命・雨宮比咩命・若彦命・弥比咩命・新彦命・吉松比咩命ヲ祀ル。勧請年月不詳。祭日九月十九日。

寺　ナシ。

学校
人民共立小学校一箇所　村ノ南加勢川堤外ニアリ。生徒男三十八人、女十人。

村町会所　ナシ。

病院　ナシ。

電線　ナシ。

郵便局　ナシ。

製糸場　ナシ。

大工作場　ナシ。

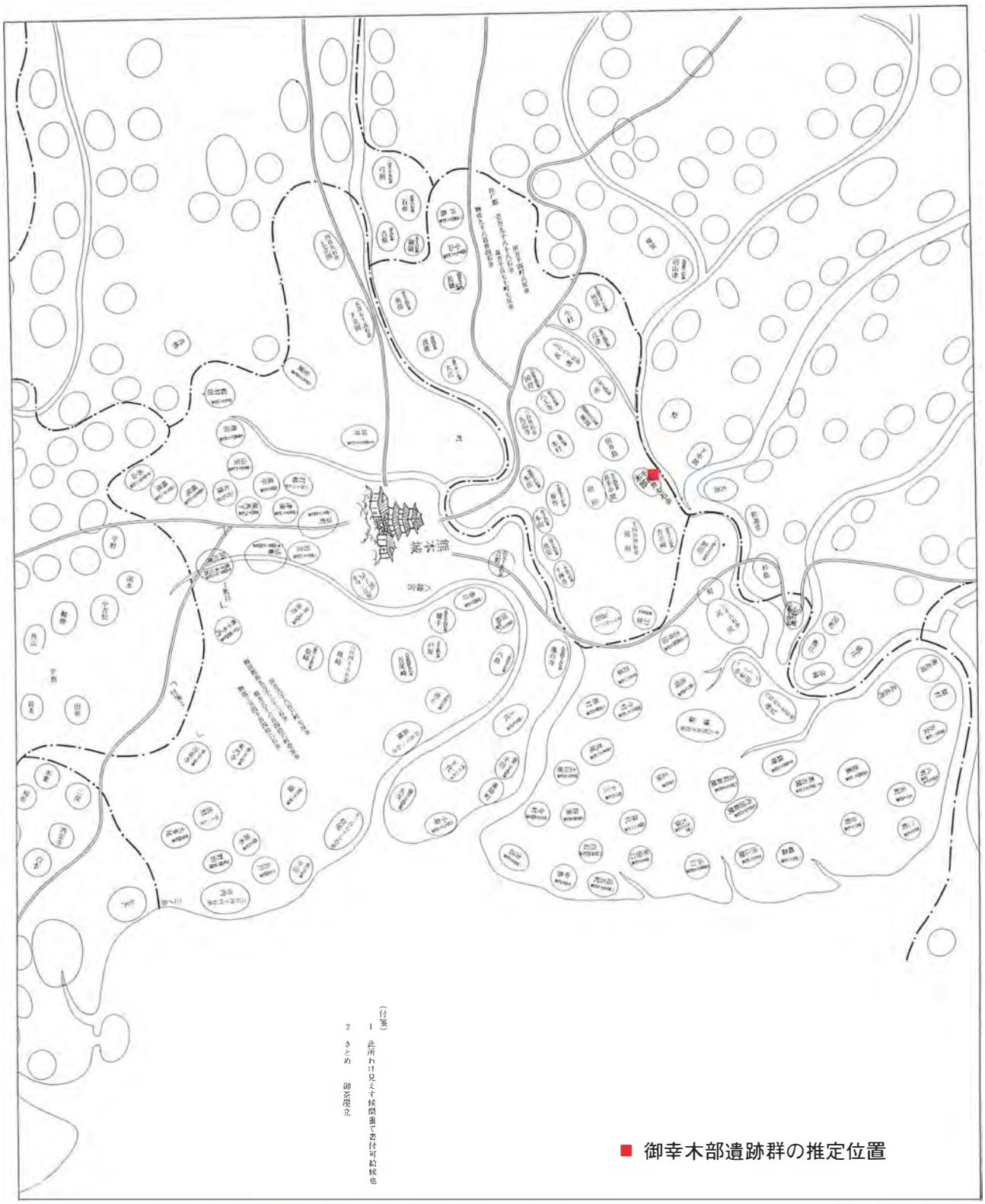
古跡　ナシ。

名勝　ナシ。

物産 明治八年度調
植物　米二千二十六石四斗九升　大豆五十四石二斗五升
小豆十一石一斗　裸麦四百五十六石五升　小麦三百八石七斗
粱五百五十八石四斗　蚕豆二百八十五石六斗　菜種六十八石
蘿蔔三十二万八千本　芋三百六十三石
器用　莚蓆五千百枚
質各可也。管内或ハ他県輸送。

民業 同上
男農百三十八戸　桶職一戸　洗湯職一戸　大工職一戸

図(Fig)58　肥後国託麻郡村誌（肥後国託麻郡木部村）（熊本市　1993）



図(Fig)59　肥後国絵図(慶長国絵図)部分　慶長10年以降(1605年～1614年)　(熊本市　1993)

高橋にも多くの運送業者や商店が軒を並べ、幕末にはさらに下手の小島が物資搬入保管の港町として栄えた。南の川尻も加藤氏の時代から藩の米倉庫が設けられ,緑川流域の年貢米が集積され、多くの労働者が集中し、そのにぎわいに拍車をかけた。年貢米を運んできた船は、帰りに農業および日常生活に必要な道具類を買い入れたため、川尻は刃物と木製品の製造ならびに木造船の製作が盛んで、高橋とともに五ヶ町のうちに加えられ商業の中心地ともなった。

飽田郡の南部と託麻郡の大半は水田地帯で米作の中心地であり、馬場楠井手・大井手などの取水によって用水を賄った。飽田郡北部の金峰山麓や託麻郡東

図(Fig)60　肥後国(元禄国絵図)部分　元禄14年(1701年)　(熊本市　1993)

部の台地では畑作が主体で、麦・大豆・小豆・粟などの穀物が主体であったが、中期頃には城下町へ供給するダイコン・ナス・カブ・唐芋・ニンジン・ゴボウ・などの野菜（主として根菜類）が近郊農村で

栽培され、販売されるようになった（番太日記)。

幕末の特産品として「肥の後州名所名物数望附」のなかに松尾の唐芋、水前寺の晒し葛、熊本織、熊本白髪素麺、水前寺もやし、熊本生蕎麦切、水前寺苔、白川の鮎、江津の鯉鮒、はえ、熊本大小金具彫物、細工町キセル、象嵌鍔、加世以多、朝鮮飴、真珠丸などが見える。(1987　鈴木)

肥後藩における地方行政単位として手永制度が用いられていた。手永は郡と村の中間にあって、数村あるいは数十村を一つの単位とする行政単位であった。当時の御幸木部遺跡群周辺の木部村（802石余)、中木部村（524石余)、下木部村（414石余）は、託麻郡田迎手永に属していた。(2004　池上)

村を統括し、村を代表するのが庄屋である。村役人のうち庄屋・頭百姓・村横目を村方三役といった。村政は、郡代・惣庄屋を通して達せられる「法令」(村人への伝達方法は高札または口達）に基づいてなされる。村は村山・神田・用水路などの財産を持ち、自治的に運営された。村規約・村役人・座祭・年中行事・農作業などむらの重要な事柄は農民の寄り合いで決定された。とくに正月10日前後に開かれる初寄り合いはその年の基本的な約束事を決めるものとして重視された。寄り合いの決定事項は村規約として記録され,共同作業に多く依存した村社会では、違反者には出不足銭や過料銭その他の罰則が課せられた。

肥後では天草島原の乱後に武士・町人･農民をそれぞれ５人から７人ずつ組み合わせ、檀家名簿を作り誓詞を書かせた。もともとキリシタン宗門取締りを目的としていた五人組も、のちには農作業における相互扶助・連帯責任を義務づけられ、法を犯す者が出れば五人組は連帯責任を問われて罰せられた。(2004　松本)

以上を鑑みると今回調査した御幸木部遺跡群は、近世期には、託麻郡田迎手永に属し、木部村を形成しており集落のそばを流れる溝（用水路）の上に位置していたと考えられる。

２）発掘調査による推定

今回の調査で判明した近世の遺構はS006の溝であった。この溝には矢穴を残した石垣が部分的に列をなしていた。このことから溝の北側は護岸状の石垣があったことが窺える。南側に加勢川が位置するため、堤防の意味もあったと推定され、堤塘でその上が道であったことが考えられる。また、堆積土が青色で粘性が強く悪臭の残る土層であったことから、流れの緩やかな用水路であったことも考えられる。

矢穴は43個確認され、幅は平均が9.1㎝であり３寸（９㎝）を超える。このことから江戸前期に溯る可能性が考えられる。(1)

溝内から出土した遺物を見ても17世紀初期～19世紀前半期と時期幅が広い（全体的にみて17世紀初期と18世紀後半の陶磁器が多く見られた）ことからこの溝は、17世紀（江戸前期）に用水路としてつくられ、19世紀前半期に埋められたことが推定可能である。その証拠に明治14年（1881年）までに作成された「熊本県管轄肥後国託麻郡木部村」の地図（図57参照）では、この溝（S006）の上は、「宅地」となっていることがわかる。

出土遺物は生活雑器であり、江戸時代の人々の生活を垣間見ることができる。

調査区外にあった林田氏の屋敷については、この溝との切りあい関係がないので、屋敷の築造時期は不明だが溝が埋められた前後の可能性が考えられる。馬門石が井戸枠に使用されていることから考えれば明治に入ってからかもしれない。

第３節　今後の課題

以下に反省と意向を踏まえて今後の課題としたい。

①弥生時代、古代の考察は付近の調査成果をもっと活用すべきであったこと。

②中世、近世の歴史解明のためには文献資料や金石文ばかりではなく、考古学の成果も合わせて考察することは言うまでもないが、文献資料の活用、歴史学の分野からの検討が不十分であったこと。

③今後の発掘調査が進む中で、また新たな事実関係を踏まえて、もう一度この遺跡の性格を問い直すべきであること。

【註】

(1) 前川清一氏の御教示による。

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台径 (cm)	残存高 (cm)	最大胴径 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	調査区	出土地点	層位 (取上No.)	胎土	備考
11	1	弥生土器	器台	裾端部	—	—	—	—	2.2～	—	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	1区	pit16	No. 3	石英、長石、角閃石、赤褐色粒子	
11	2	弥生土器	壺形土器	口縁部	—	—	—	—	2.7～	—	横ナデ	横ナデ	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/4)	良好	1区	pit16	No. 1	石英、長石、金雲母、赤褐色粒子	中期前半
11	3	弥生土器	壺形土器	口縁部	—	—	—	—	1.9～	—	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好	1区	pit26	2層	石英、長石、角閃石、輝石、赤褐色粒子	黒髪式土器
11	4	弥生土器？	高杯形土器？鉢形土器？	口縁部	—	—	—	—	4.3～	—	摩滅	摩滅	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1区	pit27	No. 1	石英、長石、輝石、角閃石、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子	
11	5	弥生土器	壺形土器	口縁部	—	—	—	—	1.4～	—	横ナデ	横ナデ	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	良好	1区	pit32	No. 1	石英、長石、雲母	黒髪式土器
13	6	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	7.1～	—	横ナデ	横ナデ、ハケ目	灰白 (10YR8/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	不良	2区－1	S002	No. 7	輝石、角閃石、赤褐色粒子、石英、長石	残存状況が不良のため断面のみ
13	7	須恵器	杯蓋	口縁部～体部	(14.4)	—	—	—	1.7～	—	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、一部指頭圧痕	灰 (N6/)	灰 (N5/)	良好	2区－1	S002	No. 5	白色粒子、黒色粒子	8世紀後半、つまみなし？
13	8	土師器	高台付杯	底部	—	(8.0)	—	—	2.7～	—	摩滅	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	2区－1	S002	No. 2	石英、長石、金雲母、赤褐色粒子、黒色粒子	外面丹塗り
13	9	土師器	高杯	口縁部	—	—	—	—	4.3～	—	摩滅	摩滅	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	2区－1	S002	No. 8	黒色粒子、赤褐色粒子	内外面丹塗り、残存状況が不良のため断面のみ
14	10	須恵器	高台付杯	完形	13.8	8.0	4.2	—	—	—	ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	灰白 (N7/)	灰 (N6/)	良好	2区－1	S003	No.53.89	石英、長石、黒色粒子	8世紀後半？
18	11	弥生土器	壺	口縁部～胴部	(18.2)	—	—	—	16.3～	20.0	横方向ハケ、左右斜め方向にハケ調整	横方向ナデ、縦方向ハケ、指押さえの様なナデ	灰白 (7.5YR8/1)	黒 (7.5YR1.7/1)	良好	3区	S012		角閃石、斜長石	
18	12	弥生土器	鉢形土器	口縁部～底部	(16.1)	—	—	—	13.2～	17.7	ハケ後ナデ後指頭圧痕	回転ナデ、ハケ目後ナデ、タタキ後ナデ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	3区	S012	No. 1	角閃石、輝石、赤褐色粒子	
18	13	弥生土器	壺形土器	脚部	—	11.6	—	—	5.7～	—	ナデ	斜め、縦方向にハケ目、指押さえハケ後ナデ調整（底部）	浅黄 (2.5YR8/3)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	3区	S012	No. 2	輝石、石英、長石、角閃石、金雲母	
18	14	弥生土器	器台？	脚部	—	12.2	—	—	7.5～	—	指頭圧痕	1.8cm巾の斜め方向の細かいハケ目あり	浅黄 (2.5YR7/3)	灰黄 (2.5YR7/2)	良好	3区	S012	No. 6	輝石、石英、角閃石、雲母	
20	15	弥生土器	壺形土器	口縁部～脚台部	(21.4)	(14.8)	46.0	—	—	(23.4)	ナナメ方向ハケ調整、不定方向ナデ	タタキ後ハケ調整、ナデ、横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	3区	S009		角閃石、斜長石、石英、赤色土粒	黒斑あり
20	16	弥生土器	壺形土器	口縁部～胴部	17.5	—	—	—	32.0～	19.8	横ナデ、ハケ調整、ナデ、押さえ有り	横ナデ、縦方向ハケ調整	橙（口縁部）(7.5YR7/6) 浅黄橙（底部）(7.5YR8/6)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	良好	3区	S009		石英、角閃石、斜長石、大粒の砂粒	黒斑あり
20	17	弥生土器	二重口縁壺形土器	口縁部～胴部上半部	(20.4)	—	—	—	24.3～	25.3	不定方向のハケ目調整、指押さえ後ナデ消し	縦方向ハケ調整、櫛措文、横ナデ、横方向ハケ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	3区	S009		角閃石、斜長石、非常に細かい	黒斑あり
21	18	弥生土器	小型の鉢形土器	ほぼ完形	10.2	—	6.9	—	—	10.5	指頭圧痕後ナデ	斜めのハケ目（胴部）、不定方向のナデ（底部）	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄色 (10YR8/4)	良好	3区	S009	No.80	長石、角閃石、輝石、雲母	口縁部に2個組の穴が不規則に4ケ所入る（内から外へ）
21	19	弥生土器	壺形土器	ほぼ完形	27.4	—	32.6	—	—	28.5	横ハケ、ハケ調整	縦方向ハケ調整、横ナデ、くびれ部に刺突状の沈線あり	橙 (5YR6/8)	明赤褐 (5YR5/6) 極暗赤褐 (5YR2/3)	良好	3区	S009		角閃石、斜長石、石英、小石（5mm大）を含む	黒斑あり
21	20	弥生土器	壺形土器	口縁部～胴部下半部	22.3	—	—	—	39.0～	26.5	横方向ハケ調整、縦方向ハケ調整	タタキ、ナデ、ハケ調整、横ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	3区	S009		石英、角閃石、斜長石	黒斑あり

表(Tab) 6　土器観察表（1）

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径	底径	器高	高台径	残存高	最大胴径	調整		色調		焼成	調査区	出土地点	層位（取上No.）	胎土	備考
					(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(内面)	(外面)	(内面)	(外面)						
21	21	弥生土器	台付鉢	口縁部～胴部	(22.0)	—	—	—	11.6～	18.5	横方向ハケ調整、不定方向ハケ	横方向ナデ、斜め方向ハケ調整	浅黄橙（7.5YR8/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	良好	3区	S009		角閃石、斜長石	
21	22	土師器	台付鉢	鉢部	15.1	—	—	—	10.4～	—	ハケ後ナデ	回転横ナデ、ハケ後ナデ	灰白（2.5YR7/1）	灰白（2.5YR7/1）	良好	3区	S009	No.276.277.278 東一括	輝石、長石	
22	23	弥生土器	小型の鉢形土器	ほぼ完形	7.7	—	6.0	—	—	9.6	回転横ナデ、指頭圧痕	斜めのハケ目後回転ナデ、不定方向の強いハケ目（底部）	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	良好	3区	S009	No.40.44.46.175.359.2層	輝石、長石、角閃石、雲母	口縁に少しゆがみあり
22	24	弥生土器	鉢形土器	ほぼ完形	15.3	—	11.5	—	—	17.5	横ナデ、不定方向ナデ、指押さえ痕	ハケ後指押さえ、ハケ調整後ナデ、ハケ調整	浅黄橙（7.5YR8/4）	浅黄橙（7.5YR8/4）	良好	3区	S009		精製されており、非常に細かい、角閃石、斜長石、赤色土粒	黒斑あり
22	25	弥生土器	鉢形土器	ほぼ完形	21.7	—	11.0	—	—	18.9	横方向に工具ナデ、ハケ調整指押さえ後ナデ	横ナデ、斜め方向ハケ調整、ハケ調整後不定方向ナデ仕上げ	浅黄橙（7.5YR8/4）	にぶい橙（7.5YR7/4）	良好	3区	S009		角閃石、斜長石、赤色土粒	
22	26	弥生土器	鉢形土器		(15.0)	—	11.8	—	—	(16.0)	回転ナデ、ハケ後ナデ、指頭圧痕	回転ナデ、ナデ、タタキ	にぶい黄橙（10YR7/2）	にぶい黄橙（10YR7/2）	良好	3区	S009	No.159 北一括	輝石、長石、角閃石、赤褐色粒子	
22	27	弥生土器	壺形土器	口縁部～胴部上半部	21.0	—	—	—	30.3～	24.0	ナナメ方向ハケ調整、ハケ調整	横ナデ後横方向タタキ	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	良好	3区	S009		角閃石、斜長石、石英、砂粒	黒斑あり
22	28	弥生土器	壺形土器	ほぼ完形	14.4	—	33.9	—	—	21.5	ハケ後指押さえ、斜め方向ハケ調整、ハケ調整後ナデ消し	回転横ナデ、縦方向ハケ調整、ハケ調整後ナデ消し	浅黄橙（7.5YR8/6）	浅黄橙（7.5YR8/6）	良好	3区	S009		角閃石、斜長石、石英、赤色土粒	黒斑あり、丸底
23	29	弥生土器	壺形土器	胴部上半部	—	—	—	—	12.5～	—	縦方向ハケ目	刻み目突帯、斜め方向ハケ目	にぶい橙（7.5YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/4）	良好	3区	S009	No.69	粗い石英、赤褐色粒、小さい白色粒、雲母	突帯
23	30	弥生土器	高杯形土器	杯部	32.5	—	—	—	7.3～	—	放射状の暗文あり	不定方向ナデ、横ナデ、ハケ調整	橙（5YR6/8）	橙（5YR6/8）	良好	3区	S009		角閃石、斜長石、石英	黒斑あり
29	31	肥前磁器	染付皿	口縁部～高台部	(13.2)	—	2.8	(5.2)	—	—	施釉	施釉	暗褐灰（10G4/1）	暗褐灰（10G4/1）	良好	3区	S006	No.328	精製されている、黒色粒子がわずかに残る、緑灰 5G6/1（胎土）	1630～1640、肥前の初期伊万里、高台が1/4程度残る、畳付に砂付着（目積痕？）、ロクロ形成、植物文様？
29	32	肥前磁器	染付皿	口縁部～高台部	14.0	—	3.1	6.4	—	—	施釉	施釉	暗灰（5B5/1）青黒（5B2/1）	暗灰（5B5/1）青黒（5B2/2）	良好	3区	S006、X－25.45、Y－43	2層	精製されている 明青灰 5BG 7/1（胎土）	1640～1650、畳付に砂付着、草花の文様
29	33	肥前陶器	天目椀	口縁部	(12.0)	—	—	—	4.2～	—	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉薬、ヘラ削り後施釉、（蛇地部分）回転ナデ、ナデ	黒褐（10YR3/）	黒褐（10YR3/1）	—	3区	S006、A－41	2層		1590～1630
29	34	肥前陶器	擂鉢	口縁部	(21.0)	—	—	—	3.2～	—	回転ナデ後11本単位のクシ目	口縁上部のみ施釉、回転ナデ	にぶい赤褐（5YR4/3）	にぶい赤褐（5YR4/3）	—	3区	S006、X－45	2層		17世紀、第2・3四半期
29	35	肥前青磁	香炉（三脚付き）	口縁部～高台部	(9.8)	—	7.5	4.7	—	—	回転ナデ、口縁部まで施釉	回転ナデ後施釉、3ケ所に脚が付く	灰白（2.5Y7/1）	緑灰（7.5Y6/1）	—	3区	S006、Y－45、Z－42.44	2層.Tr2層		17世紀後半
29	36	肥前陶器	皿	口縁部～高台部	(13.0)	—	3.6	4.4	—	—	ナデ後施釉、胎土目（見込み）	ナデ（口縁部）、粗いヘラケズリ？（胴部）	暗灰黄（2.5Y4/2）	暗灰黄（2.5Y4/2）	良好	3区	S006	No.314		胎土目つけ痕、1590－1610
29	37	肥前陶器	椀	口縁部～高台部	(11.5)	—	6.5	4.6	—	—	回転ナデ後施釉	回転ナデ後底部ヘラ削り	緑灰（5G5/1）	緑灰（5G5/1）	—	3区	S006、Z－44	トレンチ1層		緒野内野山、17世紀第4～18世紀前期、釉の緑色グラデーションあり
29	38	肥前陶器	椀	口縁部～高台部	(10.8)	—	8.5	5.0	—	—	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉、削り後ナデ、削り出し	にぶい橙（5YR6/3）	にぶい橙（5YR6/3）	—	3区	S006	2層		17世紀前半

表(Tab) 7　土器観察表（2）

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台径 (cm)	残存高 (cm)	最大胴径 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	調査区	出土地点	層位 (取上No.)	胎土	備考
29	39	肥前陶器	片口鉢	口縁部～底部	(15.1)	(12.2)	12.0	—	—	—	タタキの当て具痕あり、施釉	叩き成形、施釉	黒 (2.5Y2/1)	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	良好	3区	S006、A－40	2層		1580～1610、注ぎ口のふくらみ残る
29	40	肥前陶器	壺	口縁部～胴部下半部	(32.0)	—	—	—	22.2～	(36.5)	施釉	施釉	暗褐 (10YR3/3)	灰白 (2.5Y8/2) 暗オリーブ (5Y4/4)	良好	3区	S006	No.312	精製されている、にぶい赤褐 2.5YR5/4（胎土）	17世紀後半～18世紀前半、緑と茶色、ロクロ成形、ナデによる段々がつく、胴部の一部に細かい貫入、二彩手
30	41	肥前陶器	火入れ	ほぼ完形	(7.3)	—	4.7	4.0	—	—	回転ナデ、口縁部まで施釉	回転ナデ、素地（底部・高台）	褐灰（施釉）(7.5YR5/1) にぶい橙 ((7.5YR7/4)	褐灰（施釉）(7.5YR5/1) 橙 (7.5YR7/6)	—	3区	S006、A－42	2層		18世紀前、鉄釉
30	42	肥前陶器	小鉢	ほぼ完形	8.8	—	5.1	3.8	—	—	施釉	回転ナデ、高台近くまで施釉	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	—	3区	S006、A－39.40.41、Z－42	1層、2層		18世紀、歪みあり、笹の文様？、鉄釉、他はにぶい黄色の釉
30	43	肥前陶器	皿	口縁部～高台部	(12.1)	—	3.4	4.5	—	—	回転ヘラケズリ後施釉、蛇の目釉剥ぎ	回転ヘラケズリ	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	良好	3区	S006、A－40	2層		嬉野内野山窯18世紀前、蛇の目釉剥ぎ
30	44	肥前陶器	擂鉢	口縁部	(34.0)	—	—	—	7.0～	—	回転ナデ10本単位のクシ目	回転ナデ、口縁部に鉄釉あり	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	—	3区	S006、A－42	2層		18世紀中期、第2・3四半期
30	45	肥前磁器	染付皿	口縁部～高台部	(13.0)	—	3.7	(6.8)	—	—	施釉	施釉、露胎	青灰 (10BG5/1)	青灰 (10BG5/1)	良好	3区	S006	2層	精製されている、明緑灰 10GY8/1（胎土）	18世紀前半、内面は梅、外面は唐草文
30	46	肥前陶器	油用瓶	口縁部～高台部	3.4	—	13.4	6.0	—	—	施釉	回転ナデ	黒褐 (10YR2/3)	黒褐 (10YR2/3)	良好	3区	S006	No.372	精製されている	18世紀前半、把手欠損、ロクロ成形
30	47	肥前陶器	徳利	体部～高台部	—	—	—	8.0	18.0～	15.0	施釉	施釉、呉須白化釉	灰白 (7.5Y8/1) 暗青灰 (5BG3/1)	灰白 (7.5Y8/1) 暗青灰 (5BG3/1)	良好	3区	S006、E－43、Tr1層	No.270.343、1.2層	精製されている、にぶい黄橙 10YR7/4（胎土） 浅黄 5Y7/3（胎土）	18世紀第2・3四半期、ロクロ成形、草花の文様？
30	48	肥前陶器	台付皿	ほぼ完形	20.0	—	8.0	7.8	—	—	施釉	施釉	オリーブ黒 (5Y3/2)	オリーブ黒 (5Y3/2)	良好	3区	S006、A－40.41 Z－42.B		精製されている、オリーブ黄 5Y6/4（胎土）	18世紀前半
30	49	肥前陶器	皿	口縁部～高台部	18.6	—	4.8～6.1	7.8	—	—	蛇の目釉剥ぎ（見込み）	回転ナデ、露胎	灰白 (2.5Y8/1) オリーブ褐 (2.5Y4/6)	灰白 (2.5Y8/1) オリーブ褐 (2.5Y4/6)	良好	3区	S006、A－41		精製されている、浅黄 2.5Y7/3（胎土）	18世紀前～中、歪みがある
31	50	肥前磁器	小杯	口縁部～高台部	(5.6)	—	2.7	(1.0)	—	—	施釉	施釉	暗青灰 (5B3/1)	暗青灰 (5B3/1)	良好	3区	S006		精製されている、明緑灰 10GY8/1（胎土）	1780～1810、18世紀後半
31	51	肥前系磁器	湯飲み椀	口縁部～高台部	8.5	—	5.3	3.7	—	—	施釉	施釉	青黒 (5B2/1)	青 (5B2/1)	良好	3区	S006、A－41.42	2層	精製されている、暗緑灰 5G7/1（胎土）	1780～1820、内外面全体に貫入あり、草と切り株？の文様
31	52	肥前系磁器	湯飲み椀	口縁部～高台部	7.4	—	5.6	4.0	—	—	施釉	施釉	青黒 (5B2/1)	青黒 (5B2/1)	良好	3区	S006、Z－42	Tr一括	精製されている、明青灰 5BG7/1（胎土）	1780～1810、ロクロ成形、菊花文、四方襷文、唐草文、コンニャク印判による五弁花
31	53	肥前系磁器	染付椀	ほぼ完形	11.8	—	5.3	4.4	—	—	アルミナ塗布	施釉	暗緑灰 (10G4/1) オリーブ黒 (10Y3/2)	暗緑灰 (10G4/1) オリーブ黒 (10Y3/2)	良好	3区	S006、Z－42、43		精製されている、明緑灰 5G7/1（胎土）	18世紀末～19世紀初期、ロクロ成形、丸に斜線の紋様、襷文、コンニャク印判による五弁花
31	54	波佐見磁器	染付椀	ほぼ完形	10.0	—	5.5	4.0	—	—	施釉	施釉	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	3区	S006、A－41.42		精製されている暗オリーブ灰 2.5GY7/1（胎土）	18世紀、二重アミ目文、高台～畳付に砂付着、くらわんか手の椀
31	55	肥前系青磁	染付椀	口縁部～高台部	9.5	—	5.8	3.5	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ (5Y4/2)	オリーブ (5Y5/4)	やや不良	3区	S006		精製されている 浅黄 5Y7/3（胎土）	18世紀後半、青磁染め付け、ロクロ成形、内外面に貫入あり、四方襷文、二重圏線、コンニャク印判による五弁花
31	56	波佐見磁器	染付椀	ほぼ完形	10.0	—	4.9	4.1	—	—	施釉	施釉	青灰 (10BG6/1)	青灰 (10BG6/1)	良好	3区	S006、A－41	1層	精製されている、明緑灰 10GY8/1（胎土）	18世紀後半、ロクロ成形、畳付に砂付着、くらわんか手の椀

表(Tab) 8　土器観察表（3）

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台径 (cm)	残存高 (cm)	最大胴径 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	調査区	出土地点	層位 (取上No.)	胎土	備考
31	57	肥前磁器	染付椀	ほぼ完形	9.9	—	5.0	3.4	—	—	施釉	施釉	青灰 (10BG6/1)	青灰 (10BG6/1)	良好	3区	S006、A－41		精良、明緑灰 10GY8/1（胎土）	1770～1870、梵字文
31	58	肥前磁器	染付椀	ほぼ完形	10.0	—	5.4	3.8	—	—	施釉	施釉	明青灰 (10BG7/1)	明青灰 (10BG7/1)	良好	3区	S006. A－42. Z－42		精製されている、明緑灰 5G7/1（胎土）	18世紀中～末期、肥前、ロクロ成形、畳付に砂付着
32	59	関西系陶器	椀	ほぼ完形	9.0	—	5.2	3.0	—	—	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、凹線、削り出し高台	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	—	3区	S006、Z－42	2層		18世紀後期、笹文？
32	60	（波佐見）磁器	染付皿	口縁部～高台部	12.0	—	3.7	4.5	—	—	施釉	回転ナデ	暗オリーブ (7.5Y4/3)	暗オリーブ (7.5Y4/3)	良好	3区	S006		精製されている、灰白 10Y8/1（胎土）	18世紀頃、目積み跡あり、蛇の目釉剥ぎ、畳付に砂付笹、くらわんか手の皿、アルミナ塗布、二重斜格子文
32	61	関西系陶器	徳利	体部	—	—	—	—	20.6～	18.0	施釉	施釉	赤黒 (10R2/1)	赤黒 (10R2/1)	良好	3区	S006		精製されている、黄 2.5Y7/8（胎土）	18世紀後半～19世紀前半、ロクロ成形、胴部下半に凹み4ヶ所、ホテイさん貼り付け、「宝山」の刻印
32	62	小代焼	皿	口縁部～高台部	(10.6)	—	8.9	(8.6)	—	—	施釉	施釉	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3) 青黒 (5B2/1)	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3) 青黒 (5B2/1)	良好	3区	S006	No.265 No.332	精製されている、褐色 10YR4/4（胎土）	18世紀後半～幕末？、ロクロ成形、
32	63	肥前青磁	火入れ	口縁部～底部	(10.4)	—	7.7	6.4	—	—	施釉、回転ナデ（素地部分）、砂目（見込み部分）	ヘラケズリによる釉のかき取り（高台の底部）	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	良好	3区	S006、A－41	1層	灰白 5Y7/1（素地部分）	18世紀後半、高台に砂目跡と窯詰めの跡あり、見込みには砂が残っている。高台は蛇の目高台、かなり歪みあり
32	64	陶器	土瓶	口縁部～高台部	10.9	—	12.6	—	—	19.6	ヘラ状工具によるケズリ	ナデ、露胎	オリーブ灰 (10Y3/2)	オリーブ黒 (7.5Y3/2)	良好	3区	S006、A－42	2層	精製されている、1～3mmの白色粒子が混じる、にぶい黄橙10YR6/4（胎土）	18世紀後半～幕末、薩摩焼の可能性大
33	65	陶器	椀か皿	高台部	—	3.8	—	—	2.0～	—	回転ナデ後施釉	施釉、回転ナデ（素地部分）	オリーブ褐 (2.5Y4/3)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	—	3区	S006、Z－43	2層		近世、墨書「十」
33	6	土師器（カワラケ）	小皿（灯明皿？）	ほぼ完形	8.3	5.3	1.3	—	—	—	回転ナデ	糸切り痕（底面）、回転ナデ	灰黄 (2.5YR6/2)	暗灰黄 (2.5YR5/2)	良好	3区	S006、B－39	2層	白色粒子、黒色粒子	近世、胎土中に含まれる粒子が少なく極細い
33	67	瓦質土器	高杯？燭台？	杯部～脚部	(26.2)	—	—	—	19.7～	—	ナデ後磨き	ナデ後磨き（脚部）、縦ナデ後磨き	灰白 N4/（露胎）	灰白 N5/（露胎）	良好	3区	S006		長石、輝石、雲母	近世、黒色に磨研
33	68	土師器	焙烙	口縁部～体部	(30.2)	—	—	—	8.0～	—	回転横ナデ	回転横ナデ、被熱のため不明（底部）	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/5)	良好	3区	S006、A－41.42	2層	輝石、長石、角閃石、赤褐色粒子	穿孔が1つ確認できる
33	69	陶器	壺	口縁部～体部上半部	(25.4)	—	—	—	14.5～	(32.5)	回転横ナデ	回転横ナデ	灰赤 (2.5YR4/2)	赤黒 (10YR2/1)	良好	3区	S006、Z－44	2層		肥前17世紀後、格子目の当て具痕
33	70	陶器	壺	口縁部	(20.0)	—	—	—	9.2～	—	回転横ナデ	回転横ナデ、凹線	赤灰 (2.5YR4/1)	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	良好	3区	S006、Z－44	2層	長石、輝石	肥前17世紀前、同心円状の当て具痕
33	71	瓦質土器	壺	口縁部	(49.2)	—	—	—	12.8～	—	工具によるナデ	ヘラケズリ、回転横ナデ	灰（N5/）	灰（N4/）	良好	3区	S006. Z－42.43.45	1層	輝石、長石	
36	94	輸入磁器	椀？	高台部	—	—	—	4.1	2.0～	—	施釉	施釉	暗青灰 (5B3/1)	暗青灰 (5B3/1)	良好	3区	S006、Z—44	Tr一括	精製されている、明青灰 5B7/1（胎土）	16世紀末～17世紀初期、ロクロ成形、高台の内側に目積痕、高台部のみ残る
36	95	輸入磁器	染付皿か椀	高台部	—	—	—	(4.6)	1.5～	—	施釉	施釉	暗青灰 (5B3/1)	暗青灰 (5B3/1)	良好	3区	S006 Y－42	2層	精製されている、明青灰 5B7/1（胎土）	1580～1600、ロクロ成形、明の染付
36	96	輸入磁器	染付皿	口縁部～体部上半部	(11.6)	—	—	—	2.7～	—	染付	染付	暗緑灰 (7.5GY7/1)	暗緑灰 (7.5GY7/1)	良好	3区	S006、Z－43	2層		明代、16世紀後半、小野縞年染付皿B2群
36	97	輸入陶器	椀か皿	高台部	—	4.3	—	—	1.1～	—	回転ナデ後施釉、目アト	回転ナデ後施釉、露胎	灰白 (10YR8/1)	灰白 (10YR8/1)	—	3区	S006、A－41	1層		墨書「一」、高台に4ヶ所の目跡痕あり、15世紀代
36	98	輸入磁器	青磁椀	口縁部～体部上半部	(14.8)	—	—	—	5.4～	—	施釉	ヘラ彫りによる鎬蓮弁文、施釉	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)	良好	3区	S006、B－39	2層		龍泉窯系青磁Ⅱ－b類D期（12世紀中～後）

表(Tab) 9　土器観察表（4）

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台径 (cm)	残存高 (cm)	最大胴径 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	調査区	出土地点	層位 (取上No.)	胎土	備考
36	99	輸入磁器	青磁皿	底部	—	(4.0)	—	—	1.1～	—	櫛描文とヘラによる文様後施釉	回転ヘラケズリ後施釉	灰オリーブ (7.5Y6/2)	灰オリーブ (7.5Y6/2)	良好	3区	S006、A－41	2層		同安窯系青磁、D期（12世紀中～後）
36	100	輸入磁器	椀	体部下半部～高台部	—	4.7	—	—	4.3～	—	回転ナデ後施釉	線、蓮弁文、回転ナデ後施釉、削り出し高台	緑灰 (7.5GY6/1)	緑灰 (7.5GY6/1)	—	3区	S006、A－41	2層		15世紀中～16世紀前、龍泉窯系、外面は釉が垂れてムラがある
37	101	瓦質土器	火鉢	口縁部	—	—	—	—	9.6～	—	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、突帯2条	黄灰 (2.5Y5/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	良好	3区	S006	1層	輝石、長石、雲母、角閃石	中世、X字状のスタンプ
37	102	瓦質土器	火鉢	口縁部	—	—	—	—	6.7～	—	横ナデ、斜め方向ハケ目	突帯、横ナデ	暗青灰 (N4/1)	暗青灰 (N3/1)	良好	3区	S006、A－42	2層	白色粒、輝石	一部のみ残存、巴文と格子目状のスタンプ
37	103	瓦質土器	火鉢	口縁部	—	—	—	—	4.5～	—	回転ナデ	横ナデ、1条の突帯	灰黄 (2.5Y6/2)	黄灰 (2.5Y5/1)	良好	3区	S006		輝石、長石、金雲母	一部のみ残存、六角形と格子目状のスタンプ
37	104	瓦質土器	擂鉢	口縁部	—	—	—	—	8.8～	—	回転ナデ、4～7本のクシ目	回転ナデ、指頭圧痕	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	良好	3区	S006	No.277	輝石、長石、雲母	中世
37	105	瓦質土器	火鉢	口縁部	(34.6)	—	—	—	15.9～	—	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、ナデ、突帯2条	灰 (N4/)	灰 (N4/)	良好	3区	S006、Z－43.Tr	1層	長石、雲母	中世、菊花文のスタンプ、くし描きの波文
37	106	瓦質土器	擂鉢	底部	—	—	—	—	6.4～	—	ナデ後5本のクシ目	ナデ、回転ナデ、指頭圧痕	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	良好	3区	S006、Z－42	8層	輝石、長石、雲母	中世
37	107	瓦質土器	小型火鉢か線香立て	口縁部～脚部	(13.3)	—	6.5	—	—	(14.2)	ヘラ？による回転ナデ	回転ナデ、丁寧なナデ（脚部）	暗灰黄 (2.5Y5/2)	黄灰 (2.5Y4/1)	良好	3区	S006、Z－44	2層	石英、長石、輝石、雲母	中世の三脚か？
37	108	瓦質土器	火鉢	底部	—	(19.2)	—	—	5.7～	—	横ナデ	横ナデ、ヘラケズリ	灰 (7.5Y4/1)	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	良好	3区	S006、Z－43.Tr	1層	石英、長石	中世、三脚、脚がすり切れている
38	113	須恵器	杯蓋	口縁部～つまみ部	(14.7)	—	1.8	—	—	—	ナデ、回転横ナデ	ナデ、回転横ナデ	灰白 (N7/)	灰白 (N7/)	良好	3区	S006	2層	輝石、長石	古代（8世紀後半）、つまみ径1,9cm
38	114	須恵器	杯蓋	口縁部～底部	(15.0)	—	2.7	—	—	—	ナデ、回転横ナデ	ナデ、回転横ケズリ	灰 (N5/)	灰 (N4/)	良好	3区	S006、Z－43	ベルト1層	輝石、長石	古代（8世紀後半）
38	115	須恵器	杯蓋	口縁部～底部	(13.1)	—	1.4	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	3区	S006、Y－45	2層	輝石、長石	古代（8世紀後半）
38	116	土師器	杯	底部	—	—	—	—	1.3～	—	回転横ナデ、ナデ	ヘラ切り後ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	3区	S006	ベルト2層	赤褐色粒子、石英、胎土が緻密	刻書「用」？
38	117	土師器	杯？	底部	—	—	—	—	1.2～	—	回転横ナデ、ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	3区	S006、Z－43		長石、赤褐色粒子	刻書「根」
38	118	土師器	鉢	口縁部～底部	(12.4)	9.3	7.3	—	—	—	回転横ナデ、指頭圧痕	回転横ナデ、未調整だと思われるナデ、指の痕	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	3区	S006	No356	輝石、長石、赤褐色粒子、雲母	
38	119	土師器	甕	口縁部～胴部上半部	(24.2)	—	—	—	9.5～	—	回転横ナデ、ヘラケズリ	回転横ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	3区	S006	No363	石英、長石、角閃石、赤褐色粒子、輝石	器壁厚い
38	120	土師器	高杯	口縁部～高台端部	(20.8)	12.0	9.4	—	—	—	回転ナデ後丁寧なヘラミガキ	回転ナデ（脚部のみ）、回転ナデ後ヘラミガキ（坏部）	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	3区	S006、A－41.42	1層、2層	石英、長石、角閃石、赤褐色粒子、雲母	古代（8世紀後半）
38	121	土師器	高杯	口縁部～高台端部	(18.0)	13.0	9.4	—	—	—	回転ナデ、不定方向ナデ（底面）	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	良好	3区	S006、Z－43.44	1.2層.Tr 1.2層	石英、長石	古代（8世紀後半）
39	122	弥生土器	二重口縁壺形土器	口縁部	(23.2)	—	—	—	7.4～	—	回転横ナデ	回転横ナデ、波状文	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	3区	S006、Z－44	2層	石英、輝石、長石、角閃石、雲母	弥生時代後期

表(Tab)10　土器観察表（5）

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台径 (cm)	残存高 (cm)	最大胴径 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	調査区	出土地点	層位 (取上No.)	胎土	備考
39	123	弥生土器	二重口縁壺形土器	口縁部	—	—	—	—	4.6～	—	回転横ナデ、刻目	回転横ナデ	灰（N5/）	灰（N5/）	良好	3区	S006、Z－42	2層	石英、輝石、長石、角閃石	弥生中期前半、城越式土器
42	136	輸入磁器	青磁椀	底部	—	5.6	—	—	2.7～	—	花文のスタンプ？（見込み）	ヘラ切り（底部）、高台付近まで施釉	暗緑灰（7.5GY7/1）	暗緑灰（7.5GY7/1）	良好	3区	S008	No. 2		龍泉窯系青磁、G期（14世紀初～後）、Ⅳイ類
44	137	輸入磁器	白磁皿	口縁部～高台部	(10.1)	—	2.7	4.1	—	—	施釉	施釉	緑灰（5G6/1）	緑灰（5G6/1）	良好	3区	S014	No. 1	精製されている	16世紀末～1630、ロクロ成形、内外面施釉、貫入あり、削り出し？、中国福建省の白磁
49	138	土師器	甕	口縁部	(17.8)	—	—	—	3.8～	—	ケズリ	横ナデ	褐灰（10YR5/1）	浅黄橙（7.5YR8/4）	良	2区－1	S－18	1層	石英、長石、輝石、角閃石、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、砂粒	
49	139	土師器	甕	口縁部	—	—	—	—	6.7～	—	横ナデ、ケズリ	横ナデ	橙（5YR7/6）	にぶい橙（5YR7/4）	良好	2区－1	北西Tr	2層	石英、長石、輝石、角閃石、赤褐色粒子	
49	140	土師器	甕	口縁部	(25.0)	—	—	—	6.5～	—	回転横ナデ、ハケ目、ケズリ	回転横ナデ、ハケ目	にぶい橙（5YR7/4）	橙（5YR7/6）	良好	2区－1		2層 No.17	石英、輝石、長石、角閃石、赤褐色粒子、雲母	
49	141	土師器	甕	口縁部	—	—	—	—	5.2～	—	横ナデ、ケズリ	横ナデ	灰白（10YR8/2）	灰白（7.5YR8/2）	良好	2区－1	S－19、撹乱	1層	石英、長石、輝石、角閃石、黒色粒子、赤褐色粒子	
49	142	土師器	甑	口縁部	(25.0)	—	—	—	6.6～	—	ハケ目、横ナデ、回転ケズリ	回転横ナデ、ハケ目	にぶい黄橙（10YR7/2）	にぶい橙（5YR7/4）	良好	2区－1	S－19	1層	石英、長石、輝石、角閃石、赤褐色粒子、雲母	頚部に凹状のへこみ1条
49	143	土師器	甕	口縁部	—	—	—	—	8.3～	—	ハケ目、ケズリ	横ナデ、ハケ目	浅黄（10YR8/3）	にぶい黄橙（10YR7/2）	良好	2区－1	S－19	3層	石英、長石、輝石、角閃石、砂粒	（青灰粘土質）
49	144	土師器	甕	口縁部～胴部上半部	(25.4)	—	—	—	9.0～	—	回転横ナデ、ケズリ	回転横ナデ、ハケ目	にぶい橙（10YR7/3）	にぶい橙（10YR7/4）	良好	2区－1	S－19	1層	石英、輝石、長石、角閃石、赤褐色粒子	
49	145	土師器	甕	口縁部	(26.0)	—	—	—	9.6～	—	横ナデ（口唇部）、ケズリ	横ナデ（口縁部）、縦方向ハケ目（胴部）	橙（5YR7/6）	にぶい橙（10YR7/2）	良好	2区－1	S－19	1層.2層 No69.74	石英、長石、輝石、角閃石、雲母、赤褐色粒子	
49	146	土師器	甕	口縁部～胴部上半部	(26.2)	—	—	—	11.5～	—	回転横ナデ、ケズリ	回転横ナデ、ハケ目、ハケ目後回転横ナデ	にぶい橙（5YR7/4）	にぶい橙（5YR7/5）	良好	2区－1	T－19、No83	2層. No.83	石英、長石、角閃石、輝石、赤褐色粒子、雲母	
49	147	須恵器	蓋	口縁部～つまみ	(15.4)	—	1.4	—	—	—	ナデ、回転ナデ、指頭圧痕	ケズリ後ナデ、回転ナデ	にぶい赤褐（5YR5/3）	灰（10YR6/1）	不良	2区－1	南西Tr、撹乱.一括	1層	石英、長石、白色粒子	8世紀後半、凝宝珠形つまみあり
50	148	須恵器	杯蓋	口縁部～体部	19.6	—	—	—	2.4～	—	回転ナデ	ナデ、回転ナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	にぶい橙（7.5YR7/4）	やや不良	2区－1	S002、S－18	1層.2層 No.8	長石、黒色粒子	8世紀後半、つまみ不明
50	149	須恵器	杯蓋	ほぼ完形	13.0	3.3	2.5	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	灰黄（2.5Y6/2）	灰オリーブ（5Y6/2）	不良	2区－1	北西Tr	2層. No.60.63	長石、白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子	8世紀後半、輪状のつまみあり、荒尾産？
50	150	須恵器	杯蓋	口縁部～体部	14.0	—	—	—	2.1～	—	回転ナデ	ナデ、回転ナデ	灰（N4/）	灰（N6/）	良好	2区－1	S－19	1層	石英、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	8世紀後半、つまみ不明
50	151	須恵器	杯蓋	口縁部～体部	(15.2)	—	—	—	2.1	—	ナデ、回転ナデ	ケズリ、回転ナデ	灰白（5Y7/1）	灰白（N7/）	良	2区－1		2層. No. 1	石英、長石、輝石、白色粒子、黒色粒子	8世紀後半、つまみなし？
50	152	須恵器	高台付杯	口縁部～底部	(17.0)	(6.5)	5.7	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰褐（7.5YR5/2）	灰（N5/）	良	2区－1	S－19	1層	長石、輝石、赤褐色粒子	8世紀後、赤焼けなので荒尾産？
50	153	須恵器	高台付椀	口縁部～底部	(14.8)	(6.2)	6.0	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白（N8/）	灰白（N7/）	やや不良	2区－1	S－19	1層	白色粒子、黒色粒子、砂粒	8世紀後半～9世紀前半
50	154	須恵器	杯	口縁部～底部	(12.0)	6.2	3.8	—	—	—	回転ナデ	ケズリ、回転ナデ	灰（N6/）	灰（N6/）	良	2区－1	北西Tr、南西Tr	1層. 2層	白色粒子、黒色粒子	8世紀後～9世紀前半、高台なし
50	155	須恵器	高台付杯	口縁部～高台部	(11.2)	6.4	3.5	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰（N6/）	灰（7.5YR6/1）	良好	2区－1		2層. No.34	石英、長石、白色粒子、黒色粒子	8世紀後半？高台が磨耗により短い（意図的？）
50	156	須恵器	高台付杯	口縁部～底部	(13.2)	(9.0)	—	—	4.7	—	ナデ、回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙（7.5YR6/4）	橙（5YR6/6）	やや不良	2区－1	T－19	1”層	石英、長石、白色粒子	萩尾型椀、8世紀前？

表(Tab)11　土器観察表（6）

図版番号	遺物番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台径 (cm)	残存高 (cm)	最大胴径 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	焼成	調査区	出土地点	層位 (取上No.)	胎土	備考
50	157	須恵器	二重口縁壺	口縁部～頸部	(27.2)	—	—	—	5.1～	—	回転ナデ	回転ナデ	灰 (10YR5/)	灰 (10Y4/1)	良好	2区－1	S－19	1層	石英、長石、白色粒子	8世紀後～9世紀前
50	158	土師器	杯	口縁部～底部	(12.7)	(6.1)	3.3	—	—	—	横ナデ	横ナデ、ハケ目	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良	2区－1	S－19	1層	輝石、長石、雲母	内外面丹塗り
50	159	土師器	杯	口縁部～底部	(12.1)	7.4	3.2	—	—	—	回転ナデ	ケズリ、回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	良	2区－1	S－18	2層	輝石、赤褐色粒子	内外面丹塗り
50	160	土師器	杯	口縁部～底部	(13.8)	8.0	3.4	—	—	—	回転ナデ	ハケ目、回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良	2区－1	S－19	1層	長石、赤褐色粒子	
50	161	土師器	高台付杯	底部	—	(12.8)	—	—	3.1～	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	不良	2区－1	一括		石英、長石、角閃石、輝石、雲母、赤褐色粒子	内外面丹塗り
50	162	土師器	杯	ほぼ完形	13.8	9.0	4.1	—	—	—	横ナデ	ヘラ切り後ナデ (底部)、横ナデ	橙 (5YR7/6)	淡橙 (5YR8/3)	良好	2区－1	S－19	2層、No.32	石英、長石、角閃石、赤褐色粒子	
50	163	土師器	高台付杯	底部	—	(6.5)	—	—	2.7～	—	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい橙 (5YR7/4)	良	2区－1	S－19	1層	石英、輝石、長石、赤褐色粒子	9世紀中～後？
51	164	土師器	鉢	口縁部	(19.6)	—	—	—	5.6～	—	横ナデ、ケズリ	横ナデ、ハケ目	浅黄橙 (7.5YR8/4)	灰白 (10YR8/2)	良好	2区－1	S－19	1層、4層	石英、長石、輝石、角閃石、赤褐色粒子	
51	165	土師器	鉢	口縁部	—	—	—	—	5.1～	—	横ナデ	横ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	浅黄橙 (10YR8/3)	不良	2区－1	T－19	1層	石英、長石、角閃石、赤褐色粒子	
51	166	土師器	甕	口縁部～胴部	(9.1)	—	—	—	4.8～	—	横ナデ、ケズリ	横ナデ、ハケ目	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR5/3)	良	2区－1	S－19	1層	石英、長石、輝石、角閃石、赤褐色粒子	
51	167	土師器	甑	胴部～底部	16.7	—	—	—	11.7～	—	ケズリ	ハケ目調整の痕跡がわずかに残るものの判別不可能	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	2区－1	S－19	2層	石英、長石、輝石、角閃石、黒曜石、赤褐色粒子、砂粒	
51	168	土師器	鉢	口縁部～胴部下半部	(29.3)	—	—	—	9.6～	—	ナデ (口縁部)、ケズリ (底部)	ナデ (口縁部)、ハケ目	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	2区－1	S－19	1層、2層 No.65	石英、長石、輝石、角閃石、赤褐色粒子、砂粒	底部欠損、工具痕、煤の付着
53	173	須恵器	杯蓋	口縁部～つまみ部	16.9	—	1.7	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	やや不良	3区	古代遺物層		輝石、長石	8世紀後半
53	174	須恵器	杯蓋	口縁部～つまみ部	16.8	—	1.6	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	やや不良	3区	古代遺物層		輝石、長石、赤褐色粒子、雲母	8世紀後半
53	175	須恵器	高台付杯	口縁部～底部	(13.4)	(9.0)	4.5	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白 (5Y7/1)	灰 (5Y6/1)	やや不良	3区	古代遺物層		輝石、長石、雲母	8世紀後半、内面に丁寧なナデ
53	176	須恵器	高台付杯	口縁部～底部	(14.2)	(9.9)	4.1	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ、ナデ	灰 (N5/)	灰 (N4/)	良好	3区	古代遺物層		輝石、長石	8世紀後半
53	177	須恵器	高台付杯	口縁部～底部	—	(9.4)	6.2	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	良好	3区	古代遺物層		輝石、長石	8世紀後半
53	178	須恵器	高台付杯	口縁部～高台部	(14.6)	(9.8)	3.9	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ、ナデ	灰白 (N7/)	灰 (N6/)	良好	3区	古代遺物層		輝石、長石	8世紀後半
53	179	土師器	杯	口縁部～底部	(12.7)	9.6	3.8	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ、ヘラ切り後ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	3区	古代遺物層		石英、輝石、長石、角閃石、赤褐色粒子	
53	180	須恵器	杯	口縁部～底部	(12.8)	(7.4)	3.3	—	—	—	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (N6/)	灰 (N5/)	良好	3区	古代遺物層		輝石、長石	
53	181	須恵器	鉢	体部下半部	—	—	—	—	10.8～	(22.5)	回転ナデ	回転ナデ、一部に自然釉あり	灰 (5Y4/1)	灰 (N6/)	良好	3区	古代遺物層			把手あり、外面に一部自然釉あり、(自然釉　黒N2/)
53	182	土師器	甕	口縁部～胴部上半部	(24.0)	—	—	—	10.3～	—	回転横ナデ、ハケ後ケズリ	回転横ナデ、ハケ目後横ナデ、ハケ目	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	3区	古代遺物層		石英、長石、角閃石、赤褐色粒子	

表(Tab)12　土器観察表（7）

図版番号	遺物番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材・石質	調査区	出土地点	層　位	備　考
40	124	二次加工剥片	6.6	4.1	1.3	35.9	多久産サヌカイト質安山岩	3区	Z－42	2層一括	
40	125	縦長剥片	4.0	3.0	0.8	8.6	腰岳産黒曜石	3区	Z－42	2層	
40	126	二次加工石器　火打ち石？	4.7	3.2	1.1	15.4	灰白色のチャート	3区	S006、Z－42		
40	127	石製模造鏡	4.2	4.3	0.7	16.9	滑石になりかけの緑泥変岩	3区	S006、Z－42	底面	
40	128	石臼を砥石に転用	11.0～	8.30～	4.6	466.1	砂岩	3区	S006	No,132～139（一部取り上げ）	
40	129	砥石	12.0～	5.2	6.3	497.1	流紋岩（天草砥石）	3区	S006、Y－44	2層点あげ	すり面3面（1面は部分的）、部分的に被熱してスス付着
42	135	石臼を砥石に転用	11.6～	9.95～	5.4	701.5	砂岩	3区	S008	No,5	スス付着（2面にすり痕あり）
52	172	砥石	15.6	8.3	8.4	1019.4	砂岩	2区－1		3層、ネチネチ層一括	4面にすり痕あるが欠損、被熱して赤変

表(Tab)13　石製品・砥石観察表

図版番号	遺物番号	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	穿孔径(cm)	焼成	胎　土	色　調	残存度	調査区	出土地点	層　位	備　考
41	130	土製紡錘車	6.45	6.65	2.30	0.90	良好	石英、長石、角閃石	－	－	3区	S006、Y－44		
41	131	土錘	4.20	2.90	2.80	0.70	良好	石英、角閃石、赤褐色粒子、粒子が緻密	灰黄　(2.5Y7/2)	完形	3区		No.266、No.260～290一括	
41	132	土錘	4.50	1.10	1.10	0.40	良好	石英、輝石、雲母	にぶい橙　(2.5YR6/4)	完形	3区	S006、Z－42	2層	
41	133	土錘	3.70	0.85	0.85	0.30	良好	雲母、粒子が緻密	にぶい赤褐　(7.5YR5/3)	先端部欠損	3区	S006、B－40	2層一括	
41	134	土錘	4.50	1.65	1.65	0.70	良好	輝石、赤褐色粒子、粒子が緻密	赤褐　(10YR5/3)	先端部欠損	3区	S006、Z－44	上層一括	
52	169	どろめんこ	1.80	1.50	0.85	－	良好	長石	橙　(5YR6/6)	－	2区－1	T－19	1層	近世の遺物を含む灰色砂質土
52	170	土錘	5.00	3.15	2.90	－	良好	輝石、長石、雲母、赤褐色粒子	にぶい黄橙　(10YR7/3)	－	2区－1			

表(Tab)14　土製品観察表

図版番号	遺物番号	部　位	長さ(mm)	高さ(mm)	火皿径(mm)	重量(g)	調査区	出土地点	取り上げNo	層　位	備　考
34	72	雁首	52.0	26.0	17.0	9.5	3区	近世溝、X－45		下層	接合痕あり、銅に金メッキ、江戸中期の羅宇のきせる雁首
34	73	雁首	51.0	15.0	14.0	11.5	3区		105		火皿に歪み、胴部断面が六角形を成す、銅に金メッキ、接合痕？、サビぶくれあり、江戸後期、羅宇きせるの雁首、六角形
34	74	雁首	73.0	26.0	16.0	7.3	3区	S006、A－41		近世大溝最下層	羅宇挿入部下部に潰れ、接合痕あり、銅に金メッキ、江戸初～中？　羅宇きせるの雁首
34	75	吸口	64.0	10.0	－	5.0	3区	Z－44付近		不明（くわしい灰土の中）	銅に金メッキ、接合痕あり、段差あり、江戸中期の羅宇きせるの吸口
34	76	吸口	65.0	12.0	－	10.4	3区	Z－42		上層	羅宇挿入部に毛筋巻、銅に金メッキ、接合痕あり、江戸後期
34	77	吸口	76.0	13.0	－	12.1	3区	近世溝、Y－45		下層	銅に金メッキ、接合痕あり、江戸後期
－	－	雁首	54.0	23.0	16.5	6.8	3区	A－41		黒灰土	火皿に歪み
－	－	雁首	70.5	30.0	15.0	8.5	3区	近世溝Y－45		下層	ラウ挿入部上面に灰落としによる潰れ
－	－	雁首	51.0	26.0	18.0	5.5	3区	Z－43	87		火皿に歪み、ラウ挿入部上面に灰落としによる潰れ
－	－	雁首	46.5	28.0	17.5	8.5	3区		94		ラウ挿入部に毛筋巻、ラウ挿入部上面に灰落としによる潰れ
－	－	雁首	64.5	26.0	15.0～16.5	6.9	3区	S006、B－39		2層一括	火皿がラウ軸を長軸とする楕円形を成す
－	－	吸口	45.5	(7.0)	－	2.2	3区	A－42		下層	ラウ挿入部が大きく潰れる
－	－	吸口	54.0	10.0	－	8.0	3区	S006、Z－41		下層	
－	－	吸口	55.5	10.5	－	5.3	3区	S006、A－42		下層より10cm上	
－	－	吸口	49.0	7.50	－	2.5	3区	S006、A－40		2層一括	ラウ挿入部にラウ現存　ラウ挿入部一部欠損　胴部に潰れ
－	－	吸口	(56.5)	－	－	3.2	3区		104		ラウ挿入部一部欠損、大きく潰れる　ラウ挿入部にラウ現存
－	－	吸口	56.0	8.50	－	3.0	3区	S006、Z・A－42	126	2層	ラウ挿入部にラウ現存
－	－	火皿	－	－	18.0	5.3	3区		91		雁首のうち火皿のみ現存、やや歪む

表(Tab)15　きせる観察表

図版番号	遺物番号	種　類	径(mm)	重量(g)	調査区	出土地点	取り上げNo	層　位	備　考
34	80	寛永通宝	22.0	1.7	3区			黒灰色土	新寛永
34	81	寛永通宝	23.0	1.9	3区		113		新寛永
34	82	寛永通宝	24.0	2.5	3区		106		新寛永
34	83	寛永通宝	25.0	2.6	3区	S006、Z－42		2層	No.5　4－2、古寛永
34	84	寛永通宝	25.0	2.8	3区		97		背面に「文」、　文銭
34	85	寛永通宝	23.0	2.4	3区		96		新寛永
34	86	寛永通宝	25.5	3.4	3区	S006、Z－42		2層	No.2　古寛永
34	87	寛永通宝	25.0	3.1	3区	S006、Z－42		2層	No.3－②　2枚が固着、背面に「文」、　文銭
37	109	大観通宝	24.5	2.4	3区		102		AD1107年北宋（真）
37	110	洪武通宝	23.0	2.0	3区	B－39	373		AD1368年明、ビタ銭？
37	111	皇宋通宝	24.0	2.8	3区	溝、X－45		1層	AD1039年北宋（篆）、ビタ銭？　歪みあり
37	112	開元通宝	23.5	2.9	3区	Z－44			AD621年唐、ビタ銭？　やや小さくて歪みあり
52	171	寛永通宝	25.0	3.3	2区－1	S－19		近世の遺物を含む灰色砂質土	古寛永
－	－	不明	23.0	2.1	3区	北側石組み		黒灰土	劣化して文字不明
－	－	寛永通宝	24.5	1.9	3区	A－41			ガチガチ黒の土（おそらく黒灰土からの落ちたもの）、新寛永
－	－	寛永通宝	22.5	2.1	3区	近世溝、Z－43		2層	新寛永
－	－	不明	24.5	3.0	3区	近世溝、Z－43		2層	劣化して文字不明
－	－	寛永通宝	23.0	3.2	3区	S006、Z－42		2層	No.1、古寛永
－	－	寛永通宝	23.0	2.7	3区	S006、Z－42		2層	No.4
－	－	寛永通宝	24.0	3.2	3区	S006、Z－42		2層	No.5　4－1、古寛永
－	－	寛永通宝	25.0	3.4	3区	S006、Z－42		2層	No.5　4－3、背面に「文」
－	－	寛永通宝	24.5	3.7	3区	S006、Z－42		2層	No.5　4－4、古寛永
－	－	寛永通宝	24.0	2.4	3区		92		古寛永
－	－	寛永通宝	24.0	2.4	3区		93		鉄銭？
－	－	寛永通宝	24.5	2.7	3区		95		新寛永？
－	－	寛永通宝	25.5	4.0	3区		98		背面に「文」、　文銭
－	－	寛永通宝	24.0	2.5	3区		99		新寛永
－	－	寛永通宝	24.5	3.2	3区		100		新寛永
－	－	寛永通宝	25.0	3.3	3区		101－①		古寛永
－	－	寛永通宝	24.0	3.5	3区		101－②		古寛永
－	－	寛永通宝	24.0	4.4	3区		103		新寛永
－	－	寛永通宝	24.5	3.2	3区		107		古寛永
－	－	寛永通宝	24.5	3.0	3区		108		新寛永
－	－	寛永通宝	24.5	3.1	3区		109		古寛永
－	－	寛永通宝	23.5	3.9	3区		110		新寛永
－	－	寛永通宝	24.5	2.5	3区		111		新寛永
－	－	寛永通宝	24.5	3.2	3区		112		古寛永
－	－	寛永通宝	25.0	3.7	3区		114		古寛永
－	－	寛永通宝	24.5	3.3	3区		115		古寛永
－	－	寛永通宝	24.0	3.1	3区		116		新寛永？
－	－	寛永通宝	23.0	2.5	3区		117		新寛永
－	－	寛永通宝	23.0	2.7	3区		118		新寛永

表(Tab)16　古銭観察表（1）

図版番号	遺物番号	種　類	径(mm)	重量(g)	調査区	出土地点	取り上げNo	層　位	備　考
—	—	寛永通宝	25.0	2.8	3区		119—①		新寛永
—	—	寛永通宝	24.0	2.3	3区		119—②		新寛永
—	—	寛永通宝	25.0	3.2	3区		120		背面に「文」、文銭
—	—	寛永通宝	23.0	2.5	3区		121		新寛永
—	—	寛永通宝	23.0	2.3	3区		122		新寛永
—	—	寛永通宝	24.0	3.2	3区		123		古寛永
—	—	寛永通宝	23.5	2.7	3区		124		新寛永
—	—	寛永通宝	23.0	2.3	3区		125		新寛永
—	—	寛永通宝	23.5	2.7	3区		129		新寛永
—	—	寛永通宝	25.0	3.6	3区		295		背面に「文」、文銭

表(Tab)17　古銭観察表（2）

図版番号	遺物番号	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	調査区	出土地点	取り上げNo	層　位	備　考
34	78	鉄釘	10.7	3.4	0.6	27.9	3区	Z—44	89		
34	79	鉄釘	12.4～	1.5	0.5	13.6～	3区	B—39	374	2層	
—	—	釘？	5.5～	0.8	0.7	4.5～	3区	清掃一括			
—	—	釘	11.7～	1.0	0.6	8.6～	3区	Z・A—42	127	2層	
—	—	船釘	8.3～	0.9	0.8	5.8～	3区			黒灰色土	
—	—	船釘	11.6～	1.8	0.2	13.7～	2区—1	S—19		近世の遺物を含む灰色砂層	
—	—	船釘	5.0～	1.4	0.9	5.2～	2区—1			近世の遺物を含む灰色砂層	
—	—	船釘	11.4～	1.2	0.9	25.0～	2区—1	S—19		青灰粘質土	木質部付着
—	—	船釘	6.5～	1.1	0.6	7.7～	2区—1	S—19		青灰粘質土	部分欠損
—	—	船釘	7.5～	1.4	0.5	8.0～	2区—1	S—19		D層褐色土砂質土	
—	—	鎌	17.5～	？	0.3	144.5～	3区	S006、B—43			柄一部現存
—	—	鎌	9.5～	3.8～	0.3	22.5～	3区	A—42		2層	
—	—	鎌？	6.6～	3.3	0.5	17.4～	3区	S006、B—40			鉄器No. 1
—	—	鉄製品？	8.5～	1.7	0.7	13.6～	3区	Z—45			
—	—	不明鉄器	3.8～	？	0.5	2.8～	3区	北壁石組み、B—39			
—	—	環状銅製品	3.0～	2.9～	0.1	1.3～	3区		90		
—	—	不明銅製品	？	？	？	30.9～	3区	近世溝、Z—44		下層	
—	—	不明真鍮製品	1.4～	1.2	0.3	7.1～	3区	S007、近世大溝、Y—45		底面	
—	—	耳環状金属製品	2.6	2.5	0.3	1.7	3区		355		

表(Tab)18　鉄・銅・その他製品観察表

図版番号	遺物番号	器　種	部　位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	調査区	出土地点	層　位	備　考
35	88	丸瓦	玉縁	17.4～	13.～	—	673.3	3区	S006、A—42		17世紀初～中期、近世、91と同じ時期、内面に布目痕あり
35	89	丸瓦	広端部	17.8～	9.3～	2.0～	479.0	3区	S006、Z—42	1層	19世紀初～に至る、近世、布目と縄のあて具痕あり
35	90	軒丸瓦	瓦当	7.4～	—	1.9～	109.2	3区	S006、Z—421	Tr	近世、桔梗紋、青松17世紀、加藤氏の家紋
35	91	軒丸瓦	瓦当	14.5～	1.8～	1.8～	302.8	3区	S006	No,194	17世紀初～中期、近世、巴紋の軒丸瓦、文殊、接合のカキ目あり
35	92	平瓦		17.3～	18.3～	2.5～	976.0	3区	S006、A—42	2層	近世、時期不明
35	93	布目瓦		6.7～	8.0～	2.3～	122.8	3区	S006	No,200	古代、布目とタタキ痕あり

表(Tab)19　瓦観察表

引用・参考文献

野田拓治　1985　『上の原遺跡Ⅲ』　熊本県文化財調査報告第73集　熊本県教育委員会

鈴木　喬　1987　「熊本市」　『角川日本地名大辞典　43　熊本県』　角川書店

たばこと塩の博物館　1988　『きせる』　たばこと塩の博物館

磯野雄二　1993　『御幸木部古屋敷遺跡Ⅰ』　熊本県文化財調査報告第129集　熊本県教育委員会

熊本市　1993『新熊本市史』別編　絵図地図　上：中世、近世　下：近代、現代　新熊本市史編纂委員会

網田龍生　1994　「肥後における回転台土師器の成立と展開」　『中近世土器の基礎研究Ⅹ』
日本中世土器研究会

美濃口雅朗　1994　「熊本県における中世前期の土師器について」　『中近世土器の基礎研究Ⅹ』
日本中世土器研究会

網田龍生　1995　『上高田高橋遺跡概報』熊本市教育委員会

山本信夫　1995　「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　真陽社

中世土器研究会編　1995　『概説中世の土器・陶磁器』　真陽社

青木勝士　1996　「木部地蔵堂石造物群」　『新熊本市史』史料編　第１巻　考古資料
新熊本市史編纂委員会

美濃口雅朗　1996　「御幸木部遺跡群」　『新熊本市史』史料編　第１巻　考古資料
新熊本市史編纂委員会

板楠和子・島津義昭　1996　『古代の国家形成、律令国家と肥後国』　「新熊本市史」通史編
第１巻　自然・原始・古代　新熊本市史編纂委員会

小畑弘己　1997　『お金の話―貨幣の歴史と備蓄銭の謎－』高千穂町コミュニティセンター歴史講座

大橋康二・西田宏子監修　1998　『古伊万里』　別冊太陽　日本のこころ63　平凡社

日本貨幣商共同組合　1998　『日本貨幣カタログ』

網田龍生　1999　「熊本県から出土した銙具の集成と考察」『先史学・考古学論究』龍田考古学

水野哲郎　2000　『祇園遺跡』　熊本県文化財調査報告第188集　熊本県教育委員会

大橋康二・家田淳一・野上建紀・中野雄二・船井向洋・東中川忠美　2000　『九州陶磁の編年』
―九州近世陶磁学会10周年記念―九州近世陶磁学会

江戸遺跡研究会編　2001　『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房

中島由美編集　2001　『ベストセレクション　古伊万里　そば猪口・酒器1000』　講談社

小野正敏　2001　『図解　日本の中世遺跡』　東京大学出版会

大橋康二構成　2002　『実物大　そば猪口事典』　別冊太陽　骨董をたのしむ－42　平凡社

九州近世陶磁学会　2002　『国内出土の肥前陶磁』　―西日本の流通をさぐる―　第一・二分冊
第12回九州近世陶磁学会　資料

松本寿三郎・池上尊義　2002　「第五編　熊本城下をとりまく村々と農民の社会生活」
「第六編　熊本城下をささえる港町と交通・運輸」
『新熊本市史』通史編　第４巻　近世Ⅱ　新熊本市史編纂委員会

武末純一　2002　『弥生の村』　日本史リブレット３　山川出版社

網田龍生　2003　「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』
―考古学研究室創設30周年記念論文集―　龍田考古学

吉田麻子　2004　「御幸木部遺跡群第１次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報』　第６号
―平成14年度　熊本市教育委員会

美濃口雅朗　2006　「熊本市古町遺跡出土の陶磁器組成について」　『江戸後期における庶民向け陶磁器の
生産と流通　九州編』　第16回九州近世陶磁学会資料　九州近世陶磁学会

Summary of the *Miyukikibe* sites

1. Environmental introduction of the site

The *Miyukikibe* sites (*Miyukikibe* town, *Kumamoto* city, *Kumamoto* Prefecture) is located on the right side of the lower reaches of the *Kase* river. It is about three meters above sea level.

Along this river, there are many sites in *Yayoi* period, *Nara* period, *Heian* period, Medieval period and *Edo* period (modern times).

2. Opportunity for investigation

Embankment of the *Kase* river and prerfectural road were decided to construction by *Kumamoto* branch of Ministry of Land, Infrastructure and Transport.

So we needed to record the statement of the *Miyukikibe* sites as a report before the construction under the Law for Protection of Cultural Properties, because the construction would destroy and bury the site permanently. Investigation was carried out from December 2004 to March 2005. An area of the investigation was about one thousand one hundred siz square meters.

3. Result of investigation

1) Outline

We could find the human trace from the latter half of late stage to latest stage in *Yayoi* period (from eighteen hundred to seventeen hundred years ago, to *Edo* period from four hundred to one hundred forty years ago).

We could mainly find archaeological features and artifacts from the latter half of late stage to latest stage of *Yayoi*, *Nara* period and *Edo* period. And a grave in unknown period, too.

2) *Yayoi* period

We found five archaeological features in *Yayoi* period (three dwelling pits, a earthen pit, a ditch). A dwelling pit in the third section had many portteries and showed the structure of the dwelling, which had a rectangular plan about two or three meters broad, a central furnace and two pillars.

3) *Nara* period

A small ditch of the second section had almost complete Sue ware whitch was made in the second half of the eighth century (between a thousand two hundreds fifty and a thousand two hundreds years ago). I suppose that it runed from the south to the north and concerned with the cultivated land.

4) *Edo* period (Modern times)

A large ditch was made of the destroyed layer containing cultural remains and archaeological features. Many glazed potteries and stone wall in one row were discovered in it. The average length of many holes for cracking stones remained on the surface of stone wall were nine point one centimeters. I suppose that it was built in the first term in *Edo* period. About unearthed many glazed potteries, they were made in the Early stage to late stage of *Edo* period.

So, I think that this ditch was made for the clutivation in the first term of *Edo* period, and used during *Edo* period. The picture drawn until 1881 A.D (14th of *Meizi* period) showed us this ditch was duried until early stage of *Meizi* period.

5) *Unknown* period

In the second sention, we found a grave with a male human bones whose body was straight and whose skull was turned to the northwest. In the grave there were no artifacts. Radiocarbon dating using the carbon of the upper layer shows that this grave was made in previous the late stage of *Kofun* period (the supplementary range of radiocarbon 530AD 【87.2%】 610AD).

Figures

Fig.① Sites map around the *Miyukikibe* sites
Fig.② Investigation and distribution map in the site
Fig.③ *Yayoi* dwelling (S009) and relies
Fig.④ Ditch (S003) in *Nara* period and relics
Fig.⑤ A large ditch (S006) in *Edo* period and relics (1)
Fig.⑥ A large ditch (S006) in *Edo* period and relics (2)
Fig.⑦ Pit burial (S004) in unknown period
Fig.1 Distribution map around the *Miyukikibe* sites
Fig.2 Location of the investigated sites around the *Miyukikibe* sites
Fig.3 East-west stragigraphic profile in the section 1 under excavation
Fig.4 Stragigraphic profile in the section 2-1 under excavation
Fig.5 Stragigraphic profile in the section 2-2 under excavation
Fig.6 East-west stragigraphic profile in the section 3 under excavation
Fig.7 Stragigraphic profile in the section 3 under excavation
Fig.8 Location of archaeological features in the 1st section
Fig.9 Pits
Fig.10 Cross section of pits (1)
Fig.11 Cross section of pits and relics (2)
Fig.12 Location of archaeological features of upper layer and lower layer in the section 2 under excavation
Fig.13 Pits (S001,S002) and relics
Fig.14 Ditches (S003,S005) and relics
Fig.15 Pit burial
Fig.16 Pits (upper layer・lower layer)
Fig.17 Location of archaeological features in the section 3 under excavation
Fig.18 *Yayoi* dwelling (S012) and relics
Fig.19 *Yayoi* dwelling (S009)
Fig.20 Relics (S009) (1)
Fig.21 Relics (S009) (2)
Fig.22 Relics (S009) (3)
Fig.23 Relics (S009) (4)
Fig.24 *Yayoi* dwelling (S016)
Fig.25 Pit (S007)
Fig.26 Ditch (S011)
Fig.27 Ditch (S006)
Fig.28 Stone wall and measure table of holes for cracking stones remained on the surface of stone wall
Fig.29 Relics (S006:glazed potteries of the 17th century)
Fig.30 Relics (S006:glazed potteries of the 18th century)
Fig.31 Relics (S006:glazed potteries of the 18th～19th century) (1)
Fig.32 Relics (S006:glazed potteries of the 18th～19th century) (2)
Fig.33 Relics (S006:Modern times)
Fig.34 Relics (S006:pipes, old coins, iron nails)
Fig.35 Relics (S006:tiles in Ancient times and Modern times)
Fig.36 Relics (S006:imported glazed potteries)
Fig.37 Relics (S006:Medieval and Modern times)
Fig.38 Relics (S006:Ancient times)
Fig.39 Relics (S006:*Yayoi* period)

Fig.40 Relics (S006:stone implements)
Fig.41 Relics (S006:baked clay objects)
Fig.42 Pit (S008) and relics
Fig.43 Pits (S010・013・015)
Fig.44 Pit (S014) and relics
Fig.45 Ditch (S018)
Fig.46 Unknown archaeological features (S017)
Fig.47 Well (out of investigation)
Fig.48 Urine pot
Fig.49 Relics (the section 2-1 under excavation) (1)
Fig.50 Relics (the section 2-1 under excavation) (2)
Fig.51 Relics (the section 2-1 under excavation) (3)
Fig.52 Relics (the section 2-1 under excavation) (4)
Fig.53 Relics (Ancient times)
Fig.54 Location of the site (retouch in Isono 1993)
Fig.55 Invastigation and distribution map of archaeological features
Fig.56 Remains of rice field grids established by the ritsuryo agricultural reallocation (retouch in Shimazu 1996)
Fig.57 Map of Kibe village in Takuma county in the Higo country under *Kumamoto* Prefecture
Fig.58 Village history of Takuma county in Higo country
Fig.59 Picture of Higo country (in Keityou period)
Fig.60 Picture of HIgo country (in Genroku period)

Tables

Tab.① Chronological table of the site
Tab.1 List of sites around the site (1)
Tab.2 List of sites around the site (2)
Tab.3 List of sites around the site (3)
Tab.4 List of sites around the site (4)
Tab.5 List of sites around the site (5)
Tab.6 Observing list of potteries (1)
Tab.7 Observing list of potteries (2)
Tab.8 Observing list of potteries (3)
Tab.9 Observing list of potteries (4)
Tab.10 Observing list of potteries (5)
Tab.11 Observing list of potteries (6)
Tab.12 Observing list of potteries (7)
Tab.13 Observing list of stone impliments・whetstone
Tab.14 Observing list of baked clay objects
Tab.15 Observing list of pipes
Tab.16 Observing list of old coins (1)
Tab.17 Observing list of old coins (2)
Tab.18 Observing list of iron・copper・other implements
Tab.19 Observing list of tiles

Photographic Plates

P.L.1 Aerial photograph 1 (shot Mt.Kinbo from the site)
P.L.2 Aerial photograph 2 (shot Unzen Fugendake from the site)
P.L.3 Aerial photograph 3 (10th March 2005)

P.L.4 Aerial photograph 4 (7th August 1962)
P.L.5 Aerial photograph 5 (whole view)
P.L.6 Aerial photograph 6 (the section 3 under excavation)
P.L.7 Aerial photograph 7 (the section 1・2 under excavation)
P.L.8 Cross section in the section 1 under excavation
P.L.9 Cross section in the section 2-1 under excavation
P.L.10 Cross section in the section 3 under excavation
P.L.11 Relics (S009:the section 3 under excavation)
P.L.12 Remained pillar of pit31 (the section 1 under excavation)
P.L.13 Well out of the section under excavation
P.L.14 Relics (S006:glazed potteries in the 17th～the first half of the 18th century)
P.L.15 Relics (S006:glazed potteries in the 18th～19th century) (1)
P.L.16 Relics (S006:glazed potteries in the 18th～19th century) (2)
P.L.17 Relics (layer containing Ancient times relics)
P.L.18 Relics (characters written in ink, with a spatula: the section 3 under excavation)
P.L.19 Relics (imported glazed wares: the section 3 under excavation)
P.L.20 Relics (S009:*Yayoi* period (1))
P.L.21 Relics (S009:*Yayoi* period (2))
P.L.22 View before excavation (the section 1・2)
P.L.23 Whole view after excavation (the section 1)
P.L.24 View after excavation (the section 1) (1)
P.L.25 View after excavation (the section 1) (2)
P.L.26 Pit 30 (the section 1 under excavation)
P.L.27 Relic of pit 5 (the section 1 under excavation)
P.L.28 Relic of pit 20 (the section 1 under excavation)
P.L.29 Relic of pit 35 (the section 1 under excavation)
P.L.30 Cross section and remained pillar of pit 31 (the section 1 under excavation)
P.L.31 View after excavation of pit 7 (the section 1)
P.L.32 View after excavation of pit 2 (the section 1)
P.L.33 View after excavation (the section 2-1)
P.L.34 View of lower part of layer 2 (the section 2-1 under excavation) (1)
P.L.35 View of lower part of layer 2 (the section 2-1 under excavation) (2)
P.L.36 Pits of lower part of layer 2 (the section 2-1 under excavation) (1)
P.L.37 Pits of lower part of layer 2 (the section 2-1 under excavation) (2)
P.L.38 Cross section of the southwest (the section 2-1 under excavation)
P.L.39 Cross section of the northwest (the section 2-1 under excavation)
P.L.40 View after excavatin (S001: the section 2-1)
P.L.41 View after excavatin (lower part of layer 2: the section 2-1) (1)
P.L.42 View after excavatin (lower part of layer 2: the section 2-1) (2)
P.L.43 archaeological features of S003,4,5 (lower part of layer 3: the section 2-1 under excavation) (1)
P.L.44 archaeological features of S003,4,5 (lower part of layer 3: the section 2-1 under excavation) (2)

P.L.45 Relic of S003 (the section 2-1 under excavation) (1)
P.L.46 Relic of S003 (the section 2-1 under excavation) (2)
P.L.47 Relic of S003 (the section 2-1 under excavation) (3)
P.L.48 Cross section of S003 (the section 2-1 under excavation)
P.L.49 Cross section of S005 (the section 2-1 under excavation)
P.L.50 Human skelton of S004 (the section 2-1 under excavation) (1)

P.L.51 Human skelton of S004 (the section 2-1 under excavation) (2)
P.L.52 Human skelton of S004 (the section 2-1 under excavation) (3)
P.L.53 Human skelton of S004 (the section 2-1 under excavation) (4)
P.L.54 View of excavation of S005 (the section 2-1)
P.L.55 View after excavation of S005 (the section 2-1)
P.L.56 View after excavation (lower part of layer 3: the section 2-1)
P.L.57 Whole view under excavation (the section 3) (1)
P.L.58 View before excavation (the section 3)
P.L.59 Archaeological feature (S018)
P.L.60 Whole view after excavation (the section 3) (1)
P.L.61 Whole view after excavation (the section 3) (2)
P.L.62 View after excavation of S006 (1)
P.L.63 View after excavation of S006 (2)
P.L.64 Archaeological feature (S012,13,17) under excavation
P.L.65 Stone wall of south side (S006) under excavation
P.L.66 Stone wall of north side (S006) under excavation
P.L.67 Wooden implements (S006) under excavation
P.L.68 Iron sickle・old coins (S006) under excavation
P.L.69 Carbonized wood and wooden implements (S006) under excavation
P.L.70 Stakes and stone wall (the section 3 under excavation)
P.L.71 Stakes (the section 3 under excavation)
P.L.72 Hole 13 for cracking stones remained on the surface of stone wall (S006)
P.L.73 Hole 11 for cracking stones remained on the surface of stone wall (S006)
P.L.74 Hole 29 for cracking stones remained on the surface of stone wall (S006)
P.L.75 Hole 30 for cracking stones remained on the surface of stone wall (S006)
P.L.76 Traces of digging (S006) under excavation
P.L.77 Relics (S009) under excavation
P.L.78 View after excavation of S009,11
P.L.79 Archaeological feature of S008
P.L.80 Animal bone (S008) under excavation
P.L.81 Relics (S012,17) nder excavation
P.L.82 Relics (S012) under excavation
P.L.83 Cross section of S013
P.L.84 View after excavation of S012.13.16.17.19
P.L.85 Cross section of S019
P.L.86 View after excavation of S010
P.L.87 Cross section of S006 and northside of the section 3 under excavation
P.L.88 Cross section of southside of the section 3 under excavation
P.L.89 Distant view of well (out of the section)
P.L.90 Crose view of well (out of the section)
P.L.91 Urine pot well (out of the section)
P.L.92 Layer containing relics in Ancient times (out of the section 3 under excavation)
P.L.93 Picture of workers
P.L.94 Aerial photograph 8by US Air Force (21th January 1948)
P.L.95 Relics (the section 1,2 under excavation)
P.L.96 Relics (S012)
P.L.97 Yayoi relics (S009) (1)
P.L.98 Yayoi relics (S009) (2)

P.L.99 Relics (S006:glazed potteries in the 18th～19th century) (1)
P.L.100 Relics (S006:glazed potteries in the 18th～19th century) (2)
P.L.101 Relics (S006:glazed potteries in the 18th century) (1)
P.L.102 Relics (S006:glazed potteries in the 17th century) (1)
P.L.103 Relics (S006:glazed potteries in the 17th century) (2)
P.L.104 Pipes (S006)
P.L.105 Iron nails (S006)
P.L.106 Iron copper・other implements (S006)
P.L.107 Old coins (S006)
P.L.108 Tiles (S006)
P.L.109 Stone implements (S006)
P.L.110 Relics in Medieval period (S006)
P.L.111 Relics in Modern times (S006)
P.L.112 Relics (S006)
P.L.113 Relics in *Yayoi* period, Kofun period, Ancient times (S006)
P.L.114 Relics in Ancient times (the section 2 under excavation)
P.L.115 Relics (the section 2 under excavation
P.L.116 Whetstones (S006)
P.L.117 Millstones (S006)
P.L.118 Baked clay objects (S006)
P.L.119 Wooden implements (S006) and remained pillar of pit 31.

— 附　　論 —

御幸木部遺跡群で検出された石列遺構に残る加工痕跡について

【県立装飾古墳館　池田朋生】

はじめに

ここでは、御幸木部遺跡の治水に関わる遺構の性格は別項に譲り、遺跡から検出された石列を構成する間知石、特に表面に残る加工痕から、一般的な石工の技術についてコメントする。緑川治水・使用された「島崎石」の流通など、御幸木部遺跡そのものに関わる問題に直接答えるものではなく、また、筆者はそのような評価を下す知識を持ち合わせていないことを最初に断っておきたい。本論の目的は、熊本県下で発掘調査の際に検出される可能性が高い、近世石工が手を加えた様々な石造文化財と思しき出土品を見る際に、判断材料となる加工痕や使われる道具などの基礎的な理解を示すことにある。

活用する事例等は、筆者が担当し平成15年度、16年度に開催した、県立装飾古墳古墳館前期企画展「阿蘇の灰石展」時の調査成果による。この企画展での目的は、県内装飾古墳の総合的な調査の一助となるよう、石室・石棺製作に使用された石材、なかでも「阿蘇溶結凝灰岩」の基礎的理解を目的とし、特に地元石工技術の理解から古墳時代の石工技術について迫ろうとした企画である。従って、装飾古墳の調査研究を目的とした筆者の知識は、石工技術の基礎的な理解を示すにはいささかの偏りがある。体系的な説明としては程遠い。特に「軟石」である「凝灰岩（通称灰石）」に調査の主眼を置いていたのでその点でもご容赦願いたい。

熊本県内は改めて述べるまでも無く、石橋をはじめ多数の石造物の宝庫であり、或る時期の肥後の石工は、紛れも無く熊本を代表する産業であったはずである。従って、遺跡から検出さる機会は決して珍しくはないだろう。そうした調査の際に、本文が少しでも役立つならば幸いである。

遺跡としての取扱い

対象となる本遺跡の近世遺構は、文化庁次長通知（平成12年度庁保記第27号）において、地域の特徴をあらわす物については調査の必要性が認められている。県内において、塘、水道橋、干拓堤防上に作られた樋門などの利水・治水に関わる遺構は、文化財保護法のなかでは一般的に「建造物」として扱われ、指定されている場合が多い。一方で、破却され埋められたこの種の遺構が、埋蔵文化財の調査現場において検出される可能性は充分にあるが、それらの発掘調査現場での取扱についても、「建造物」としての取扱いと同様な調査により、資料化に努めなければならない。雄大な阿蘇の噴火によって得られる豊富な水資源と凝灰岩という石材。眼鏡橋に代表される石橋や、遠浅の海の存在によって可能な干拓遺跡は、「建造物」「埋蔵文化財」という法律上の区分に関わらず、熊本という地域の特徴をあらわす歴史遺産であることに間違いない。

玉名市月田石工の石切場跡検出状況（北の崎遺跡）

石工技術理解のまえに

冒頭でも述べたように、御幸木部遺跡で検出された石の多くは、肉眼観察のみでの検討であるが、熊本城石垣普請で多く使われた「島崎石」と呼ばれる輝石安山岩が多用されていると思われる。一般的に、石工が生業とする石は、民俗学からアプローチする際、大きく「硬石系」と「軟石系」という分け方で捉えることができる。近世に、金峰山周辺で採取されていた「島崎石」は安山岩という「硬石系」の技によってはじめて加工が可能な石であろう。

「硬石」「軟石」という見方は、理化学的な石材鑑定から診ればいささか乱暴な区分であるが、それを裏付ける石工技術に大きな違いがあり、道具にその特徴が見出せる。ところが、明治から昭和初期にかけての技術革新や、高度経済成長期以降の、著しい機械化を境に、国内の石工技術は大きく変容する。特にコンクリートの導入によって間知石の需要が急速に無くなった現在では、石工もその多くが廃業、或いは兼業となっており、実際に使用される道具は、硬石系の石工技術保持者が軟石を加工する場合もあり、逆に軟石系の石工が硬石系の道具を工夫して使用することもあり、実態の把握は簡単ではない。「軟石」「硬石」の区分は、多分に技術的背景＝石工道具の形態に反映されており、その違いを民具学、各種理化学的分析を用いて、できるだけ記録していくことが県内での課題である。

菊池川の灰石に使われた石工道具（伝統工芸館蔵）

熊本では、筆者が管見する限り、「軟石系石工集団」と「硬石系石工集団」の二つの大きな流れがあったと考えられる。最もこの二つは、それぞれが大きなグループを形成していたとは考えにくく、その活動範囲、時期も様々で、多くの石工集団が存在したと考えるべきである。県内各地域で様々な「石」の呼称があり、ブランド名として知られていたようである。「島崎石」もそうした数あるブランドのなかの一つであり、先祖代々「島崎石」をあいてに、石工業を生業にされた方の子孫が居られるはずである。今の我々にとって「硬石系石工」の技術として身近なのは御影石製の墓石であろう。「硬石系」の石として民具収集や考古学上の調査対象になっている事例には、香川県「庵知石・牟礼石」、奈良県「奈良石」、兵庫県「竜山石」などが挙げられる。一方、「軟石系」では、島根県「来待石」福井県「笏谷石」栃木県「大谷石」などが例になるのではないだろうか。この他、阿蘇溶結凝灰岩での「軟石系」技術の範疇には八女燈籠で有名な「八女石」の調査が含まれるだろう。熊本県下で硬石系の道具は、天草下浦一帯で、「天草砂岩」の加工を生業とした下浦石工の集団の道具に見られる。この石工集団に関わる調査は、本渡歴史民俗資料館が行っており、同館で下浦石工の道具のごく一部が見学できる。この地域は、軟石系の石工集団が、五和町御領周辺で活動しており好対照を為していて興味深い。こちらは阿蘇溶結凝灰岩が相手で、「灰石（ひゃあいし）」若しくは「御領灰石」と言う。両者の技術基盤・職人集団が全く異なるという好例である。

熊本を代表する著名な石工集団とその研究は、東陽の種山石工と、眼鏡橋に代表される。前述の「軟石」・「硬石」の区分で彼らの道具を見ると、ツルハシなどの「軟石系」道具と、角ビシャンなどの「硬石系」道具を併せ持つ。江戸時代、「備前石工」との技術交流を持つ彼らは、硬石を加工する道具や技も受け継いだようで、凝灰岩のなかでも、彼らが使う石は一際硬い。軟石系の技術を基盤に、硬石系

の技術が合わさっていると愚考している。眼鏡橋に使用される凝灰岩は特に硬く重い。およそ古墳時代の石棺材などには向かない硬石系の技で切り出されたモノである。最近、緑川流域でこの種の遺構として塘や刎という治水に関連する近世の遺構が検出されている。使用された間知石の一部は美里町教育委員会（旧中央町教育委員会）で見ることができる。凝灰岩のなかでも、中に黒曜石のようなガラス質の硬い不純物を層状に含み、相当に重いものである。

鹿児島県串木野市栫城跡で見つかった石工道具・石材

御幸木部遺跡の石工道具による痕跡

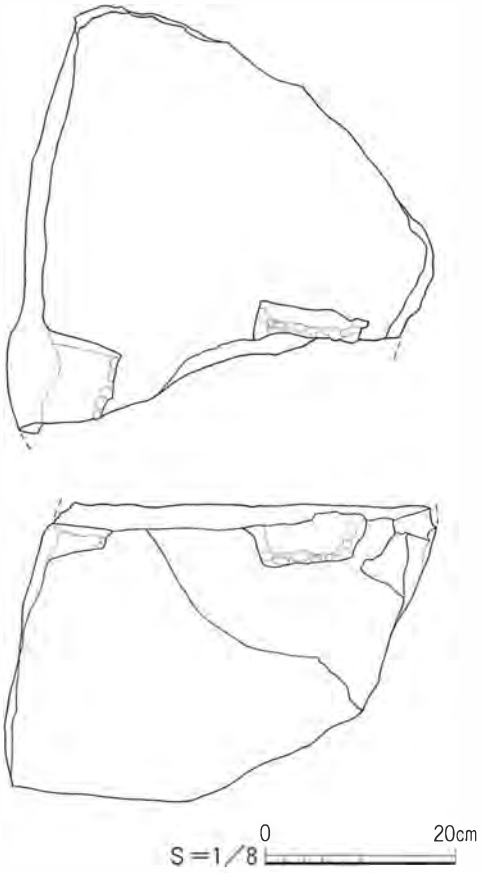
以上の視点でもって、御幸木部遺跡出土の間知石を観察してみる。ここで検出された無数の石例と木杭は緑川中流域で検出された石刎遺跡の遺構と類似するものであろう。

金峰山周辺で採れる石のなかでも、熊本城の石垣と同質の硬いものであり、硬石系の技術、いわゆる「矢穴技法」によって切られた石を間知石として使っている。このような間知石の石切場は、近年発掘調査が行われ、事例が増えつつある。鹿児島県串木野市栫城跡は、中世末～近世初頭の石切り場を知る好例である。ここでは、石を削る「矢」の他、「矢穴」の掘削に使われたと思われる「ノミ※」も検出されている。水平方向と垂直方向からの矢の衝撃によって、丸く抉り取られ、半円のようような形になっている。間知石、又は割石として使用するために、この後、更に半切し、一面が丸みを帯びた三角錐の形に仕上げている。（※灰石の石工道具には「ノミ」という呼称は無い、島崎石の石工道具は未調査なので、一般的な道具の名称を用いる。）

現代の間知石の石切場（山鹿市鍋田）

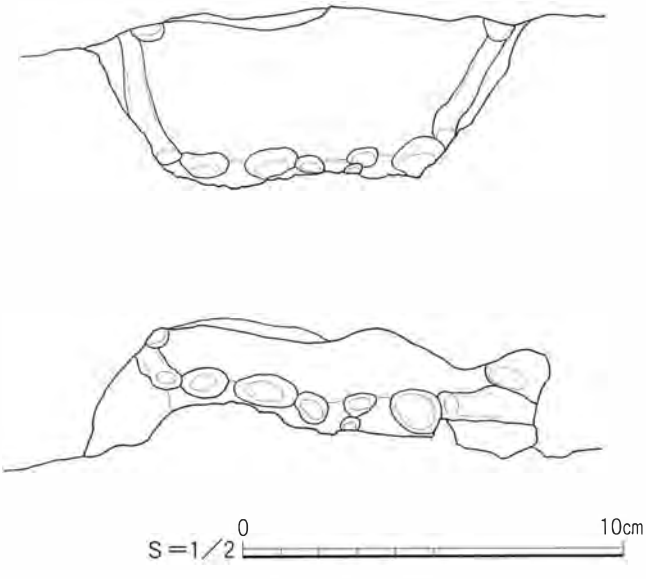
鹿児島県串木野市栫城跡で見つかった石切場跡

山鹿の民家で使われている鍋田石（ベンガラで書かれた「江」の字）

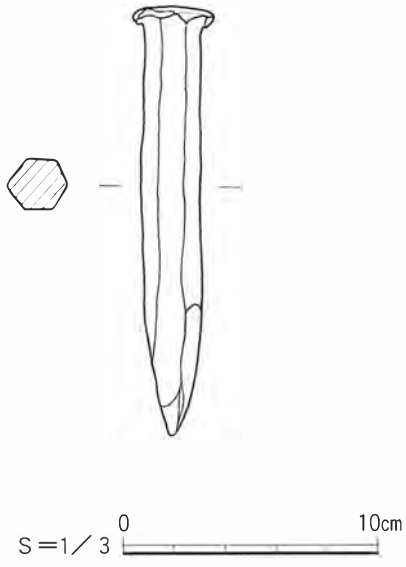


割石（わりいし）実測図

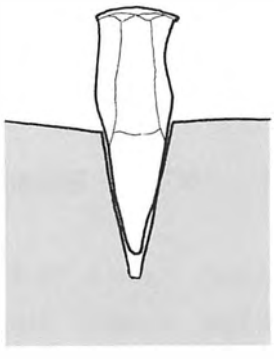
1点サンプルとして持ち帰られた割石には、「矢穴」が二箇所残る。一方は半切した際のもの、もう一方は四分割された際のものである。石全体の形状は一面に丸みを持つゆがんだ三角錐の形を呈し、割石の形状そのままである。恐らく、四分割された矢穴が、石切場で切り出す際のものと思われる。また、半切した矢穴は、小割りし間知石として製品化した際のものであろう。二つの矢穴の底には、ノミによる矢穴を掘削した痕跡が残っている。半切した矢穴を観察すると、ほぼ三分の二の深さのところで幅が狭まりそれより下部でノミ痕跡が顕著になるところから、矢の先が約3センチ程度入った段階で割れたものと見られる。矢穴技法とは、矢の先端で割るのではなく、より幅広い胴の部分が、ゲンノウで打ち込まれることで石を押し切る技術であるため、矢穴の底にこのような痕跡が認められる。一方、矢が入った矢穴の上の部分では、細かなノミの稜線は残りにくいと思われる。



矢穴に残るノミ痕実測図



矢穴掘用ノミ実測図（植木町正清の民具資料）



ヤとヤアナの模式図

前述の榕城跡では、石切場で小割りされた三角錐状の石も多量に検出されている。半円のまま放置されているものは、規格に合わず小さいためであろう。こうした規格にそった間知石を取る近世の石切場がかつて島崎周辺に存在した。現在、県内で近世の石切場は発見されていない。後世の石切場として使われていなければ、熊本市金峰山周辺で石切場跡が発見されることは、充分に考えられる。

発見された際は、現在の石工技術と近世の石工技術の差、島崎石へのニーズが近世以降どのように変化したかなどの課題が挙げられるだろう。

おわりに

熊本の石工の歴史は、種山石工ら眼鏡橋の技術者を対象とした研究が良く知られている。一方で、この他の地域・時代の調査・研究はあまり認知されていない。石造物の調査など各市町村史でも緻密な調査は行われており、考古・民俗・文献史学・各種分析科学による、より総合的な理解が求められる。そのことは、取りも直さず、貴重な歴史遺産の資料的価値を高めるだけでなく、材質の調査から保存・公開への活用も化可能なデータになりうる。県内に僅かにのこる伝統技術を持った石工達は、瞬時に使われた石の特性を知る確かな目をもっている。そうした確かな目によって出された言葉の中には、なんらかの方法で客観的に数値化すれば、様々な貢献ができるはずだ。史跡の保存施設構築の際に、慌てて各種データを集めるのではなく、そのような普段の調査成果・調査方法が生かされていく事を願っている。

最後に、執筆の機会を与えていただいた岡本真也氏に御礼申し上げます。

調査協力者　（順不同・敬称略）

長井勲、小林石材、大林ハモノ工場、松本健次、今田秀樹、山下義満、青木勝士、本渡市歴史民俗資料館、熊本県伝統工芸館、黎明館、山鹿市立博物館、八女市伝統工芸館、鹿児島県立埋蔵文化財センター、牟礼町石の民俗資料館、竜山市教育センター

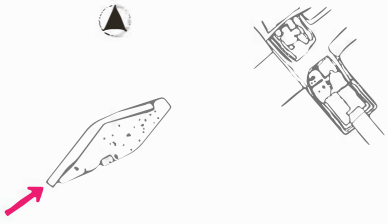
主要参考文献

金子久明編　1998『下浦石工物語』自費出版

兼康保明・北垣聰一郎・先山徹・清水一文・中村弘・藤原清尚・和田清吾　2005『竜山石切場』―兵庫県高砂市所在　竜山採石遺跡詳細分布調査報告―高砂市教育委員会

原口長之　1985「石工」『熊本県の諸職』熊本県文化財調査報告72集

本多康二　1999『くらしに息づく下浦石工展』　平成10年度小企画展　本渡市立歴史民俗資料館

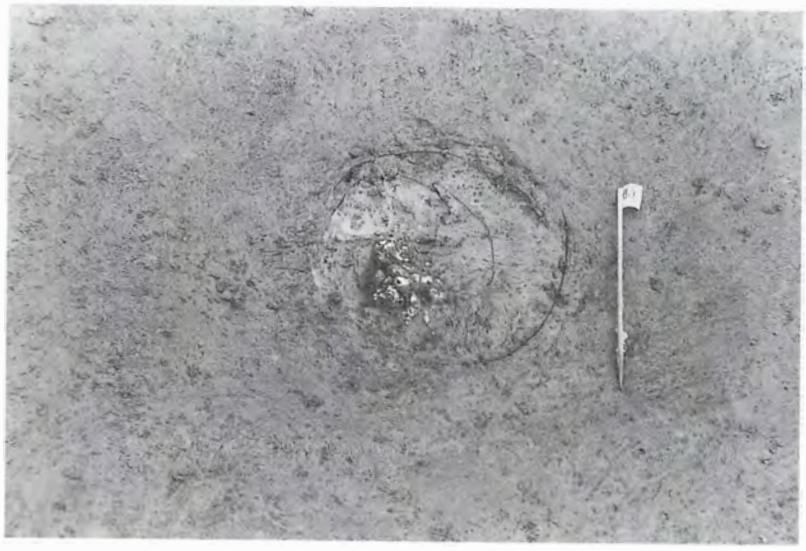


写真(PL)22
調査1・2区
調査前風景

写真(PL)23
調査1区
完掘状況全景

写真(PL)24
調査1区
完掘状況（1）

写真(PL)25
調査1区
完掘状況(2)

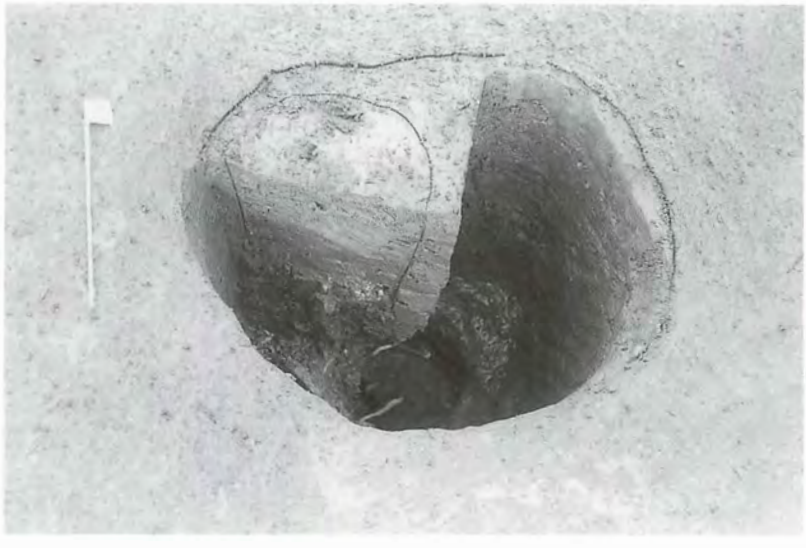


写真(PL)26
調査1区
ピット30番検出状況

写真(PL)27
調査1区
ピット5番遺物出土状況

写真(PL)28
調査1区
ピット20番遺物検出状況

写真(PL)29
調査1区
ピット35番遺物出土状況

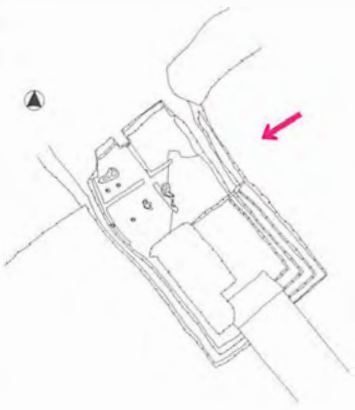


写真(PL)30
調査1区
ピット31番半裁状況と
木質部残存状況

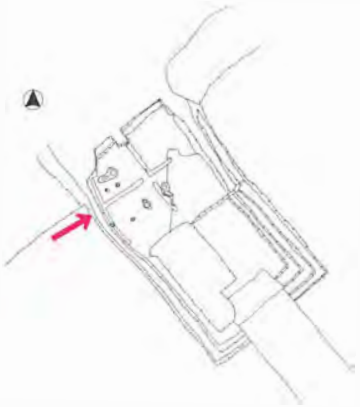
写真(PL)31
調査1区
ピット7番完掘状況

写真(PL)32
調査1区
ピット2番完掘状況

写真(PL)33
調査2区-2
完掘状況

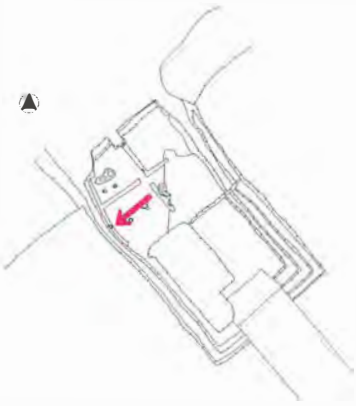


写真(PL)34
調査2区-1
②層下面（1）



写真(PL)35
調査2区-1
②層下面（2）

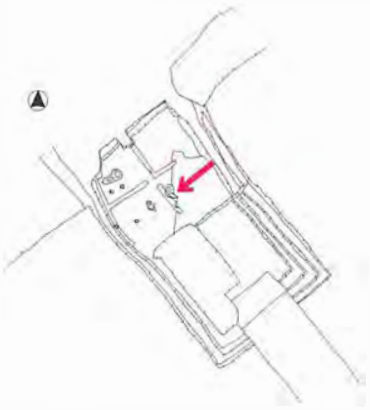
写真(PL)36
調査2区-1
②層下面ピット検出状況（1）



写真(PL)37
調査2区-1
②層下面ピット検出
状況（2）

写真(PL)38
調査2区-1
南西側土層断面

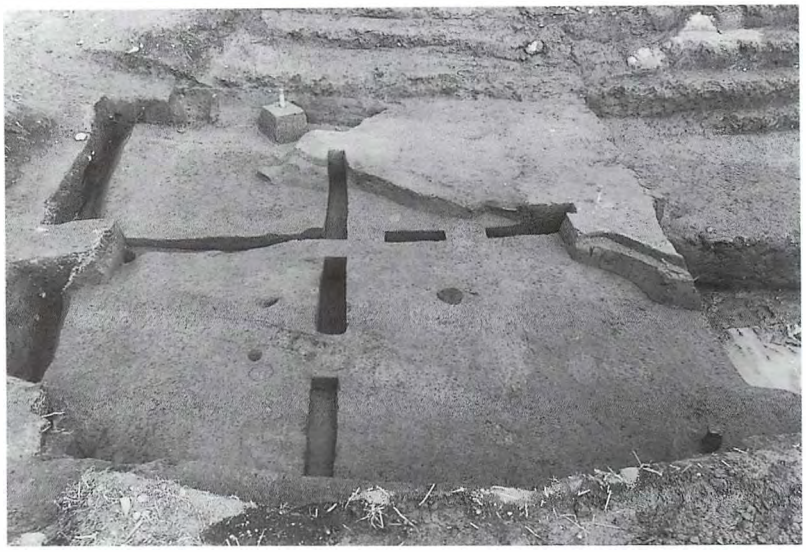
写真(PL)39
調査2区-1
北西側土層断面



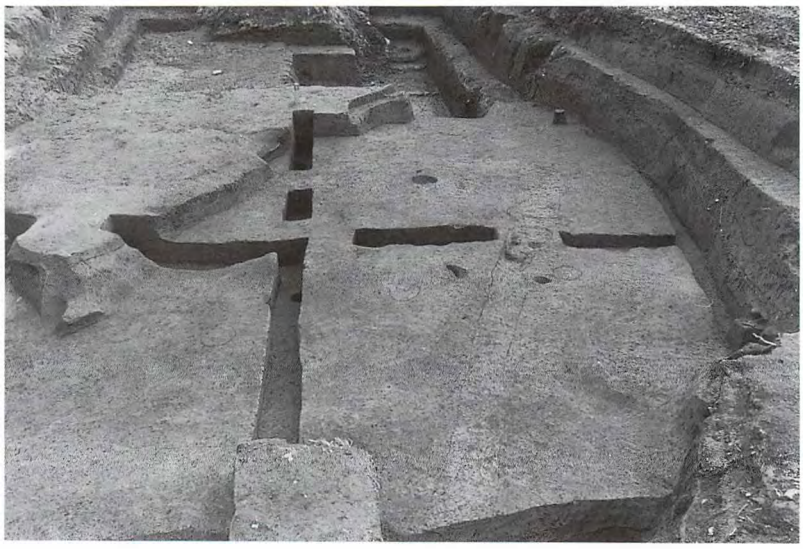
写真(PL)40
調査2区-1
S001完掘状況

写真(PL)41
調査2区-1
②層下面完掘状況（1）

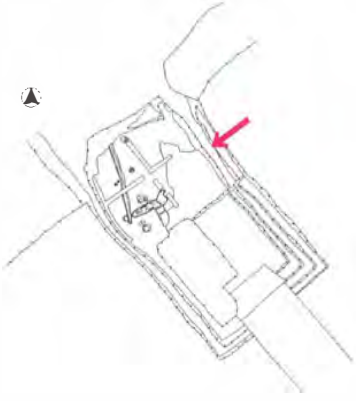
写真(PL)42
調査2区-1
②層下面完掘状況（2）



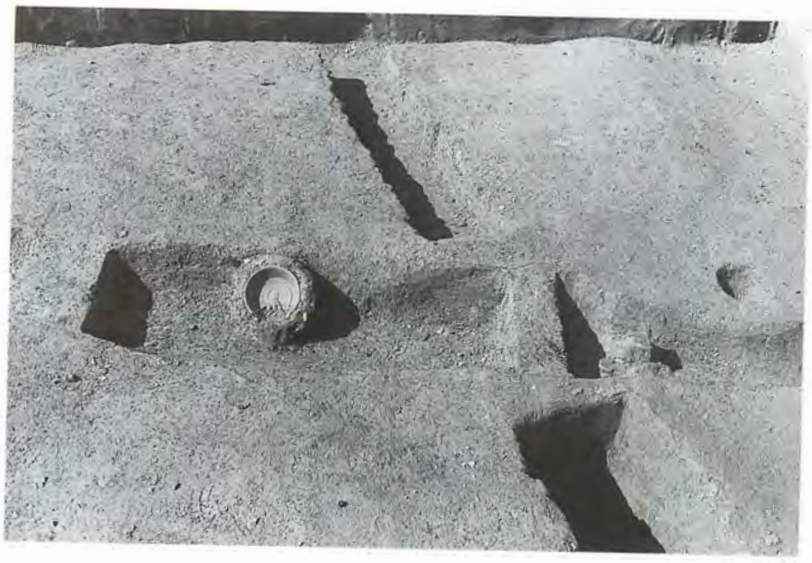
写真(PL)43
調査2区-1
③層下面S003・4・5
検出状況（1）

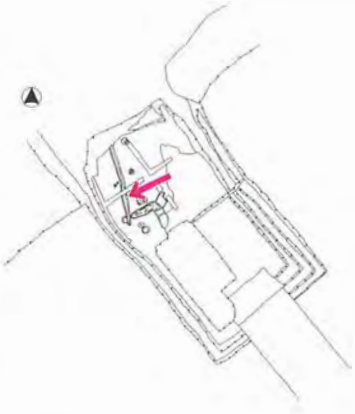


写真(PL)44
調査2区-1
③層下面S003・4・5
検出状況（2）



写真(PL)45
調査2区-1
S003遺物出土状況（1）



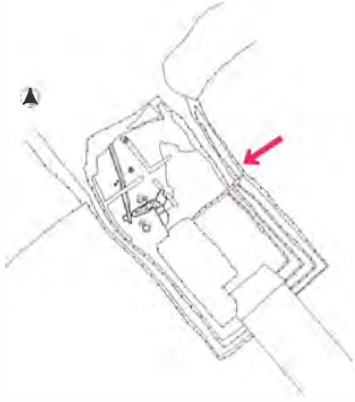


写真(PL)46
調査2区-1
S003遺物出土状況（2）

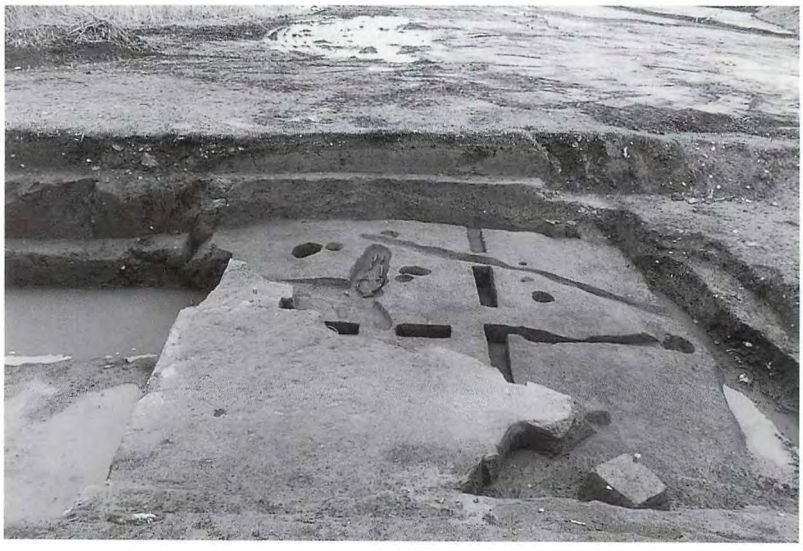
写真(PL)47
調査2区-1
S003遺物出土状況（3）

写真(PL)48
調査2区-1
S003土層断面

写真(PL)49
調査2区-1
S005土層断面

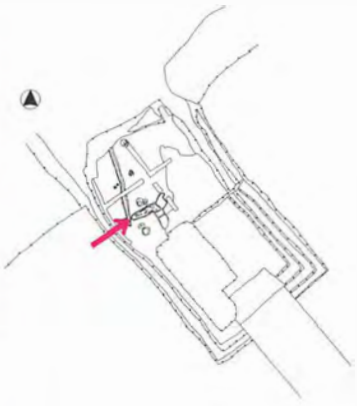


写真(PL)50
調査2区-1
S004人骨検出状況 (1)



写真(PL)51
調査2区-1
S004人骨検出状況 (2)

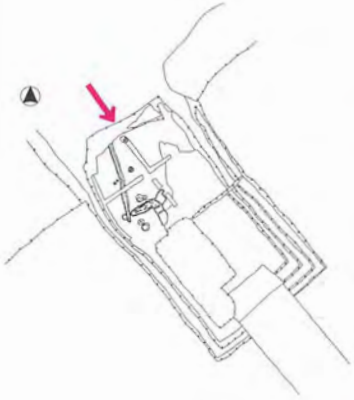
写真(PL)52
調査2区-1
S004人骨検出状況（3）



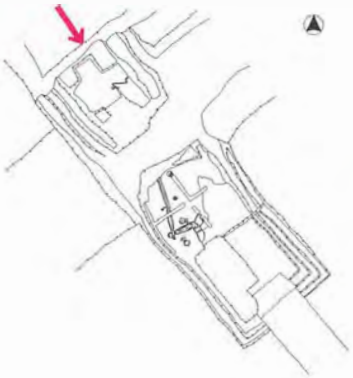
写真(PL)53
調査2区-1
S004人骨検出状況（4）

写真(PL)54
調査2区-1
S004人骨調査風景
（松下孝幸氏）

写真(PL)55
調査2区-1
S004完掘状況



写真(PL)56
調査2区-1
③層下面完掘状況



写真(PL)57
調査2区
調査風景

写真(PL)58
調査3区
調査前

写真(PL)59
調査3区
S018検出状況

写真(PL)60
調査3区
完掘状況全景 (1)

写真(PL)61
調査3区
完掘状況全景（2）

写真(PL)62
調査3区
S006完掘状況（1）

写真(PL)63
調査3区
S006完掘状況（2）

写真(PL)64
調査3区
S012・13・17検出状況

写真(PL)65
調査3区
S006南側石列検出状況

写真(PL)66
調査3区
S006北側遺物検出状況

写真(PL)67
調査3区
S006木製品出土状況

写真(PL)68
調査3区
S006鉄鎌・寛永通宝等
出土状況

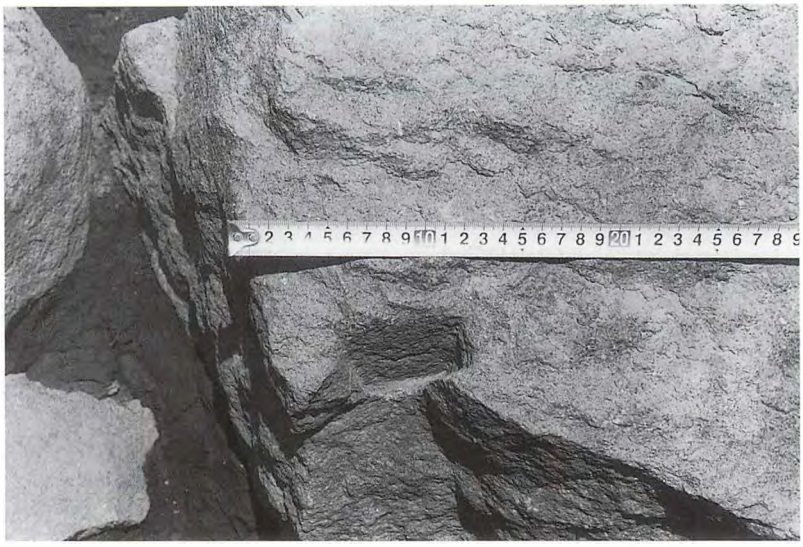
写真(PL)69
調査3区
S006炭化材と
木製品出土状況

写真(PL)70
調査3区
杭及び石列検出状況

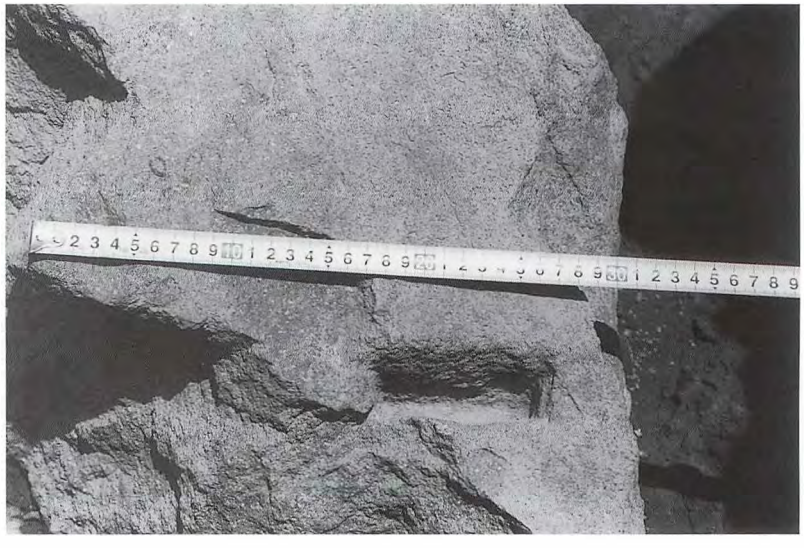
写真(PL)71
調査3区
杭検出状況

写真(PL)72
調査3区
S006石列矢穴13状況

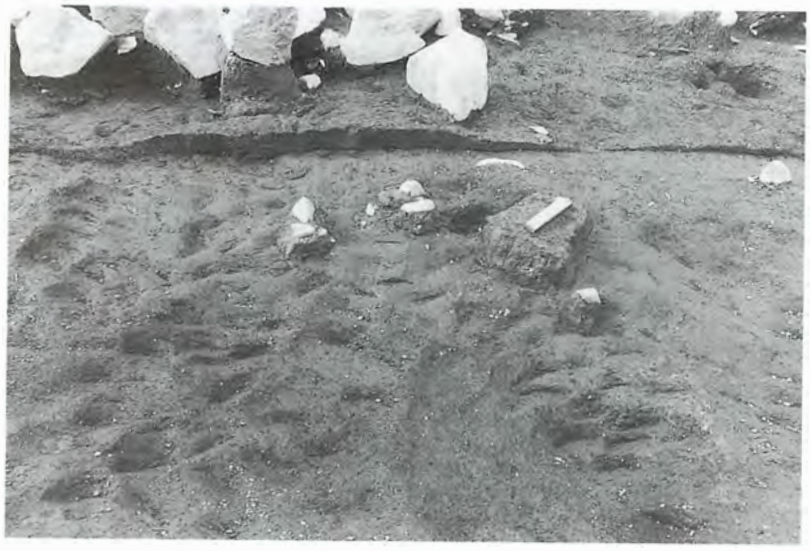
写真(PL)73
調査3区
S006石列矢穴11状況



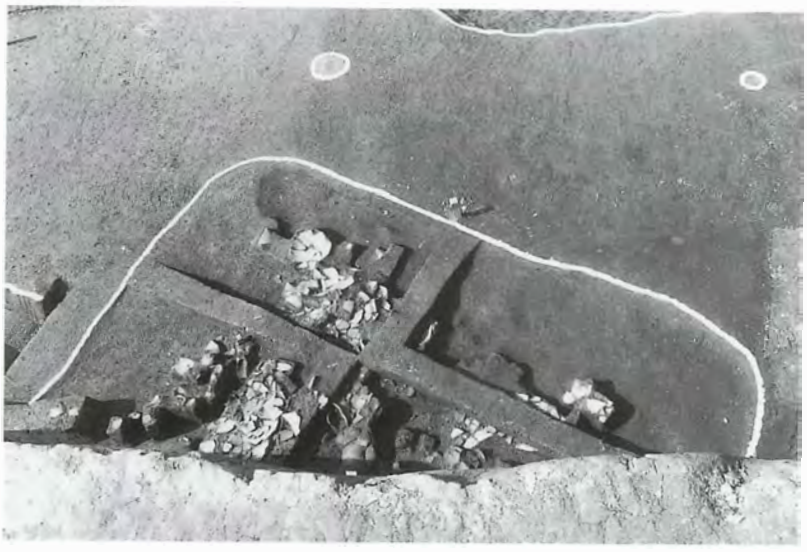
写真(PL)74
調査3区
S006石列矢穴29状況



写真(PL)75
調査3区
S006石列矢穴30状況



写真(PL)76
調査3区
S006掘削痕跡の検出状況



写真(PL)77
調査3区
S009遺物出土状況

写真(PL)78
調査3区
S009・11完掘状況

写真(PL)79
調査3区
S008検出状況

写真(PL)80
調査3区
S008獣骨検出状況

写真(PL)81
調査3区
S012・17遺物出土状況

写真(PL)82
調査3区
S012遺物出土状況

写真(PL)83
調査3区
S013土層断面

写真(PL)84
調査3区
S012・13・16・17
・19 完掘状況

写真(PL)85
調査3区
S019土層断面

写真(PL)86
調査3区
S010完掘状況

写真(PL)87
調査3区
S006土層断面及び
北側土層断面

写真(PL)88
調査3区
南側土層断面

写真(PL)89
調査区外井戸遠景

写真(PL)90
調査区外井戸内状況

写真(PL)91
調査区外の小便甕(左端)

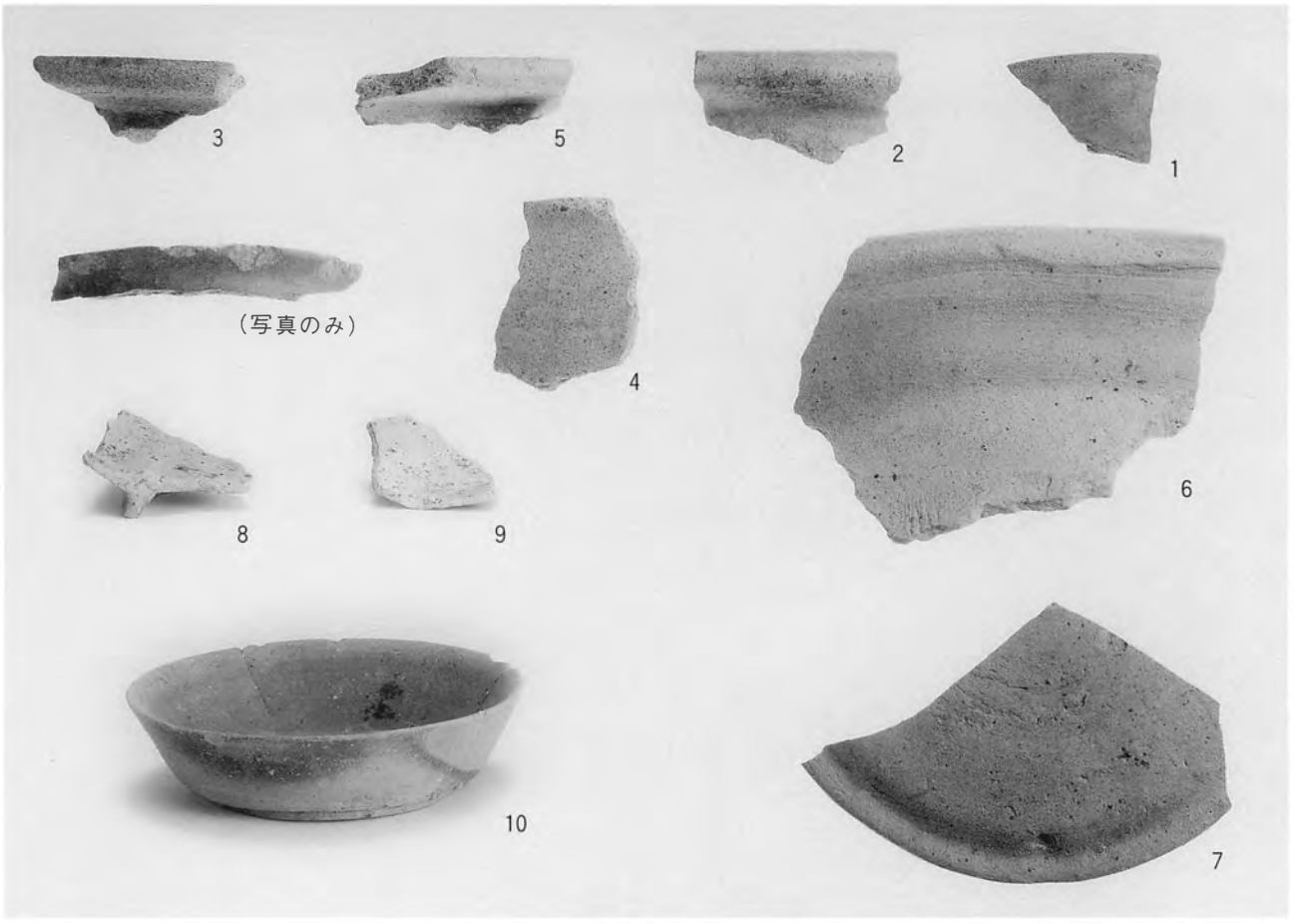
写真(PL)92
調査区外の古代遺物層

写真(PL)93
作業員さん方との
集合写真

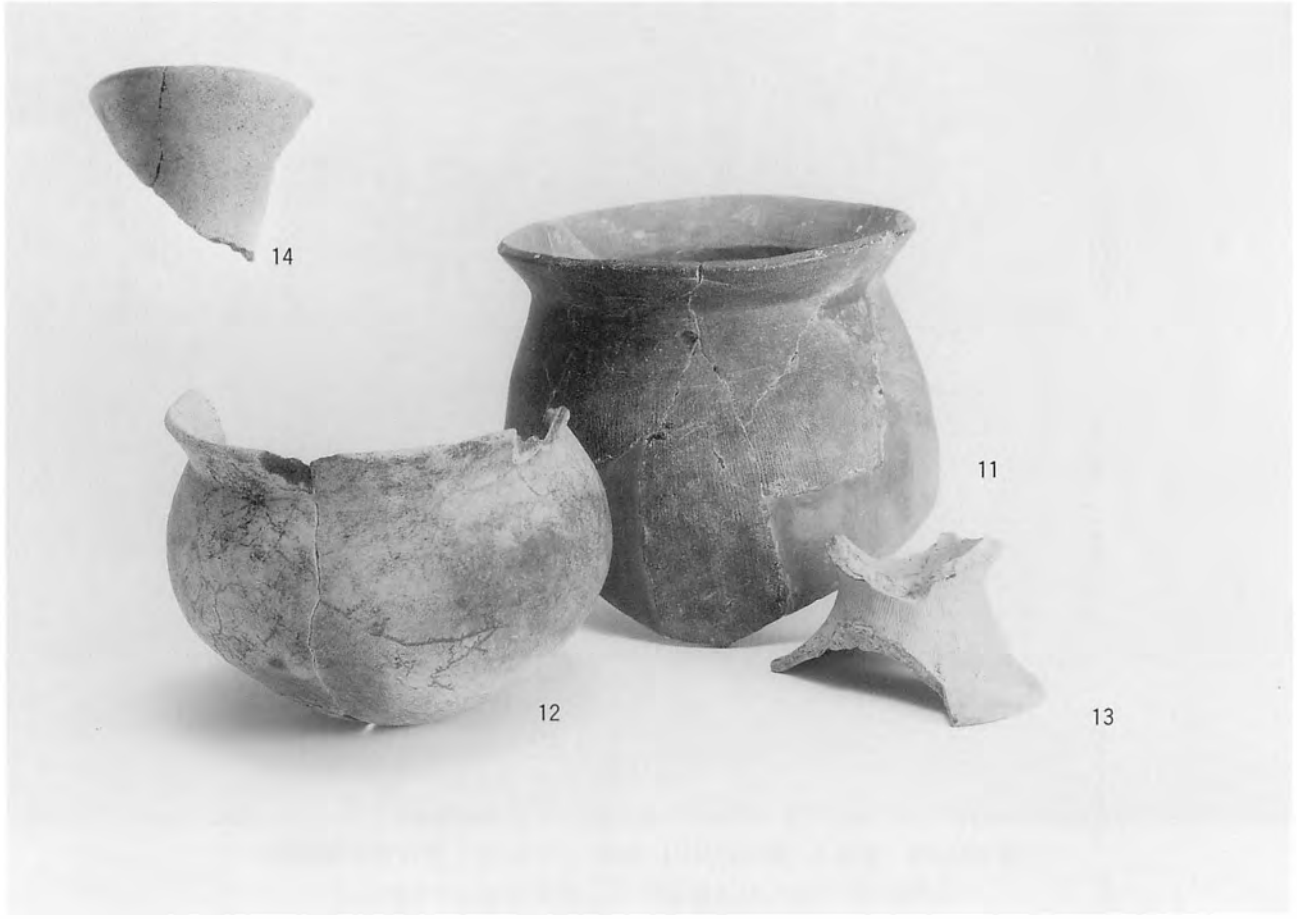
写真(PL)94　空撮８(昭和23年【1948】１月21日　米極東空軍撮影)

高度8.000フィート(約2.400m)上空よりS＝1/30.850

※この写真は、国土地理院長の承認を得て同院及び米軍撮影の空中写真、米軍撮影空中写真を掲載したものである。(承認番号　平18九複、第195号)



写真(PL)95　1・2区出土遺物



写真(PL)96　S012出土遺物

写真(PL)97　S009出土遺物　弥生（１）

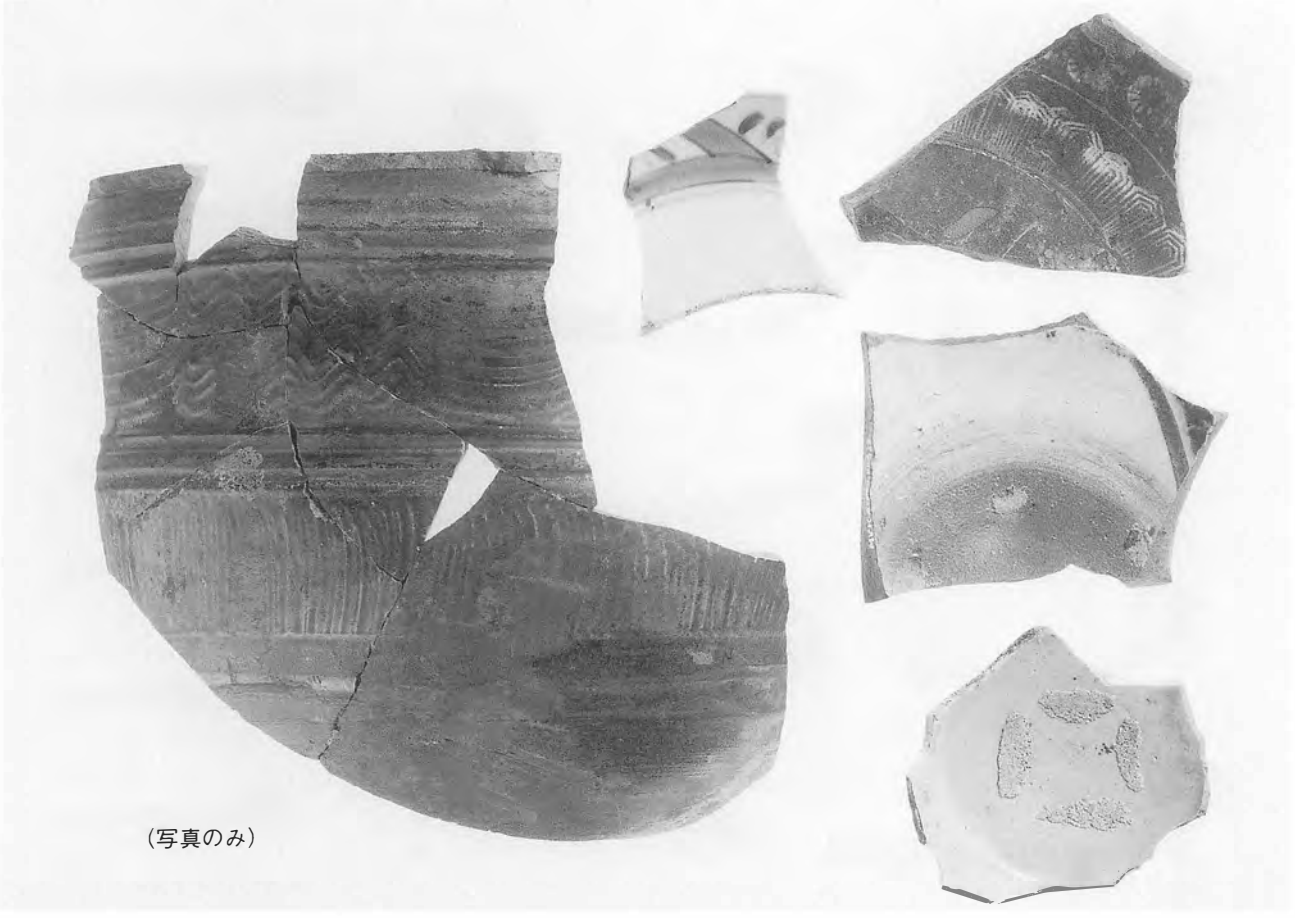
写真(PL)98　S009出土遺物　弥生（２）

写真（PL）99　S006出土遺物近世陶磁器【18世紀後～19世紀】（１）

写真（PL）100　S006出土遺物近世陶磁器【18世紀後～19世紀】（２）

（写真のみ）

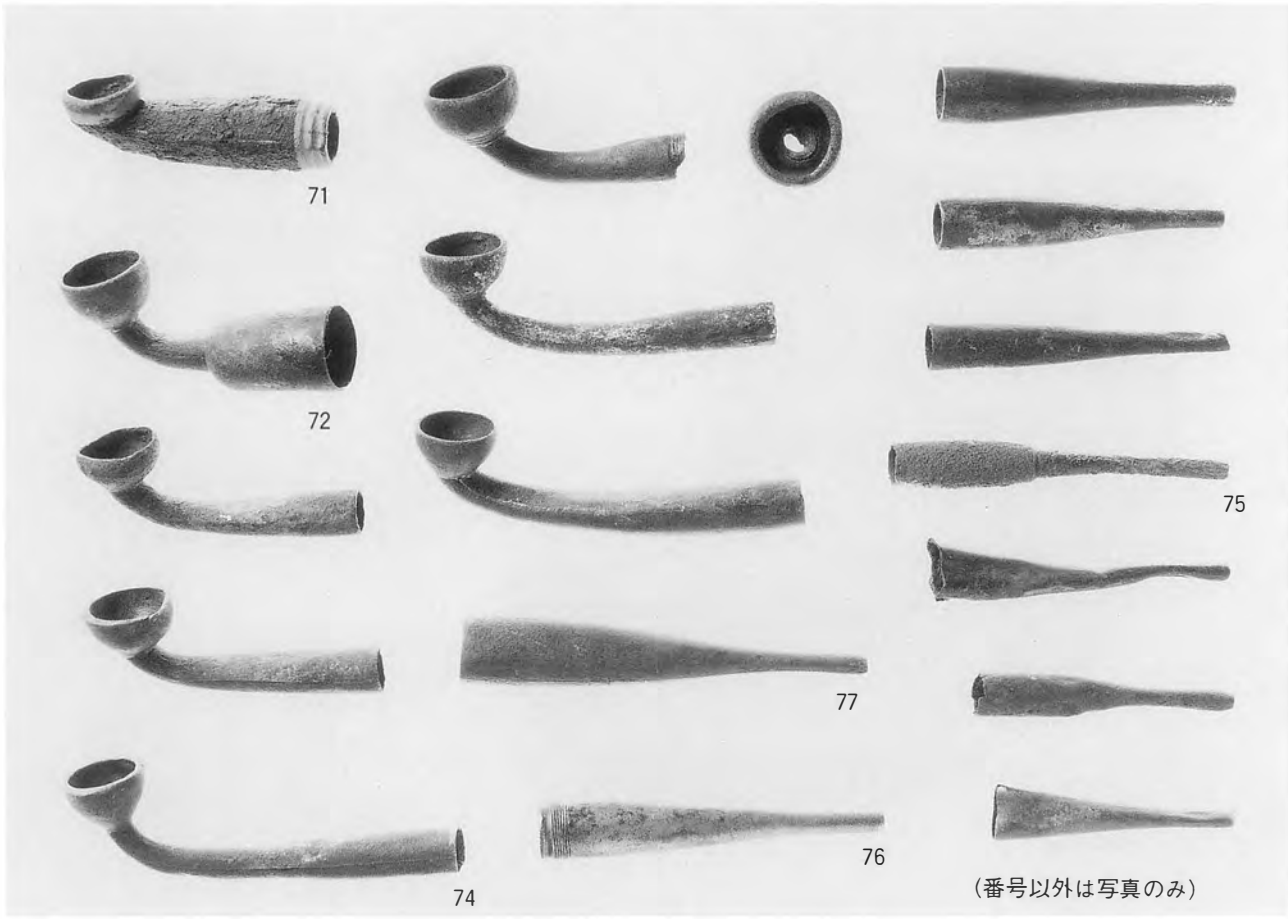
写真（PL）101　S006出土遺物近世陶磁器【18世紀】



（写真のみ）

写真（PL）102　S006出土遺物近世陶磁器【17世紀】（1）

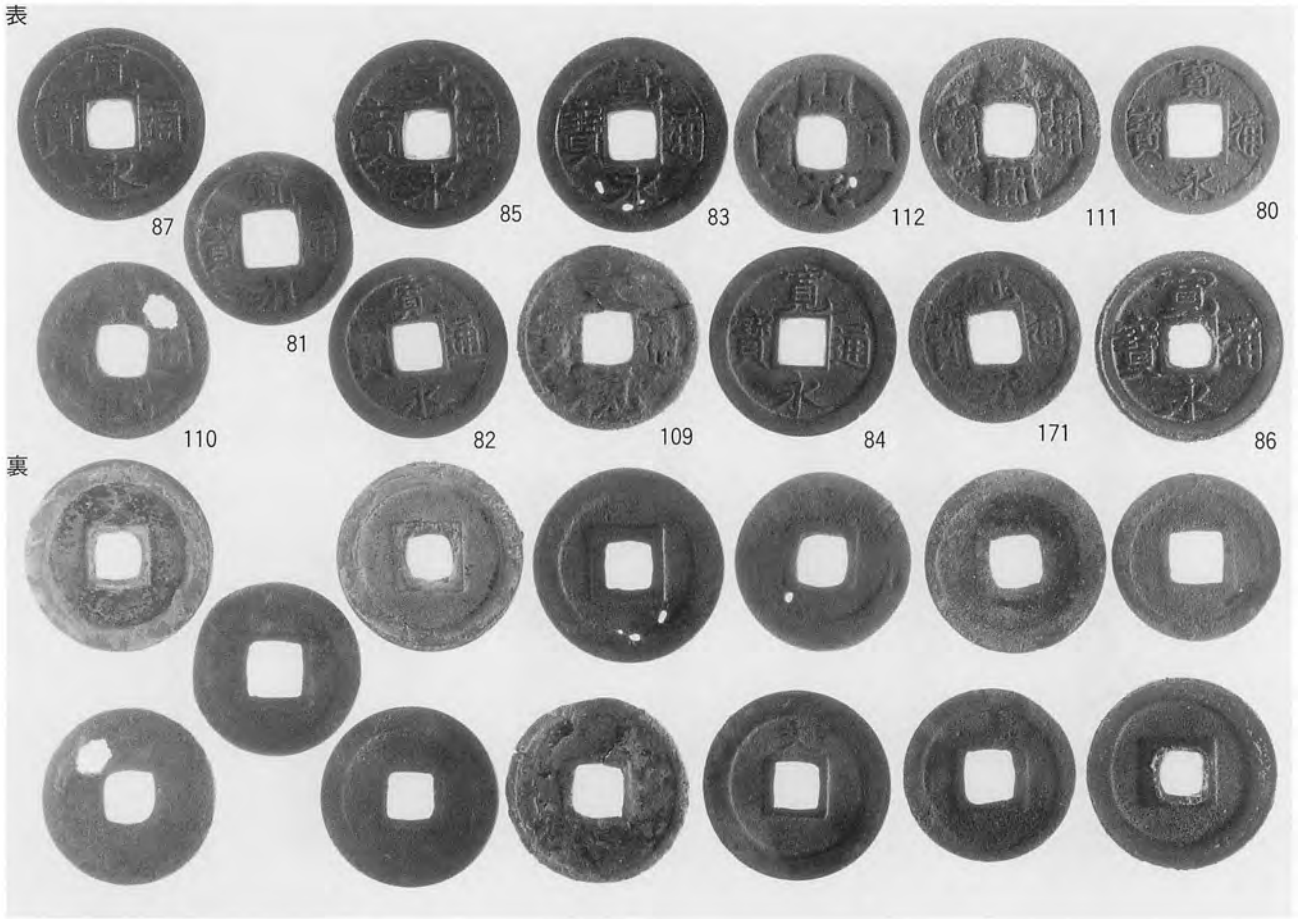
写真（PL）103　S006出土遺物近世陶磁器【17世紀】（2）



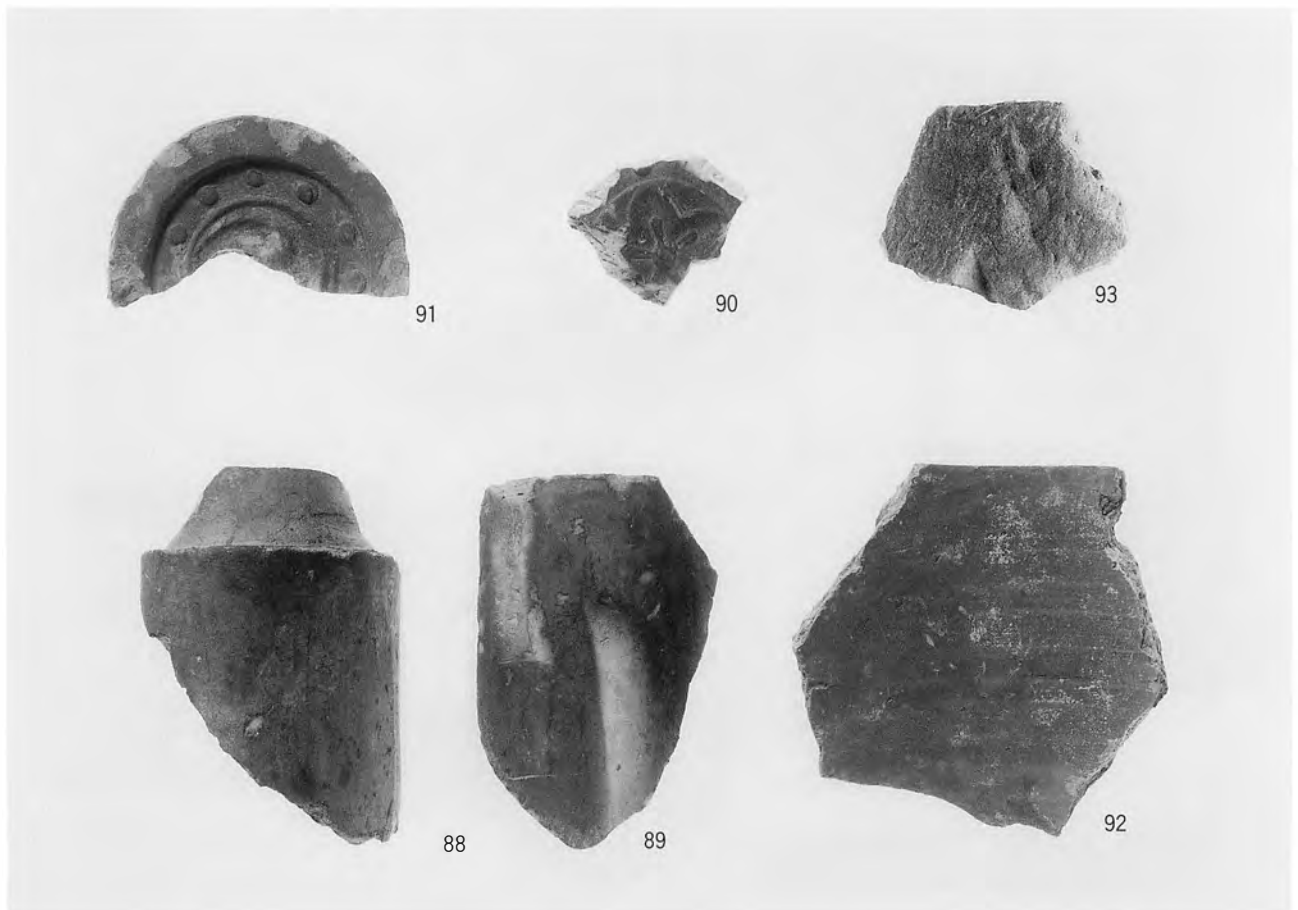
写真（PL）104　S006出土遺物（近世のきせる）

写真（PL）105　S006出土遺物（鉄釘）

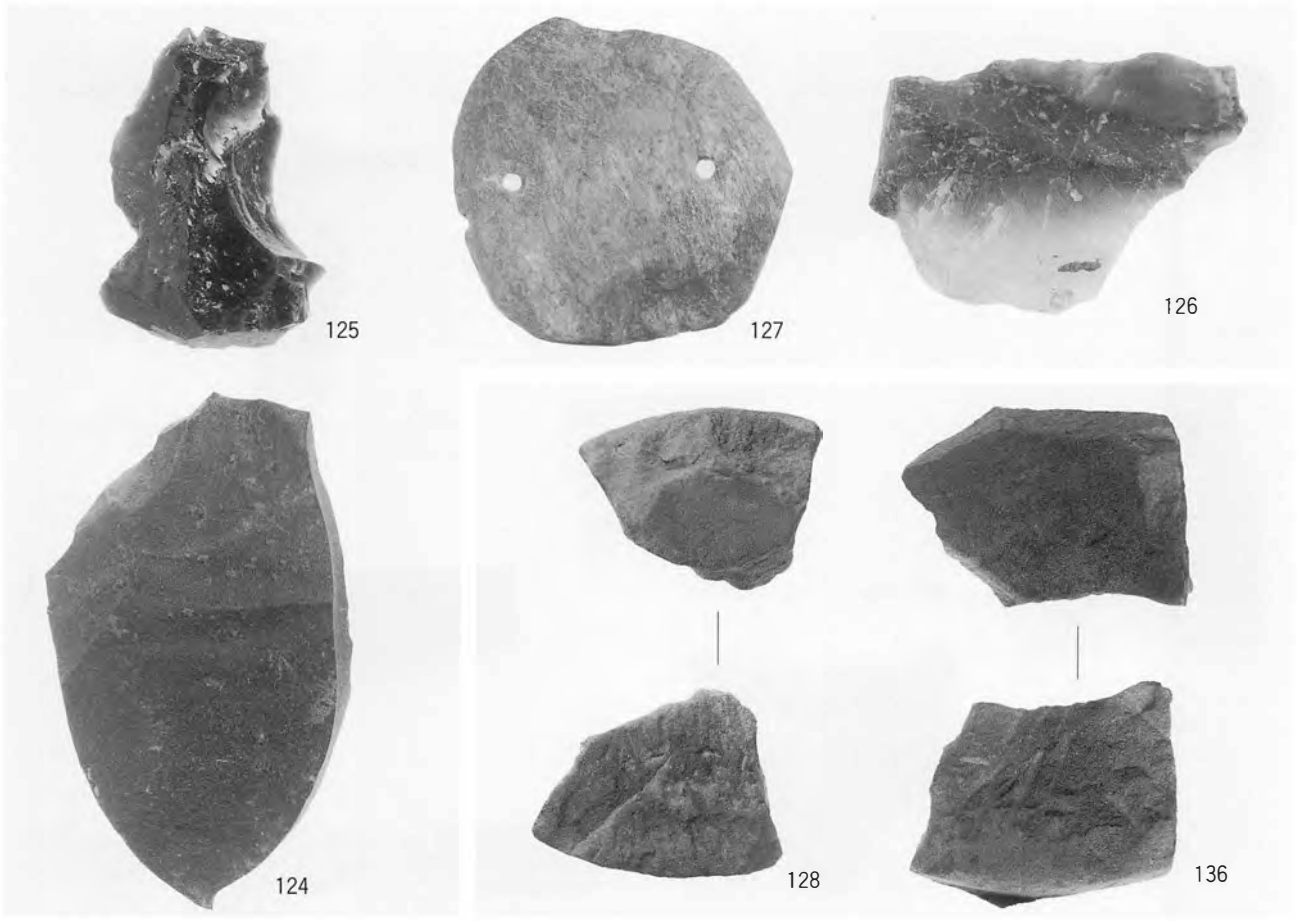
写真（PL）106　S006出土遺物（鉄・銅・その他製品）



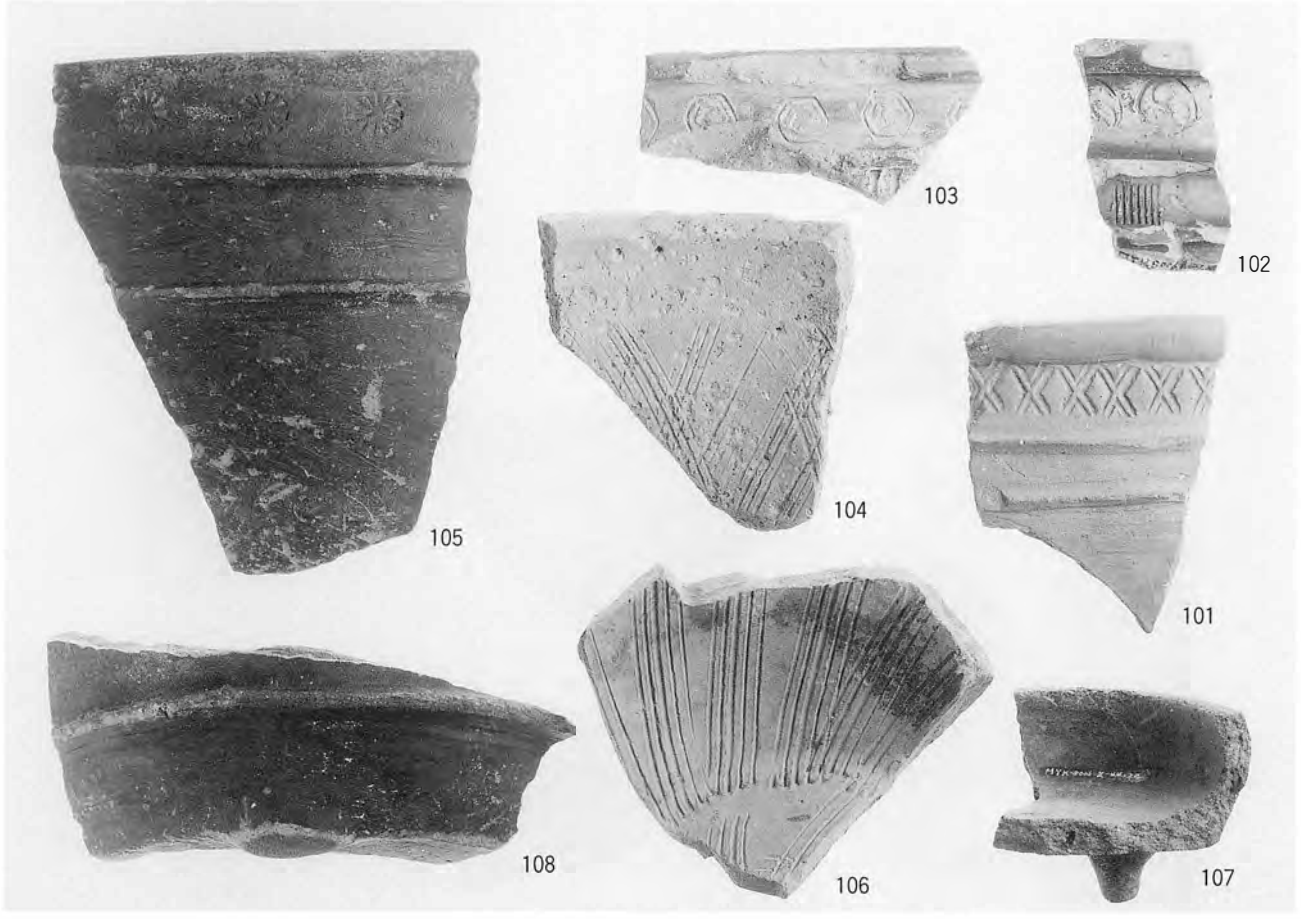
写真(PL)107　S006出土遺物（古銭）



写真(PL)108　S006出土遺物（瓦）



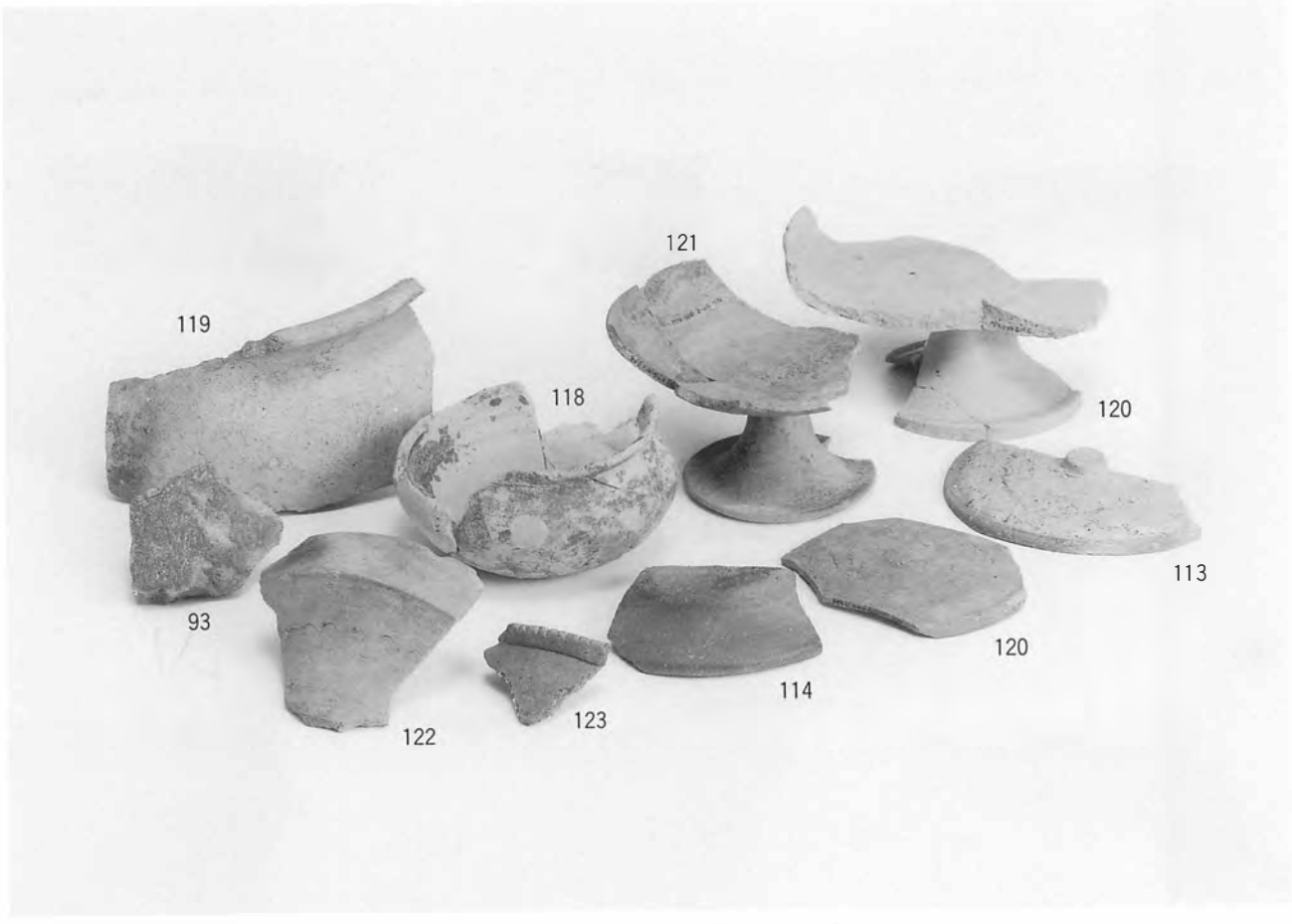
写真(PL)109　S006出土遺物（石器）



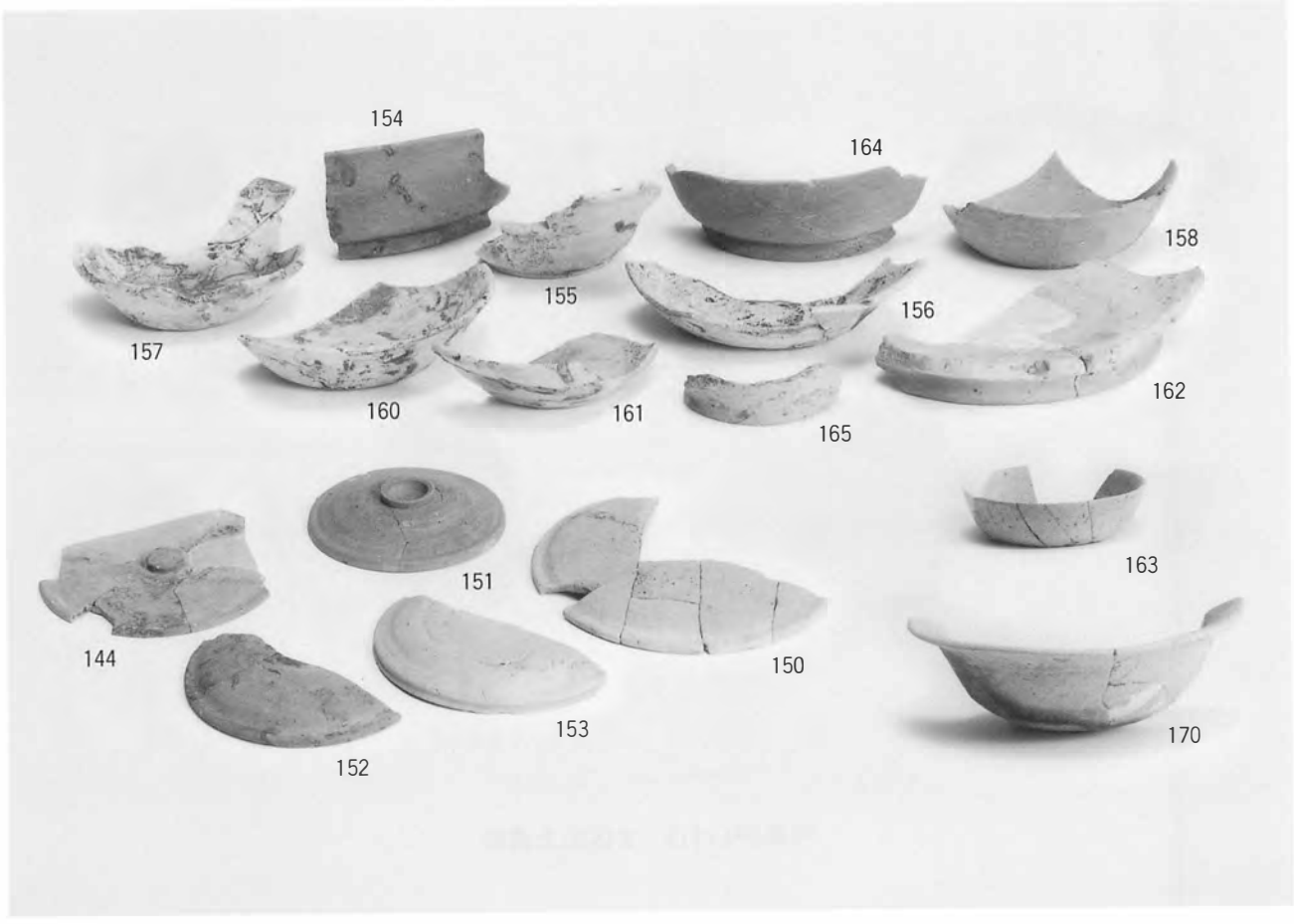
写真(PL)110　S006出土遺物（中世）

写真(PL)111　S006出土遺物（近世）

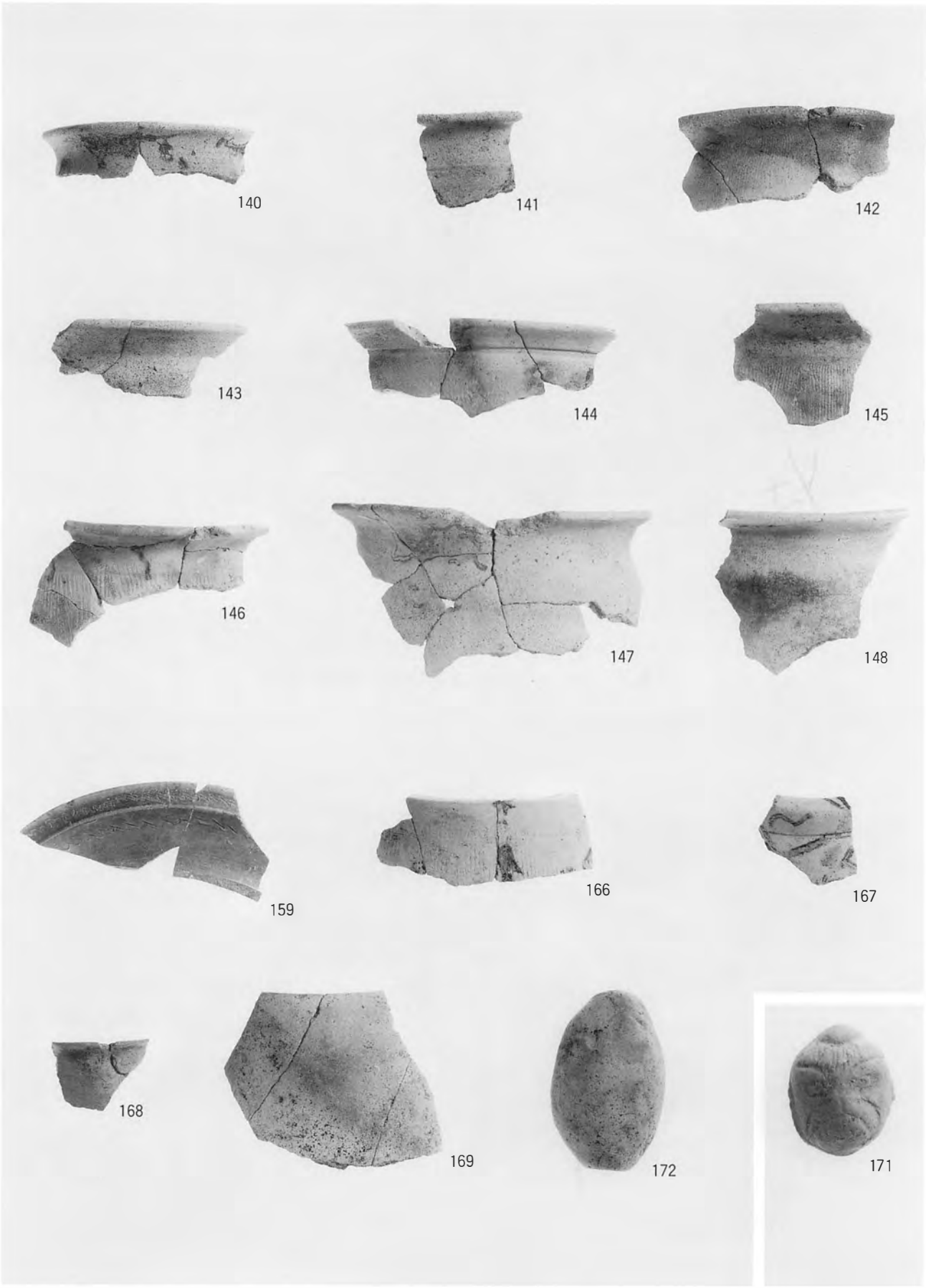
写真(PL)112　S006出土遺物



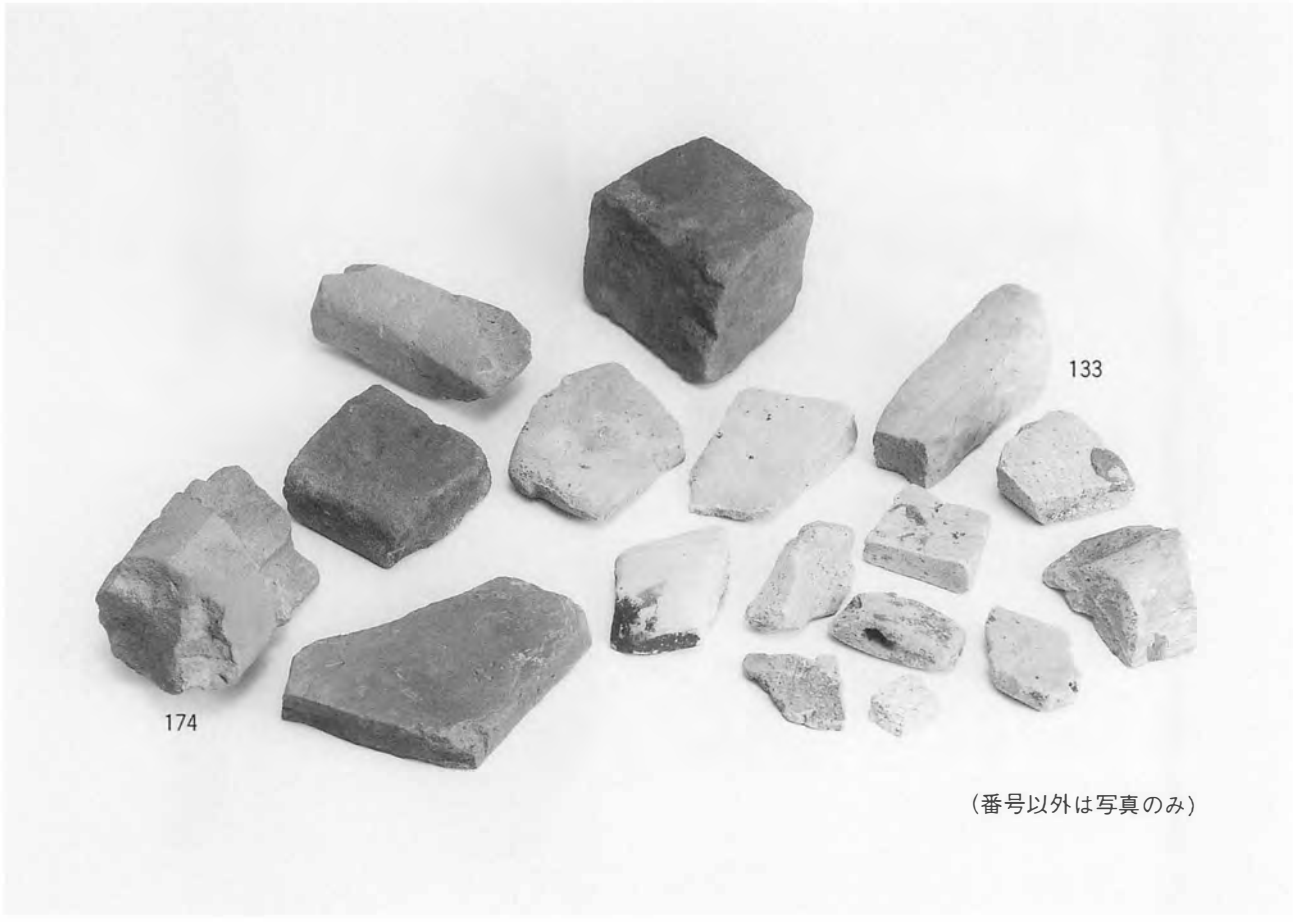
写真(PL)113　S006出土遺物（弥生・古墳・古代）



写真(PL)114　2区出土遺物（古代）

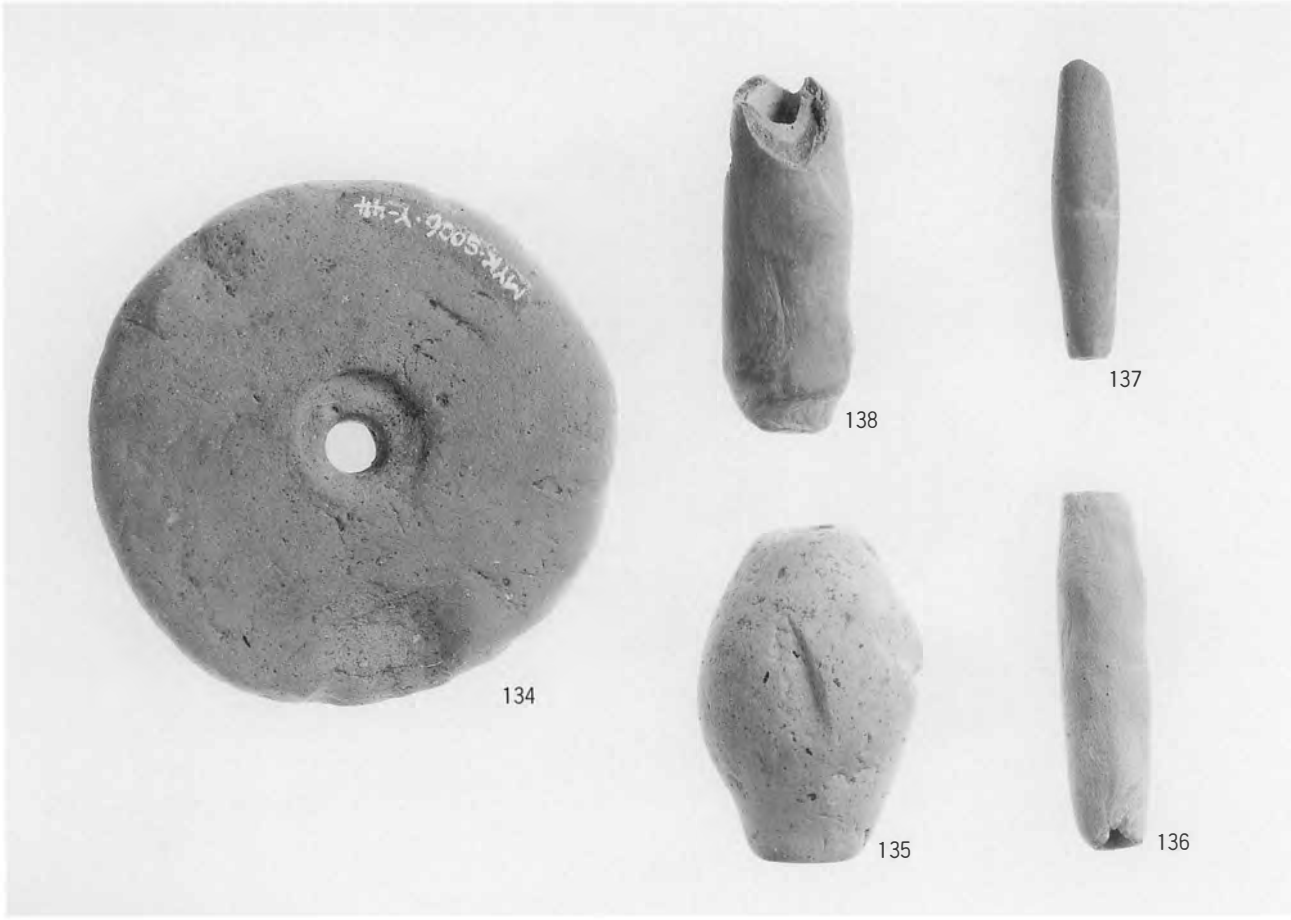


写真(PL)115　2区出土遺物



写真（PL）116　S006出土遺物（砥石）

写真（PL）117　S006出土遺物（石臼）



写真(PL)118　S006出土遺物（土製品）

写真(PL)119　S006出土遺物（木製品）とピット31の柱材の一部

あ と が き

調査区が3箇所に分けておこなった御幸木部遺跡群の発掘調査も作業に携わっていただいた皆さんのお陰で無事に終了することができた。

この調査において特に勉強になったことは、近世の大溝を発掘し、肥前陶磁器の素晴らしさを知ったことであった。整理作業の段階で九州陶磁器文化館の大橋康二館長に遺物を見てもらい、感銘を受けたことはいうまでもない。

寒い中、一緒に汗を流して下さった作業員さん方、遺物の水洗い、註記、接合をしていただいた一次整理作業員さん方、報告書作成に関わって下さった二次整理作業員さん方、そして調査から報告書作成までご指導いただいた全ての皆さん方に感謝をして、結びの言葉とします。ありがとうございました。

（現場作業員）

森川護・征子、松永一代・里美、西岡正治・チズ子、中村キヌイ、田上次俊・トシ子、吉川雅信、早田咲百合、庄司修三、田中マリ子、三宅幸生、境百合子、森田登、柴田道子、河野義勝、白石美智子、田島弘子、今村明美、番山明子、梅原美奈子、山田由美、土山富枝、岡田イッ子、松井昭子、古林喜久江、上村久子、前田和子、堀川貞子

（一次整理作業員）

今福英子、上田律子、原田春子、大石啓子、大澤由美、緒方智世、江島園子、上村孝子、後藤直美、中原ひで子、山下千栄子　諸氏（順不同・敬称略）

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ミユキキベイセキグン
書　　名	御幸木部遺跡群
副 書 名	国土交通省熊本河川国道事務所加勢川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第233号
編 著 者	岡本　真也
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所 在 地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺 6 丁目18番1号
発 行 年	2006年 3 月31日

フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミユキキベイセキグン 御幸木部遺跡群	クマモトシ 熊本市 ミユキキベマチ 御幸木部町	4320.1	201－398	32 44' 27"	13.0 43' 4"	H.16.12.1 ～ H.17.3.30	1,100㎡	国土交通省 熊本河川 国道事務所 加勢川改修 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
御幸木部遺跡群	包蔵地	弥生時代 中期 後期～終末期	竪穴住居跡・溝など	黒髪式土器 弥生式土器（タタキ目を持つ甕形土器など）	
		古代	溝など	須恵器、土師器、布目瓦など	
		中世		龍泉窯系青磁、景徳鎮窯系磁器火鉢、擂鉢、渡来銭など	
		近世～	溝・礎石柱建物など	肥前系陶磁器片（椀、皿、湯飲み、甕、擂鉢など）瓦、古銭（寛永通宝）、鉄器、きせるなど	

（遺跡の概要）

調査結果の要点は次のようになります。①弥生時代の後期～終末期にかけての住居跡が 3 件確認されたこと。②古墳後期以前（ 6 世紀前半期以前）の土壙墓が 1 基確認されたこと。③古代（ 8 世紀後半期）の溝が 1 条確認されたこと。④近世（17世紀～19世紀）の大溝が 1 条確認され、当時の庶民の生活雑器（肥前陶磁器など）が多く出土したこと。

熊本県文化財調査報告　第233集

御幸木部遺跡群

発行年月日　平成18年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺６丁目18番1号

印　刷　コロニー印刷
〒860-0051　熊本市二本木３丁目12番37号

Cultural Series of *Kumamoto* Prefecture No.233

The *Miyukikibe* Sites

Excavation for Improving Embankment and Drainage
of *Kase* River in *Miyukikibe* District of *Kumamoto* City

March 2006

Board of Education, *Kumamoto* Prefecture

17 教委 教文
② 0 0 9

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 233 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：御幸木部遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/